

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集

西 鴨 地 遺 跡

四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

西 鴨 地 遺 跡

四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001.3

（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター



西鴨地遺跡全景
(東側上空からのぞむ)



西鴨地遺跡と周辺の地形
(西側上空からのぞむ)

序

この度、土佐市に所在する西鴨地遺跡の発掘調査報告書を公にすることができました。この遺跡は、四国横断自動車道伊野 - 須崎間の敷設工事に伴って新たに発見され発掘調査を実施した遺跡であります。土佐市域は、本県の歴史を語る上で大変重要な位置にありながら、長い間発掘調査が実施されてこなかった地域であります。しかしながらここ数年、自動車道や国道56号線バイパス工事に伴う緊急調査が俄に増加し、居徳遺跡群など全国から注目される成果が挙がっております。

西鴨地遺跡の今回の調査は、自然流路を中心としたものですが、出土遺物の内容は、実に多彩であり注目を集めております。奈良・平安時代に都で作られた土器が大量に出土しております。これは古代の土佐と都との関係を知る上で重要な資料であります。また、湿地という自然条件にも恵まれたこともあって、当時の人々が身に着け、日常生活の中で使用した櫛や、曲げ物などの容器類、それに精神生活の一端を示す木製祭祀具などが出土しました。これらの遺物の一つ一つは、古代の生活の具体像を雄弁に語りかけてくれるものです。

時恰も21世紀を迎え、自動車道の完成によって更なる発展を遂げられようとしている折柄、このように新たな歴史の一頁が、明らかになったことは意義深いことと存じます。今後、この報告書が地域の歴史研究や普及・啓蒙に少しでも資することができれば幸甚でございます。同時に埋蔵文化財に対します一層のご理解をお願い致したいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして大きなご支援とご協力を頂きました地元の皆様、多くのご便宜・配慮を頂きました日本道路公団四国支社高知工事事務所に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 門田 伍朗

例 言

1. 本書は、四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴って財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下高知県埋蔵文化財センター）が1998（平成10）年度に実施した西鴨地遺跡の発掘調査報告書である。西鴨地遺跡は1996（平成8）年度の試掘調査によって確認された遺跡であり、本書においては、この試掘調査および四国横断自動車道（伊野～須崎間）関連の須崎市飛田坂本遺跡の1997・1998年度調査についても併せて報告する。

2. 本調査は日本道路公団高松建設局（現四国支社）の委託を受け、高知県教育委員会が受託し、高知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。

3. 西鴨地遺跡は高知県土佐市西鴨地字バデンに所在する。

4. 調査面積

試掘調査 820㎡（土佐市戸波地区）

本調査 2,000㎡（区 - 700㎡・区 - 860㎡・区 - 440㎡）

5. 調査期間

平成8年度試掘調査 - 平成9年1月22日～2月22日

平成10年度本調査 - 平成10年5月25日～9月4日

6. 調査体制

平成8年度 試掘調査

統括	古谷碩志	高知県埋蔵文化財センター	所長
	岩崎嘉郎	〃	調査課長
調査員	曾我貴行	〃	調査員
	久家隆芳	〃	調査員
総務	吉岡利一	〃	総務課主幹

平成10年度 本発掘調査

統括	古谷碩志	高知県埋蔵文化財センター	所長
	西川 裕	〃	調査課長
調査員	松村信博	〃	主任調査員
総務	大原裕幸	〃	総務課主幹

7. 西鴨地遺跡の整理作業及び報告書作成業務については、平成10年度・11年度・12年度の3ヶ年にわたって実施し、平成10・11年度は松村が担当、平成12年度は高知県埋蔵文化財センター調査第3班長出原恵三と松村が分担して行った。

8. 本書の編集は松村が行い、執筆分担については以下のとおりである。（本文目次にも示す。）

第 章・第 章2・第 章1・第 章1（出原）、第 章1・2、第 章、第 章2、第 章2・3、第 章2（松村）、第 章1（高知県埋蔵文化財センター主任調査員池澤俊幸）

9. 本報告書に関わる遺物のうち、植物遺体・木製品の樹種同定及び保存処理を（株）東都文化財研究所・（株）パリノサーヴェイ・（株）吉田生物研究所に、種子の樹種同定及び分析を（株）東都文化財研究

所・㈱パリノサーヴェイに、銅製帯金具の保存処理及び分析を㈱東都文化財研究所に委託した。

10. 調査途上で、周辺の地形も含めて記録するため空中写真撮影並びに航空測量を実施した。空中写真撮影及び測量業務については㈱アイシーに委託した。
11. 出土遺物ならびに写真・図書類は高知県埋蔵文化財センター（高知県南国市篠原1437-1）に保管している。
12. 西鴨地遺跡の本調査及び整理作業にに参加した作業員の方々は以下のとおりである。記して感謝をささげたい。

（1998年度西鴨地遺跡本調査）

西村宏子・尾崎角美・武政勝司・杉本直助・尾崎定富・尾崎定子・徳平真也・産田康子・森沢健次郎・西村勝美・西村美恵子・西村和江・山本里佐・細木藤雄・村上光夫・前田百合枝・杉本智崇・西村寛道・西村進一・西村陽介・和田雅弘・田村彰教・越路由美子・谷脇慎二

（整理作業・1998～2000年）

松木富子・山口知子・大原喜子・浜田雅代・山本由里・尾崎富貴・岩本須美子・森綾子・川久保香

13. 本報告書作成に際して、以下の諸氏に貴重な御教示・御助言をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

山田昌久（東京都立大学）・梅野光興（高知県歴史民俗資料館）・平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）

前田光雄・松田直則・山本哲也・吉成承三・池澤俊幸・筒井三菜・山本純代はじめ高知県埋蔵文化財センターの諸氏

本文目次

第 章	西鴨地遺跡周辺の地理・歴史的環境	(出原)	1
第 章	調査の概要		
1	調査に至る経過	(松村)	5
2	試掘調査	(出原)	6
3	本調査	(松村)	9
第 章	遺跡の概要		
1	西鴨地遺跡の概要	(松村)	13
2	土層堆積状況	(松村)	18
3	遺構	(松村)	21
第 章	出土遺物		
1	土器	(出原)	29
2	石器	(出原)	34
3	金具	(出原)	34
4	鉄滓	(出原)	34
5	木製品	(松村)	49
第 章	考 察		
1	西鴨地遺跡出土の古代土器と遺跡の性格	(出原)	77
2	西鴨地遺跡出土の端部炭化材について	(松村)	85
3	西鴨地遺跡出土の木製品 - イスノキ製の横櫛素材	(松村)	95
第 章	付編 西鴨地遺跡の自然科学分析		
1	西鴨地遺跡から出土した木製品の樹種	(株)パリオサーヴェイ・(株)東都文化財研究所	106
2	高知県西鴨地遺跡・出土木製品の樹種調査結果(1)	(株)吉田生物研究所	109
3	高知県西鴨地遺跡・出土木製品の樹種調査結果(2)	(株)吉田生物研究所	112
4	西鴨地遺跡から出土した種実遺体・木材の同定	(株)パリオサーヴェイ・(株)東都文化財研究所	114
5	西鴨地遺跡、金属製品の化学的調査	(株)東都文化財研究所	121
第 章	付編 1997年・1998年度飛田坂本遺跡の調査		
1	1997年度	(池澤)	127
2	1998年度	(松村)	129

挿図目次

Fig. 1	西鴨地遺跡位置図	1
Fig. 2	西鴨地遺跡(5)と周辺の遺跡分布図	3
Fig. 3	試掘ピット及び本調査の位置図 (S=1/2000)	7
Fig. 4	西鴨地遺跡調査区(本調査)と周辺の地形 (S=1/1000)	10
Fig. 5	西鴨地遺跡 調査区及びグリッドの設定 (S=1/800)	11
Fig. 6	西鴨地遺跡 ~ 区遺構平面全体図 (S=1/400)	14
Fig. 7	西鴨地遺跡 ・ 区平面図 (等高線10cm間隔・S=1/300)	15
Fig. 8	西鴨地遺跡 区平面図 (等高線10cm間隔・S=1/300)	17
Fig. 9	区西壁セクション (S=1/80)	19
Fig.10	区A・B境界バンク西壁セクション (S=1/80)	19
Fig.11	区西端セクション (S=1/80)	20
Fig.12	区遺物(礫・流木・木製品・杭列)出土状況平面・ エレベーション図(S=1/100)	22
Fig.13	区遺物(礫・流木・木製品・杭列)出土状況平面・ エレベーション図(S=1/100)	23
Fig.14	・ 区遺物(礫・流木・木製品・杭列)出土状況平面・ エレベーション図(S=1/100)	24
Fig.15	SD-1 平面・エレベーション図(S=1/120)	25
Fig.16	自然流路(河道)の変遷(S=1/1000)	25
Fig.17	・ 区杭検出状況平面図(S=1/300、1/600)及び、 杭検出時の標高エレベーション図(S=1/300)	26
Fig.18	主な遺物出土地点平面図	27
Fig.19	黒色土器高台形態分類図	32
Fig.20	縄文土器、弥生土器、古式土師器、須恵器坏蓋実測図	35
Fig.21	土師器皿・同坏・須恵器皿実測図	36
Fig.22	土師器坏・椀、須恵器椀A類(110)実測図	37
Fig.23	土師器坏・椀・皿実測図	38
Fig.24	須恵器皿・坏実測図	39
Fig.25	須恵器蓋・椀、黒色土器椀実測図	40
Fig.26	黒色土器椀底部、緑釉皿、同椀、灰釉皿、瓦器椀、青磁椀実測図	41
Fig.27	土師器甕実測図	42
Fig.28	土師器甕実測図	43
Fig.29	土師器羽釜実測図	44
Fig.30	須恵器広口壺、同長頸壺、同短頸壺、同小型壺、同甕実測図	45
Fig.31	須恵器甕、同壺底部、製塩土器実測図	46
Fig.32	土錘、土版、帯金具、椀状鉄滓、石鏃、打製石斧実測図	47
Fig.33	伐採斧、砥石、叩石実測図	48
Fig.34	木製品(木製祭祀具)実測図	54
Fig.35	木製品(木製祭祀具・細板材・端部炭化材・木錘・部材・檜扇・横櫛・横櫛素材板)実測図	55
Fig.36	木製品(円形曲物底板・蓋板・把手付底板)実測図	56
Fig.37	木製品(円形曲物底板・蓋板・側板)実測図	57
Fig.38	木製品(円形曲物側板・剝物容器・杭)実測図	58

Fig.39	土師器坏口径・器高分布図	78
Fig.40	西鴨地遺跡出土の古代土器変遷図	81
Fig.41	端部炭化材の形状	88
Fig.42	イスノキ製木製品の用途別出土状況	98
Fig.43	イスノキ製の横櫛と横櫛素材の板材	98
Fig.44	西鴨地遺跡周辺の地籍図 (S=1/5000)	101
Fig.45	B- 区出土青磁碗実測図	127
Fig.46	1997年度調査区位置図	127
Fig.47	基本層準	128
Fig.48	飛田坂本遺跡位置図及び1998年度調査地点	129
Fig.49	飛田坂本遺跡と周辺の主な古代・中世の遺跡	130
Fig.50	土層堆積状況 (S=1/60)	132
Fig.51	1998年度調査 遺構平面全体図 (S=1/100)	134
Fig.52	遺構配置図、設定バンク・トレンチ位置図 (S=1/200)	135
Fig.53	SB-5・SB-6・SB-7遺構平面エレベーション図 (S=1/60)	137
Fig.54	SA-1・SA-2・SA-3・SK-10遺構平面・エレベーション図 (S=1/60・S=1/30)	138
Fig.55	1998年度調査 出土遺物	140

表目次

Tab. 1	出土・モモ核・計測表	53
Tab. 2	縄文・弥生・古墳時代土器観察表	59
Tab. 3	古代土器観察表 - 1	60
Tab. 4	古代土器観察表 - 2	61
Tab. 5	古代土器観察表 - 3	62
Tab. 6	古代土器観察表 - 4	63
Tab. 7	古代土器観察表 - 5	64
Tab. 8	古代土器観察表 - 6	65
Tab. 9	古代土器観察表 - 7	66
Tab.10	古代土器観察表 - 8	67
Tab.11	古代土器観察表 - 9	68
Tab.12	古代土器観察表 - 10	69
Tab.13	古代土器観察表 - 11	70
Tab.14	古代土器観察表 - 12	71
Tab.15	木製品観察表 - 1	73
Tab.16	木製品観察表 - 2	74
Tab.17	木製品観察表 - 3	75
Tab.18	木製品観察表 - 4	76
Tab.19	端部炭化材計測表	87
Tab.20	イスノキ製木製品出土遺跡一覧表	99
Tab.21	遺構 (ピット) 計測表	139
Tab.22	1998年度出土遺物観察表	141
Tab.23	(石器・石製品) 観察表	141

写真図版

巻頭カラー 西鴨地遺跡周辺の地形（東側上空から）・西鴨地遺跡遠景（西上空から）

- PL. 1 西鴨地遺跡と周辺の景観（遺跡西側の字竹の下から撮影）／調査前の景観（遺跡東側より）
- PL. 2 区西端セクション／区西端セクション（流路岸辺の礫を含む）
- PL. 3 区東端セクション（層より上層のみ）／区東端セクション
- PL. 4 区中央部A・B境界バンク西壁セクション／区西端セクション
- PL. 5 区自然流路 河岸 遺物出土状況／同上（検出された礫と流木）
- PL. 6 区杭列・礫検出状況／区自然流路 河岸 流木、礫、杭列検出状況
- PL. 7 区全景（東から）／区自然流路（西から）
- PL. 8 区自然流路内堆積状況／同上
- PL. 9 区自然流路 河岸の様相／区自然流路完掘状況
- PL.10 区自然流路完掘状況（南東から）／同上（東から）
- PL.11 区（調査区西端）調査開始時の状況／同上
- PL.12 SD - 1及び周辺の小ピット検出状況／同上完掘状況
- PL.13 区自然流路河岸の状況（南東から）／同上（東から）
- PL.14 西鴨地遺跡遺物出土状況⁽¹⁾ - 須恵器、土師器、黒色土器 -
- PL.15 西鴨地遺跡遺物出土状況⁽²⁾ - 須恵器、土師器 -
- PL.16 西鴨地遺跡遺物出土状況⁽³⁾ - 木製品 -
- PL.17 西鴨地遺跡遺物出土状況⁽⁴⁾ - 木製品 -
- PL.18 西鴨地遺跡、飛田坂本遺跡遺物出土状況
- PL.19 須恵器壺・古式土師器鉢
- PL.20 土師器坏・椀、黒色土器椀
- PL.21 土師器皿・坏、須恵器皿
- PL.22 須恵器皿・坏・椀、黒色土器椀、土師器坏、緑釉皿、灰釉皿
- PL.23 土師器甕
- PL.24 土師器甕
- PL.25 土師器甕
- PL.26 土師器羽釜
- PL.27 西鴨地遺跡出土遺物（帯金具・椀状鉄滓・石器）／飛田坂本遺跡出土遺物
- PL.28 出土遺物（木製品）1 - 木製祭祀具 -
- PL.29 出土遺物（木製品）2 - 服飾具（横櫛・檜扇）木錘、部材、素材、曲物、綴紐 -
- PL.30 出土遺物（木製品）3 - 曲物（蓋板・底板・側板） -
- PL.31 出土遺物（木製品）4 - 大型円形板、曲物側板、板材 -
- PL.32 出土遺物（木製品）5 - 曲物側板、刳物（舟形容器） -
- PL.33 飛田坂本遺跡（1998年度）TR-1北壁セクション／TR-2北壁セクション
- PL.34 飛田坂本遺跡（1998年度）遺構検出状況（南から）／同上（北から）
- PL.35 飛田坂本遺跡（1998年度）遺構完掘状況（北から）／同上（南から）
- PL.36 飛田坂本遺跡（1998年度）SK10焼土及び円礫検出状況／SB5（P1）土師器出土状況

第 章 西鴨地遺跡周辺の地理・歴史的環境

1 地理的環境

西鴨地遺跡は、土佐市西鴨地字バデン他に所在する。当遺跡は、土佐市の中心部である高岡平野の西端に位置し、東西の交通路である中村街道沿いに位置する。高岡平野は、北に虚空山系の丘陵が迫り、南側には横瀬山系が東西に走り海岸線と隔てられている。平野の南部は波介川が蛇行しながら流れ仁淀川に注いでいる。西鴨地遺跡は、この波介川上流域に形成された沖積地に立地しており、仁淀川岸より西に4kmを測り標高は12m前後である。遺跡の北側には波介川支流の西鴨地川が流れている。波介川流域は氾濫原性の低湿地が広がり、水害の常習地帯として知られている。これは、波介川の河床勾配が1000分の0.2と緩かであるのに加えて、仁淀川の旧中州群によって河口付近が閉塞されているために、周辺の山地から流れ出す水は捌け口を失い冠水状態となるのである。

しかしながらこれらの低湿地帯には、ところどころに自然堤防や埋没丘陵が存在しており縄文時代や弥生時代の集落遺跡が形成されている。森岡遺跡や倉岡遺跡、北高田遺跡などを挙げるができる。また微高地の斜面部には古墳時代の祭祀遺跡が形成されている。このような高岡平野の微地形は、後氷期の海面上昇に伴って生じたものであるが、市街地中心部にある高岡高校では地表下10～18m付近までが沖積世堆積物、16～20m付近に海成層、この海成層の直上に厚さ1mの音地火山灰(アカホヤ)の堆積が確認されている。この地域は、後氷期の海水面停滞以後、仁淀川本流の砂礫堆積と支流である波介川の細粒物質の堆積と拮抗しながら微地形が作り出されてきている。

このような微地形と遺跡の立地は県西南部の中筋川流域平野の状況と類似している。すなわち仁淀川と波介川との関係を四万十川と中筋川との関係に比定することができるのである。

参考文献

川沢啓三「自然編」『土佐市史』高知県土佐市 1978年

貞方 昇「仁淀川下流沖積平野の地形形成」『西日本外帯・多雨地域における平野地形の特性に関する研究』昭和59年度文部省科学研究費総合研究(A) 1985年



Fig. 1 西鴨地遺跡位置図

2 歴史的環境

高岡平野で最も古く遡る遺跡は、サヌカイト製の尖頭器が発見された徳安仁井田ノ内の二宮神社境内（徳安C地点遺跡）を挙げるができる。この尖頭器は先端の一部を欠いているが復元すると全長8cmを測る。出土状況の詳細については不明であるが、岡本健児氏は旧石器時代末に属するものとしている。これ以降縄文時代後期に至るまでの間の遺跡の発見例はない。これは前述した平野の形成と密接な関係があるものと考えられる。平野部に遺跡が分布し始めるのは縄文後期からで、野田遺跡(26)や林口遺跡(34)を挙げるができる。後者は発掘調査によるもので後期前葉の土器と共に土坑も確認されている。続く晩期中・後葉に至ると遺跡数は飛躍的に増加する。波介川流域の倉岡遺跡(19)や北高田遺跡(16)からは黒色磨研土器や深鉢類が大量に出土している。深鉢は口縁部内面に沈線を有するなど瀬戸内との関連性が指摘できる。また、無刻突帯を有する県西部のものとは特徴を異にしており、この違いが地域差なのか時期差なのか今後の研究に期待がよせられる。

弥生時代の遺跡は、前期に属するものとして野田遺跡(26)や林口遺跡、北部山麓の居徳遺跡群を挙げるができる。前二者では前期後半の土器が少量確認されおり、居徳遺跡群からは前期前半を含む大量の遺物が晩期土器と共に出土している。高知平野の前期前半の遺跡としては、中央部に位置する田村遺跡群が著名であるが、ここからは前期初頭の土器が晩期土器を伴わずに純粋な状態で出土しており、居徳遺跡群の状況とは異なっている。同じ高知平野においても西部と中央部とでは弥生時代の開始に違いのあることを示すものであり興味深い問題を投げかけている。中期の遺跡の状況はほとんど解っていないが、唯一中期末の甫岐山遺跡(30)を挙げるができる。この遺跡は、仁淀川右岸の標高50mの地点に営まれた高地性集落で竪穴住居が1棟確認されている。弥生土器の他に石包丁や太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石鏃、石錘、投弾など石器類が豊富に出土している。後期になると再び平野部に集落が営まれるようになる。この場合、野田遺跡のように縄文後期以来生活痕跡が認められる旧中州に加えて、北高田遺跡や天崎遺跡のように比較的小規模な自然堤防上に立地するようになる。このことはこの時期に安定した自然堤防の形成があったものと思われる。北高田遺跡では、後期前半に属する掘建柱建物13棟と竪穴住居1棟、土坑などが検出され、県下では他に例を見ない掘建柱建物を中心とする集落として注目されている。当遺跡から出土した

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	徳安弥生遺跡	弥生	13	出間城跡	古墳・中世	25	天神三島遺跡	弥生・中世
2	二宮神社近傍遺跡	縄文	14	松森城跡	中世	26	野田遺跡	縄文・中世
3	徳安縄文遺跡	縄文	15	鷹股城跡	中世	27	今ヶ谷遺跡	古墳
4	本村遺跡	弥生・中世	16	北高田遺跡	中世	28	中島遺跡	中世
5	西鴨地遺跡	縄文・中世	17	蓮池城跡	縄文・中世	29	天神之森城跡	中世
6	森光遺跡	弥生	18	森岡遺跡	中世	30	甫岐山遺跡	中世
7	竹ヶ端遺跡	弥生	19	倉岡遺跡	弥生・古墳	31	大サルバミ古墳	古墳
8	江良澤遺跡	弥生	20	波介萬福寺遺跡	縄文・弥生	32	股谷古墳	古墳
9	入沢遺跡	弥生	21	三宝山城跡	弥生	33	宇佐西中郷遺跡	弥生・中世
10	鍛冶屋ヶ端遺跡	弥生	22	初田遺跡	中世	34	高岡林口遺跡	縄文・中世
11	伊乃保峠城跡	弥生	23	明官寺大古遺跡	古墳・中世			
12	船戸遺跡	中世	24	明官寺遺跡	弥生			

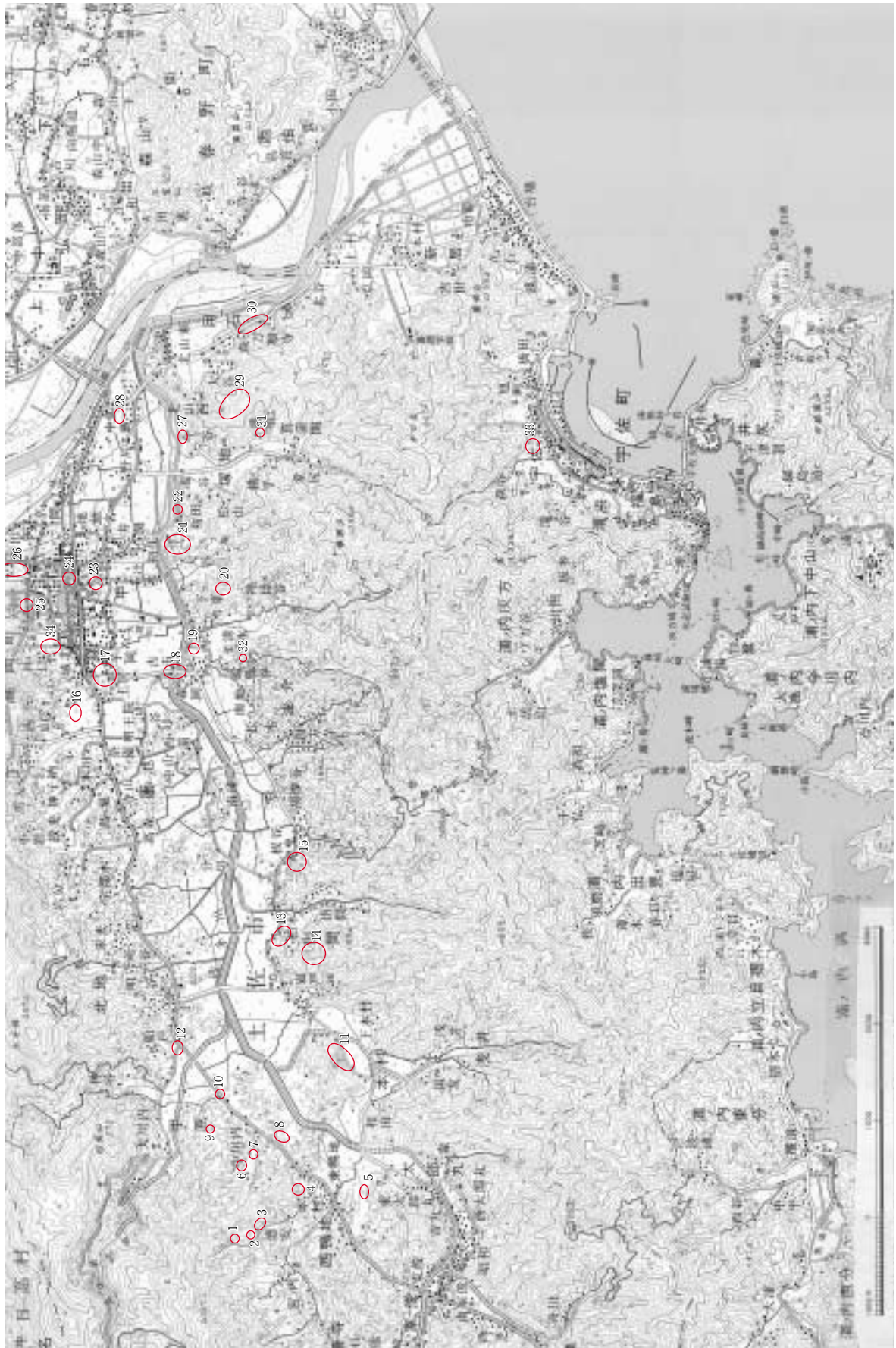


Fig. 2 西鴨地遺跡(5)と周辺の遺跡分布図

後期前葉の土器は、櫛描文や浮文を盛んに施しており、同時期の中央部の遺跡が無文化傾向を遂げることとは特徴を大きく異にしている。また、ここからはイネとともにヒエのプラントオパールが大量に検出されており、「稲作よりも稗作の方が主であった」という興味深い結果も得ている。

次に青銅器と磨製石剣の分布について述べなければならない。まず、仁淀川左岸の伊野町八田からは細形銅剣 1本、同じく天神溝田遺跡から中細銅剣と中広銅戈が1本ずつ出土し、さらに出土状況については不明であるが波介川流域から銅剣形石剣が1本出土している。このように仁淀川下流地域は、西隣の須崎湾とそれに注ぐ新莊川流域とともに細形・中細形銅剣、銅剣形石剣の分布圏を形成するのである。言わばこの地域は、高知県で最も古い段階の青銅器分布圏を形成している。続いて中広・広形銅矛が大量に流入し、県中央部の銅鐸・銅矛混在地帯とは異なった銅矛形祭器純粋の分布圏を形成するのである。すなわち、波介万福寺から中広形・広形が各1本ずつ計2本、天崎遺跡から中広形4本など近隣を含めて計13本の銅矛形祭器が確認されている。このような青銅器分布圏の違いが、普遍的な遺物である土器にどのように投影されるのか、否か、長年の課題であったが先述の北高田遺跡の状況が興味深く語ってくれる。

弥生時代後期末から古墳時代に至ると中央部との地域差はほとんど認められなくなる。高知平野における統合の結果であろうか。しかしながら前期・中期を通して古墳の造営は認められない。古墳時代前・中期の遺跡としては、大小の祭祀遺跡を挙げることができる。特に波介川流域には顕著である。甲原船戸遺跡や入沢遺跡(9)など低湿地に立地する水辺の祭祀が特徴的である。この種の祭祀遺跡は県西部で顕著であったが、近年では中央部においても盛行していたことが明らかになり始めた。今後の調査によって中筋川流域と同じような祭祀遺跡群の存在が想定される。また高岡町明官寺大古遺跡(23)からは滑石製の子持勾玉が出土している。古墳が造られ始めるのは6世紀末を待たなければならない。宮ノ谷古墳、土居山古墳、大サルバミ古墳(31)、股々谷古墳(32)を挙げることができるが、何れも発掘調査されたことはなく前二者はすでに消滅しているが、横穴石室を持った小型円墳である。股々谷古墳は岡本健児氏の調査によると2～3基の古墳群を形成しているということであり、7世紀中葉の須恵器蓋・坏が出土している。

古代に入ると土佐には先ず安芸・土佐・吾川・幡多の4郡が設置(『続日本紀』宝亀9年)され、高岡平野は吾川郡に所属することになる。ついで承和8年(841)に吾川郡の8郷のうち4郡を分けて高岡郡が置かれたことが『続日本後紀』によって明らかであり、高岡平野は高岡郷に属していた。奈良時代の遺跡については不明であるが、平安時代のものとしては野田遺跡、初田遺跡、池江良沢遺跡などが知られており瓦器や須恵器、土師器などが出土し、本町遺跡からは平安時代の鉄さいが出土している。現在の市街地から野田遺跡あたりが古代の中心地を形成していたことがわかる。

中世になると『吾妻鏡』に源頼朝の弟希義を追討した蓮池城主蓮池家綱の記載が見られ、南北朝期には、高岡平野も動乱の渦中にあり、北朝方の拠点として高岡館のあったことが『佐伯文書』から知ることができる。また観応の擾乱に際しては、土佐守護代の居城高岡庄松風城の記載も東大史料編纂所の「雑録新統一」に見られる。高岡館や松風城が高岡庄の何処にあったのか定かではないが、土佐守護代細川頼益が南国市の田村庄を設けるまでは、当地域が土佐の中心的位置を占めていたことが窺われる。

第 章 調査の概要

1 調査に至る経過

西鴨地遺跡の調査は、四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設に伴うものである。

国土開発幹線自動車法制定により、1966年7月に予定路線となった四国横断自動車道（高松～須崎間）は、以後、基本計画決定（1970年・南国～須崎間、1971年・大豊～南国間）、路線発表（1977年・大豊～南国間実施計画認可）と続き、10年を経て1987年大豊～南国間が開通、高知県初の高速道路となる。さらに1992年川之江～大豊間、1997年南国～伊野間が相次いで開通、現在は伊野～須崎間の2002年度開通に向けて建設工事が進められている。

高知県における高速道路関連の発掘調査は大豊～南国間にはじまる。高知県教育委員会は1973・1976年に実施した分布調査結果に基づき、1982年から発掘調査に着手した。この区間は山間部であることもあり、土佐山田町飼古屋岩陰遺跡（82年）、口ミノヲ谷古墳（83年）の2遺跡と調査対象遺跡は少なかったが、山麓部から平野へと続く南国～伊野間では、栄工田遺跡（93年）、長畝古墳群（94年）、奥谷南遺跡（94～96年）など5遺跡が調査の対象となった。

伊野～須崎間（11次区間）については、高知県教育委員会と日本道路公団高松建設局（現四国支社）高知工事事務所との間で工事範囲内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議・調整が行われ、1995年から計画路線内の試掘調査を実施することになった。調査については、高知県教育委員会と受託契約を結んだ高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当する。

11次区間で、試掘調査の結果に基づいて本調査が実施された遺跡は、東から順に八田奈路遺跡（96・97年度）、八田神母谷遺跡（95・96年度）、天崎遺跡（97年度）、居徳遺跡群（96～98年度）、北高田遺跡（98年度）、北地アリノ木遺跡（98年度）、西鴨地遺跡（98年度）、飛田坂本遺跡（96～98年度）の8遺跡である。なお、八田栃谷遺跡（95年度）・甲原中川内遺跡（96年度）の2遺跡については、試掘調査で遺跡の存在を確認したものの、調査面積を拡張して試掘調査時点で調査を完了、本調査には至っていない。また、四国横断自動車道建設に関連する墓地移転工事に伴って、土佐市教育委員会が主体となる人麻呂様城跡（97年度）の調査も実施されている。

今回報告する西鴨地遺跡は、従来遺跡として認知されておらず、試掘調査の結果明らかになった遺跡である。1997年1月22日～2月22日の日程で、土佐市戸波工区の埋蔵文化財の確認を行う試掘調査が実施された。試掘対象区の西端、土佐市西鴨地字バデン周辺の土地から、古墳時代から中世にかけての遺物包含層と古代の自然流路が検出され、地名を元に「西鴨地遺跡」と命名された。¹⁾

この試掘調査結果に基づいて、1998年度に西鴨地遺跡を対象とする本調査が実施される。1998年4月1日付の埋蔵文化財調査委託契約により、1999年5月25日より9月4日までの日程で実施し、調査を完了した。調査対象地内の溝などの調査時点で機能している構造物を避けて調査区（～区）を設定、調査面積は 区700㎡、 区840㎡、 区460㎡の計2,000㎡である。

註1) 曾我貴行「戸波東地区」『1996年度 高知県埋蔵文化財センター年報』1997年（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

2 試掘調査

(1) 調査対象地の概要

西鴨地遺跡（土佐市戸波地区）の調査は、四国横断自動車道建設予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査から開始した。調査期間は、平成9年1月22日～同2月22日までである。調査対象地は、波介川の支流である宮の内川の右岸に形成された沖積地であり、大雨の度に冠水を繰り返しているところである。試掘調査の範囲は、宮の内川と自動車道が交差する地点を東端とし、西端は西鴨地川右岸に迫る山塊の裾部までの東西約800m、道路幅70～90mの範囲を対象とした。字名では、中条、ヘダ、チャ、ジョウデン、ハリ中、ハリギ、バデンが含まれる。調査対象地の地目は、水田及びビニールハウスである。現地表の標高は、概ね10～12mを測り東から西に向かって少しずつ高くなっている。

(2) 調査方法と調査概要

東西の延長約800mの範囲に26個のテストピット（TP1～TP26）を設定した。テストピットの大きさは概ね5m×5mである。調査方法は、重機を用いて掘削を行い、土層の堆積状況や遺物・遺構の有無について観察し、各ピット毎に土層断面図の作製と写真撮影を行った。

各テストピットは3.5～4.7mの深さまで掘削を行ったが、全体を通して現耕作土の下には厚さ50～150cmの客土が置かれている。これは戦後洪水対策として行ったもので、旧地表面は現状より相当下に形成されていたことになる。客土の下には一部に旧耕作土の残存もみられるが、総じて厚い青灰色粘土の堆積となっており、宮の内川に近いTP1は、他のテストピットに比べて砂粒の混入が多くみられた。

調査の結果、TP17～19から東については、数個のテストピットから時期不明の杭が検出された他は、人工遺物は認められなかった。しかしそれより西のTP24～26からは、現地表下1.5～2.5mの深度で、古代～中世の遺物包含層を検出した。この内TP26は、土師器・須恵器と共に自然遺物や木製品片と見られるものが出土し、土層中に礫を多く含むことから埋没河川の可能性を指摘することができる。以上のことから、TP23～26の周辺について本発掘調査の必要があると判断した。

3 本調査

(1) 調査区の設定と周辺地形

本調査においては、調査対象区内を通る水路等調査時点で機能している構造物を避けて、便宜上、～ 区の調査区を設定し区ごとに調査を進めた。便宜上の調査区設定であり、これらの調査区は堆積状況も同じであり、同じ自然流路が流れる岸边を包摂する一連のものである。

周辺の地形と本調査時の調査区をFig.4に示した。調査区付近の現地表面は標高11.7～12.7m前後であり、西側の標高が高くなっている。調査区の北側40～50mほどの地点に東西方向に走る水路 - 宮の内川（流方向西 東）が流れ、水路沿いには市道ハリギ新田線が通っている。この水路は、戦後改修され付け換えられた三面コンクリート張りの水路であり、それ以前はコンクリート等の構造物を伴わない自然の河道が調査区に近い地点を蛇行しながら流れていたということである。通常は少ないながらも一定の水量を維持する穏やかなせせらぎだが、まとまった降雨の際には流れは一変し、濁流の渦巻く急流へと変貌する。この川（水路）も含めた治水が地域の積年の課題だったことが推察される。

水路は遺跡から下流へ約800mの地点で波介川（戸波川）に合流する。調査区の南側には標高45.09m比高差33mの小丘陵が控える。調査区に続く斜面は40度前後の傾斜を持つ急斜面だが、尾根を越えた斜面は削平されて果樹園として利用されており、旧地形の改変が著しい。遺跡の北側にも標高25mほどの低く細長い丘が西側から伸びており、調査区は低い丘陵に挟まれた谷状地形の谷出口付近に位置しているといえる。谷は西に向かって開いており、奥行き700m、出口付近の幅170mと細長くのびている。

今回の調査地点は字「バデン」であるが、周辺の地形は大規模な客土による土地改良のため、現在の字界から旧地形の推定はできない。調査区周辺は調査前には生姜畑として利用されていたが、土地改良以前には水田であり、客土の下からは粘土層が確認されている。戦前には湿田であったが、暗渠による乾田化を試みた痕跡も残されていた。しかし、戦後も条件の悪い湿田である状況が続いたようであり、1946年の南海地震の際の土地の沈降に対する地直しの杭と見られる杭も包含層上層の粘土層から検出されている。

(2) 調査の方法

調査に際しての測定の基準点設置については、(株)アイシーに委託し、遺跡地周辺の四国横断自動車道関連の2級基準点（基11次 - 24、基11次 - 25他）及び3級水準点（水11次 - 15、水11次 - 16 - 0）をもとに調査区周辺に6箇所の4級基準点を設置した。これらの基準点を利用して調査区内に4mグリッドを設定した。4級基準点の公共座標並びに標高は以下のとおりである。

キ - 1	X=51735.592	Y= - 12798.564	Z=12.008
キ - 2	X=51707.684	Y= - 12834.033	Z=12.033
キ - 3	X=51727.579	Y= - 12953.599	Z=12.195
キ - 4	X=51706.660	Y= - 12872.630	Z=12.093
キ - 5	X=51735.282	Y= - 12869.165	Z=11.951

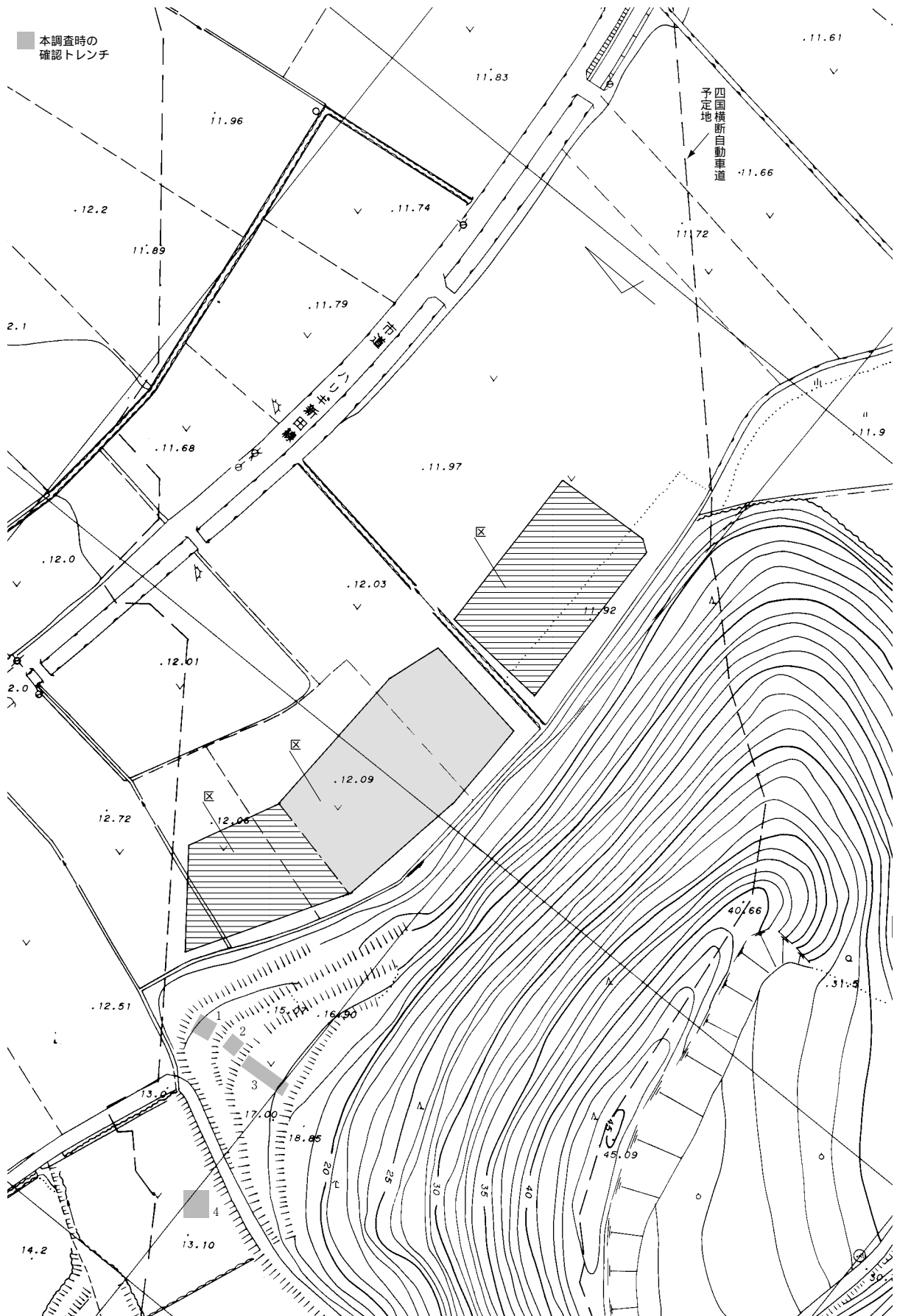


Fig. 4 西鴨地遺跡調査区（本調査）と周辺の地形（S=1/1000）

キ - 6 X=51731.460 Y = - 12816.755 Z=11.641

調査区全域をカバーする公共座標に即した4mグリッドを設定、西北端を基準とし、南北方向はAからアルファベット順にA~K、東西方向は1から数字の昇順に1~29の記号・数字を付し、測量の起点とした。グリッドの設定と公共座標との対応についてはFig.5に示した。

遺物の多くが自然流路・包含層中からの出土であったため、特に必要だと認められる遺物については、地点・標高を記録して採り上げるか、1/10あるいは1/20の縮尺での実測を行った。それ以外の遺物については、グリッド単位ではなく、主に調査小区の単位で採り上げを行う。調査小区については、Fig.5のように10~12m前後の幅で設定した。区は東から西へ、 - A・ - B・ - C、

区も同様に東から西へ、 - A・ - B・ - C、区は東側を - E、西側を - W、そして区を拡張した調査区西端部分については - Wカク(区西拡張区)として各々の地点を記号化し、出土地点の記録に用いた。

調査区ごとに、流路にほぼ直交するトレンチを設定、層序を確認しながら平面的に掘り下げる。先述のごとく遺跡周辺は、元来、湿田であったが、大規模な客土により1m前後の嵩上げを行い、調査直前には生姜畑として利用されていた土地である。包含層を検出するまでの大量の土砂を除去するために重機を利用、遺物包含層上面までは重機により掘削、包含層以下は人力による調査である。

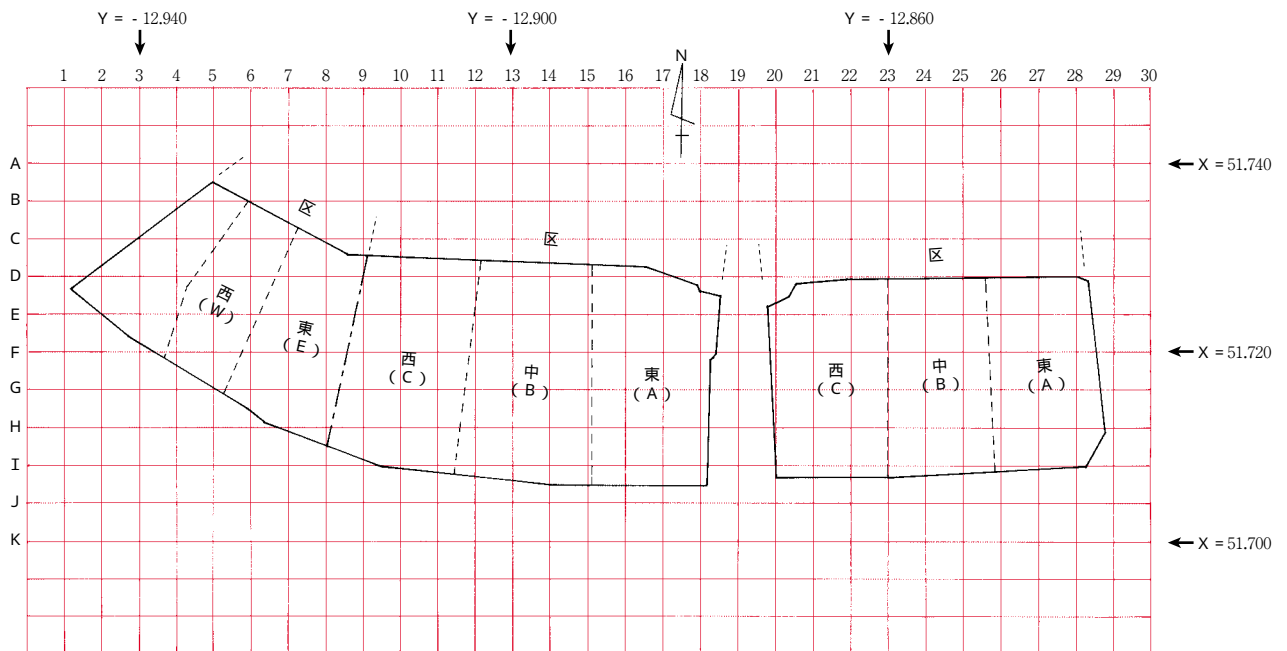


Fig. 5 西鴨地遺跡調査区及びグリッドの設定 (S=1/800)

(3) 調査の日程

5月25日、本発掘調査の準備作業着手。調査前の草刈作業、現場事務所の設営、調査用測量杭の付設等の作業を進める。(同時に須崎市飛田坂本遺跡の道路工事部分の調査を行う)

6月5日、区調査開始。まず、調査予定地の東端に区を設定、試掘調査の成果に照らしながら、遺物包含層の深さを再確認する。全域に1m前後の客土層がのるため、排土置き場を調査予定地北側に設定する。

6月8日、遺物の集中部のみという当初の予定だったが、比較的まとまった出土を示したため、可能な範囲で区の面積を拡張。地表から3mの深さにも遺物が出土する。

6月13日、区調査開始。当初は遺跡の西側への拡がりを確認する意味で区と区を区分していたのだが、両区ともに遺物の集中が確認できたため、後に調査対象地内で可能な範囲まで広げた。最終的には、区の境界はなくなる。

7月7日、戸波中学校発掘調査参加。全校生徒、約80名が教職員全員とともに調査に参加してくれる。学年ごとに分かれて遺物の見学と発掘調査の体験を行う。炎天下にも関わらず、非常に熱心に発掘。

8月20日、記者発表。

8月22日、現地説明会。地元の方を中心に、高知市、南国市、土佐町、本山町など遠方からの来跡もある。約120名の参加。

8月28日、空中写真撮影。

9月4日、調査の全日程を終える。



調査に参加する戸波中学校のみなさん

第 章 遺跡の概要

1 西鴨地遺跡の概要

西鴨地遺跡の本調査に際しては、試掘調査の結果をもとに、現在機能している水路等の構造物を避け、幅約20m、長さ約100mほどの範囲に調査区を設定した。

土層は細かく分層していくと30以上に分かれるが、基本層序として確認した層は、～層であり、主な遺物包含層は、・・・層、特に・層に集中している。・・層にも少量だが遺物が含まれている。これらの層の詳細については後述する。

約2,000㎡の調査区内で検出した遺構は、溝1条と自然流路（河道）及び3時期以上にわたる杭列である。河岸からは拳大から人頭大の自然礫が点在あるいは集中して検出されている。杭列の間に自然礫が挟まった形で検出された地点もあるなど、杭列の分布と礫の分布が重なり合う部分も多い。当時（古代）の一種の護岸だった可能性も考えられる。

出土遺物は、総量コンテナケース150箱ほどで、所属時期は縄文時代後期・縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代初頭・古代（8～10世紀）・中世（12～13世紀）であり、層出土の杭以外に14世紀以降の遺物はほとんど出土していない。

遺物の大半は古代（8～10世紀）のものである。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器などの土器類以外に、木製品を含む植物遺体や帯金具などの金属製品や鉄生産を示す



上空からみた調査地点周辺の地形

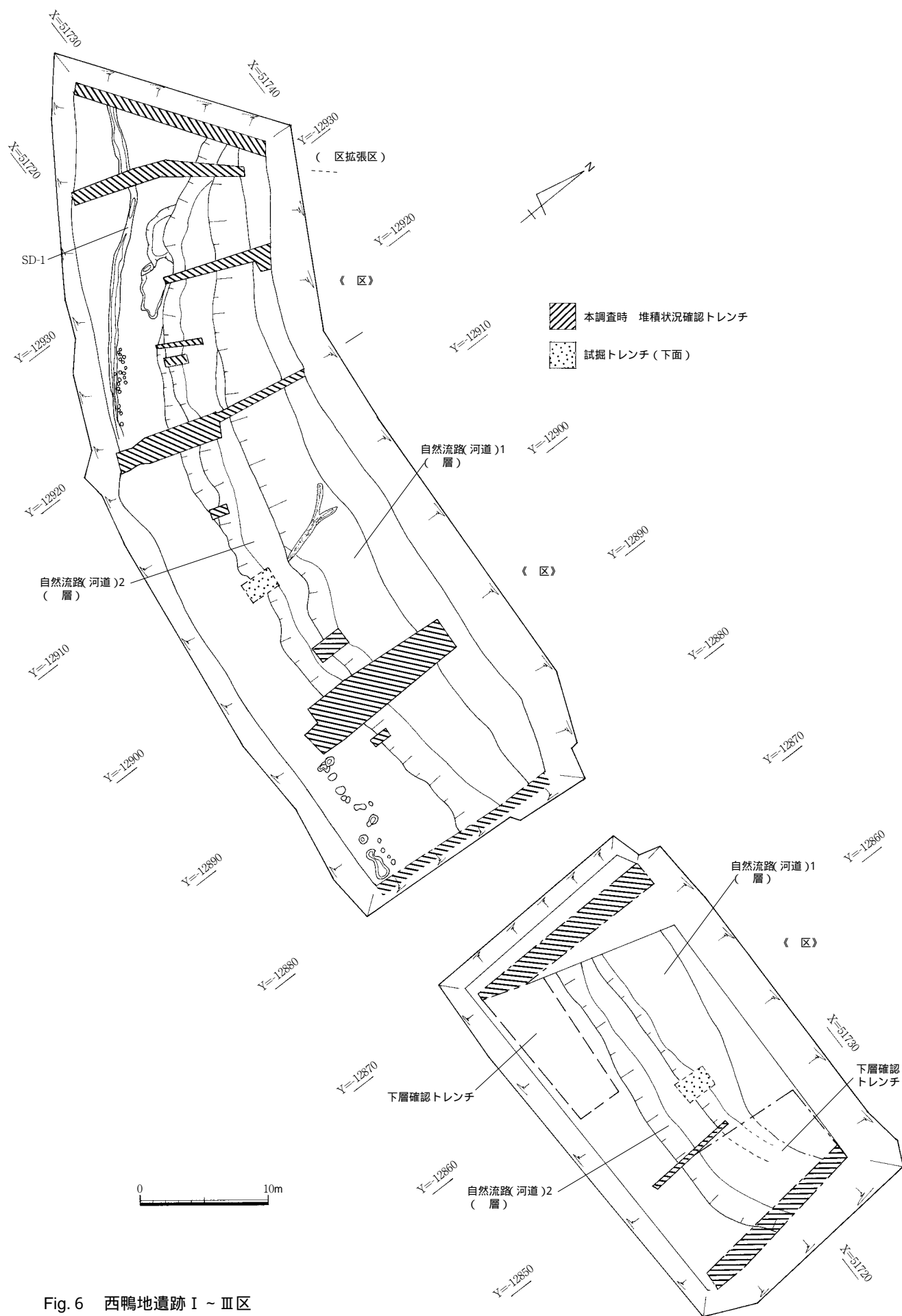


Fig. 6 西鴨地遺跡 I ~ III 区
遺構平面全体図 (S=1/400)

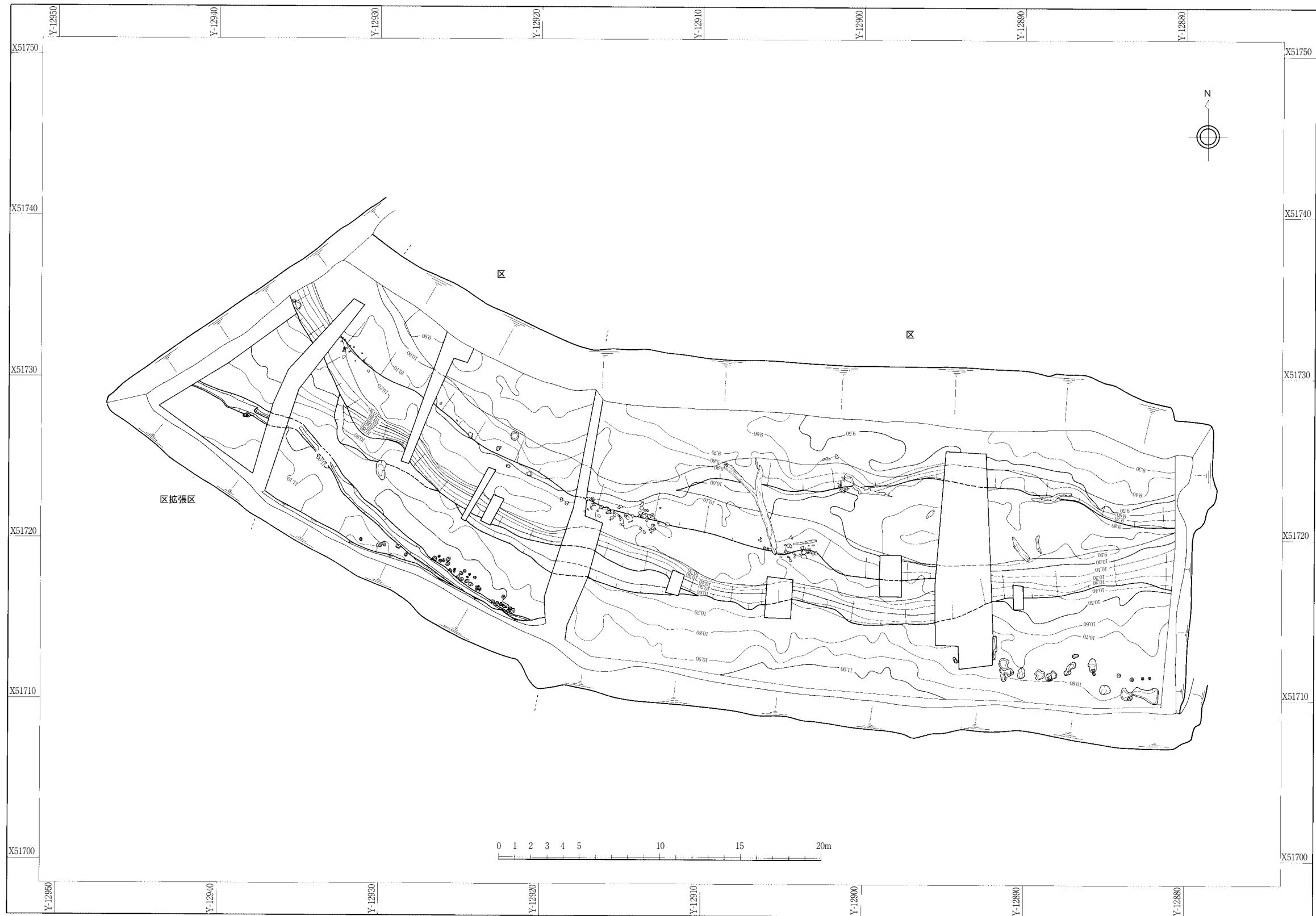


Fig. 7 西鴨地遺跡Ⅱ・Ⅲ区平面図(等高線10cm間隔・S=1/300)

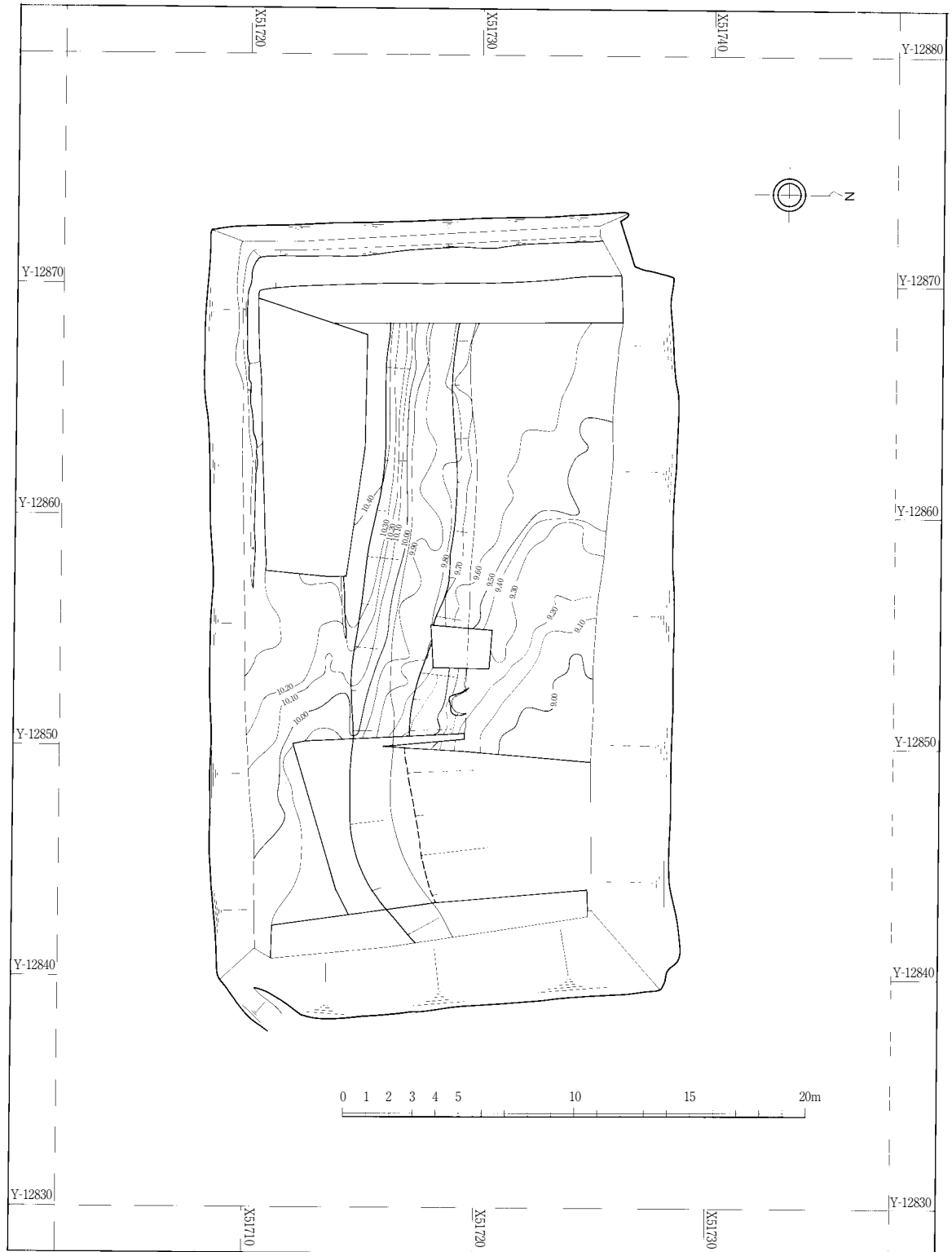


Fig. 8 西鴨地遺跡 I 区平面図 (等高線10cm間隔、S=1/300)

椀状鉄滓など、古代に属する多様な遺物が出土している。

まとめて出土した土師器煮炊具・須恵器貯蔵具、搬入土器である緑釉陶器、灰釉陶器、流路内出土資料ながら県内でも最多の部類に入る黒色土器、製塩土器・帯金具の存在や木製祭祀具は官衛関連遺跡であることを示す。また土師器・須恵器の供膳具は、この地域の古代の土器様相の変遷を位置付けることができる良好な資料であり、当遺跡出土資料が地域史の構築に果たす役割は大きい。

周辺への遺跡の広がりが予想されたため、本調査に併行して調査区の南西方向の微高地上と隣接する谷に4ヶ所の小トレンチを設定、確認調査を行ったものの、遺構・遺物とも検出できなかった。調査区内で検出された大半の遺物は自然流路の運搬・堆積作用により上流（西方向）から持たされたものと考えられる。遺物を使用したであろう空間はこの谷の上流に位置する。ただ、遺物の磨滅の状況から判断すると距離の隔たりはさほど大きくなく、生活の本拠は今回の調査地点に近接した地点であると予想される。

Fig. 7は 区、Fig. 8は 区の調査途上での図面であり、各々の調査区の平面図を10cm間隔の等高線で示した。Fig. 6は 層終了段階の状況を平示した面図であり、部分的には対応しない箇所もある。

2 土層堆積状況

調査区内において確認した土層堆積状況 - セクション図をFig. 9 ~ 11に示す。 区西端・ 区中央部・ 区西端の3ヶ所であり、いずれも流路の方向に直行する南北方向のセクションである。層の詳細については各々の図面の層名を参照していただきたい。

遺物包含層を中心に調査区全体の基本層序を設定した。 層・ 層が旧耕作土及びそれに連続する層、 層が客土、 ~ 層までが主な遺物包含層、 層以下から検出することができた遺物は流木等の植物遺体を除くとFig.32-365の打製石斧1点のみである。 ~ 区を通じて広く確認できる層をもとに基本層序を設定したが、一部に分布するだけの層もある。また、層によっては、さらに細分の可能な地点・層もある。

調査に入る直前までの耕作土（現耕作土とする）の下は、地点によって厚さは異なるものの1m前後の大規模な客土の堆積が認められる。現耕作土を 層、耕作土下の客土を 層とした。 層には遺物は全く含まれていない。客土除去後には全域に粘土層の堆積があり、この層を 層とした。 層は客土以前の旧耕作土（水田）に相当する粘土層である。地点により2 ~ 3層に分層可能だが、基本的には水田耕作面あるいはその下層に相当すると考えられる粘土層である。この層の下に小礫を含む厚さ15 ~ 20cmほどの遺物包含層 - 層を検出した。 層出土した遺物（瓦器等）から、堆積時期は中世前期以降だと考えられるが、遺物量が少量で詳細については不明である。

層除去後に検出した層が 層である。この 層と下層に堆積する 層から、今調査の遺物の大半が出土している。8世紀から10世紀までの時期幅の遺物がまとめて出土しており、これらの遺物により遺跡の主な存続時期と性格が予想される。 層とともに複数の層をまとめた呼称であり、

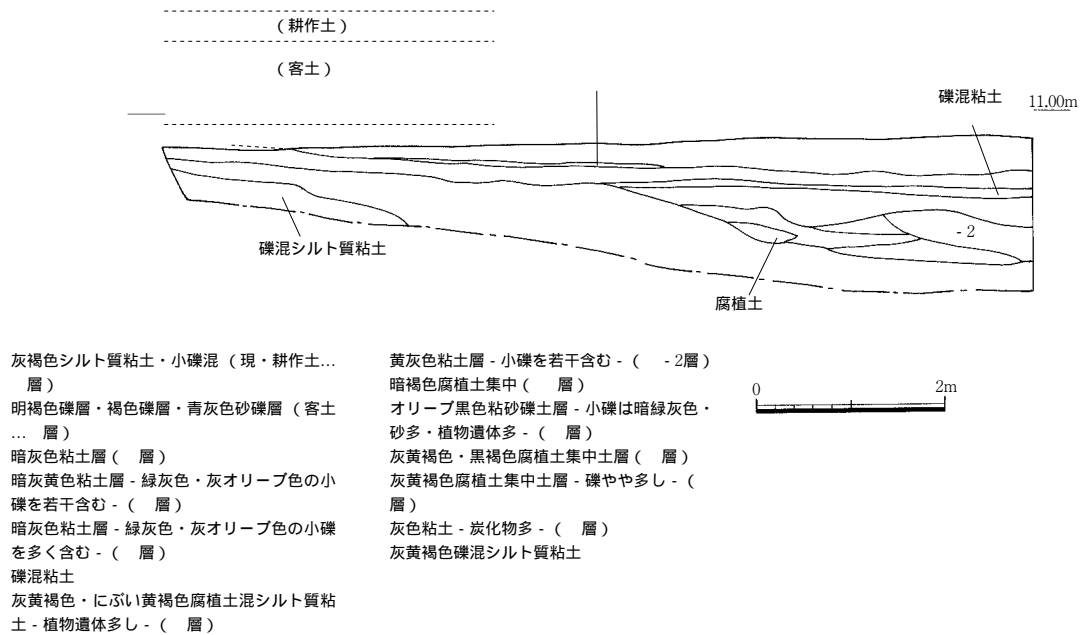


Fig. 9 I区西壁セクション (S=1/80)

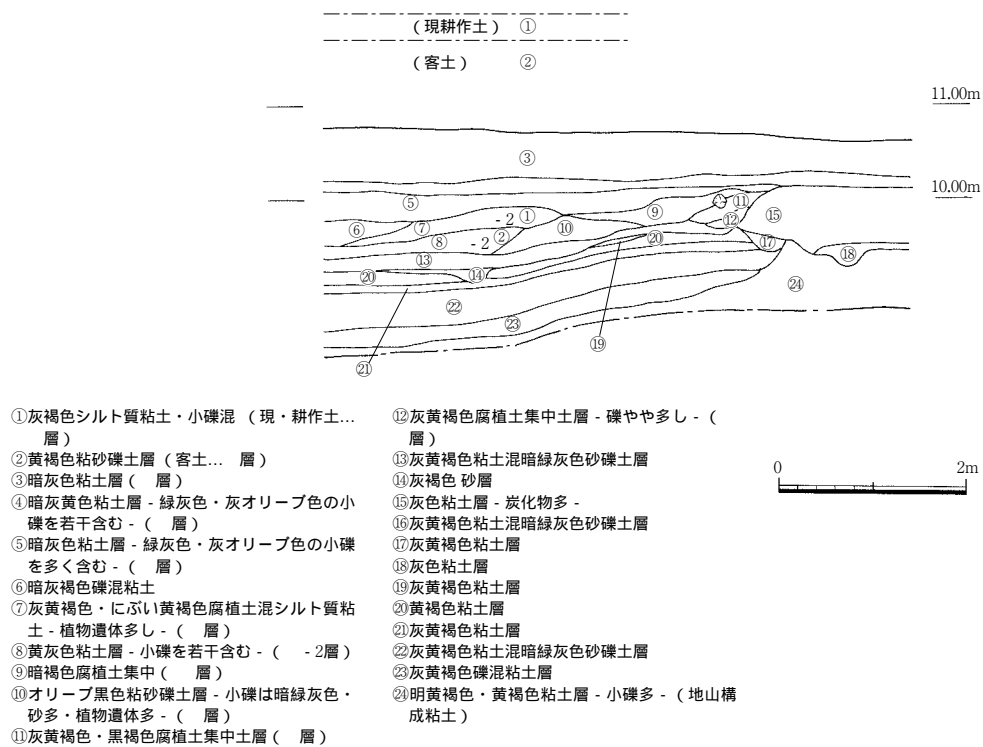


Fig.10 II区A・B境界バンク西壁セクション (S=1/80)

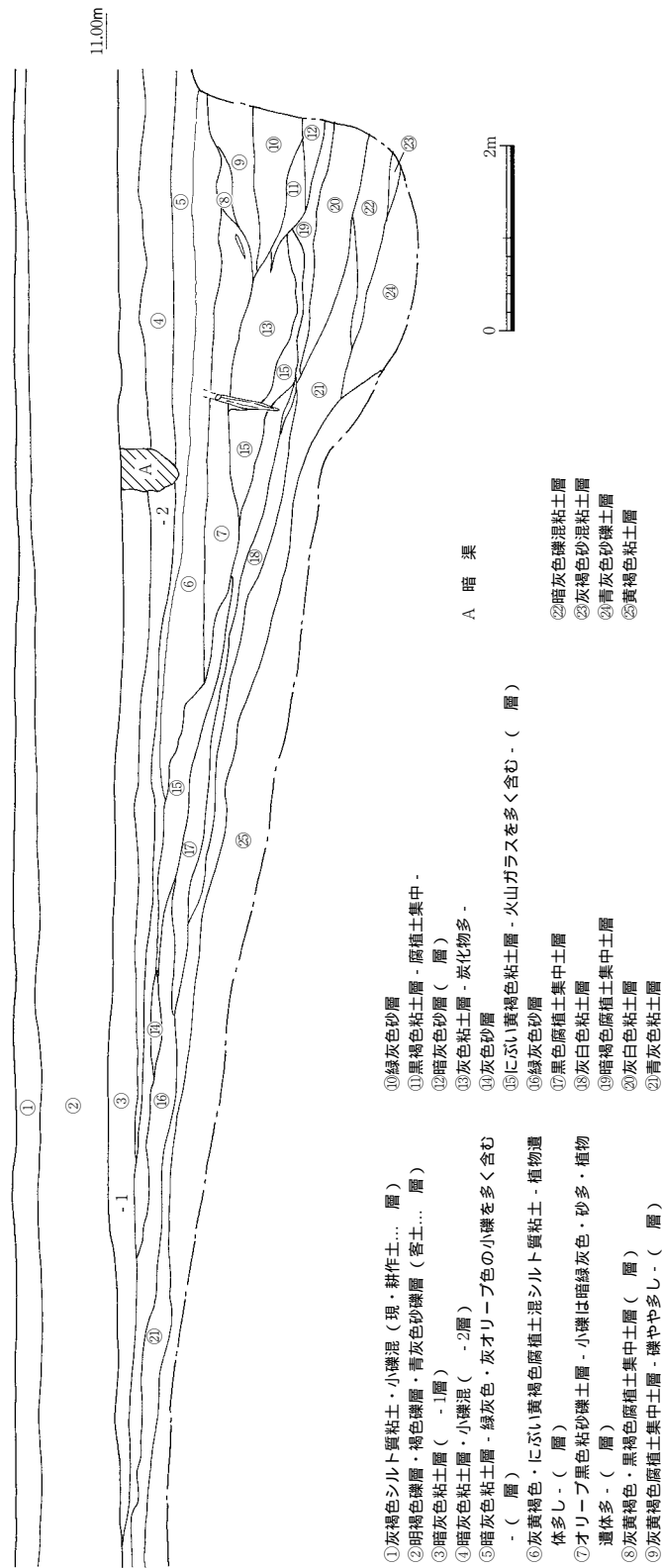


Fig.11 III区西端セクション (S=1/80)

層の中には ・ 1・ - 2、 ・ - 2・ サレキなどいくつかの細分が可能であった。層は粘土層を主体に、小礫混じり粘土層、腐植土集中土層などが互層となり、複雑な堆積状況を示す。

層は腐植土集中土層が主体で、小礫混じり粘土層、砂礫土層などが互層をなす。層・層ともに数層に分層可能なのではあるが、各々の層に河道の埋積の状況が反映されていると考え、・というまとまりで遺物の採り上げを行った。また ・ 層の区別をしたのは、別々の流路の堆積物として時期差を持つ可能性も視野に入れてのことである。平面的に検出した「岸辺」のラインも ・ 層の拡がりに対応している。

・ 層間で遺物の構成にほとんど差のないことから、これら2つの層は堆積した時間には当然先後関係があるものの、堆積時期は極めて近接した時期であることが想定される。また平面的には異なる流路に対応する堆積物であるようにも見えるが、土層堆積状況を改めて検討すると、同じ流路が時間差をもって埋積されたと解釈する方が、より合理的である。

・ 層によって流路が埋積された時期については、出土遺物の時期から10世紀だと考えているが、それ以降である可能性も残る。

この2層からは、それ以前の縄文時代・弥生時代前期・中期・古墳時代初頭など他時期の遺物も少量ではあるが検出されている。

層は灰色粘土層で極めて粘性の強い粘土である。層あるいは層の流路の肩となる地点に部分的にしか残っていない。層は、堆積後に ・ 層が埋積した流路によって侵食されたものと推定される。包含する遺物は、8世紀の須恵器あるいは土師器に限られる。木製品等については調査範囲では確認できなかった。

層は灰色～青灰色砂層及び砂礫層、古墳時代初頭の土師器を含んでいる。

層はにぶい黄褐色粘土層で火山ガラスを多く含む粘性の低い層である。区西端の層中からは弥生土器がまとまって出土している。今回の調査区域では他の地点にも層は検出されているものの遺物は出土していない。

3 遺 構

自然流路（河道1・2）とそれに伴う杭列、溝一条（SD-1）が検出されている。溝（SD-1）周辺を中心に直径10数cmの小ピットが20基ほど、2区東端でも20基ほどの小ピットが検出されたが、杭列に伴うものであり建物跡を構成するものではない。検出地点を全体図（Fig.6）に記載するととどめる。

溝（SD-1）は、自然流路に沿って東西方向に走り、検出面での幅70～95cm、検出延長23m、深さ12～16cmを測る。残存状況は悪く、底面付近のみの残存である。断面U字型で、最下層に堆積しているのは砂層であり、水が流れていたことを示している。出土遺物はなく、形成時期は不明である。

自然流路については、層の埋積した流路を河道、層の埋積した流路を河道2としてFig.6に示した。Fig.17に示した範囲が層と層の分布範囲である。しかし、土層堆積状況の項で述べた

ように、これらの2つの流路は埋積時期の極めて近接する一つの流路として捉えた方がよいかもしれない。なお、この自然流路からは土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・金属製品・木製品など8～10世紀を中心とする時期の遺物がまとまって出土している。出土遺物についての詳細は「第 章 出土遺物」の項で報告する。遺物出土地点については、主な遺物の出土地点についてのみFig.18に示した。流路内出土資料という資料的制約を考え、多くの遺物については層位とグリッド及びグリッドに準じる地点確認を行った上で採り上げるという調査方法を行ったため、出土遺物の多くをカバー可能なドットマップ等は作成できない。主な遺物の出土地点の平面位置を示すことができるのみである。

これに対して、流路に沿って打たれた杭列については遺構と同様に扱い、ある程度時期が遡ることが確認できる大半の杭について地点及び標高の測量を実施した。

杭にはいくつかの時期のものが混在して検出されている。最も新しい杭は、戦後の南海地震の地盤低下に伴う地直しの杭であり、層上面あるいは層中に残されていた杭が相当する。この杭については、土器包含層上面であったこともあり記録を残していない。Fig.17- 区杭検出状況として記録した杭列は層以下で検出した杭である。杭検出時点の標高を東西方向と南北方向の2方向について示したが、検出標高の違いで2時期以上の杭であることが予想される。

杭列はFig.17- として示した地点を結ぶラインとFig.17- として示した地点を結ぶラインの2つのラインに並ぶことが指摘できる。前者は、河道1とした層の分布ライン及びその岸辺に沿って確認されたものであり、後者はSD-1に沿って検出されたものである。検出された標高も各々に対応している。これらの杭列は、自然流路の方向に沿って打たれたものだが、流路に直行する杭もある。の杭列は流路に接して形成された浅い皿状の落ち込み地形に打ち込まれた杭である。この杭列のみが流路方向に直交する。

区の杭列は周辺に砂岩礫を伴って検出されている (Fig.12)。区についても同様の様相 (杭列と砂岩礫が同時に検出される) を示す地点 (Fig.13・14) があり註)、これらが自然流路に対する護岸の役割を果たしていた可能性も考える必要がある。加工の痕跡がなく、利用されていたものかどうかの特定はできなかったが、岸辺に直交する形で検出された長さ6 m60cmの二股に分かれた自然木 (Fig.13) や長さ3 m50cmで梯子状の加工の入った木 (Fig.14) など、調査区周辺の岸辺

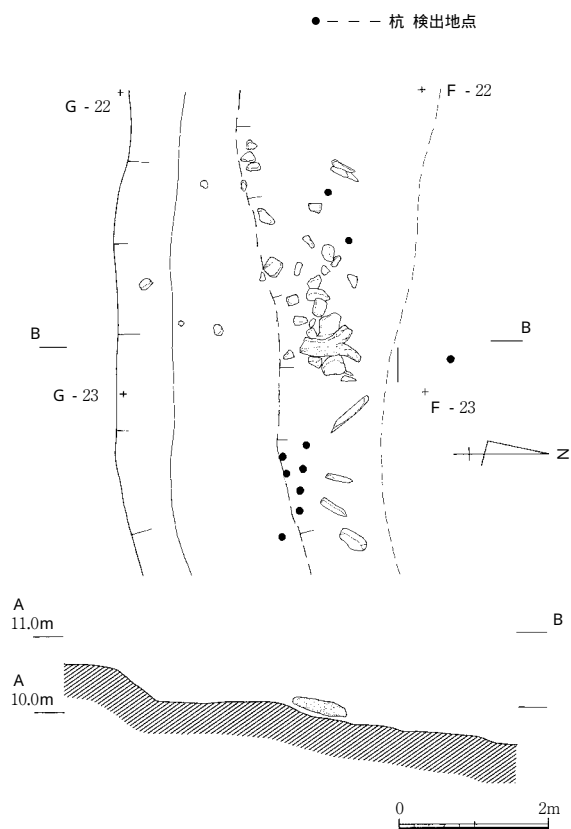


Fig.12 I区遺物 (礫・流木・木製品・杭列) 出土状況
平面・エレベーション図 (S=1/100)

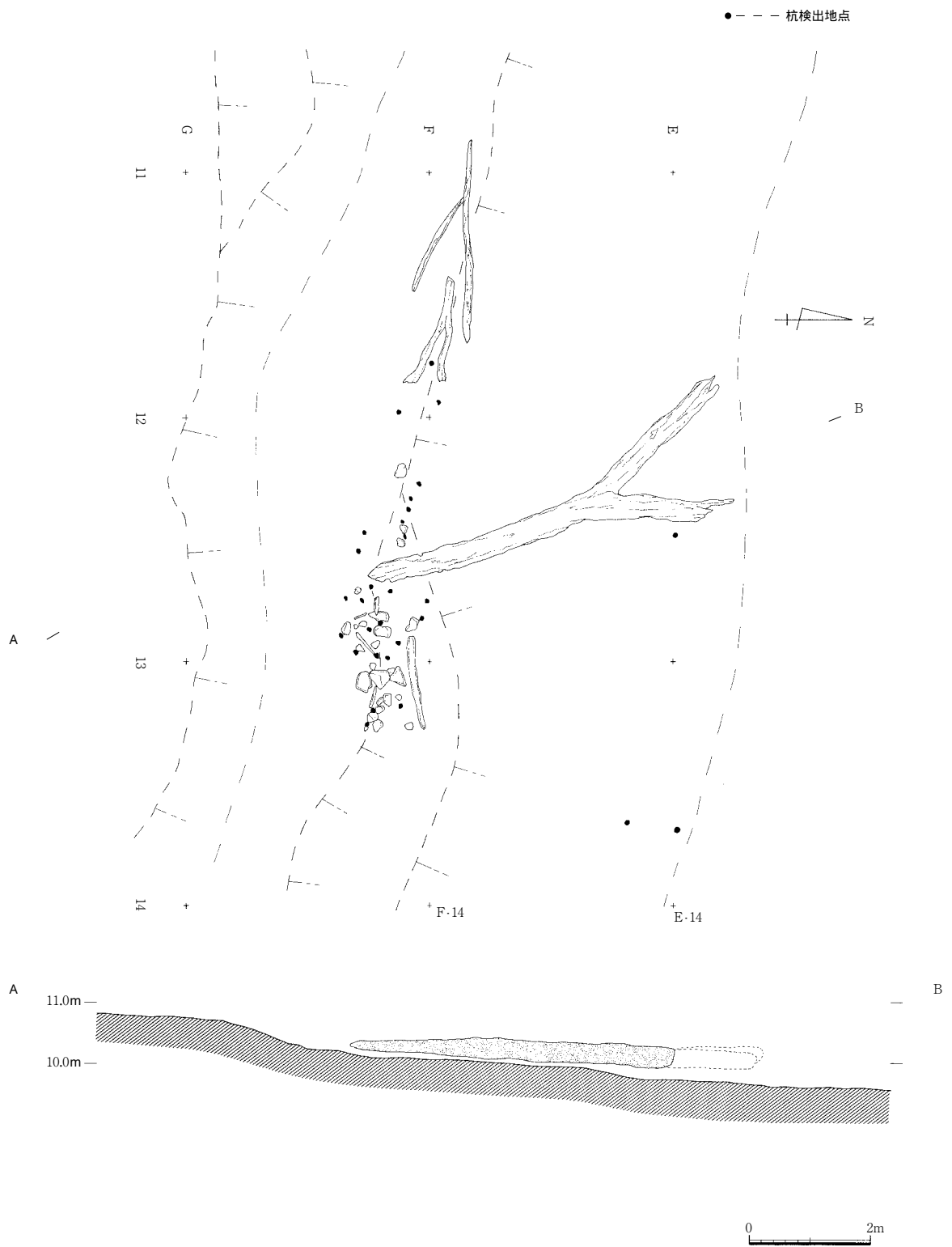


Fig.13 II区遺物（礫・流木・木製品・杭列）出土状況 平面・エレベーション図（S=1/100）

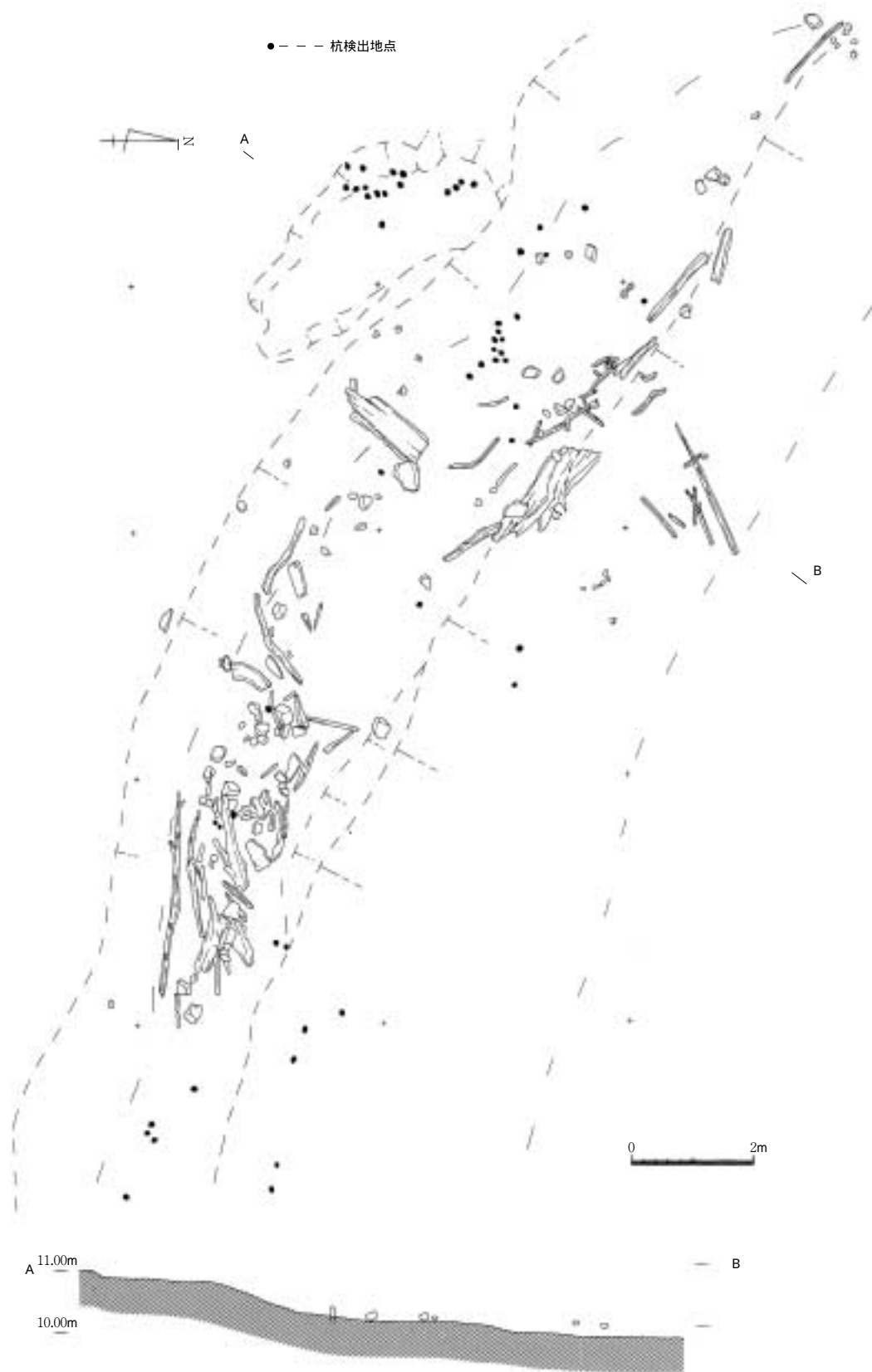


Fig.14 II・III区遺物（礫・流木・木製品・杭列）出土状況 平面・エレベーション図（S=1/100）

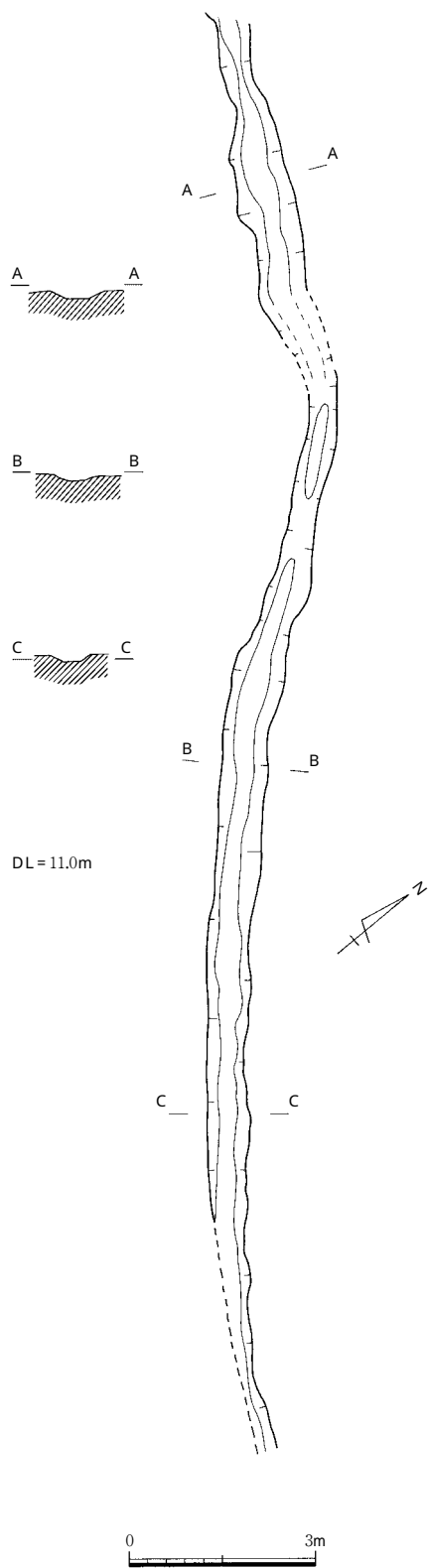


Fig.15 SD - 1 平面・エレベーション図
(S=1/120)

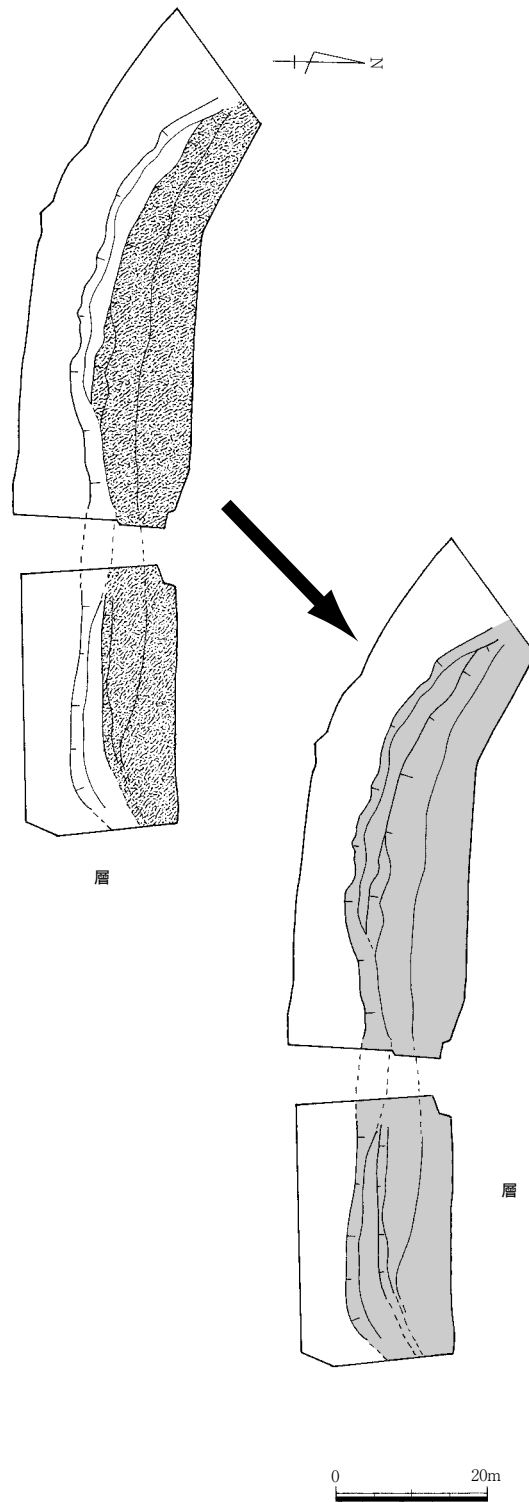
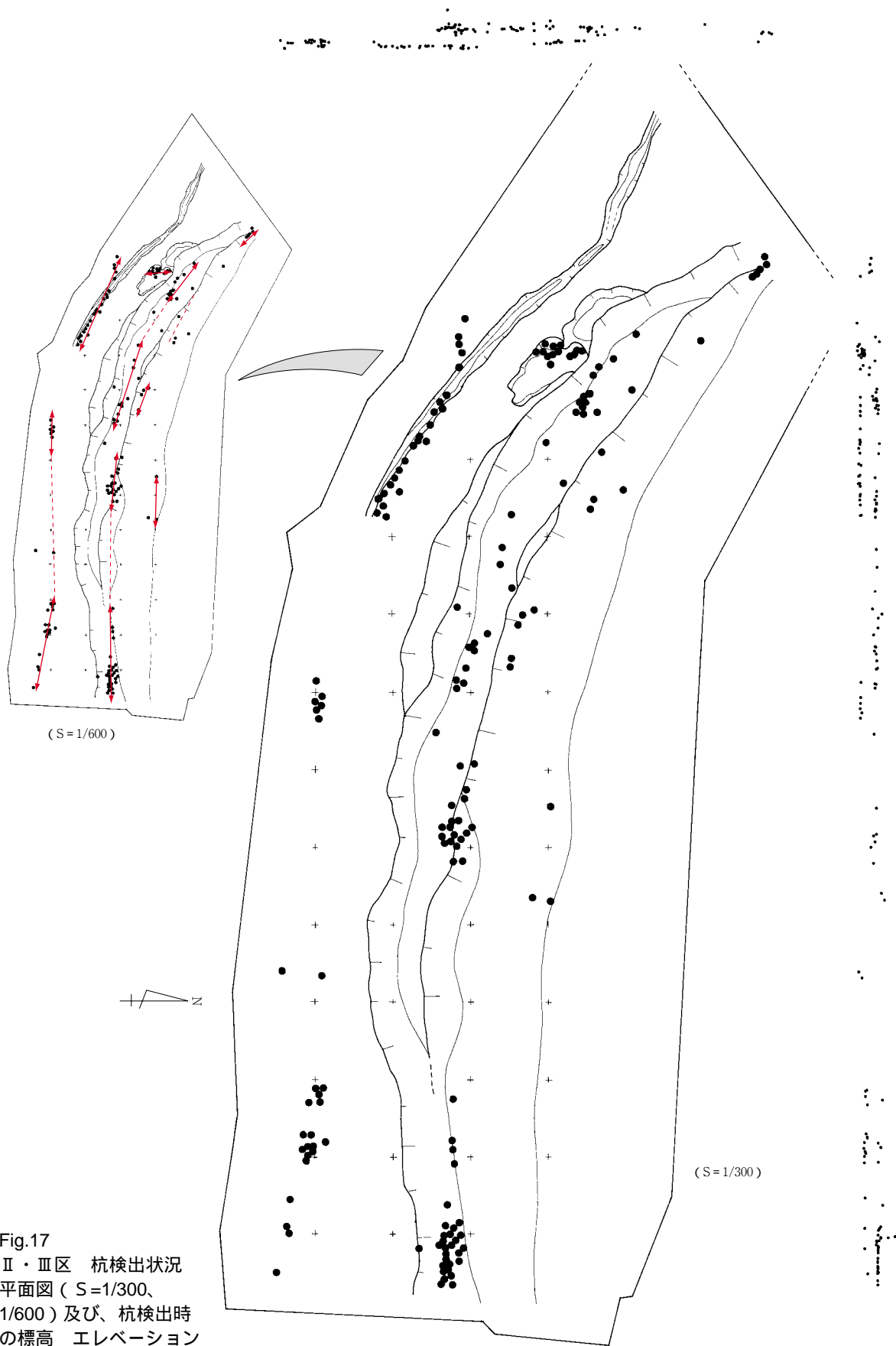


Fig.16 自然流路 (河道) の変遷 (S=1/1000)



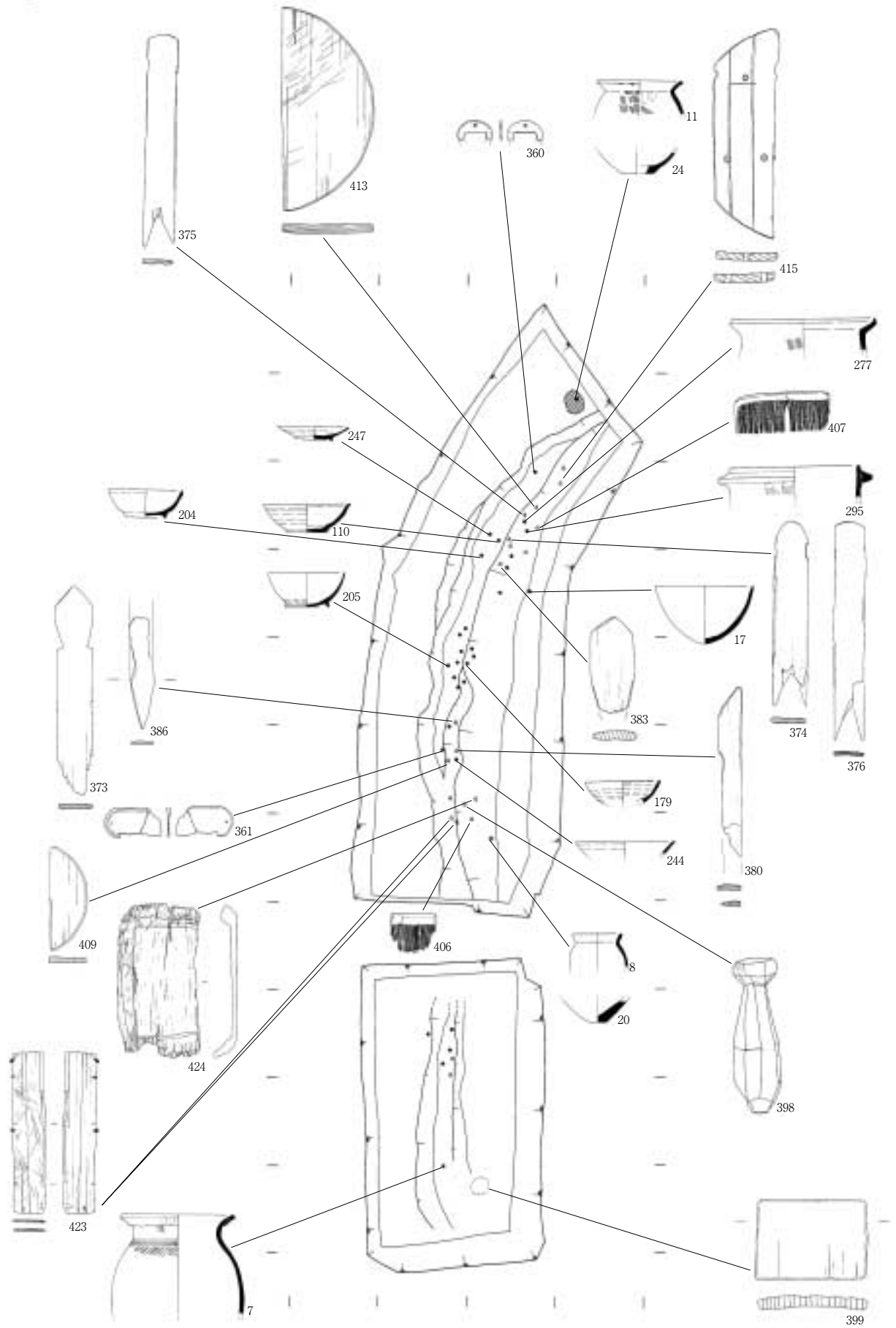


Fig.18 主な遺物出土地点平面図

が利用された可能性を示す木製遺物も多い。

註) 木と自然礫を利用した護岸工法は、現在の親水護岸など脱コンクリート護岸の川づくりに類似例を見出すことができる。遺跡から約8 kmほど東の土佐市倉岡遺跡付近の波介川では、発掘調査中に河岸に打ち込んだ数列の杭の間に自然礫を埋め込む工法により護岸工事を行っていた。護岸強度の関係や経費など、様々な要因でコンクリート護岸の占める割合は、今なお高いが、近年、木・杭及び礫を使用した近自然工法へと河川護岸が変化する傾向にある。

参考) 『木でつくる公共空間ビジュアルブック』高知県森林局林業振興課 2000年

『多自然型川づくり 施工と現場の工夫』(財)リバーフロント整備センター 1998年

第 章 出土遺物

出土遺物は、土器、石器、木製品、金属製品に大別することができる。各調査区ともに層位的な出土状況を示していないために、ここでは縄文時代～古墳時代、古代、中世に分けて、種類別、器種別に説明する。

1 土 器

(1) 縄文時代～古墳時代 (Fig.20)

縄文土器は 区から出土している。1は後期の双耳壺の耳部で接合部から剥離している。径5mmの円孔が上下に貫通し、上下面にRLの縄文を転がしている。2・3は晩期の刻目突帯文土器である。両者ともに口唇は丸く、突帯は小さく扁平である。3の外表面は横位の擦痕、内表面は同方向の条痕が見られる。ともに最終段階のものである。4は、弥生中期後葉の壺頸部である。外表面に櫛描直線文と櫛描波状文を施し更に楕円形の浮文を貼付している。5は、弥生前期前半の甕である。口唇は面取り、下半にしっかりした刻目を刷毛状原体で施し、口縁部内外表面は同原体でヨコナデを施している。6は弥生後期の二重口縁壺である。7・11は弥生後期の甕である。7は、口縁部外表面に2cm幅の粘土帯を貼付に上胴部には櫛描直線文と右上がりの列点文を施している。櫛描文は4に比べてシャープさに欠けている。11は、く字に屈曲する口縁部を有し胴部外表面の刷毛の下地に叩き痕が認められる。7は後期前葉でいわゆる土佐型甕に属し、11は後期後葉に属する。8～10・12・13は古墳時代前期の甕である。16は脚付鉢の脚部、17は鉢である。ともに古墳時代前期である。14・15・18・20・23・24は弥生後期の底部、19・21は古墳時代前期の土器底部である。22は古墳時代後期の須恵器坏蓋である。

(2) 古 代

供膳形

a 土師器

皿、坏、椀がある。これらはすべてロクロ使用による成形で、いわゆる回転台土師器に属するものである。以下器形別に形態、法量などによって分類を行う。

皿 (Fig.21-25～29・33・36～48、Fig.23-122・123)

類：口径10cm以下の小型のもの(25・26)。内外面強いヨコナデを施す。

類：口径11～16cmを測り、内外面強いヨコナデを施す。口縁部に向かって比較的直線的に立ち上がる A類(29・33・36・41・44・45・48)と外反する B類(27・28・37～40・42・43・46・47)がある。後者の中には口縁部のみ外反する B類(39)と立ち上がりから深く屈曲する B類(27・28・40・43・46)とがある。また41は、内外面へら削りをした後ヨコナデを施した丁寧な作りをしており、他のものに比べて特異な存在である。さらに内表面には、漆或いは渋のような付着物が見られる。この他に底部から屈曲して立ち上がる高台付の皿が2点(122・123)ある。

坏 (Fig.21-30・31・34・35・49～78、Fig.22-79～91・93～103・105～108、Fig.23-115～117・121・124)

類：口径10cm前後の小坏で、器高指数は20.4から25.7を示す。ヘラ切り後、外底を丁寧にナデ消し内面の調整も丁寧な A類 (50・53・55) と切りっぱなしで内面の調整も粗雑な B類 (49・51・54) がある。

類：化粧土を塗布し内外面にヘラミガキを施し、口縁部内面に段を有する (52・59)

類：口縁部が直線的に立ち上がり、後述する 類に比して重厚な作りを有するもの (72)

類：供膳形態の中で最も多いタイプである。器高指数は19.0から31.1までばらつきがあるが、平均22.8である。口縁部が比較的直線的に立ち上がる A類 (56・57・64・68・73～75・78・79・82・85・86) と口縁部が外反する B類 (58・60～63・65～67・69～71・76・77・80・81) がある。両者はヘラ切り後、底部をナデ調整することを基本としている。95～101、103、105は 類の底部である。

類：器高指数が30以上を示し、内外面に口ク口目が顕著である。高台を持たない A類 (83・84・87～91・93・94・106・107) と高台を有する B類 (115～118・121) がある。

椀 (Fig.22・23-92・104・109・111～114・119・120)

類：ベタ高台を有するタイプである。大振りで内底に段を持つ A類 (104・109) と小振りで段を持たない B類 (92) がある。

類：輪高台を有するタイプである。高くてしっかりした高台を持つ A類 (119)、小さな高台を持つ B類 (111～114) がある。 A類は内底に段を持ち外底はヘラ切り後粗ナデ調整であるのに対して、 B類は丁寧なナデ調整を施している。

b 須恵器

皿 (Fig.21-32、Fig.24-125～141)

主として口縁部の形態から大きく3つに分けることができる。

類：口縁部を上方に摘み上げ内面に段を有するもの (127～129・131・132・134～140)、器高指数は8.8～15.6を示し平均は12.5である。

類：素口縁でおわるもの (32・125・126・130・133)

類：素口縁であるが、 類に比べて立ち上がりが著しく緩やかなもの (141)、141は転用碗である。

坏 (Fig.24-142～172)

高台を有するA類と高台を持たないB類に大別することができる。

A 類：底部から丸みを帯びて立ち上がるもの (147・150・151)

A 類：底部から比較的直線的に立ち上がるもの (145・146・148・149・152・153)

A 類：口縁部が外反するもの (142)

B類は、底部から口縁部まで一個体で把握できるものは僅少であるが、161以外はほぼ直

線的に立ち上がる形態を有している。高台の位置は、底部外縁の内側に貼付するものが大半であるが、165と166は体部の延長線上に貼付している。また高台の形状は、しっかりした台形状を呈し外方に踏ん張るもの(156・158・164)や長方形状を呈するもの(157・160・171・172)などバリエーションが見られる。畳付けは強いヨコナデにより凹状を呈するものも多く見られる(154・158・159・162・163・167・168・170)。総じて坏B類の器面調整は、A類に比べて丁寧である。特に外底は粘土紐の単位やヘラ切り痕跡を残さないまでに丁寧なナデ調整を施している。

椀 (Fig.22-110、Fig.25-178～180)

A類：ベタ高台を有し体部内外面ヨコナデ調整、外底はヘラ切り後やや粗雑なナデを施し、内底には段を有している。内外に火禿が見られる。(110)

B類：輪高台を有し体部内外面ヨコナデ調整、外底はヘラ切り後ナデ調整、内外面に火禿が見られる(178)。この他に、口縁部を2点(179・180)図化することができた。

蓋 (Fig.25-173～177)

口径が大きいもの(176・177)と小さなもの(173～175)がある。口縁端部は下方に摘み出して面取りをしている。

c 黒色土器

椀 (Fig.25-181～210、Fig.26-211～240)

器壁の作りが厚いもの(口縁部下の器壁が5mm前後かそれ以上)を 類、薄いもの(口縁部下の器壁が3mm前後かそれ以下)を 類とし、その上で口縁部が僅かに外反するa類と内湾しておわるb類に、更に口縁部内面に細い沈線を施す 類、太い沈線を施す 類、沈線のない 類に分類することができる。(a 類：203、 a 類：184・186・197・201

b 類：207・209 b 類：192・198・199・202・204～206 b 類：187・189・190・193～195 a 類：181～183・185・188 b 類：191・196・208)

また口縁部と底部とを一個体で統一的に把握できる資料が少ないために、底部は高台の形態によって以下のように分類した。

類：断面三角形の小さな高台を有する。微隆起帯状を呈し指頭圧痕が残る a類(206・210)とa類に比して大きくしっかりした三角形の高台を持つ b類(209・212・214)がある。

類：高台内面のヨコナデ調整が極めて強く、断面が二等辺三角形状を呈する(211・213)。

類：八字状に外方に踏んばる(203・235)。

類：一般的な輪高台で断面長方形(205・215～218・224・225・227～229・232・234・240)

類：断面台形状を呈し高台脇にナデ付けた粘土が残る。(204・219～223・226・230・231・233・236・238)

類：ベタ高台を有するもの(237・239)。

以上の黒色土器は、すべて内面黒色のいわゆる黒色土器A類に属するものであるが、1点だけ内外黒の黒色土器B類(200)が出土している。

d 緑釉陶器

皿 (Fig.26-245)

陶胎で底部の全体と口縁部も3分の1が残っている。口径13.4cm、器高2.7cm、高台径5.8cmを測る。内面にはミガキが施され、外底は中央を凹状に削り取っている。内外面全面に施釉している。

椀 (Fig.26-241~244・246・248)

底部の形態から2つに分けることができる。

類：外底を凹状に削り取った後太い沈線を巡らして擬蛇目状高台をなすもの(243・248)。内外面全面に施釉が及んでいる。

類：輪高台を有するもの(241・242)。242の内面には僅かにミガキを認めることができる。2点ともに外底は無釉である。

e 灰釉陶器 (Fig.26-247)

皿が1点出土している。口縁部付近にのみ施釉し、外底は糸切り後輪高台を貼付している。

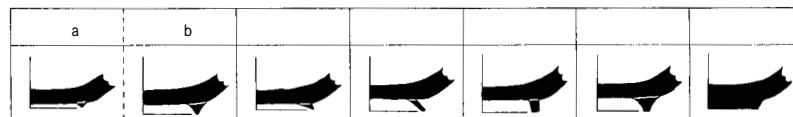


Fig.19 黒色土器高台形態分類図

f 瓦器椀 (Fig.26-249~251)

249、251は口縁部が強いヨコナデにより外反し、251の内面には横方向のヘラミガキが見られる。250は内湾する。

g 青磁椀 (Fig.26-252)

椀が1点出土している。内外面に櫛目模様が見られる同安窯製である。

煮沸形態

a 甕 (Fig.27・28)

形態、胎土、調整手法などから以下のように分類することができる。

類：口縁部がく字状に屈曲外反する。(253)

類：最大径を胴部に有する。胴部外面には指頭圧痕が目立ち、内面は弱い削りが施される。(255)

類：最大径を口縁部に有し、口縁部が内湾して立ち上がる。胎土中に石英・長石を多く含み茶色に発色する(254)

類：最大径を口縁部に有し、口縁部内外面は強いヨコナデ調整が施され、胴部外面はほ

とんど例外なくタテハケ調整が施される。胎土・色調は 類と同じ。口縁端部の形態によってA～Cに細分することができる。

A類：口縁端部をほとんど拡張しないもの(266・281)

B類：口縁端部をわずかに上方に拡張するもの(259・262・265・268・274・276・278・282・283)

C類：口縁端部を著しく上方に拡張するもの(256～258・260・261・263・267・269・270～273・275・277・279・280)

類： 類と同様の形態を有するが、 類が例外なく胎土中に石英・長石を多く含み茶色に発色擦るのに対して、 類はチャート・頁岩を含み灰白色に発色する。また胴部外面に横方向のハケ調整が見られる(264)

b 羽釜 (Fig.29-284～302)

甕・ 類と同様の胎土・色調を有し、胴部外面の調整も同様の原体によるタテ方向のハケ調整がなされるものが多い。口縁部直下に幅の広い鏝を巡らす、鏝の形態と位置によって大きく2つに分けることができる。

類：鏝のヨコナデ調整が強くなされ、端部が上方を向く。鏝の位置が 類に比べて下方にある(286・288・290・291・296・298・300・301)

類：鏝の断面が長方形あるいは台形状を呈するもの(284・285・287・289・292～295・297・299・302)

貯蔵形態

a 須恵器壺 (Fig.30-303～310・312・313、Fig.31-331～338)

広口壺(306・309)、長頸壺(303～305・307・308)、短頸壺(310・312)、小型壺(313)がある。底部331・334～336は長頸壺、332・333・337は短頸壺に対応するものであろう。前者は胎土、器面調整が粗雑であるのに対して、後者は均一な胎土を有し内外面丁寧なヨコナデを施し、高台端面は強いヨコナデによって凹状を呈している。広口壺306は、338のような底部を有するものと考えられる。

b 須恵器甕 (Fig.30・31-311、314～330)

口径15～30cmを測るが、20cm前後のものが多い。口縁部はく字状に外反し、端部はそのまま終わるものや下方に拡張するもの、ヨコナデによって凹状をなすものがある。胴部外面は平行叩きを施すものが多いが、叩き目の細かいもの(315・319・328・329)と荒いもの(316・320)とがある。321は鋸歯状に施している。内面の青海波文はほとんどナデ消されている。

製塩土器 (Fig.31-339～345)

20数点出土している。口縁部は直線的に立ち上がるものや内湾気味のもの、端部は丸く納めるものや尖るものが見られる。外面は指頭圧痕が、内面には布の圧痕が見られる。

土錘 (Fig.32-346～358)

管状土錘が25本出土している。長さは3.1～5.7cm、最大径は1.3～2.0cm、孔径は0.5～0.7cm、重さは6～18gを測る。

2 石 器

(1) 石斧 (Fig.32・33-365～368)

365は打製石斧の基部である。基部近くに最大幅があり8.0cmを測る。全厚は1.5cm、全長15cm程に復元することができよう。頁岩製である。縄文晩期に属するものである。366～368は磨製石斧である。366は、結晶片岩製の扁平片刃石斧の刃部で、厚さ1.0cmを測る。367は蛇紋岩製の伐採斧である。刃部側半分が欠損しているが、尖基で残存断面の厚さは3.5cm、重さ220gを測る。368は結晶片岩製の伐採斧で刃部が欠落している。残存長9.1cmを測る。

(2) 石鏃 (Fig.32-363、364)

363は、両面に主剥離面が残る。全長3.0cm、全幅1.6cm、全厚0.4cm、重量2.16gを測る。364は大型品で、両面中央部に主剥離面が残る。全長4.1cm、全幅2.9cm、全厚0.7cm、重量6.6gを測る。2点ともサヌカイトである。

(3) 砥石 (Fig.33-369、370)

共に砂岩製の砥石である。369は4面に研磨の使用痕が見られ、3面には敲打痕が見られる。370は4面に研磨の使用痕が見られる。369が1450g、370が1145gを測る。

(4) 叩き石 (Fig.33-371、372)

371は両主面中央部と側縁部に敲打痕が認められる。全長14.7cm、厚さ6.5cm、1280gを測る。砂岩製である。372は両主面の中央部と側縁のほとんど全面に敲打痕が見られる。全長11.7cm、全幅7.9cm、全厚4.9cmを測る。石英粗面岩製である。

以上述べた石器の石材は、すべて仁淀川流域で採集可能である。

3 金 具 (Fig.32-360、361)

青銅製帯金具が2点出土している。360は、約半分が欠落している。全幅3.1cm、厚さ1.5mm、先端中央部に1×2mmの穿孔が見られる。重さは3.3gである。361は、2つの破片が近接して出土し接合できた。ほぼ全体の形状を知ることができるが、一方の端部は欠落している。片面の外縁には幅3mmの肥厚帯が巡っていることからこちらが表であろう。裏面にも少し凹凸が見られるがもとは平坦面であったと思われる。残存長5.0cm、幅2.25cm、厚さは外縁の肥厚部分で2～3mm、内区で1～2mm、重さは小片が1.5g、大片が5.6g、全体で7.1gを測る。表右側縁は、半円状を呈し肥厚帯の内側1mmにのところに径1～2mmの穿孔がある。同様の孔は他にも2個所に認められる。

4 鉄 滓 (Fig.32-362)

椀状鉄滓である。一部が欠けているがほぼ全体の形状を知ることができる。上面の復元径は13cm×10cm、高さ5cm、残存重量は550gを測る。

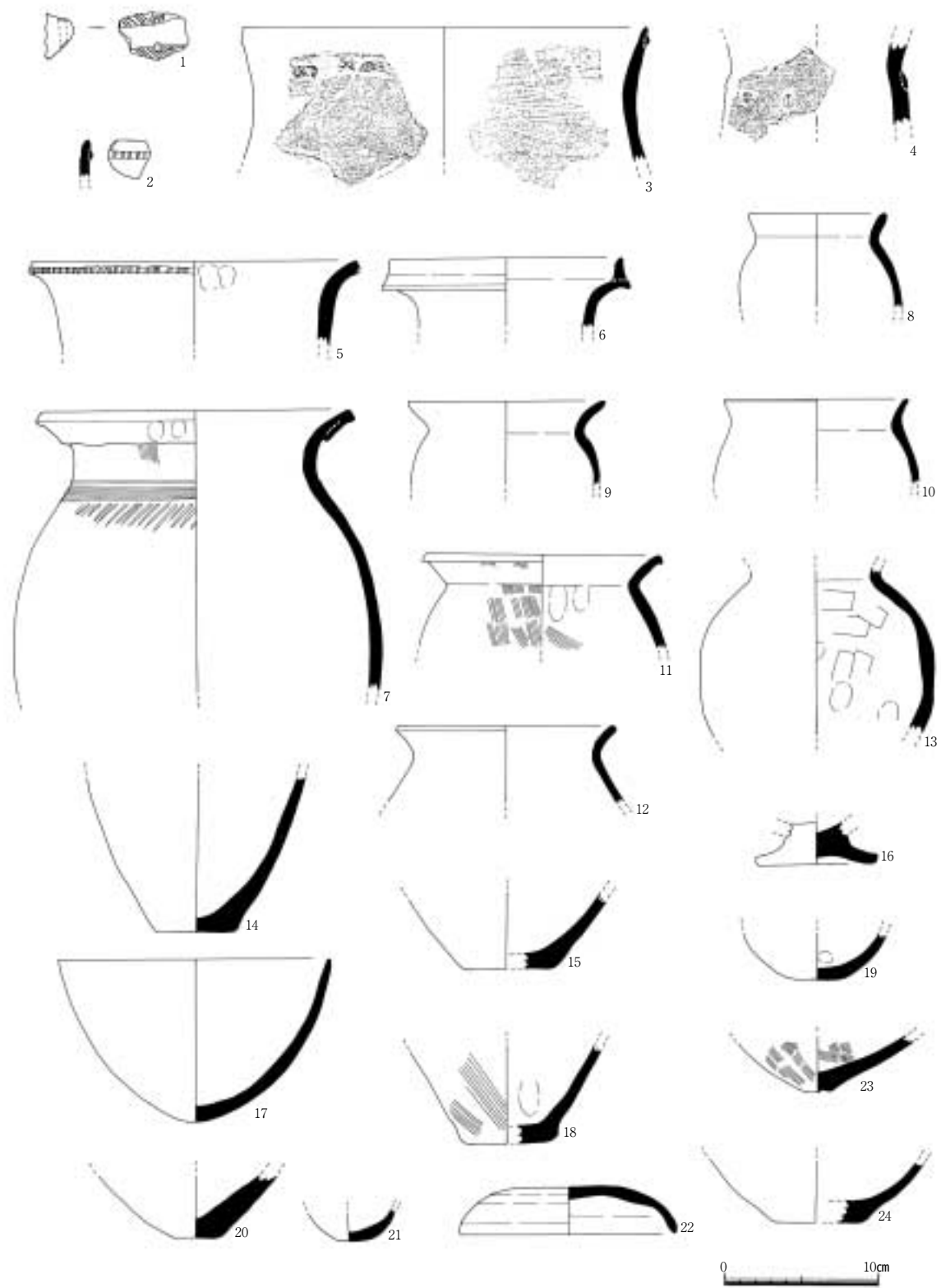


Fig.20 縄文土器（1～3）、弥生土器（4～7・11・14・15・18・20・23・24）、古式土師器（8～10・12・13・16・17・19・21）、須恵器坏蓋（22）実測図

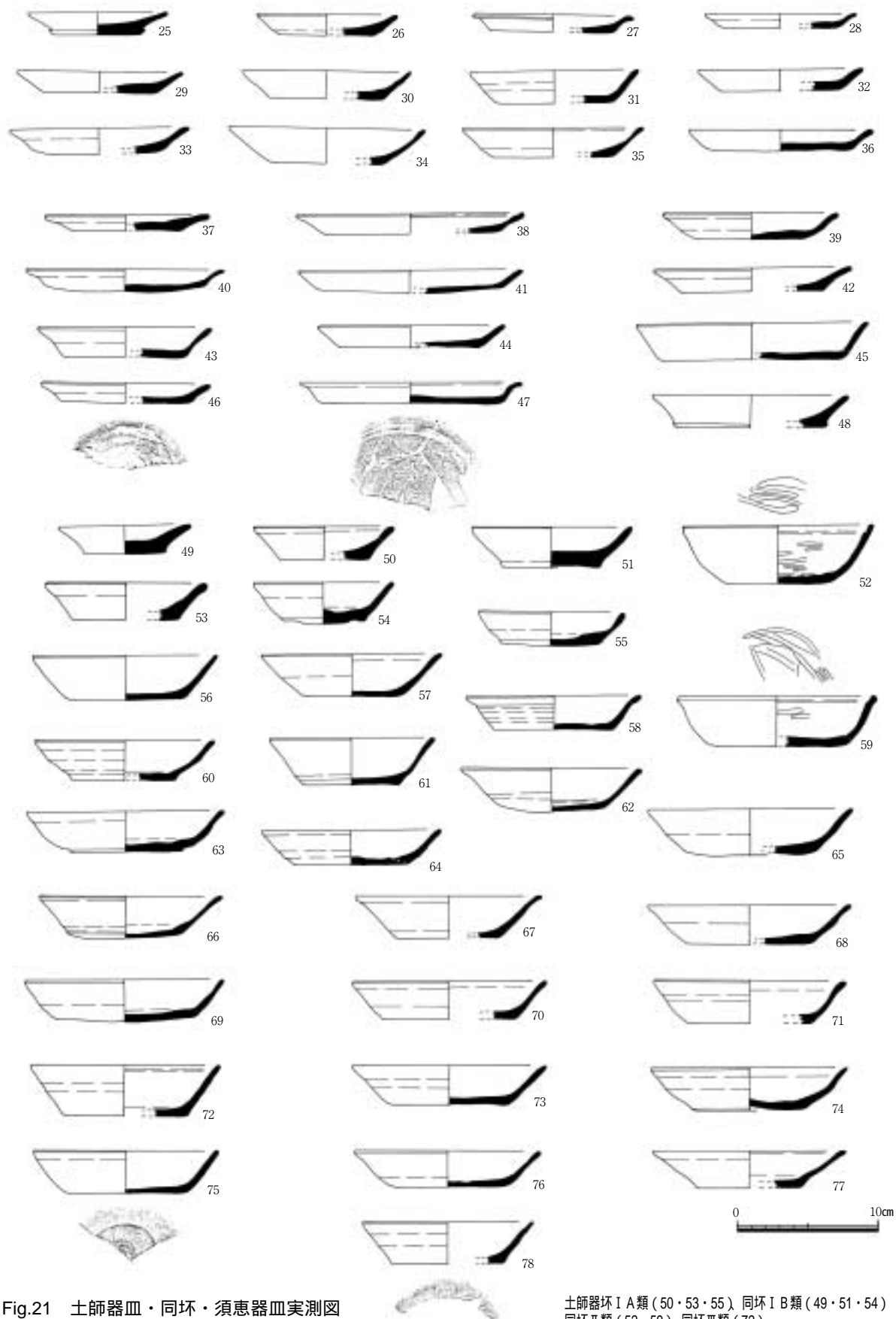


Fig.21 土師器皿・同坏・須恵器皿実測図

土師器皿 I 類 (25・26) 同皿 II A 類 (29・33・36・41・44・45・48)
 同皿 II B 類 (27・28・37~40・42・43・46・47) 須恵器皿 II 類 (32)

土師器坏 I A 類 (50・53・55) 同坏 I B 類 (49・51・54)
 同坏 II 類 (52・59) 同坏 III 類 (72)
 同坏 IV A 類 (56・57・64・68・73~75・78)
 同坏 IV B 類 (58・60~63・65~67・69~71・76・77)

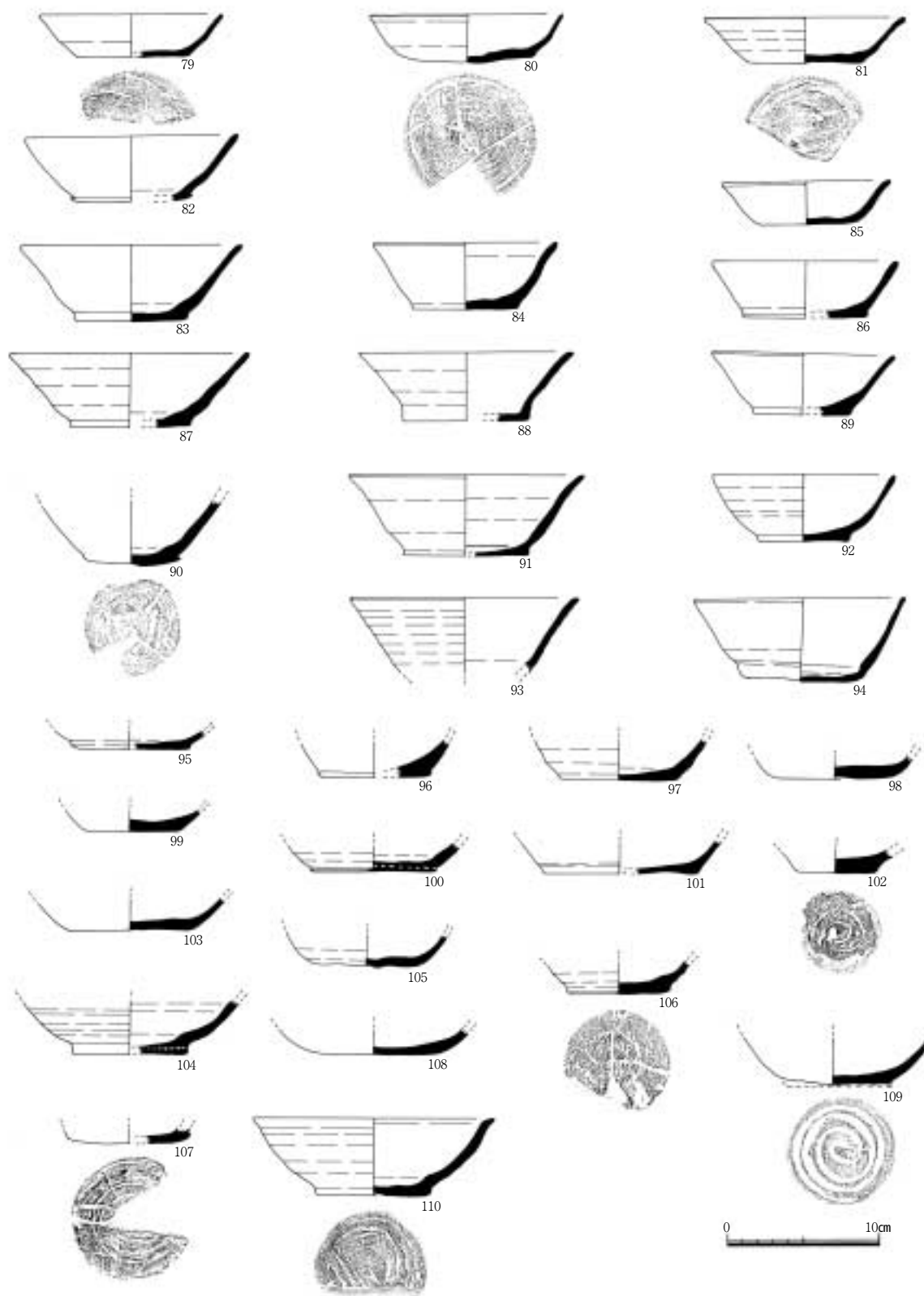


Fig.22 土師器坏・椀、須恵器椀A類(110)実測図

土師器坏IV A類(79・82・85・86) 同坏IV B類(80・81) 同坏IV類底部(95~103、105~108)
 同坏V A類(83・84・87~91・93・94・106・107) 同椀I A類(104・109) 同椀I B類(92)

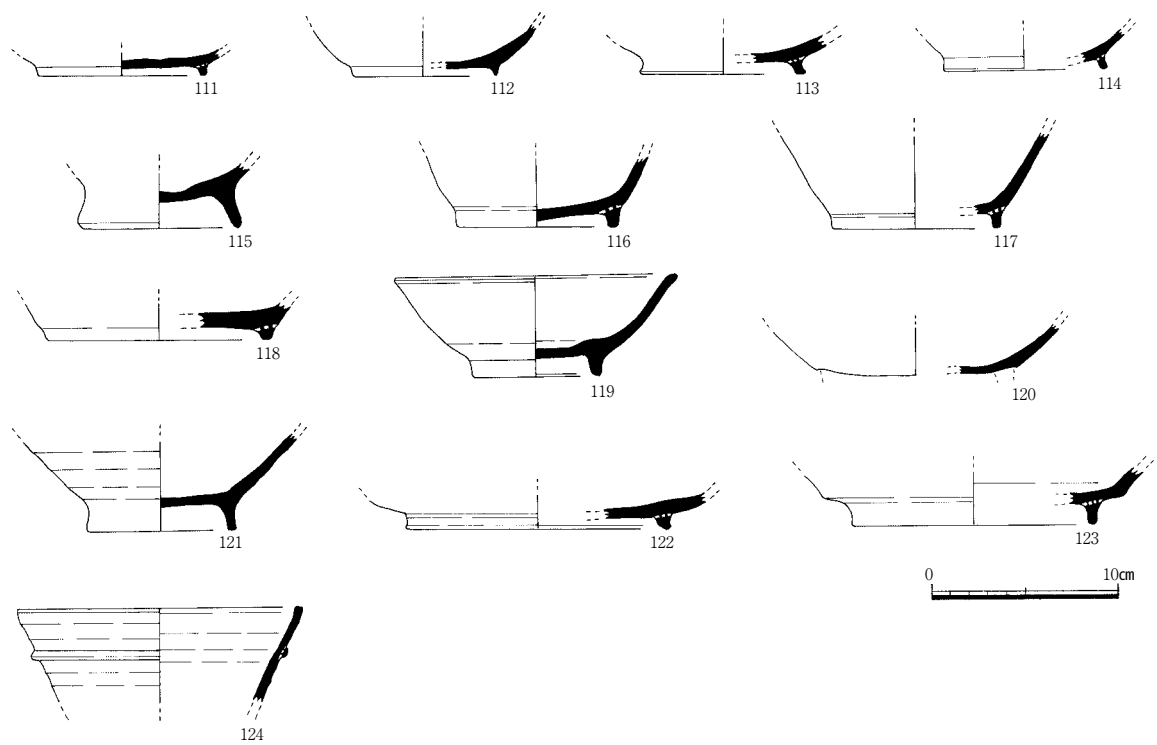


Fig.23 土師器坏・椀・皿実測図

土師器坏V B類 (115 ~ 117 · 118 · 121)
 同椀Ⅱ A類 (119) 同椀Ⅱ B類 (111 ~ 114) 同皿 (122 · 123)

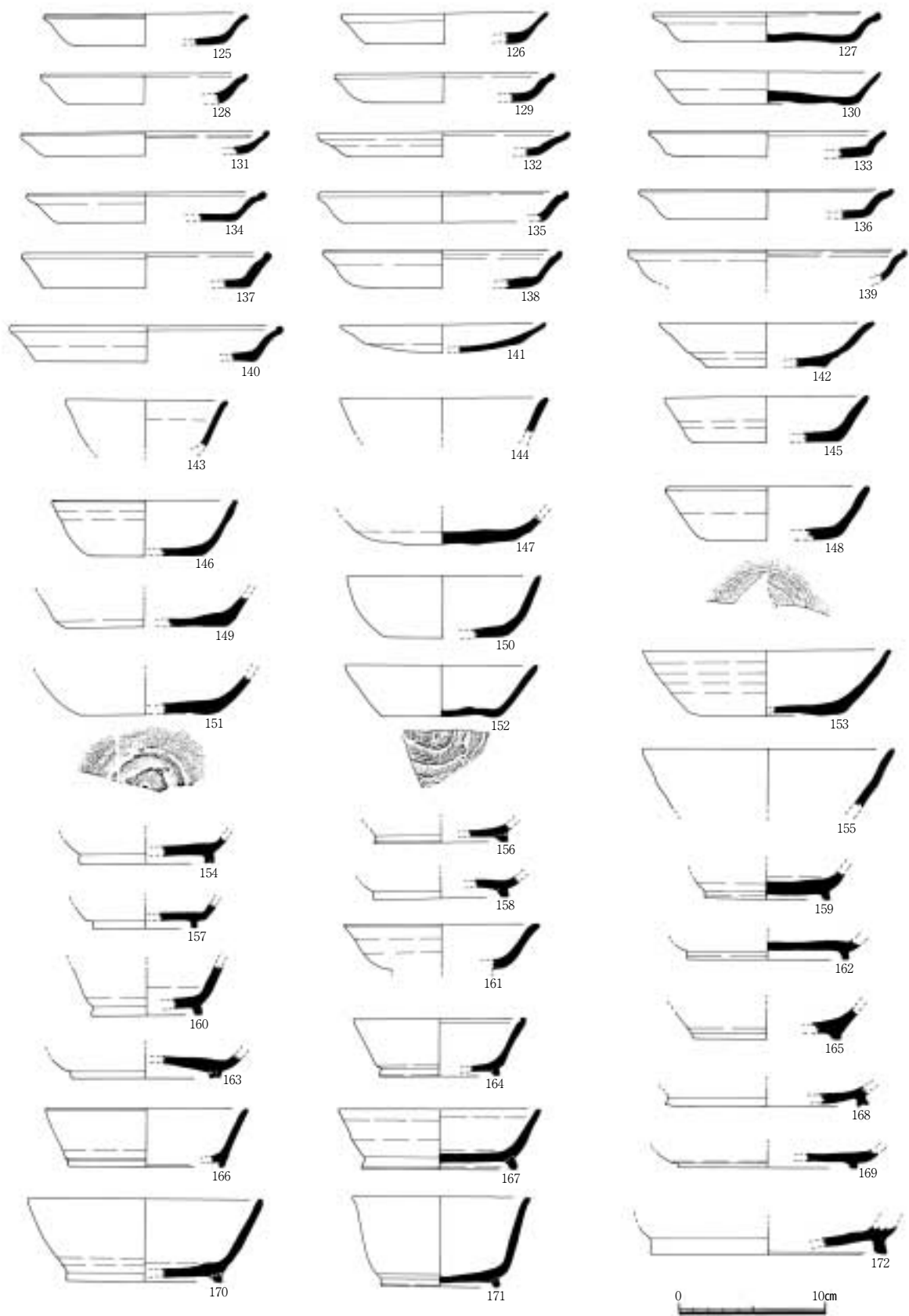


Fig.24 須恵器皿・坏実測図

須恵器皿Ⅰ類 (127~129・131・132・134~140) 同皿Ⅱ類 (125・126・130・133) 同皿Ⅲ類 (141)
 同坏AⅠ類 (147・150・151) 同坏AⅡ類 (145・146・148・149・152・153)
 同坏AⅢ類 (142) 同坏B類 (154・156~172)

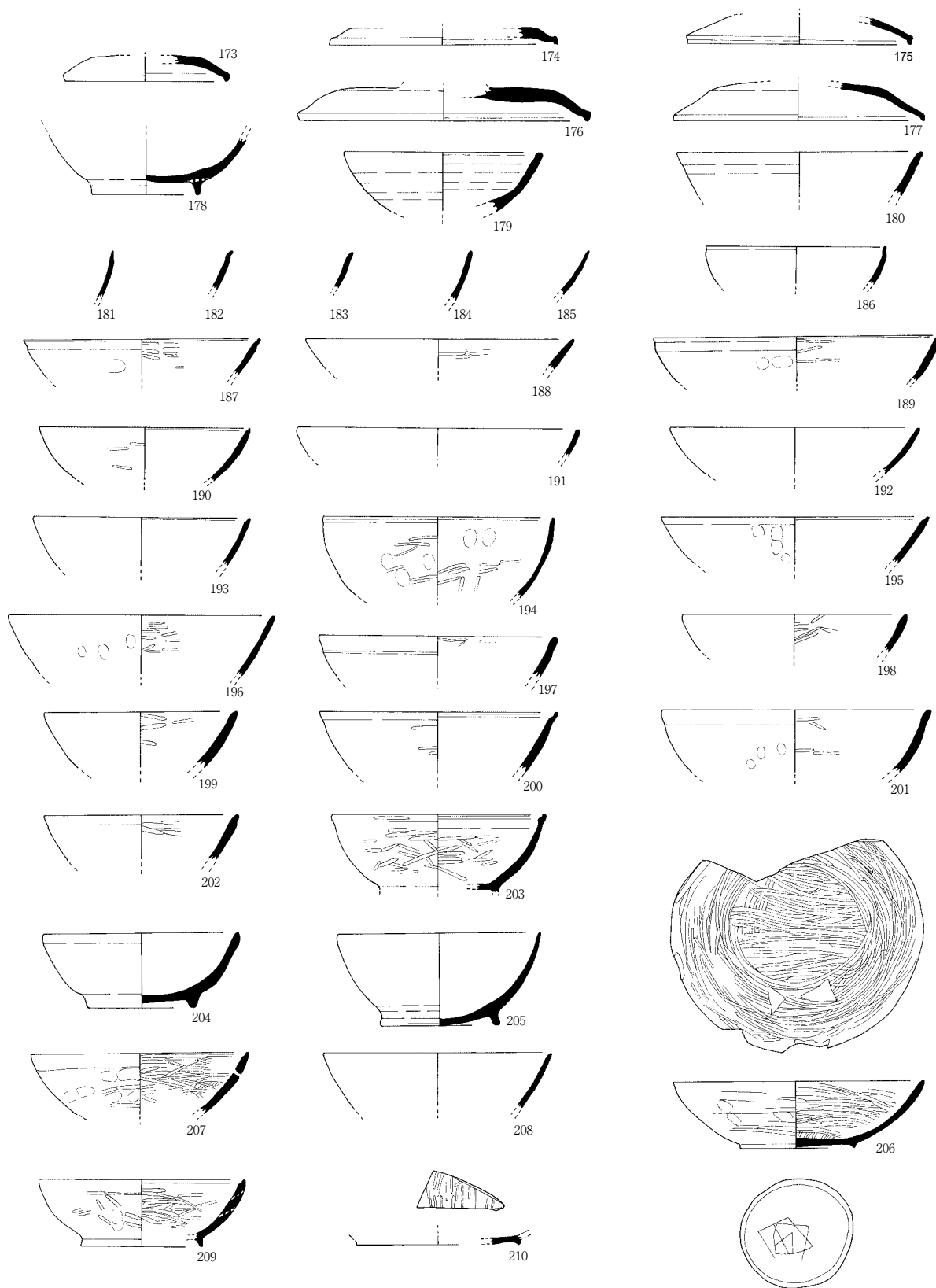


Fig.25 須恵器蓋・碗、黒色土器碗実測図
 須恵器蓋(173~177) 須恵器碗B類(178) 須恵器碗(179・180) 黒色土器碗I a 類(203)
 同I a 類(184・186・197・201) 同I b 類(207・209) 同I b 類(192・198・199・202・204~206)
 同II b 類(187・189・190・193~195) 同II a 類(181~183・185・188)
 同II b 類(191・196・208) 同底部I a類(206・210) 同I b類(209) 同III類(203)
 同IV類(205) 同V類(204)

0 10cm

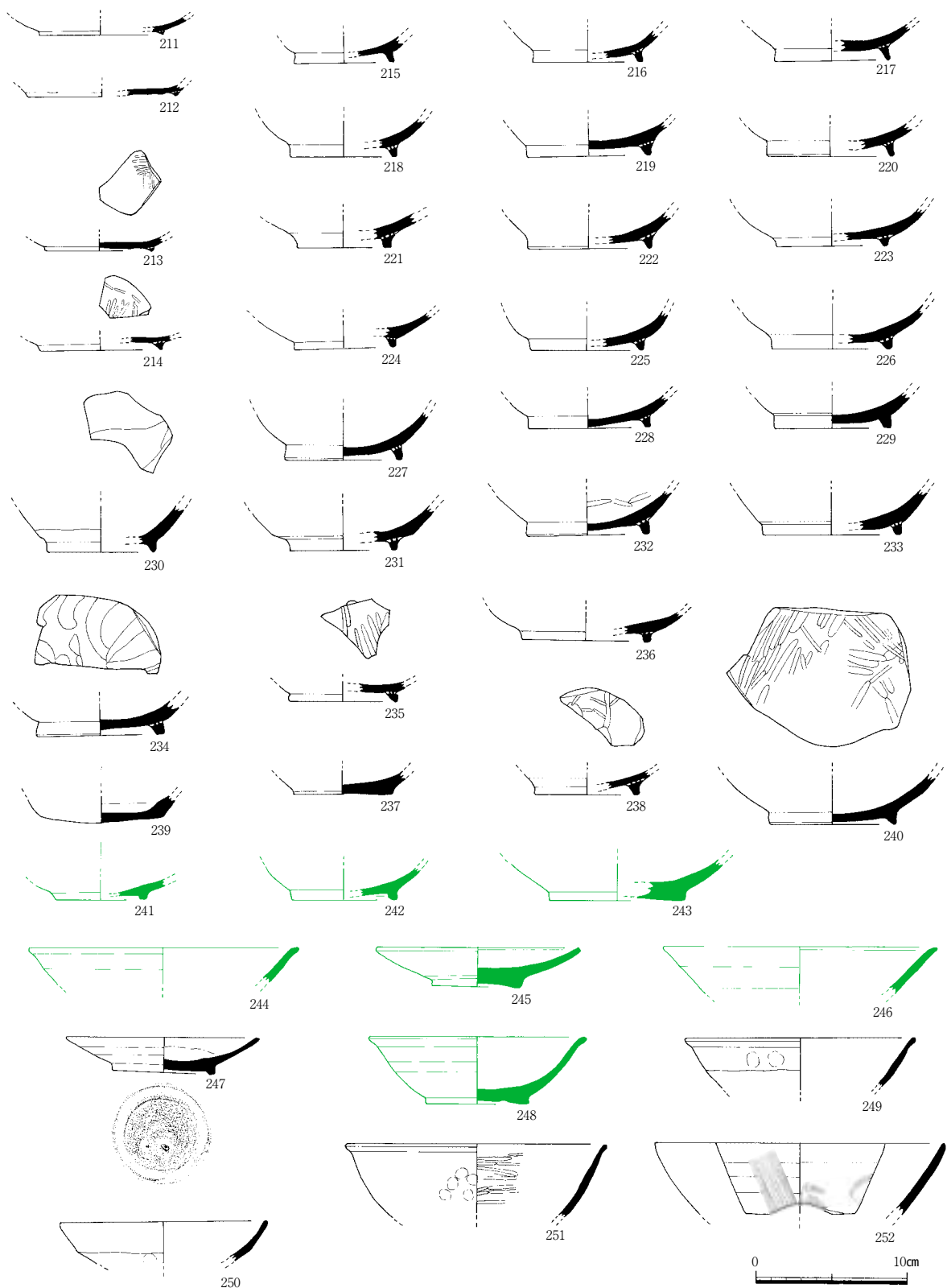


Fig.26 黑色土器碗底部、緑釉皿（245）、同碗（241～244・246・248）、灰釉皿（247）、
瓦器碗（249～251）、青磁碗（252）実測図

黑色土器碗底部I b類（212・214）、同II類（211・213）、同III類（235）
同IV類（215～218・224・225・227～229・232・234・240）、
同V類（219～223・226・230・231・233・236・238）、同類（237・239）

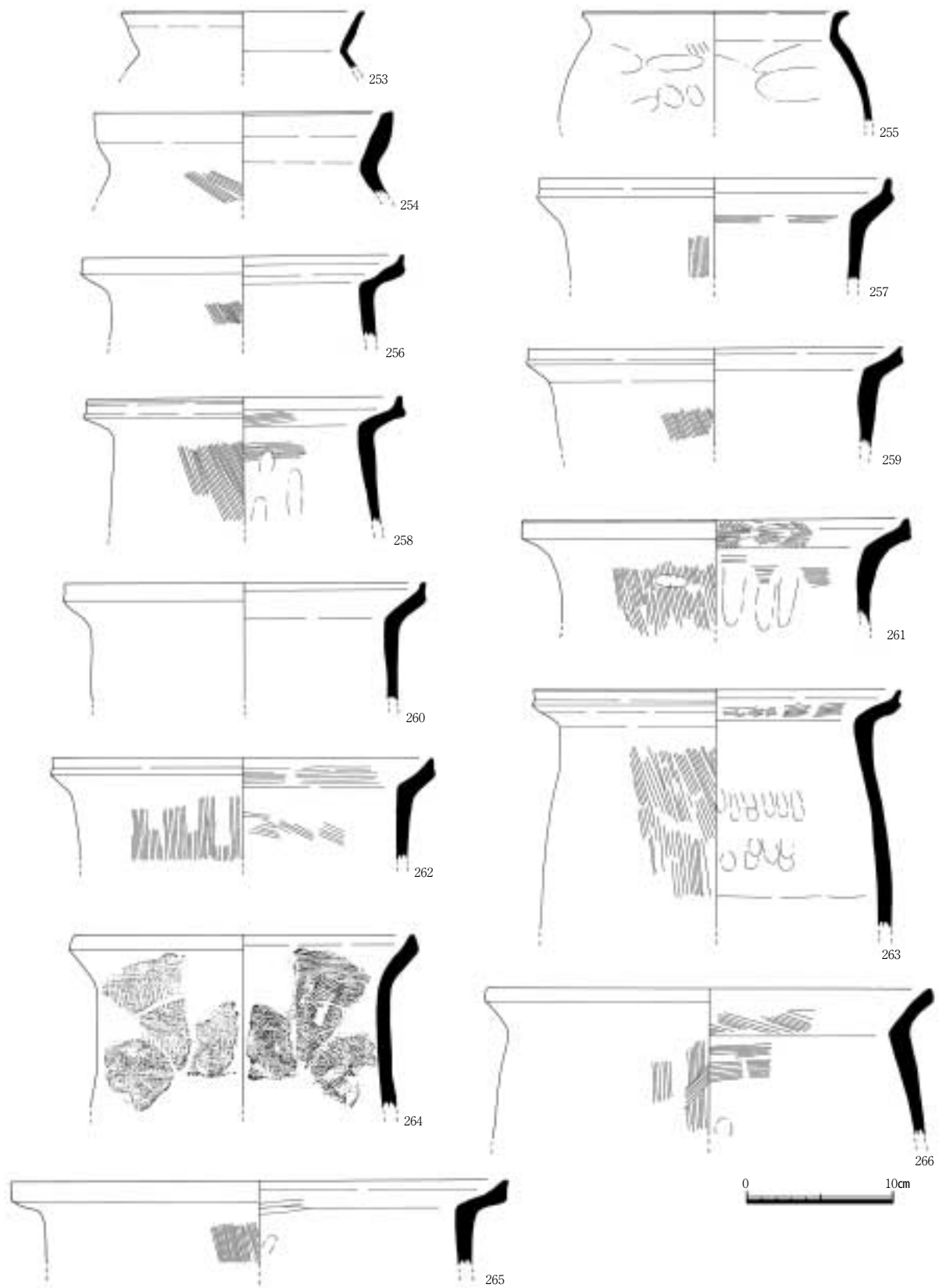


Fig.27 土師器甕実測図

I類(253) II類(255) III類(254) IV A類(266) IV B類(259・262・265)
IV C類(256~258・260・261・263) V類(264)

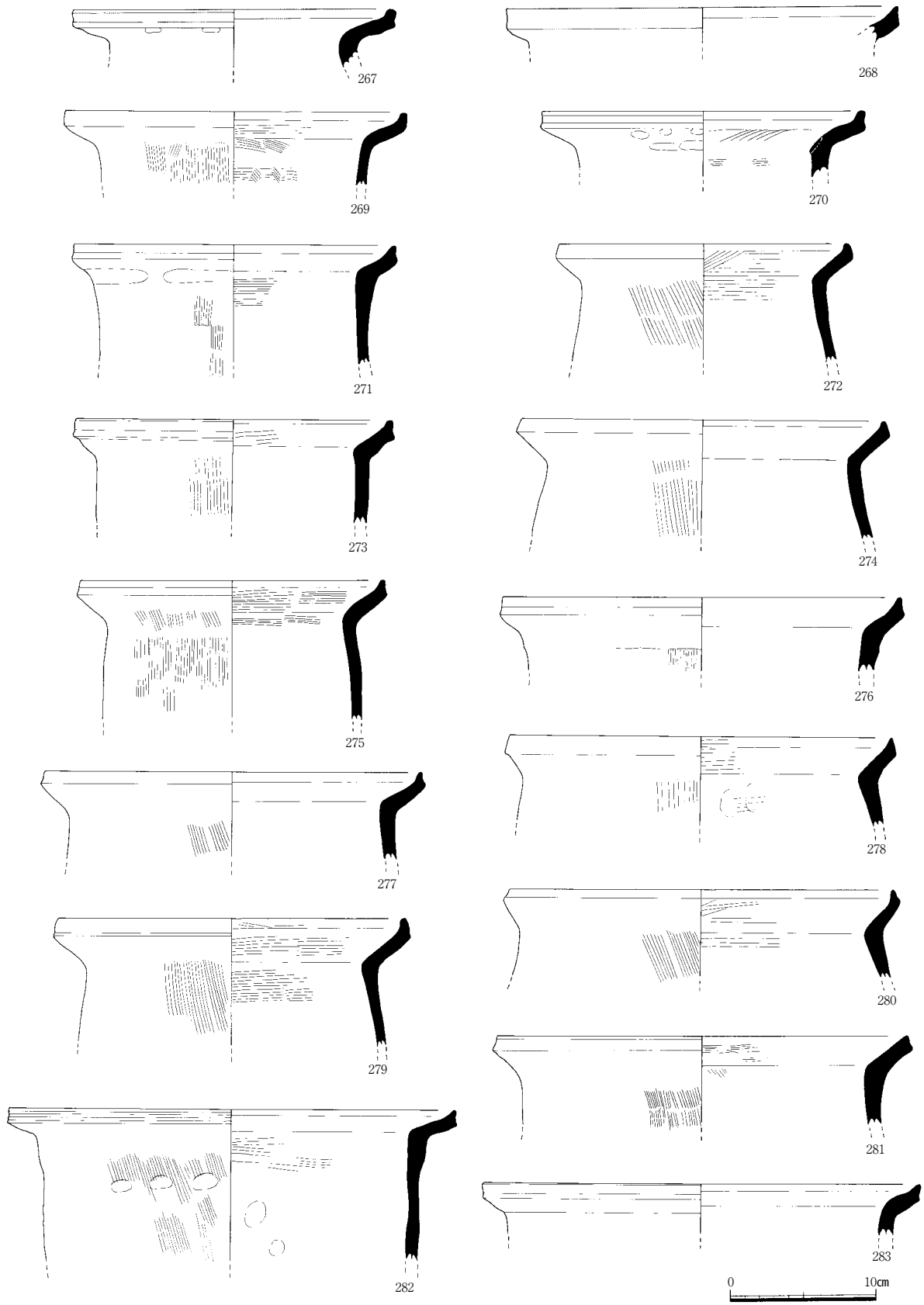


Fig.28 土師器甕実測図

ⅣA類 (281) ⅣB類 (268・274・276・278・282・283) ⅣC類 (267・269・270~273・275・277・279・280)

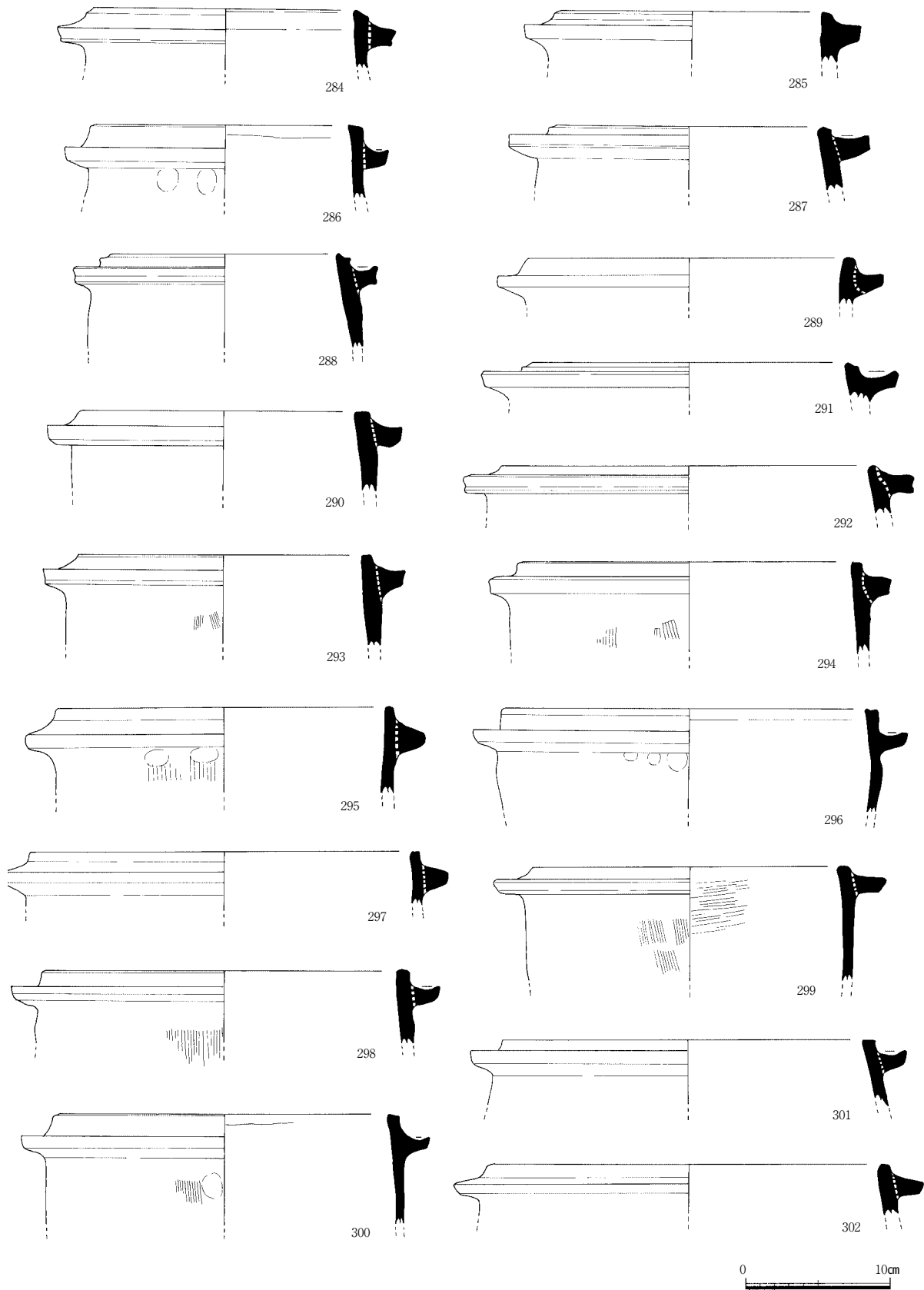


Fig.29 土師器羽釜実測図

I類 (286・288・290・291・296・298・300・301)、II類 (284・285・287・289・292~295・297・299・302)

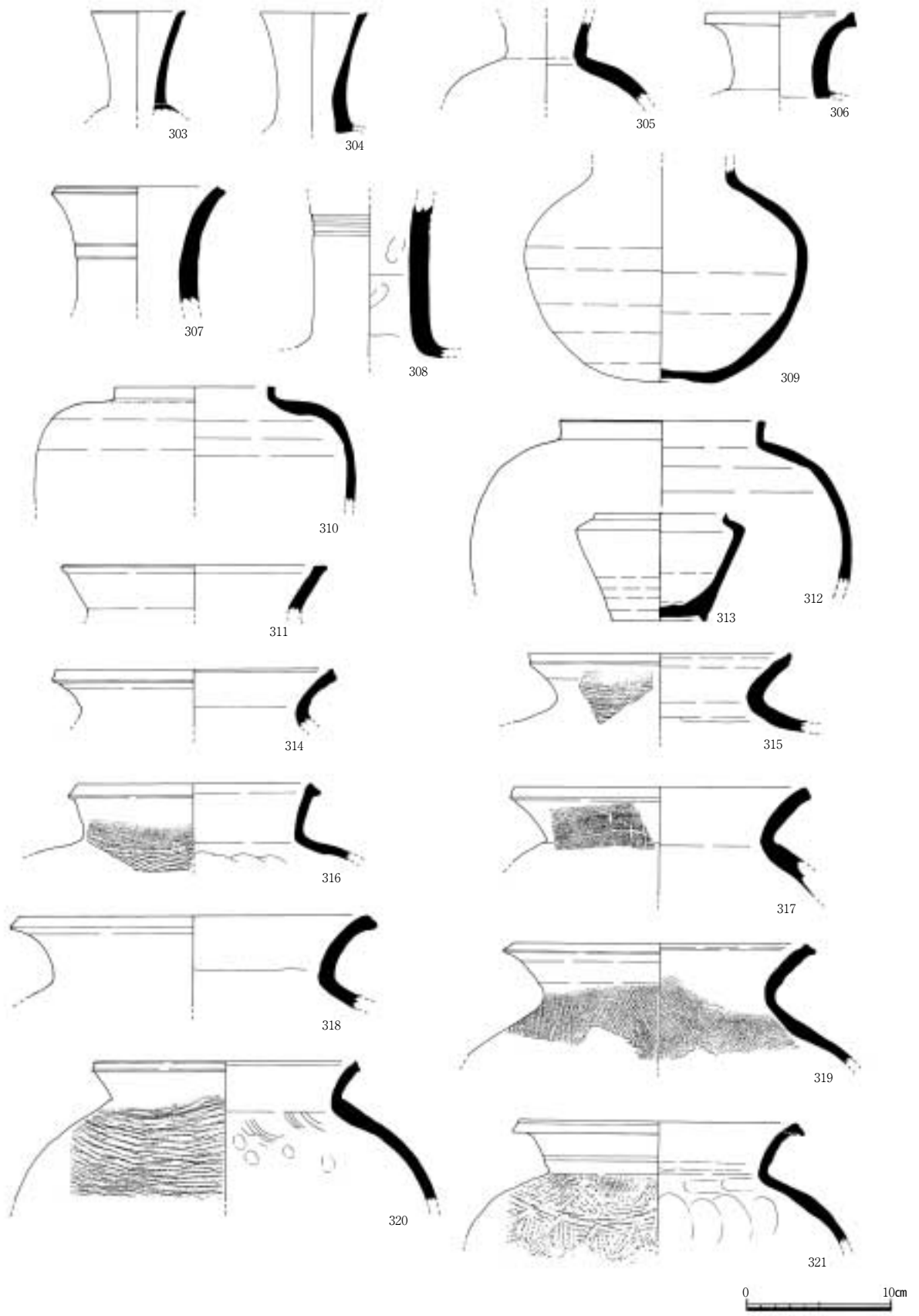


Fig.30 須恵器広口壺 (306・309)、同長頸壺 (303~305・307・308)
同短頸壺 (310・312)、同小型壺 (313)、同甕 (311・314~321) 実測図

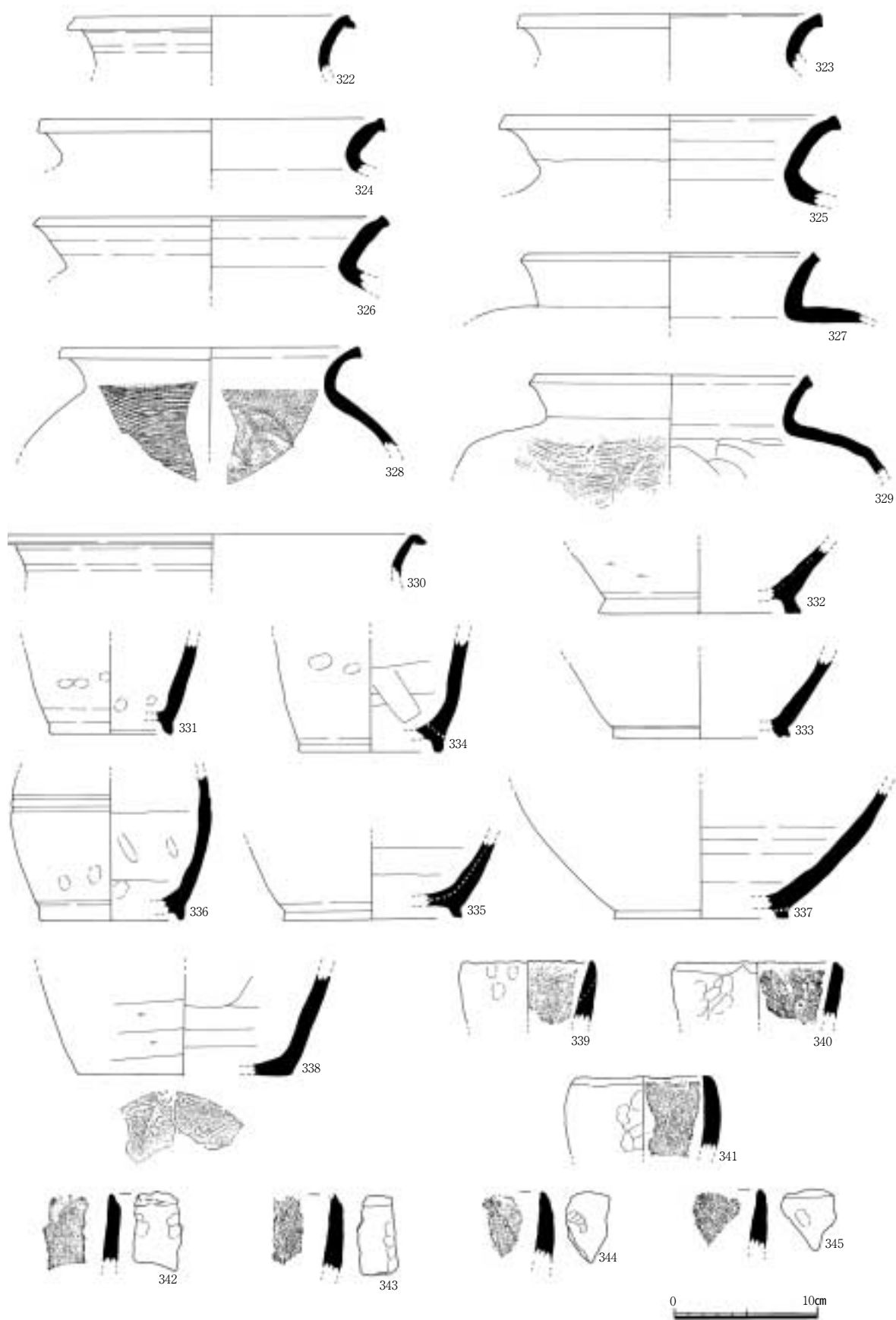


Fig.31 須恵器甕 (322 ~ 330)、同壺底部 (331 ~ 338)、製塩土器 (339 ~ 345) 実測図

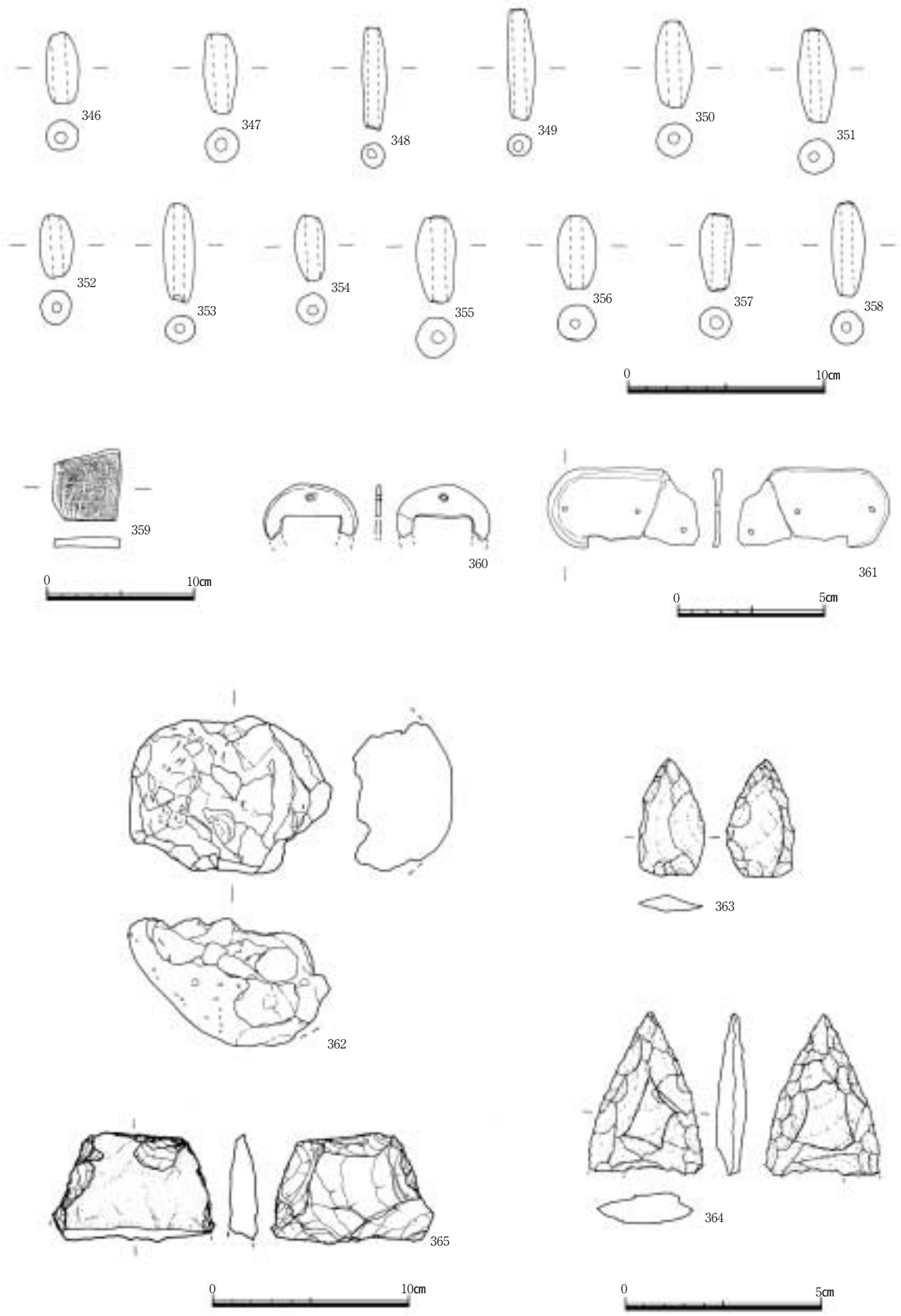


Fig.32 土錘 (346~358) 土版 (359) 帶金具 (360・361) 椀狀鉄滓 (362) 石鏃 (363・364) 打製石斧 (365) 実測図

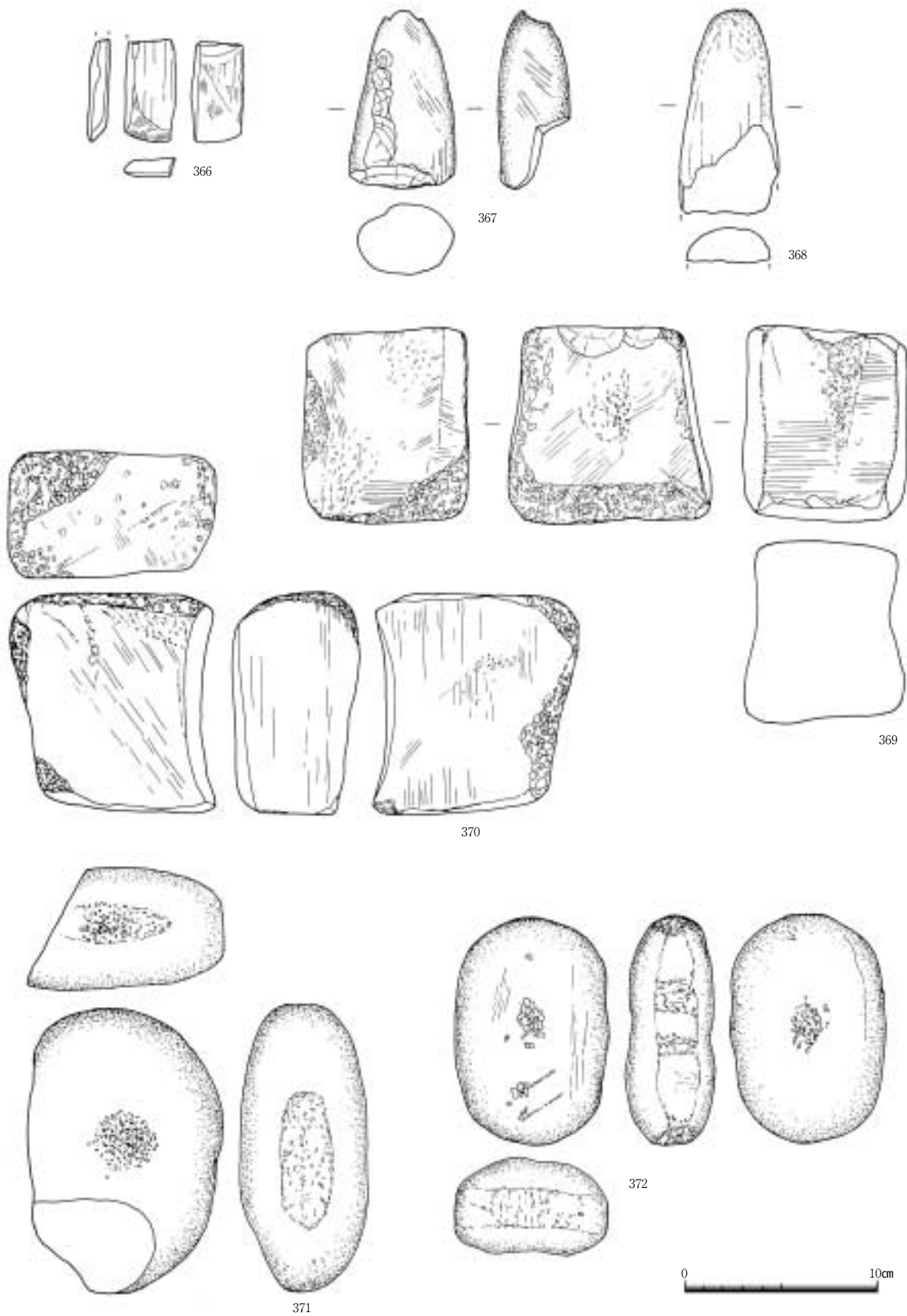


Fig.33 伐採斧 (366 ~ 368) 砥石 (369・370) 叩石 (371・372) 実測図

5 木製品

流路内には、腐植土の集中する層が何層か推積し、まとまった有機物が確認された。有機物に含まれる情報は極めて大きい。周辺の環境も含めた復元が可能な資料として極めて有効である。しかし、今回はそれらの出土した有機遺物の中で、明らかに人為の認められる木製品と利用したであろう自然遺物に限って報告を進めたい。流路の機能した細かい時期の特定はできないが、含まれる遺物の時期からこの河道が10世紀以降に埋積したことは確実であり、検出される遺物の時期をもとに木製品の所属時期についても8世紀から10世紀の範囲内で捉えられよう。

端部炭化材

人為の認められる木製遺物の中で、最も多かった資料は8～20cm内外の長さの棒状の木ぎれや板材の片方の端、あるいは両端が炭化したものである。程度の差はあれ端部の先端付近のみが炭化しており、火の利用に関わる遺物だと考えられるが、ここでは推定される用途ではなく形態的な特徴をもとに「端部炭化材」と呼称しておきたい。丁寧な加工を施した遺物ではない。加工の際に生じる木片を利用したものであり、ある程度の普遍性を持つであろうと考えられる遺物である。

層・層ともに出土しており、層による際だった違いは認められない。図化した端部炭化材は1点のみであり、個々の遺物ごとに詳細な分析を加えることはできなかった。出土した端部炭化材は、総数400点以上にのぼる。その中で210点について法量を計測した結果、長さは10～15cm前後のものが最も多く、幅は0.8～1.6cm前後、端部の炭化部位の長さは0.5～1.5cm前後と、素材や形状は多様でも一定の規格性を持つことが明らかになった。樹種は大半がヒノキだと推定されるが、少数だがシイ類などの広葉樹、竹類なども利用されている。端部炭化材の法量表及び計測値からの分析等は第 章考察で後述する。



Ⅱ区 V層出土 端部炭化材

加工の明らかな木製品の中で、図示し得た物はFig.32～36に示した58点である。種類別に分けられ

ば、祭祀具17点、細板材あるいは祭祀具6点、ヘラ状木製品1点、端部炭化材1点、紡織具1点、部材・板材4点、服飾具（装身具を含む）5点、容器（曲物）16点、容器（割物）1点、杭6点である。部材・板材としたものなど用途の明らかではない物も一定含まれる。

出土地点は、区が多いものの区から区に渡っており、自然流路出土という状況から、出土地点が廃棄地点を示すとは言えない。

木製祭祀具がまとまって出土した点、少量であるとはいえ檜扇・横櫛の服飾具が検出された点、円形曲物を中心とする容器類の出土などが、今回の調査での木製品の特徴である。

木製祭祀具（Fig.34-373～388・395）

厚さ0.2～0.7cm程度の薄くて細長い細板状の素材を用い、上端の頭部形状及び下端の形状（串状か脚部表現があるか）によって、人形（下端が2股に分かれる）・斎串（下端串状）に分類した。人形が373～376、斎串が377～379・381・385・386であり、387～393は木製祭祀具（斎串）の可能性がある細板材である。また380は刀形（刀子型）、395は木筒形と各々形代である可能性を指摘できる遺物だが、他の種類の木製品である可能性も残る。樹種は全てヒノキである。柾目の板材も利用されているが、板目の板材の比率が高く、柾目:板目が約1:2の比率となっている。

細かい造形を行うものはなく、極めて簡単なつくりのものが多い。頭部の形状を圭頭状につくるもの、簡単な加工で弧状の頭部を造るもの、左右からの切り込みによって肩部と頭部の境を表現するもの、両側縁に上方からの削りがけを施すもの、下方からの削りがけを施すもの、下端を串状に整形するもの、下端に切り込みを入れることで二股の脚部を表現するもの、いずれも最小の手順で祭祀具の整形加工を行っている。

また、図示した木製祭祀具と想定される全ての遺物について、赤外線写真の撮影を行い、墨書の有無を確認したが、墨書の認められる例はなかった。

なお、細板材あるいは祭祀具として観察表に提示した389～393、402についても木製祭祀具である可能性を持つ遺物である。

ヘラ状木製品（Fig.35-394）

厚さ約7mmと比較的厚い板状の素材。先端が弧状であるが、両側縁の平行な細長い板状で、このような形状のものを「ヘラ状」と称すべきかどうか迷ったが、他の祭祀具とは異なる形態・用途だと考え、発掘調査に使用する竹ペラとの類似によりヘラ状木製品とする。

部材・板材（Fig.35-397・399～401）

用途不明木製品が大半である。その中で、399は他の板材がヒノキであるのに対し材質がイスノキである点が注目される。当遺跡では、大半の木製品がヒノキあるいはヒノキ科ヒノキ属であるのに対し、イスノキは、この板材以外には横櫛に使用されているのみである。399の板材の厚さは11mmで、101mm×73mmの長方形の平面形を持つことから、横櫛（推定長92mm・幅36mm・最大厚10mm、Fig.35-407）の素材であった可能性が高く、重要な資料である。保存処理の結果、接線方向は全く収

縮せず、半径方向に約1cm(10%ほど)大きく収縮してしまった。イスノキとこの板材の特徴がよくわかる。

紡織具 - 木製錘 (Fig.35-398)

いわゆるツチノコ型のもじり編み用の木製錘である。破損して縦方向に割れているものの、全体形状の推定は可能である。長さ14.0cm、頭部径3.9cm、括れ部径2.0cm、胴部径4.2cm。

服飾具 - 檜扇 (Fig.35-403)

1枚だけの部品だが檜扇だと判断している。要の孔は1孔、上端は破損により形状の特定ができない。ヒノキの板材使用。

服飾具 - 横櫛 (Fig.35-404 ~ 407)

材質はツゲ(405)とイスノキ(404・406・407)、小破片が多く、全体形状を推定可能な資料は407のみである。板状の素材を加工、一側縁から細かい歯を挽き出し、表面を平滑に仕上げる。挽き出された櫛歯数は1cmあたり9本から11本である。(9本/cm - 405・406、10本/cm - 404、11本/cm - 407)

407は推定長9.2cm、幅3.6cmの長方形の横櫛で、歯先は直線的で肩部に丸味を持つ。歯の挽き出し位置である切り通し線は上縁に沿っており、背部(直線部)では上縁と平行線、肩部では上縁と同様の曲線を描く。

このような形態的特徴を持つ横櫛の型式は、木製品集成図録 - 近畿・古代編で設定されたA - 型式である。A - 型式は8世紀になって登場し、10世紀まで存続する。

また、横櫛の素材だと予想されるイスノキの板材(399)の存在は、出土した横櫛がどこで生産されたのかを示唆する資料として、極めて重要である。

容器 - 円形曲物 (Fig.36-408 ~ 414, Fig.37-415 ~ 418・420 ~ 422, Fig.38-423)

円形曲物であると考えられる資料は、Fig.34 ~ Fig.36に示した。底板・蓋板・側板が確認され、接合部の綴紐が残った資料(408・414・416・419・420・423)も確認できた。特に、側板の綴じ方が明瞭に分かる資料も含まれている。

なお、把手付円形曲物として理解した資料の根拠は、側縁が面をなし、留め釘(木釘)の残存する点による。

容器 - 箱形組物 (Fig.37-419)

容器の側板であるのだが、その厚みから円形曲物ではない可能性を考えている。

容器 - 割物 (Fig.38-424)

クスノキ。割物で、舟形容器である。全長55cm、幅は破損のため不明だが約33cmほどが残る。底

の厚さ1.5～2.0cm、側壁の厚さ1.6～5.4cm。

杭 (Fig.38-425～430)

層上面で検出された杭 1点と 層上面で検出された杭 4点、合計 5点を図化した。樹種同定の結果、ブナ科シイ属、アワブキ科アワブキ属、イヌガヤなど周辺で産したであろう広葉樹が利用されていたことがわかった。

層の資料と 層の資料では、素材が違う点が大きく異なる。層出土資料は、加工が全周に回る例がなく、先端部を造り出せればそれでよし、という意図の下に最小の手順で自然木から杭をつくりだしている。それに対し、層で検出された杭 (415) は棒状の角材を作り出した後で、先端を加工し杭とする。上層から打ち込まれた杭である可能性も残り、時期の特定はできない。これに対し、層で検出した杭は、少なくとも層が堆積する以前に打ち込まれた杭だといえる。

樹皮

綴紐として利用された樹皮は、鑑定の結果、桜あるいは樺のいずれかであり、似通った特徴を持つため区別することは不可能だ、との鑑定結果を得た。しかし、樺は亜寒帯林から温帯林にかけて分布する木であり、照葉樹林が分布する高知平野に位置する当遺跡周辺は、現在樺の分布域ではなく、当時の植生を勘案しても、おそらく分布していなかったであろうと推察される。それゆえ、今回検出された綴紐に利用された樹皮は桜だと判断するのが妥当であろう。

自然遺物 - 種子等

図示してはいないが、種子等の自然遺物が確認されている。中でも採り上げる必要があると思われるのは、桃科の植物の核である。桃の核については、東都文化財研究所並びにパリノサーヴェイの分析・鑑定の結果、より詳細なデータを得ることができた。桃の核がある程度まとまって出土したため、Tab. 1 に計測値を記載する。

野市町曾我遺跡の柱穴からの桃核出土例により、古代の土佐の特産物としての「桃仁」生産についての指摘がなされている。西鴨地遺跡からも70点ほどのまとまった出土を示したこともあり、桃仁の可能性を考え、樹種同定と同時に桃仁生産の可能性についての検討を(株)東都文化財研究所に依頼した。その結果、桃核の形態からは古墳時代から奈良時代にかけての様相に類似していることが明らかになり、8世紀から10世紀という流路内出土の遺物の時期とも、ほぼ合致することがわかった。しかし、この桃核が土佐の特産物の一つとされる桃仁の生産に適したものかどうかという点については、原生種よりは適しているものの詳細は不明であるという結論となっている。

なお、桃の分析と並行して流路内の植物遺体を検討、当時の植生が暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)であったという分析結果を得た。種子や木材の種として、桃以外にオニグルミ、イチイガシ、シリブカガシ、アサダ、アカガシ亜属、クリ、タブノキなどの存在が確認されている。詳細は章. 4 を参照していただきたい。

Tab. 1 出土・モモ核・計測表

整理番号	調査区	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	推定値	整理番号	調査区	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	推定値
1	- E		20.3	16.6	12.3	欠	40		検	26.6	19.0	13.1	東端 欠
2		不明	20.5	16.8	14.3	欠 16.8	41	- C		26.7	19.6	15.3	
3			21.5	16.8	12.7		42			26.8	19.1	14.1	
4	- A		21.9	14.6	11.2	欠 14.6	43			26.8	19.2	14.3	
5	不明	不明	22.7	16.7	14.2		44	- C		26.8	21.5	15.4	
6	- E		23.5	17.6	13.6		45			26.9	21.8	16.3	
7	- E		23.6	18.4	15.5	欠 18.4	46	- A		27.0	18.6	13.9	
8	- C		23.6	18.7	14.5		47	- A		27.0	19.3	14.8	
9	- E		23.6	18.8	16.4		48	- E		27.0	19.9	15.5	
10	- A		23.7	18.3	15.1		49			27.0	19.9	16.5	
11	- E	-2	24.0	18.4	15.1		50	- E		27.0	20.3	16.4	
12	- E		24.1	19.0	15.2	15.2	51	- E		27.6	21.6	14.7	
13	- E		24.2	17.3	15.0		52	- E		27.7	20.1	15.5	
14	- E		24.3	17.5	14.5	欠	53			27.7	20.4	15.5	
15	- E		24.4	17.9	15.3	欠 17.9	54			27.8	19.1	14.8	
16		不明	24.5	19.8	14.7		55	- C		27.8	22.1	16.7	
17			24.5	20.5	14.9		56	・ TR-2		27.9	19.0	14.2	
18	- C		24.5	20.6	15.4	欠 20.6	57			28.1	21.8	15.1	
19			24.6	17.1	14.7	欠 17.1	58			28.5	20.2	15.4	
20	- E	下	24.6	19.6	13.8	欠 19.6	59	- C		28.6	20.7	16.4	
21	- E		24.8	19.5	14.5	欠 19.5	60	- E		28.9	21.7	15.4	
22	- C		24.8	19.9	15.5		61	- E		29.0	21.5	16.5	
23	- W	~	25.1	19.3	14.8		62			29.5	21.7	14.9	
24	- E		25.1	20.1	16.9		63	- W		29.7	22.9	18.1	
25	- E		25.2	18.9	16.5		64	- A		29.8	20.1	15.8	
26	- E ・ No.42		25.3	19.0	14.3		65	- E		29.8	21.6	15.9	
27			25.4	18.0	15.1		66		~	30.0	20.8	14.3	
28	- E		25.6	18.6	16.7		67	不明	不明	30.0	22.0	16.9	
29	- C		25.6	18.7	14.6		68	- C		30.0	22.6	16.1	
30	- E		25.7	19.0	15.2	欠 19.0	69	- E	-2	30.0	22.7	17.4	
31	- E		25.7	19.1	15.6		70		~	30.2	22.1	16.6	
32	- E		25.9	19.4	14.2		71			30.5	21.1	16.2	
33	- E		26.0	19.0	15.8		72	- A		30.7	21.0	15.6	
34	- B		26.0	19.4	14.3		73	不明	不明	30.7	22.0	19.8	
35	- E		26.0	19.9	14.6		74			31.1	22.2	16.6	
36	- A		26.1	19.2	14.6		75			31.2	21.7	14.8	
37			26.4	19.4	14.9		76	- W		31.3	23.8	17.8	
38	- C		26.4	20.1	17.4		77	- A		31.8	22.3	17.8	
39	- E		26.5	20.2	14.6		78	- E		35.3	24.1	17.4	

欠 ... 欠損部あり

... 分析対象資料

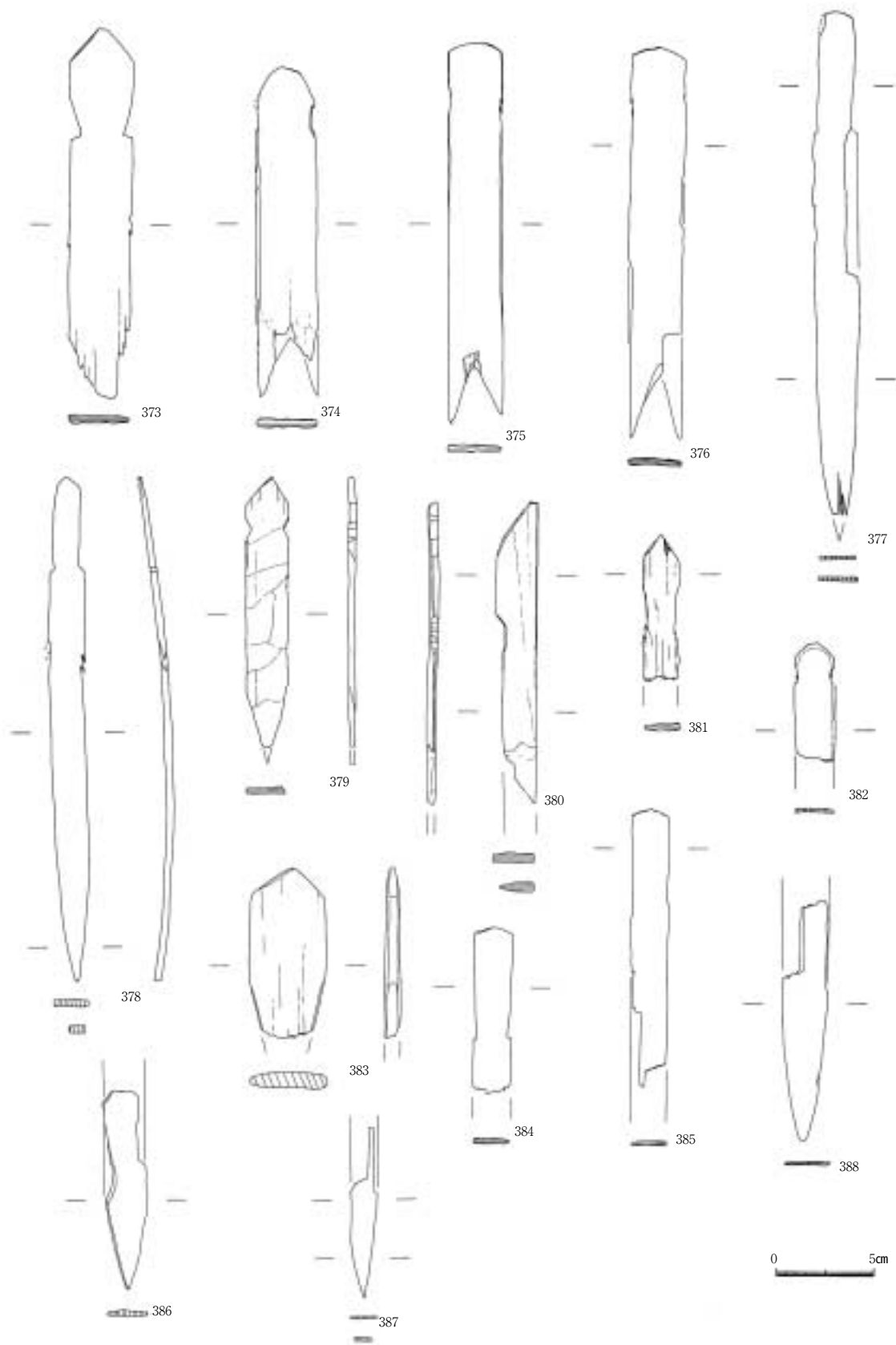


Fig.34 木製品（木製祭祀具）実測図



Fig.35 木製品（木製祭祀具・細板材・端部炭化材・木錘・部材・檜扇・横櫛・横櫛素材板）実測図

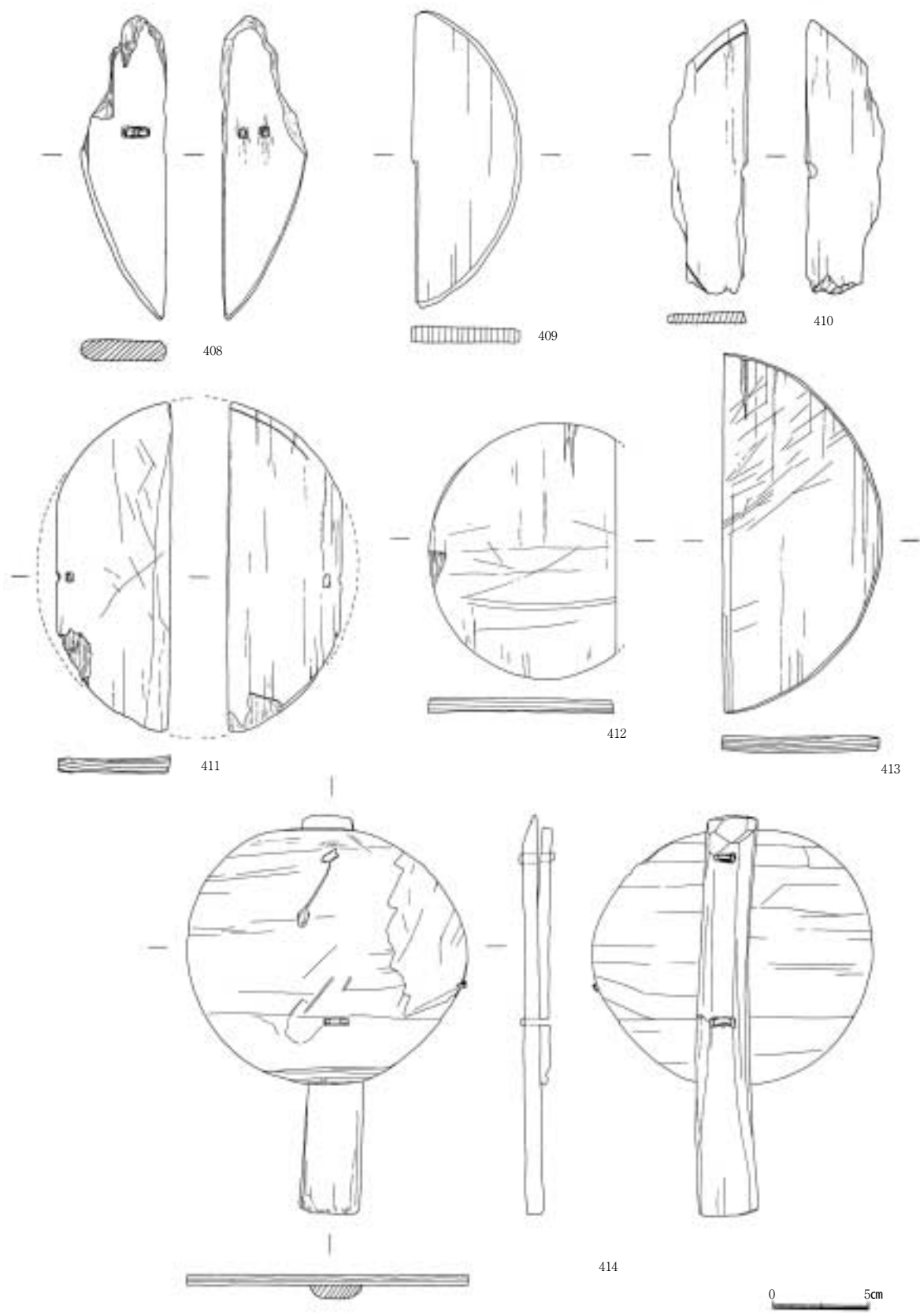


Fig.36 木製品（円形曲物底板・蓋板・把手付底板）実測図

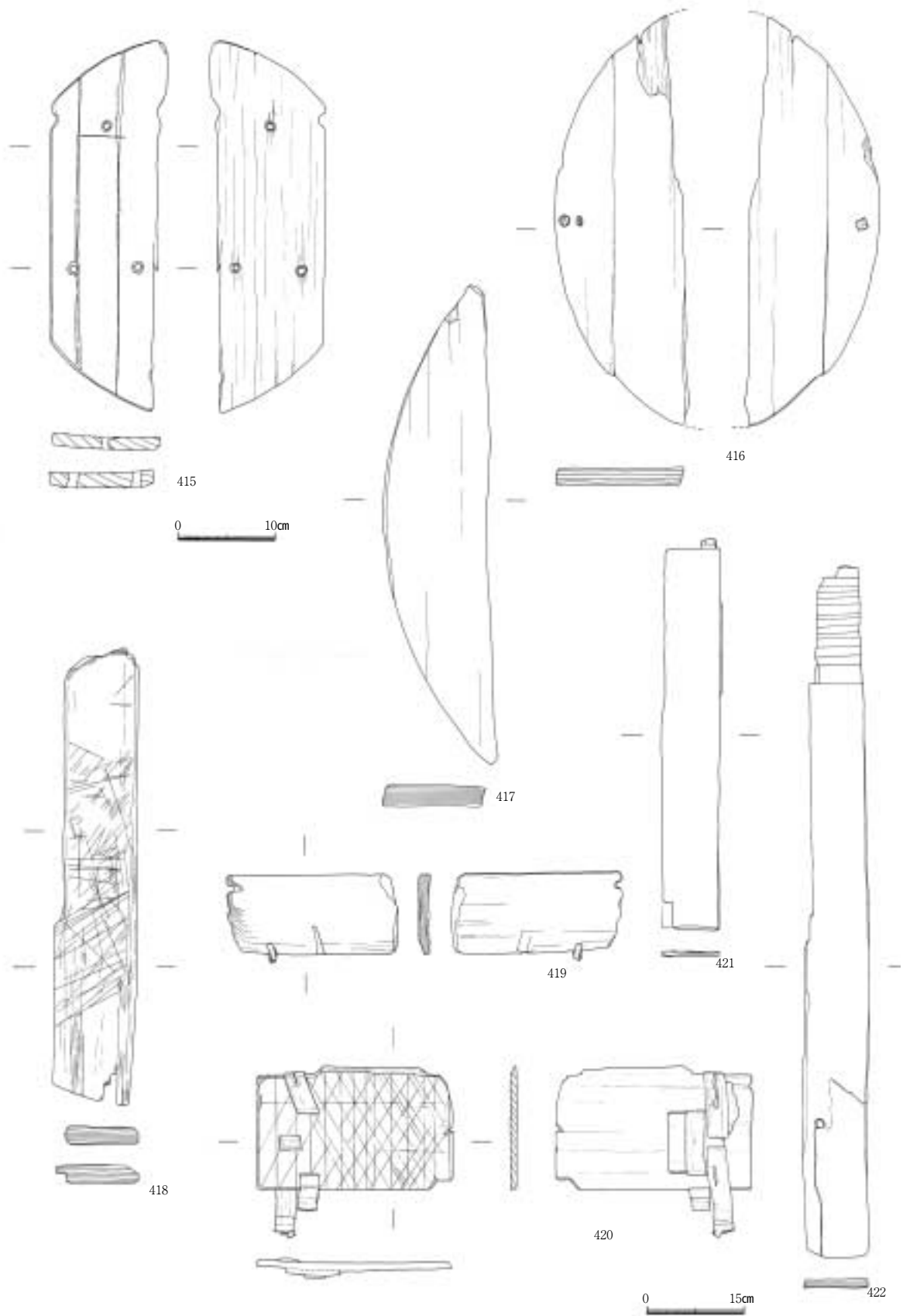


Fig.37 木製品（円形曲物底板・蓋板・側板）実測図

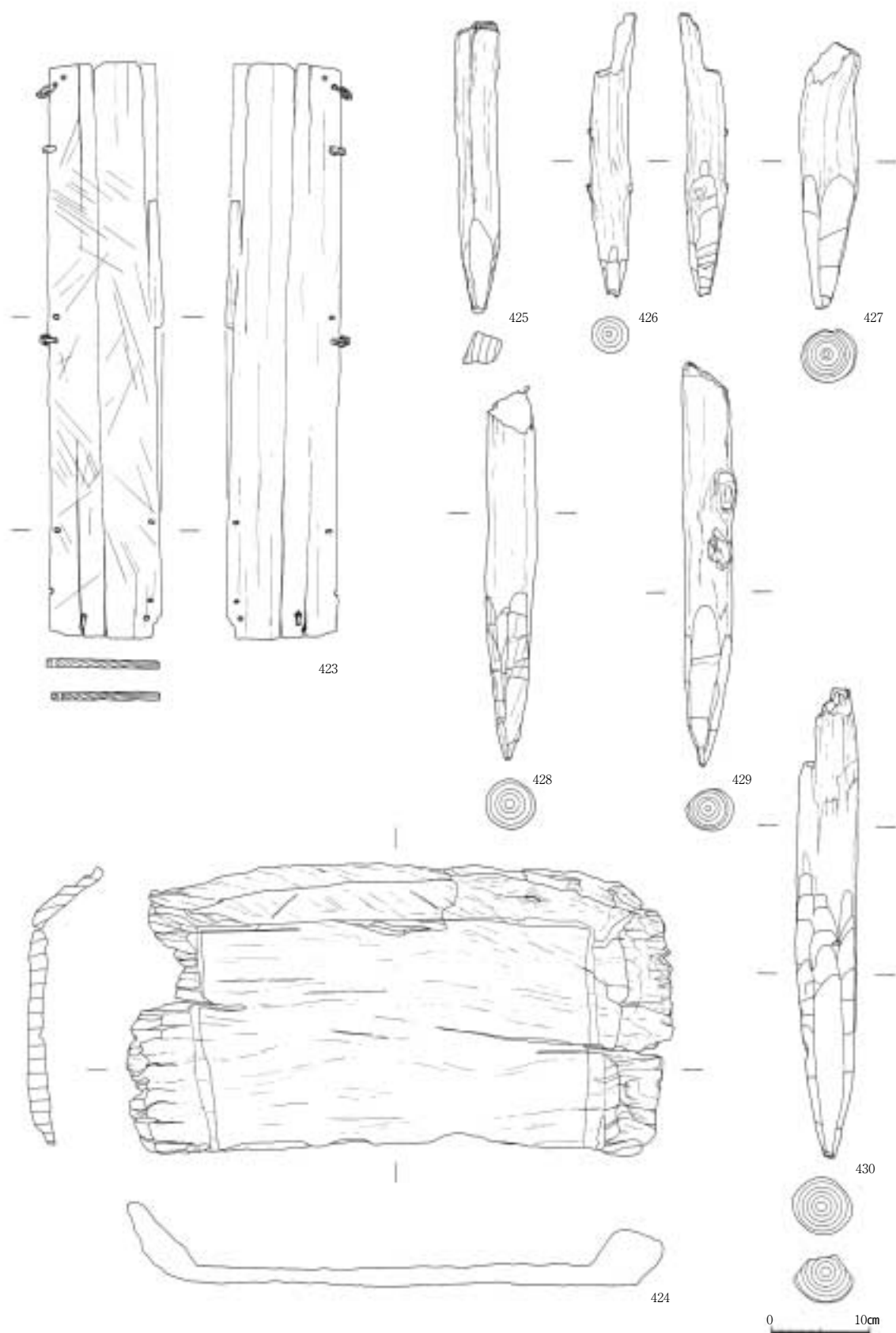


Fig.38 木製品（円形曲物側板・剝物容器・杭）実測図

Tab.2 縄文・弥生・古墳時代土器観察表

Fig. No.	図版番号	出土地点層位	器種	法 量 (cm)				色調・胎土	特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径			
20	1	区層	双耳壺					暗灰色。長石砂粒を多く含む。	体部から剥離、径5mmの焼成前穿孔。	
"	2	区層	深鉢					桃色。チャート他の砂粒を多く含む。	口縁部に刻目突帯文。	
"	3	区層	"	26				チャートの細粒砂、雲母を多く含む。	口縁部外面に刻目突帯文を貼付、口頸部外面横位の条痕調整。	
"	4	区層	甗			12		黒灰色。チャートの粗粒砂を多く含む。	外面は頸部から胴部にかけて、櫛描直線文+櫛描波状文を施し波状文帯の上に浮文を貼付。外面縦方向のハケ。	
"	5	区層	"	21.0				灰茶色。石英の細・粗粒砂を多く含む。	口唇面取り、下半にしっかりした刻目。	外面煤け
"	6	区層	壺	15				桃色。チャートの粗粒砂を多く含む。	二重口縁。	
"	7	区層	"	20		24.0		黒褐色。チャートの粗粒砂を多く含む。	口縁部外面2cm幅の粘土帯貼付、上胴部に櫛描直線文と列点文を施す。	外面煤け
"	8	区層	"	8.4		10.6		風化礫を中心とする粗粒砂を多く含む。	口縁部横方向のナデ、胴部内面ナデ調整。	
"	9	"	甗	13.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	口縁部内外面ナデ調整。	
"	10	区層	"	11.7				黄茶色。頁岩風化礫を含む。		
"	11	区層	"	15.0				黒色。チャート、頁岩、他の粗粒砂を多く含む。	口唇ナデ調整。頸・胴部外面縦ハケ。上胴部内面指ナデ、内面中位右下がりのハケ。	
"	12	区層	"	14.0				淡茶色。石英粒を多く含む。	内外横方向のナデ。	外面煤け
"	13	区層	"			15.0		灰茶色。チャート、他の粗粒砂を少量含む。	外面ナデ調整。内面板状工具によるナデ。一部擦痕。	"
"	14	区層	"			5.0		桃色。チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面器表の荒れが激しい。	"
"	15	区層	"			3.0		灰茶色	内外面ナデ調整。	"
"	16	区-2層	台付鉢			8.0		桃色。頁岩の風化礫砂粒を含む。	調整不明。	
"	17	区	鉢	19.4				桃色。頁岩の風化礫を多く含む。	丸底。内外ナデ調整。	
"	18	区層	甗			5.3		灰白色。風化礫を多く含む。	内ナデ調整。外面縦ハケ。	
"	19	区層	壺			3.0		灰茶色。	"	
"	20	"	甗			2.8		暗灰色。チャート、他の小礫、粗粒砂を多く含む。	調整不明。	
"	21	区層	手づくね					黄茶色。チャート、その他の砂粒を含む。	手づくね土器。	
"	22	区層	坏蓋	14.0	3.0					
"	23	区層	甗			1.7		灰茶色。チャート他の粗粒を含む。	内外ハケ調整。	
"	24	区層	"			5.5		灰茶色。チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。	外面縦ハケ、内面ナデ調整。	

Tab.3 古代土器観察表 - 1

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 21	25	E 区層	土師器皿	9.9	1.6	6	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(16.2)
"	26	区層	"	10	1.5	6.5	"	内外ヨコナデ、外底ヘラ切り+ナデ	(15.0)
"	27	区層	"	11.3	1.2	8.5	淡茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(10.6)
"	28	区層	"	10.8	1	8	桃色。精選された胎土。	"	(9.3)
"	29	区層	"	11.7	1.5	7.8	白黄色。精選された胎土。	器表の荒れが激しい。	(12.8)
"	30	区層	"	12.0	2.0	7.8	灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り。	(16.7)
"	31	A 区層	"	12.0	2.3	8.2	桃色。細粒砂を多く含む。	内外丁寧なヨコナデ。	(19.2)
"	32	区層	須恵器皿	11.5	1.6	8.5	桃色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ	(13.9)
"	33	区層	土師器皿	12.4	1.8	8.0	灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	(14.1)
"	34	区	"	14.0	2.5	8.0	淡茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。	(17.8)
"	35	区層	"	12.6	2.1	8.5	黄茶色。精選された胎土。	外底はヘラ切り+ナデ。	(16.7)
"	36	"	"	13.0	1.5	10.0	黄色。赤色の砂粒を少し含む。	内外器表の荒れが激しい。	(11.5)
"	37	"	"	11.7	1.1	7.5	桃色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底はヘラ切り。	(9.4)
"	38	区層	"	16.0	1.4	12.0	橙色。チャート、他の砂粒を多く含む。	口縁部内面に僅かな段。内外丁寧なヨコナデ。	(8.8)
"	39	区層	"	12.0	1.9	7.5	茶色。精選された胎土。	内外面丁寧なヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ。	(15.8)
"	40	区層	"	14.4	1.9	11.5	橙色。精選された胎土。	口縁部は強く外反、内外ヨコナデ。	(13.2)
"	41	"	"	16.0	15.5	13	橙色。細粗粒砂を多く含む。	内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ、内面ベンガラ塗布。	(9.4)
"	42	区層	"	14.0	1.6	10	橙色。赤色風化礫の粗粒を含む。	内外ヨコナデ。	(11.4)
"	43	区層	"	12.3	2.1	8.5	桃色。精選された胎土。	"	(17.2)
"	44	"	"	13.2	1.5	10.0	"	器表の荒れが激しい。ヘラ切り。	(11.4)
"	45	区層	"	16.0	2.5	13.7	茶灰色。細砂粒を含む。	口縁部端部摘み出し。外底器表剥落。内外丁寧なヨコナデ。	内外煤け (13.2)
"	46	区層	"	12.0	1.5	9.0	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外面ヘラ切り+ナデ	内外煤け (12.5)
"	47	"	"	15.6	1.5	12.2	茶灰色。細粒砂を含む。	口縁部内面段状。内外丁寧なヨコナデ、内底も丁寧な回転ナデ。外底はヘラ切り+ナデ	(9.6)
"	48	区層	"	14.0	2.3	10.5	橙色。細粒砂を含む。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(16.4)
"	49	区層	土師器	9.3	1.9	5.7	精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ、外底ヘラ切り+ナデ。平行圧痕あり。	(20.4)
"	50	区層	"	9.9	2.3	6.2	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ、外底ヘラ切り+ナデ。	内外煤け (23.0)
"	51	区層	"	11.3	2.9	6.7	灰色。長石、他の砂粒。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り。	内面全面煤け (23.0)
"	52	区層	"	13.3	4.1	7.4	茶色。精選された胎土。	口縁部内面に段、内面は底部を含めて暗文風のヘラミガキ。内面に化粧土塗布。ヘラ切り。	(30.8)
"	53	区層	"	11.4	2.6	7.5	暗茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。ヘラ切り+ナデ。	(22.8)

Tab.4 古代土器観察表 - 2

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 21	54	区層	坏	9.8	2.9	5.8	灰茶色。細粒砂を含む。	内外面ヨコナデ。ヘラ切り。	(29.0)
"	55	区層	"	10.2	2.4	7.1	黄茶色。精選された胎土。	底部に段。内外丁寧なヨコナデ。ヘラ切り+ナデ。	(23.5)
"	56	区層	"	13.0	3.1	8.0	茶色。赤色風化礫の砂粒を含む。	内外丁寧なヨコナデ。ヘラ切り。	(23.8)
"	57	区層	"	12.8	3.0	6.7	茶色。チャートの砂粒を含む。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(23.4)
"	58	区	"	12.4	2.4	8.4	橙色。チャート、他の細粒砂を含む。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(19.4)
"	59	区層	"	13.5	3.5	10.0	黄茶色。精選された胎土。	口縁部内面に段。内外ヨコナデ+部分的にヘラミガキ。底部と体部の接合痕を認む。外底に粘土紐の単位を認む。	(25.9)
"	60	区層	"	12.7	2.8	7.2	橙色。石英、赤色風化礫の砂粒を含む。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ+平行圧痕	(22.0)
"	61	区層	"	11.7	3.3	6.8	薄黄色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(28.2)
"	62	区層	"	12.5	3.1	8.0	黄茶色。細粒砂を多く含む。	底部に段。内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	内外煤け (24.8)
"	63	区層	"	14.0	2.9	7.8	橙色。長石、チャートの細粒を含む。	底部に段。内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(20.7)
"	64	"	"	12.4	2.4	7.9	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(19.4)
"	65	区層	"	14.3	3.3	9.5	淡茶色。精選された胎土。	"	内外煤け (23.1)
"	66	"	"	12.9	3.0	8.0	橙色。赤色風化礫の粗粒を含む。	"	(23.3)
"	67	区層	"	13.3	3.0	7.0	淡茶色。赤色風化礫の細粒を含む。	内外ヨコナデ。	内外煤け (22.6)
"	68	区層	"	14.2	2.7	9.2	橙色。細粒砂を多く含む。	器表の荒れが激しい。	(19.0)
"	69	区層	"	13.7	3.0	9.7	淡茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ、内底回転ナデ+一定方向のナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(21.9)
"	70	区層	"	13.7	2.7	9.3	薄茶色。赤色細粒砂を多く含む。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(19.7)
"	71	区層	"	13.6	3.0	8.9	灰桃色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。	(22.0)
"	72	区層	"	13.4	3.6	8.5	灰白色。精選された胎土。	口縁部内面に、鈍い沈線。内外ヨコナデ。外底ヘラ切り。	(26.5)
"	73	区層	"	13.6	2.8	8.2	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ、外底ヘラ切り+ナデ	内外煤け (20.5)
"	74	"	"	14.0	3.0	8.0	橙色。石英、長石砂粒を含む。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(21.4)
"	75	区層	"	13.2	3.0	8.4	橙色。赤色風化礫を含む。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(22.7)
"	76	区層	"	13.0	2.6	8.0	灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(20.0)
"	77	"	"	13.5	2.6	7.3	黄茶色。細粒砂を含む。	内底は段状。内外ヨコナデ。ヘラ切り	(19.3)
"	78	"	"	12.0	2.9	8.0	淡灰褐色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底に平行圧痕。	(24.2)
Fig. 22	79	"	"	12.0	2.8	7.2	灰白色。精選された胎土。	内外面ヨコナデ。外底ナデ+平行圧痕。	口縁部煤け (23.3)
"	80	"	"	12.7	3.1	9.0	黄茶色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	(24.4)
"	81	"	"	13.2	3.0	7.5	灰茶色。細粒砂を含む。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ+平行圧痕。	(22.7)

Tab.5 古代土器観察表 - 3

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 22	82	区層	坏	14.0	4.4	7.1	淡茶色。チャート、他の細粒砂を含む。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	(31.4)
"	83	"	"	14.6	5.0	7.5	橙色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ、ヘラ切り。内底に段。	(34.2)
"	84	区層	"	12.0	4.4	6.2	黄灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(36.7)
"	85	"	"	11.0	2.8	6.0	茶色。赤色風化礫の砂粒を含む。	"	(23.4)
"	86	区層	"	12.2	3.7	7.1	橙色。赤色砂粒を多く含む。	内外器表の荒れが激しい。	(30.3)
"	87	区層	"	15.7	4.9	7.7	淡黄色。長石、赤色風化礫の砂粒を含む。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。	(31.2)
"	88	"	"	14.0	4.5	8.2	灰黄色。精選された胎土。	内外面ヨコナデ。内底は段状。外底平行圧痕あり。	(32.1)
"	89	区層	"	12.2	4.0	6.1	灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ、ヘラ切り。	(32.8)
"	90	"	"			6.5	橙色。細粒砂を含む。	ヘラ切り。	(13.2)
"	91	"	"	15.2	5.3	8.2	暗灰茶色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ+ハゲ。	内外煤け (23.3)
"	92		土師器椀	12.0	4.4	5.7	灰茶色。チャート、他の粗・細粒砂を含む。	内外面ヨコナデ。ベタ高台。ヘラ切り+ナデ	内外煤け、赤変 (36.7)
"	93	"	土師器坏	15.0			淡茶色。精選された胎土。	外面はロク口の凹凸が顕著。	
"	94	"	"	13.7	5.4	8.3	灰白色。シャーモットを含む。	内底は段状。内外丁寧なヨコナデ。ヘラ切り・	(39.4)
"	95	"	"			7.0	淡茶色。細粒砂を多く含む。	底部外縁は強いヨコナデで凹状をなす。ヘラ切り+ナデ。	
"	96	"	"			6.9	黄茶色。赤色風化礫の細粒を含む。	内外摩耗が激しい。	
"	97	"	"			7.5	橙色。精選された胎土。	外底はヘラ切り+ナデ。	
"	98	"	"			8.8	灰茶色。赤色風化礫の砂粒を多く含む。	内面丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ	内底煤け
"	99	"	"			6.2	淡茶色。精選された胎土。	ヘラ切り。	
"	100	区層	"			8.0	精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底はヘラ切り+弱い削り+ナデ。	
"	101	区層	"			10.0	"	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	
"	102	区層	"			5.8	橙色。精選された胎土。	ヘラ切り。	
"	103	区層	"			8.0	暗茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ	
"	104	区層	土師器椀			7.4	灰茶色。精選された胎土。	"	椀の可能性あり
"	105	"	土師器坏			6.8	橙色。細粒砂を多く含む。	内外面ヨコナデ。ヘラ切り。	煤け
"	106	"	"			6.8	灰色。石英、他の細粒砂を多く含む。	内外面ロクロ目顕著。ヘラ切り。	
"	107	区層	"			7.7	灰黄色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。ヘラ切り。	
"	108	区層	"			8.2	淡茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ。高台剥離	椀の可能性あり
"	109	区層	土師器椀				黄茶色。チャート、他の細粒を含む。	内外ヨコナデ。外底円盤が剥離。粘土紐を巻いた点部痕跡が判る好例。	

Tab.6 古代土器観察表 - 4

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 22	110	区層	須恵器椀	15.6	5.1	7.5	灰黄色。チャートの細粗粒を含む。	ベタ高台。内底は段状。体部外面は左 右の弱い削り+ヨコナデ。内面ヨコナデ。外底ヘラ切り+ナデ+平行圧痕。内外に火襷。	(32.7)
Fig. 23	111	区	土師器坏		高台高 0.5	高台径 7.2	橙色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。	
"	112	区層	土師器椀			高台径 7.4	橙色。石英粒砂を含む。	断面三角高台。	
"	113	"	"			高台径 8.8	橙色。精選された胎土。	内外ヘラミガキ。しっかりした貼付高台。	
"	114	"	"			高台径 8.6	"	内外ヨコナデ。	
"	115	"	土師器坏		高台高 2.0	高台径 8.6	黄茶色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	
"	116	区層	"		高台高 0.9	高台径 8.4	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底削り+ナデ。	
"	117	区	"		高台高 1.0	高台径 9.0	黄白色。細粒砂を含む。	内外ヨコナデ。	
"	118	区層	"		高台高 0.5	高台径 12.0	灰茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底寺切り+ヨコナデ	
"	119	区層	土師器椀	15.0	5.3	高台径 6.7	淡茶色。内外ヨコナデ。	口縁部内面に弱い沈線。内外ヨコナデ、外底ヘラ切り。高台高1.0cm。	
"	120	区層	"				暗灰色。石英、長石、他の砂粒を含む。	高台剥離。	外底煤け
"	121	区層	土師器坏		高台高 1.5	高台径 7.8	淡茶色。赤色風化礫の砂粒を含む。	内外ヨコナデ。	
"	122	区層	土師器皿?		高台高 0.8	高台径 13.9	橙色。精選された胎土。	"	内外面一部煤け
"	123	区層	土師器坏		高台高 1.2	高台径 12.8	淡茶色。精選された胎土。	"	
"	124	区層	土師器坏?	15.0			薄黄色。精選された胎土。	口縁部内面段状。内外ヨコナデ。体部外面に断面三角突帯。	
Fig. 24	125	区層	須恵器皿	13.5	2.1	11.0	灰白色。精選された胎土。	口唇部に細い沈線。内外面丁寧なヨコナデ。	(15.6)
"	126	"	"	14.0	2.0	10.0	白灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。焼成不良。	(14.3)
"	127	区層	"	15.0	2.0	16.4	白灰色。長石、他精選された胎土。	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ。	(13.3)
"	128	区層	"	14.0	2.0	10.0	灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	(14.3)
"	129	"	"	14.6	2.0	11.0	灰白色。精選された胎土。	"	(13.7)
"	130	"	"	15.4	2.2	12.2	"	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ。	(14.3)
"	131	"	"	16.6	1.6	13.3	"	口縁部摘み上げ。内外ヨコナデ。	(9.6)
"	132	区	"	17.0	1.6	12.3	"	"	(8.8)
"	133	区層	"	16.0	1.7	13.4	茶灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ヨコナデ。	(10.6)
"	134	"	"	16.5	2.0	12.0	灰白色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	(12.1)
"	135	区	"	16.5	2.0	13.2	灰白色。極めて精選された胎土。	口縁部内面に段。内外丁寧なヨコナデ。	(12.0)
"	136	区層	"	17.0	2.0	13.4	"	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ヨコナデ。	(11.8)
"	137	"	"	16.6	2.3	13.8	"	内外ヨコナデ。	(14.4)
"	138	"	"	16.0	2.5	12.4	灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+ヨコナデ。	(15.6)

Tab.7 古代土器観察表 - 5

Fig. No.	図版番号	出土地点層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 24	139	区層	須恵器皿	18.6	2.2	15.2	灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。	(11.8)
"	140	"	"	18.4	2.4	14.8	灰黄色。長石、他の砂粒。	口縁部摘み上げ、内面に段。内外ヨコナデ。	(13.0)
"	141	区層	"	14.0	1.9		灰色。精選された胎土。	口縁部は僅かに肥厚、内外ヨコナデ。転用硯。	内面に墨付着 (13.2)
"	142	区	"	14.6	3.0	8.0	"	内外ヨコナデ。焼成不良。	(20.5)
"	143	区層	須恵器坏	11.0			"	内外ヨコナデ。	
"	144	区層	"	14.0			"	"	
"	145	"	"	13.6	3.1	9.8	"	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り	(22.8)
"	146	区層	"	12.4	3.8	7.8	灰白色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ。	(30.6)
"	147	区層	"				灰色。長石、他の細粒を多く含む。	内面は丁寧なヨコナデ。外面は強いヨコナデにより凹凸が顕著。外底はヘラ切り+ナデ。内外に火禿。	
"	148	"	"	13.5	3.6	8.0	灰色。	内外丁寧なヨコナデ。内低もナデ。外底はヘラ切り+ナデ。	(26.7)
"	149	区	"			11.0	灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ	
"	150	区層	"	13.0	4.2	8.4	茶灰色。石英粒、他の砂粒を含む。	内外ヨコナデ。	(30.1)
"	151	区層	"			9.0	黄灰色。チャート、他の細粒砂を多く含む。	"	
"	152	区層	"	13.0	3.5	8.0	灰白。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り。外面に自然釉	(26.9)
"	153	"	"	16.6	4.4	10.5	灰色。長石、他の細粒を含む。	内外面ヨコナデ。器面の凹凸顕著。外底はヘラ切り+ナデ。	
"	154	区層	"			高台径9.0	茶灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。外底はヘラ切り+丁寧なナデ。高台高0.6cm。	
"	155	区層	"	8.5			灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	
"	156	"	"			高台径9.2	灰色。長石、他の細粒を含む。	内外ヨコナデ。高台高0.5cm。	
"	157	区層	"			高台径7.0	灰色。極めて精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。高台高0.6cm。	
"	158	区層	"			高台径9.2	"	内外ヨコナデ。	
"	159	区層	"			高台径8.2	灰色。精選された胎土。	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り+削り+ナデ。高台は僅かに凹状をなす。	内低に朱付着
"	160	"	"			高台径7.6	灰色。極めて精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	
"	161	"	"	13.0			灰色。長石、他の細粒を含む。	内外面ヨコナデ。	
"	162	"	"			高台径11.0	灰色。精選された胎土。	"	
"	163	"	"			高台径10.0	"	内外ヨコナデ。畳付けは凹状をなす。	
"	164	区層	"	11.4	3.9	高台径8.0	"	口縁部摘み上げ、内外ヨコナデ。	(31.6)
"	165	"	"			高台径10.0	灰色。長石、チャートの粒砂を含む。	内外丁寧なヨコナデ。高台脇、外底もヨコナデ。	
"	166	区	"	13.6	3.9	高台径10.0	灰色。精選された胎土。	外底外縁いっぱい高台が付く。内外ヨコナデ。	外面煤け
"	167	区層	"	13.6	4.1	高台径10.6	"	内外丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り+丁寧なナデ。しっかりした高台が外方に踏ん張る。	(26.5)

Tab.8 古代土器観察表 - 6

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 24	168	区層	須恵器坏			高台径 14.0	灰色。精選された胎土。	外底は丁寧なナデ。高台置付け凹状。	
"	169	区層	"			高台径 12.0	灰白色。精選された胎土。	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り+丁寧なナデ	
"	170	区層	"	15.8	5.6	高台径 10.6	灰色。石英、他の粗・細りゅうを含む。	内外面丁寧なヨコナデ。外底はヘラ切り+丁寧なナデ	(31.2)
"	171	区層	"	12.0	6.1	高台径 7.8	灰色。精選された胎土。	内外面ヨコナデ。外底はヘラ切り+丁寧なナデ。高台脇強いヨコナデ。	(46.7)
"	172	区層	須恵器壺			高台径 16.0	灰色。精選された胎土。	高台内外ヨコナデ。外底に布目圧痕あり。	
Fig. 25	173	区層	須恵器蓋	10.9	1.7		"	内外面ヨコナデ。外面自然油。	
"	174	区層	"	15.7			精選された胎土。	内外面ヨコナデ。口縁部端部を摘み出し強いヨコナデ。	
"	175	区層	"	15.3			灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。口縁部面取り。	
"	176		"	19.6	2.2		灰色。精選された胎土。	"	
"	177	区層	"	17.5			黄灰色。長石砂粒を含む。	天井部外面ナデ、他の部位はヨコナデ。	
"	178	区層	須恵器椀		高台高 1.1	高台径 7.2	黄茶色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外底はヘラ切り+ナデ。内外面に火禱あり。	
"	179	区層	"	13.4			精選された胎土。	内外ヨコナデ、ロクロ目顕著。	
"	180	区層	"	16.6			"	"	
"	181	区層	黒色土器椀				雲母を多く含む。外面灰茶色。	口縁部外面ヨコナデ。	
"	182	区層	"				雲母を多く含む。外面こげ茶色。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部端部をわずかに摘み出してヨコナデ。	搬入品
"	183	区層	"				精選された胎土。雲母を多く含む。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ、白銀に発色。	"
"	184	区層	"				精選された胎土。外面暗茶色。	口縁部内外ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	
"	185	区層	"				雲母を含む。外面こげ茶色。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕顕著。内面ヘラミガキ。	搬入品
"	186	区層	"	12.2			外面灰茶色。石粒その他の細粒を含む。	口縁部外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ。	"
"	187	区層	"	16.6			外面淡茶色。雲母を多く含む。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	"
"	188	区層	"	18.0			外面こげ茶色。雲母石英粒を多く含む。	内面ヘラミガキ。	"
"	189	区層	"	19.0			雲母を多く含む。	口縁部外面強いヨコナデ、内面沈線。内面ヘラミガキ、外面指頭圧痕。	"
"	190	区層	"	14.0			雲母を多く含む。こげ茶色。	口縁部内面沈線。体部外面ヘラ削り(左右)、内面ヘラミガキ。	"
"	191		"	19.0			精選された胎土。外面灰茶色。	内外ヨコナデ。	
"	192	区層	"	15.3			石英・雲母を多く含む。外面こげ茶色。	内外面ヘラミガキ。口縁部内外ヨコナデ。	搬入品
"	193	区層	"	14.6			石英、長石、他の砂粒を含む。	口縁部内面のヨコナデは弱い。内面ヘラミガキ。	"
"	194	区層	"	15.6			雲母を多く含む。	口縁部外面ヨコナデ、内面沈線。体部内面ヨコヘラミガキ。外面指頭圧痕、擦痕。	"
"	195	区層	"	18.0			外面淡茶色。石英、長石、角閃石の砂粒を含む。	口縁部外面ヨコナデ、内面沈線。外面は弱い擦痕。	"

Tab.9 古代土器観察表 - 7

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 25	196	区層	黒色土器椀	18.0			外面こげ茶色。雲母を多く含む。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	搬入品
"	197	区層	"	16.0			外面浅黄色。石英、他の砂粒を含む。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ	
"	198	区層	"	15.0			外面黄灰色。石英、長石、雲母の細粒を含む。	外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	
"	199	区層	"	13.0			外面灰茶色。石英、長石、雲母の砂粒を含む。	外面弱いヘラ削り。内面ヘラミガキ	
"	200	"	"	16.0			外面黒褐色。精選された胎土。	口縁部内面に太い沈線。口縁部外面ヨコナデ。体部外面横方向の擦痕+ヨコナデ。	
"	201	"	"	18.0			外面灰茶色。長石、雲母を多く含む。	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕顕著。内面ヘラミガキ。	
"	202	区	"	13.0			外面暗茶色。精選された胎土。	口縁部内外ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	
"	203	区層	"	14.4			外面灰褐色。石英、雲母他を多く含む。	口縁部は内面にも肥厚しS字状を呈する。外面は擦痕+ヘラミガキ。高台欠損。	
"	204	区層	"	13.3	5.0	7.3	外面黄灰色、石英他の砂粒。	口縁部内外面ヨコナデ。外面弱い削り(左 右)、内面ヘラミガキ。しっかりした貼付高台。	(37.6)
"	205	"	"	13.8	6.2	8.0	外面橙色。長石、赤色粒砂を含む。	外面回転ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	(44.9)
"	206	区層	"	17.0	4.5	7.7	外面橙色。チャート・石英他の砂粒。	体部外面削り(左 右)、内面丁寧なヘラミガキ。断面の貼付高台。外底にヘラ記号。	(26.5)
"	207	区層	"	14.8			外面茶色。	口縁部内面沈線、外面ヨコナデ。体部内面ヨコヘラミガキ。体部外面指頭圧痕顕著。	
"	208	区層	"	15.4			外面橙色。石英粒を含む精選された胎土。		
"	209	区層	"	14.0	4.5	6.2	外面茶色。	口縁部内面沈線、外面ヨコナデ。体部外面削り+ナデ。体部内面は丁寧なヘラミガキ。断面逆三角のしっかりした高台を貼付しヨコナデ。	
"	210	"	"			11.0	外面灰茶色。精選された胎土、雲母を含む。	断面三角の小さな高台貼付。高台脇をヨコナデ	搬入品
Fig. 26	211	区層	"			高台径 8.2	外面橙色。石英、雲母を含む。	断面三角の小さな高台貼付。高台脇をヨコナデ。	"
"	212	区層	"			高台径 9.8	外面こげ茶色。雲母、角閃石を多く含む。	断面三角の小さな高台貼付。高台脇をヨコナデ。外底ナデ、内底は細く丁寧なヘラミガキ。	"
"	213	区層	"			高台径 7.0	外面橙色。精選された胎土。	断面三角の小さな高台貼付。高台脇をヨコナデ。外底ナデ、内底細く丁寧なヘラミガキ。	
"	214	区層	"			高台径 8.0	淡茶色。精選された胎土。	断面三角のしっかりした貼付高台。高台脇をヨコナデ。	
"	215	区層	"			高台径 6.6	外面黄茶色。精選された胎土。	貼付高台。高台脇ヨコナデ。外底ナデ、内底ヘラミガキ。	
"	216	区層	"			高台径 7.4	"	貼付高台。高台脇ヨコナデ。体部外面擦痕+ナデ。内面ヘラミガキ。	
"	217	"	"			高台径 7.1	"	貼付高台。高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	
"	218	区層	"			高台径 7.0	外面灰茶色。チャート、他の細粒を含む。	貼付高台。高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面煤ける。	
"	219	区層	"			高台径 8.2	外面茶色。チャート、長石、他の細粒を含む。	貼付高台。高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	
"	220	区層	"			高台径 8.4	外面暗茶色。内底は白銀を呈す。精選された胎土。	貼付高台。高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面煤ける。	
"	221	"	"			高台径 6.0	外面淡茶色。精選された胎土。	貼付高台。高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	

Tab.10 古代土器観察表 - 8

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 26	222	区層	黒色土器椀			高台径 8.3	外面茶色。チャート、長石、他の砂粒を含む。	高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。内外面二次的に被熱、煤が付着。	
"	223	"	"			高台径 7.4	淡茶色。精選された胎土。	高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面ナデ。	
"	224	区層	"			高台径 6.8	"	"	
"	225	区層	"			高台径 7.5	外面灰茶色。チャート、赤色風化礫の細粒を含む。	高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面二次的に被熱、煤が付着。	
"	226	区層	"			高台径 8.0	精選された胎土。	断面かまぼこ状のしっかりした貼付高台。高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面二次的に被熱、煤が付着。	
"	227	"	"			高台径 7.6	淡茶色。精選された胎土。チャートを含有。	外底糸切り痕跡を認める。体部外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	
"	228	"	"			高台径 8.0	外面灰茶色。チャート、赤色風化礫の細粒を含む。	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	
"	229	区層	"			高台径 7.6	外面茶色。精選された胎土。	外底はヘラ切り+ナデ。高台脇ヨコナデ、高台外に僅かに段を生ず。内面ヘラミガキ。	
"	230	区層	"			高台径 7.0	外面茶灰色。チャートの細粒を含む。	高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面ナデ。	
"	231	区層	"			高台径 7.0	外面こげ茶色。精選された胎土。	高台脇をヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面ナデ。外面に黒色物塗布。	
"	232	区層	"			高台径 7.8	外面茶色。チャートの砂粒を含む。	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	
"	233	区層	"			高台径 9.0	"	"	
"	234	"	"			高台径 8.4	外面淡茶色。精選された胎土。	外面ヨコナデ、内底には放射状に幅の広いヘラミガキを施す。高台は外方に踏ん張る。	
"	235	区層	"			高台径 7.0	外面灰茶色。石英、雲母、角閃石を含む。	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。高台は外方に踏ん張る。	搬入品
"	236	区層	"			高台径 8.8	外面茶灰色。精選された胎土。	高台脇ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	
"	237	区層	"			6.4	外面橙色。チャート、石英の砂粒を含む。	ベタ高台。内面ヘラミガキ。	
"	238	区層	"			高台径 6.8	外面鈍い黄橙色。長石、他の砂粒を含む。	高台内外面強いヨコナデ。内面ヘラミガキ。外面煤け。	
"	239	区層	"			8.0	外面白桃色。精選された胎土。	外底ヘラ切り+ナデ。内底に口ク口目。外底煤け。	
"	240	区層	"			高台径 8.2	外面灰黄色。石英、雲母を含む。	外底に糸切り痕あり。高台内外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	
"	241	区層	緑釉椀			高台径 6.0	精選された胎土。	陶胎。高台外面まで施釉、釉は緑灰色。	搬入品
"	242	区層	"			高台径 6.8	"	陶胎。高台外面まで施釉。釉は緑灰色。畳付けを内外に削る。	"
"	243	区層	"			9.0	"	軟胎。円盤の上にべた高台を貼付し、蛇の目状に高台を削り出す。内外全面施釉。釉は灰色を帯びる。	"
"	244	"	"	18.0			"	軟胎。口縁部は僅かに外反。	"
"	245	区層	緑釉皿	13.4	2.7	5.8	"	陶胎。口唇面取り。外底は強い削りによって凹状を呈す。外面ヨコ方向のケズリ+ヨコナデ、内面丁寧なヨコナデ。	" (20.1)
"	246	区層	緑釉椀	18.0			"	軟胎。口縁部は僅かに外反。	"
"	247	区層	灰釉	12.8	2.3	高台径 6.3	灰白色。精選された胎土。	底部糸切り。高台貼付。内外面ヨコナデ。体部中位まで施釉。	"
"	248	区層	緑釉椀	14.4	4.4	6.8	精選された胎土。	軟胎。蛇の目状高台。口縁部はわずかに外反。体部外面は右左削り+ヨコナデ。内面は丁寧なヨコナデ。釉は灰色に発色。	"

Tab.11 古代土器観察表 - 9

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 26	249	区層	瓦器椀	15.0			精選された胎土。	口縁部外反。体部外面指頭圧痕。	
"	250	"	"	13.8			長石、石英他	口縁部内外ヨコナデ。体部外面指頭圧痕。	
"	251	"	"	17.0			精選された胎土。	口縁部は外反、強いヨコナデ。外面指頭圧痕。内面ヘラミガキ。	
"	252	区層	青磁椀	19.0			灰白色、精緻な胎土。	内外面櫛目文。口縁部内面1条の界線。鉛色の透明釉。体部外面に幅1.2cm前後のコテによる削り痕跡を認める。	
Fig. 27	253		土師器甕	16.5			茶色。長石、石英、角閃石を含む。	口縁部はくの字に屈曲。口縁部内外面ヨコナデ。内面黒色処理か。	搬入品
"	254	区層	"	20.3			茶色。長石、石英、他の砂粒を多く含む。	口縁部内外強いヨコナデ。胴部内外面右下がりのハケ調整。	
"	255	区層	"	18.0			灰茶色。石英、長石の砂粒を含む。	口縁部内外ヨコナデ。胴部内外ナデ、内面に下地のヨコ方向削りあり。外面煤け。	搬入品
"	256	区層	"	21.6			薄い茶色。長石、石英砂粒を含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面右下がりのハケ。	
"	257	区層	"	24.0			灰茶色。石英粒を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	258	"	"	21.2			茶色。石英、雲母を多く含む。	口縁部内外に強いヨコナデ、内面の下地にはヨコハケ。胴部外面タテハケ、内面上部ヨコハケ。外面煤け。	
"	259	"	"	25.4			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ、内面ヨコナデ。煤け。	
"	260	"	"	24.5			"	口縁部内外強いヨコナデ。胴部内外面ナデ。	
"	261	"	"	26.0			灰茶色。石英、長石、雲母を含む。	口縁部外面、口唇部強いヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。胴部外面タテハケ、内面ヨコナデ+ナデ。煤け	
"	262	区層	"	27.0			褐灰色。長石、雲母を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ、内面はヨコハケ+ヨコナデ。外面タテハケ、内面右下がりのハケ。煤け。	
"	263	区層	"	24.8			茶色。石英、長石、雲母を含む。	口縁部内外面ヨコハケ+強いヨコナデ。胴部外面タテハケ、内面ナデ、指頭圧痕顕著。	
"	264	区層	"	23.0			灰茶色。石英、長石を全く含まない。	口縁部内外ヨコハケ+ヨコナデ。口唇ヨコナデ。胴部内面ヨコハケ、外面タテ+ヨコのハケ。煤け。	
"	265	区層	"	34.0			濃茶色。石英、長石、雲母を含む。	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面タテハケ、内面ヨコナデ。外面煤け。	
"	266	区層	"	30.0			茶灰色。石英、長石、雲母、他を含む。	口縁部内外強いヨコナデ。胴部外面タテ、内面ヨコハケ。外面煤け。	
Fig. 28	267	区層	"	22.0			石英、長石、他の砂粒を多く含む。	口縁部内外強いヨコナデ。外面煤け	
"	268	区層	"	26.9			濃茶色。石英、長石、他の砂粒を含む。	口縁部内外ヨコナデ。外面煤け。	
"	269	区層	"	23.3			赤茶色。石英、長石の砂粒を含む。	口縁部内外ヨコナデ。胴部内面ヨコ、外面タテハケ。煤け。	
"	270	区層	"	22.0			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口唇、口縁部内外強いヨコナデ。胴部内面ヨコハケ。外面煤け。	
"	271	区層	"	22.0			"	口唇、口縁部内外強いヨコナデ。胴部内面ヨコハケ、外面タテハケ。外面煤け。	
"	272	区層	"	20.0			黄茶色。石英、長石、他の砂粒を多く含む。	口唇、口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。胴部外面右下がりのタテハケ。	
"	273	区層	"	20.7			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外強いヨコナデ、内面の下地にはヨコハケあり。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	274	区層	"	25.0			茶色。石英、長石、雲母、角閃石を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。	
"	275	区層	"	20.8			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部、口唇外面ヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ。胴部外面タテハケ、内面ナデ。	

Tab.12 古代土器観察表 - 10

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 28	276	区層	土師器甕	27.0			濃茶色。長石、石英を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	277	区層	"	26.0			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	278	区層	"	26.2			橙茶色。石英砂粒を多く含む。	口唇、口縁部外面強いヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。	
"	279	区層	"	23.7			茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。内面ヨコハケ。	
"	280	区	"	26.5			茶色。石英、長石、他を多く含む。	口縁部内面ヨコハケ、外面・口唇部ヨコナデ。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	281	区層	"	28.2			濃茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面タテハケ。口縁部、胴部内面の下地にハケあり。	
"	282	区層	"	30.6			灰茶色。石英、長石の砂粒を含む。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテハケ、内面胴部上位ヨコハケ、それより下はナデ。	
"	283	区層	"	30.0			濃茶色。石英、長石、雲母の砂粒を含む。	口縁部内外強いヨコナデ。外面煤け。	
Fig. 29	284	区層	土師器羽釜	17.8			灰茶色。石英、他の砂粒を多く含む。	口縁部、鐔強いヨコナデ。	
"	285	区	"	18.1			黄灰色。石英、長石、他の砂粒を多く含む。	口縁部内外面強いヨコナデ。	
"	286	区層	"	19.0			茶色。石英、長石の粗粒砂を多く含む。	口唇、鐔端面取り、内面ヨコナデ、胴部外面指頭圧痕あり。	
"	287	区層	"	18.4			"	"	
"	288	"	"	15.9			"	口唇部は強いヨコナデ、鐔の上下・端面強いヨコナデ。胴部外面ナデ。外面煤け。	
"	289	区	"	22.5			黄茶色。石英、長石の粗粒砂を含む。	口唇はまるく納め、鐔はヨコナデ、端面取り。	
"	290	区層	"	20.0			灰茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部、鐔上下強いヨコナデ。口唇は平坦な面をなす。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	291	区層	"	21.7			黄茶色。石英、長石の粗粒砂を含む。	口縁部、鐔上下強いヨコナデ。	
"	292	区層	"	26.0			灰茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	"	
"	293	区層	"	20.8			灰茶色。石英、雲母を多く含む。	口縁部、鐔上下強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。外面煤け。	
"	294	"	"	23.6			灰茶色。石英、チャート、長石、雲母を多く含む。	口縁部、鐔上下、端面ヨコナデ面取り。胴部外面タテハケ。	
"	295	区	"	19.5			茶色。石英、雲母を多く含む。	煤け。	搬入品
"	296	区層	"	26.0			"	口縁部内外、鐔上下強いヨコナデ。胴部内外ナデ、外面煤け。	
"	297	区層	"	27.0			茶色。石英、長石、他を含む。	口縁部内外、鐔いヨコナデ。内面は横方向の弱い削り+ナデ。	
"	298	"	"	24.0			焦茶色。長石、石英、雲母の砂粒を多く含む。	口縁部、鐔ヨコナデ。口唇、鐔端面取り。胴部外面タテハケ、内面ナデ。	
"	299	区層	"	20.7			橙色。長石、石英、他の砂粒を含む。	口縁部、鐔強いヨコナデ。胴部外面タテ、内面ヨコナデ。外面煤け。	
"	300	区層	"	24.1			茶色。石英、長石、雲母の砂粒を含む。	口縁部内外、鐔上下強いヨコナデ。外面タテハケ、外面煤け。	
"	301	"	"	25.8			淡茶色。石英、長石、雲母を多く含む。	口縁部内外、鐔上下強いヨコナデ。外面ナデ、内面ヨコハケ+ナデ。	
"	302	区層	"	26.6			茶色。石英、長石、雲母の砂粒を含む。	口縁部、鐔強いヨコナデ。外面煤け。	
Fig. 30	303	"	須恵器壺	6.3			灰色。粗粒砂を少量含む。	内外ヨコナデ。	
"	304	区層	"	7.3			灰色。長石、他の砂粒を含む。	"	

Tab.13 古代土器観察表 - 11

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 30	305	区層	須恵器壺				灰色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。外面に自然釉。	
"	306	"	"	10.0			灰色。長石、チャート、他の砂粒を多く含む。	内外ヨコナデ。口縁部内面自然釉。	
"	307	"	"	11.2			灰色。精選された胎土。	口唇と頸部外面に沈線。内外ヨコナデ。	
"	308	"	"				灰色、断面セピア。長石、他の砂粒。	頸部に3条の沈積。内外ヨコナデ。	
"	309	区層	"			7.0	青灰色。チャート、長石の粗粒砂を含む。	外面胴部上半ヨコナデ、下半左右の削り。内面ヨコナデ。	
"	310	区層	"	11.0			灰色。精選された胎土。	内外丁寧なヨコナデ。	
"	311	"	"	18.0			"	口唇凹状。内外ヨコナデ。内面自然釉。	
"	312	"	"	14.0			"	内外ヨコナデ。	
"	313	区層	"	9.1	7.4	6.6	"	内外ヨコナデ。外底ヘラ切り+ヨコナデ。	
"	314	区層	須恵器甕	19.0			"	内外ヨコナデ。	
"	315	区層	"	18.0			灰色。長石、他の細粒を含む。	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面平行叩き。	
"	316	区層	"	16.0			灰色。精選された胎土。	口唇、口縁部内外ヨコナデ。胴部外面平行叩き。	
"	317	区層	"	20.0			"	"	
"	318	区層	"	24.0			灰色。チャート、他の細・粗粒砂を含む。	内外ヨコナデ。	
"	319	区層	"	24.0			灰色。精選された胎土。	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面平行叩き、内面青海波紋をナデ消す。	
"	320	区層	"	18.0			"	"	
"	321	区層	"	19.0			"	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面平行叩き、内面は凹凸が見られる。	
Fig. 31	322	区層	"	19.0			灰白色。精選された胎土。	内外ヨコナデ。	
"	323	区層	"	20.8			灰褐色。精選された胎土。	"	
"	324	区層	"	24.0			"	"	
"	325	区層	"	23.0			灰色。チャート他の細・粗粒砂を含む。	口頸部内外ヨコナデ。	
"	326	区層	"	24.0			灰色。チャート、長石、他の細・粗粒砂を含む。	口頸部内外ヨコナデ。内面に自然釉。	
"	327	区層	"	20.0			灰色。石英、長石を含む。	口頸部内外ヨコナデ。胴部外面平行叩き、内面ヨコナデ。	
"	328	区層	"	21.0			灰色。精選された胎土。	口頸部内外面ヨコナデ。胴部外面平行叩き。	
"	329	"	"	19.0			"	口頸部内外面ヨコナデ。胴部外面細い平行叩き、内面青海波紋。	
"	330	"	"	28.7			"	口縁部下垂。口頸部内外ヨコナデ。	
"	331		須恵器壺			8.6	灰色。長石の細粒を多く含む。	内外面ヨコナデ。	
"	332	区層	"			14.0	灰色。精選された胎土。	しっかりした高台が外方に踏ん張る。胴部外面(左右)のヘラ削り+ナデ。高台内外強いヨコナデ。	
"	333	区層	"			12.0	"	貼付高台、豊付けは凹状。内外丁寧なヨコナデ。	

Tab.14 古代土器観察表 - 12

Fig. No.	図版番号	出土地点 層位	器種	法 量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考 (器高指数)
				口径	器高	底径			
Fig. 31	334	区層	須恵器壺			10.0	灰色。精選された胎土。	外面は弱い削り+ナデ、内面ヨコナデ。高台に窯壁の一部が付着。	
"	335	区層	"			12.4	"	胴部外面弱い削り+ナデ、内面ヨコナデ。高台内外面強いヨコナデ。	
"	336	区層	"			10.0	"	胴部外面中位に2本の凹線。内外面ヨコナデ。	
"	337	区層	"			12.0	"	高台は外方にしっかり踏ん張る。内外ヨコナデ。	
"	338	区層	"			15.0	"	内外ヨコナデ。	
"	339	"	製塩土器			8.9	灰色。チャートの細・粗粒砂を含む。	内面布目圧痕。外面ナデ。	
"	340	区層	"			11.0	灰黄色。チャート、長石の砂粒を含む。	堅致。外面指頭圧痕あり。	
"	341	区層	"			9.0	橙色。チャート、他の砂粒を含む。	内面布目圧痕。外面ナデ。	
"	342	"	"				橙色。長石、石英粒を含む。	堅致。内外面ナデ。	
"	343	区層	"				灰褐色。長石、他の砂粒を含む。	堅致。内面布目圧痕。外面ナデ。	
"	344	区層	"				"	"	
"	345	区層	"				橙色。長石、石英粒を含む。	"	

Tab.15 木製品観察表 - 1

Fig. 番号	図版 番号	種別	種別	出土 地点	層位	残存 状況	残存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	樹種	特 徴	備考
34	373	祭祀具	人形	・ No.33	層	上半 2/3 以上残	残18.8	3.2	0.4	板目	ヒノキ	下半の形状は不明。上端から3.5~5.5cmにかけて両側縁に切れ込みを入れ、頭部と肩部を表現、また、上端から10cmの両側縁には下方からの削りがけにより腕が表現される。	
34	374	祭祀具	人形	- E ・ No.20	層	全・ 脚部 一部 欠損	16.8	3.1	0.5	板目	ヒノキ	上端から2.0~3.8cmの部位の両側縁を挟ることによって、頭部と肩部を表現、下端に深さ3cmほどのV字の切れ込みを入れることによって脚部を表現する。側縁には下方からの削りがけによる腕の表現が残る。	
34	375	祭祀具	人形	- E ・ No.19	層	全	19.5	2.8	0.4	板目	ヒノキ	上端は弧状で頭部を表現する。上端から2~3.5cmの両側縁に下方からの削りがけあり。2回ずつの削りが観察できる。下端は深さ2.8cmのV字の切れ込みを入れ、脚部を表現する。	
34	376	祭祀具	人形	- E ・ No.20	層	全	20.0	2.8	0.3	板目	ヒノキ	上端は緩やかな三角形で頭部を表現する。上端から2.5~4cmほどの部位の両側縁に下方からの削りがけがあるが、痕跡を留めるのみ。2回ずつの削りが観察できる。下端は深さ3cmのV字の切れ込みを入れ、脚部を表現する。脚部の片側が破損する。	
34	377	祭祀具	斎串	- A	層	全・ 一部 欠損	25.7	2.0	0.2	柱目	ヒノキ	上端から6.2~6.3cmにかけて肩の表現あり。片方の側縁に削りがけがあるが、逆側は破損しており、削りがけの有無は不明。	
34	378	祭祀具	斎串	- E ・ No.50	層	全	25.7	1.8	0.3	柱目	ヒノキ	上端から4.6~4.8cmにかけて肩の表現あり。両側縁に削りがけあり。	
34	379	祭祀具	斎串		層	全	13.8	2.1	0.3	板目	ヒノキ	上端は三角形で、上端から2.1~3.1cmの部位に両側から挟りが入る。頭部表現とも考えられるが、下端が串状に整形されており、斎串に分類した。両側縁に下方からの削りがけが認められる。	C 型式
34	380	祭祀具	(形代- 刀形?)	・ No.35	層	2/3 以上残	残15.4	2.1	0.5	板目	ヒノキ	木製祭祀具で、柄の表現のない刀形と考えたのだが断定はできない。	刀形 B 型式
34	381	祭祀具	斎串	区西 層	層	上端1/3 程度	残7.4	1.9	1	?	ヒノキ科 ヒノキ属	上端は圭頭状。下半は失われているため形状不明。両側縁に上方からの削りがけがある。	
34	382	祭祀具	人形 (斎串?)	- A	層	上端	残5.0	2.1	0.2	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	上端を弧状に加工。上端から1.5~2cmの部位に両側から挟りが入る。下半の形状不明。人形だと考えられるが、斎串の可能性も残る。	
34	383	祭祀具	人形	・ No.18	層	上端	残8.7	3.9	0.7	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	上端は三角形(圭頭)で、上端下6.0~8.5cmを削り出して頭部を表現する。肩部以下の形状は不明。厚さ7mmと祭祀具の中では最も厚い。	
34	384	祭祀具	人形ある いは斎串	- E	層	上部1/3 程度	残8.5	2.0	0.3	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	上端は圭頭状で、切れ込みによって肩部が表現される。	
34	385	祭祀具	斎串か	- E	層	上半 ・ 1/2以上	残14.2	1.9	0.2	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	上端は緩やかな三角形。上端から5cm前後の部位に、上方からの削りがけが入り、肩部となる。下端形状は不明。	
34	386	祭祀具	斎串	・ No.33	層	下端	残10.0	2.1	0.3	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	下端のみが残る。厚さ3mm前後の細板状で、斎串の可能性あり。	
34	387	祭祀具	祭祀具? 細板材	- E	層	下端 のみ	残8.7	1.4	0.2	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	下端のみが残る。厚さ2mm前後の細板状で、斎串の可能性あり。	
34	388	祭祀具	祭祀具? 細板材		層	下端 のみ	残12.3	2.3	0.2	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	下端のみが残る。厚さ2mm前後の細板状で、斎串の可能性あり。	
35	389	細板材	祭祀具? 細板材	- B	層	下半	残12.5	2.0	0.25	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	下端のみが残る。厚さ2~3mmの細板状で、斎串の可能性あり。	
35	390	祭祀具 細板材	祭祀具? 細板材	- E	層	上部	残8.2	1.6	0.2	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	祭祀具の可能性はあるが、下半形状は不明であり、側縁に削りがけの痕跡もないなど、その性格ははっきりしない。	
35	391	細板材	細板材	- E ・ No.20	層	不明	残7.3	残2.3	0.3	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	厚さ3mmの薄く細い板状の素材。	

Tab.16 木製品観察表- 2

Fig. 番号	図版 番号	種別	種別	出土 地点	層位	残存 状況	残存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	樹種	特 徴	備考
35	392	細板材	薄い板状素材	- C	層	部分	残6.3	1.5	0.3	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	上端を丸く加工し、側縁に抉りの残る細板状の素材。祭祀具の可能性もあるが、破損により形状不明で断定できない。	
35	393	祭祀具 細板材	祭祀具? 細板材		層	上半	残17.1	3.5	0.5	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	薄い板状の素材で、上端は両角を削り弧状に仕上げる。下端の形状は不明。木製祭祀具の可能性もあるが断定はできない。	
35	394	ヘラ状 木製品	ヘラ状 木製品	- B	層	全	16.4	2.2	0.7	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	厚さ約7mmと比較的厚めの細長い板状の素材。先端を粗く整形して弧状に造り出す。ヘラ状木製品と分類したが用途は不明である。	
35	395	祭祀具?	荷札形 木筒? 木筒形?		不明	上半	残10.2	2.6	0.7	柱目	ヒノキ	幅約7mmと厚めの細い板状素材。荷札形木筒と形態は類似するが墨書は認められない。木筒形の可能性あり。また生産関連の道具の可能性も検討を要する。	
35	396	端部 炭化材	端部 炭化材	No.12	層	全	16.3	3.1	1.6	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	先端部のみ炭化している。西鴨地遺跡の端部炭化材の中では例外的な形状。	
35	397	部材	部材	- E	層	不明	残8.6	3.4	0.4	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	板状の素材で中央に穿孔が認められる。両端が焼けている。	
35	398	木製錘	もじり 編み用 木製錘	- A ・ W-5	層	タテ方向に 割れている。	14.0	3.9	残2.9	-	モチノキ科 モチノキ属	編布などを作製するための錘具。棒状品の片端部近くを切り込み、釘頭状につくり、もう一端を斜めに切り落とす。頭部径3.9cm、柄れ部径2.0cm、胴部径4.2cm、長さ14.0cm、1/2近くが破損により失われている。	考古学雑誌 66-4 ・ 1981年
35	399	板材	板材 (横櫛の 素材)	区 ・ 層 ・ A	層	全	10.1	7.3	1.1	柱目	イスノキ	厚さ10~11mmの長方形の板材。長さ10.1cm・幅7.3cmという大きさと樹種がイスノキであることから、横櫛の素材であった可能性がある。これが横櫛の素材板片であれば遺跡近辺で横櫛が生産されていたことを示し、重要である。遺跡の西には「串屋」地名が残っている。	
35	400	部材	部材の 一部用 途不明	- E カク ・ No.11	層境界	1/2 以上 残?	残7.0	9.0	2.3	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	幅7cmの板材で、片方の辺から最大幅5mm深さ45mmの切れ込みが入る。他の部材と組合わさって製品を構成する。製品の種類は不明。片側の端部は破損している。	
35	401	板材	板材	区	不明	7/8 程度	33.0	13.3	1.2	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	用途不明の薄い板材。一端に径2.5mmと3mmの小孔が並ぶ。綴紐で固定していたと考えられる。	
35	402	祭祀具 細板材	細板齋 串	- E ・ No.20	層	タテ方向に 破損か?	21.5	残?0.8	0.3	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	縦方向に分割されて、破損している可能性が高い。齋串あるいは細板材。	
35	403	服飾具	櫛扇 (1枚)	- C	層	下半のみ 上端不明	残23.6	1.4	0.2	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属 ヒノキ	ヒノキの薄板を下端部(要)と中央部の綴紐で綴じあわせ扇とする。上端破損、要の孔は1孔である。	
35	404	装身具	横櫛	- C	層	不明	残3.2	残1.6	0.8	-	イスノキ	イスノキの板状の素材を加工、一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に仕上げる。断片であり、全体形状不明。歯数10本/cm。	
35	405	装身具	横櫛	- E ・ No.45	層	不明	残2.4	3.9	0.8	-	ツゲ	ツゲの板状の素材を加工、一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に仕上げる。断片であり、全体形状不明。横櫛。歯数9本/cm。	
35	406	装身具	横櫛	- A ・ W-6	層	不明	残4.1	3.5	0.7	-	イスノキ	イスノキの板状の素材を加工、一側縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に仕上げる。長方形の横櫛だと推定されるが、全体形状不明。歯数9本/cm。	
35	407	装身具	横櫛	- E ・ No.27	-2 層	不明	残8.7	3.6	1.0	-	イスノキ	イスノキ素材。推定長9.2cm幅3.6cmの長方形の横櫛で、肩部に丸みを持つ。歯の挽き出し位置である切り通し線は上縁に沿って背部(直線部)では上縁と平行線、肩部では上縁と同様の曲線を描く。歯数11本/cm。	A 型式・ 8世紀以降 10世紀ごろ まで
36	408	容器	円形曲 物蓋板		層	1/8 程度	残15.6	残4.4	1.1	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属 桜あるいは樺	推定径34.6cm。内面は割り面、外面は削って仕上げる。周縁は削って丸く仕上げる。貫通孔を2ヶ所あけ綴紐が残る。一部炭化している。	
36	409	容器	円形曲 物蓋板	No.12	層	1/3 程度	残15.4	残5.7	0.8	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	円盤状の蓋板。推定径16.0cm。板状の素材を用い、周辺を整える程度の加工にとどまる。	

Tab.17 木製品観察表- 3

Fig.番号	図版番号	種別	種別	出土地点	層位	残存状況	残存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	樹種	特徴	備考
36	410	容器	円形曲物蓋板	・ No.21	層	1/7程度	残14.2	残4.0	0.6	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	円盤状の蓋板。推定径25.6cm。	
36	411	容器	円形曲物底板	・中央 バンク ・ No.35直下	層	1/2弱	残17.0	残5.9	0.7	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	推定径19.8cm。2孔1対の結合孔を通して留めた曲物の底板の部分。内面に側板の痕跡が残る。周縁に段を作らない。	樺皮結合曲物B
36	412	容器	円形曲物底板		層	2/3以上残	径13.2	残9.7	0.7	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	径13.2cm。周縁部が面をなす。内面は全体に黒変、外面は周縁部付近を中心に黒変する。内外にケビキ残る。	
36	413	容器	円形曲物蓋板	-E区 ・層 ・ No.46	層	1/2程度	残18.7	残8.2	0.8	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	円盤状の蓋板。推定径18.8cm。板状の素材を用い、周辺を整える程度の加工にとどまる。表面にケビキの痕跡が観察される。	
36	414	容器	円形曲物底板	・ No.15	層	全	13.2 ~14.5	13.2 ~14.5	0.5 ~0.55	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	内面は黒化しケビキが残る。外面は削って仕上げる。径13.2~14.5cm。周縁は面をなす。1ヶ所に木釘が残ることから、側板と固定されていた円形曲物の底板であることがわかる。2孔1対の結合孔が2ヶ所あり把手部分と縫い合わせる。	
36	414	容器	円形曲物把手	・ No.15	層	全	20.6	2.8	0.7 ~0.9	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	内面は割り面、外面は削って加工。外面先端部は削られている。2孔1対の結合孔が2ヶ所。断面は薄鋸型。	
36	414	容器	円形曲物綴紐	・15	層	一部破損				樹皮	桜あるいは樺	底板と把手を2ヶ所で縫い合わせる綴紐。	
37	415	容器?	用途不明木製品大型円形板	-E ・ No.47	2層	1/4程度	残38.2	残11.0	1.4	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属	円形板の破片。側板の装着痕なし。6箇所に穿孔が認められる。推定径39.5cm。円形曲物関連だとすれば、底板ではなく蓋板。用途不明の大型品の可能性もある。	
37	416	容器	円形曲物底板	-E ・ No.49	層	1/4程度	残21.1	残6.5	0.8	板目	ヒノキ科 ヒノキ属 桜・樺	2孔1対の結合孔あり。円形曲物の底板。	
37	417	容器	円形曲物蓋板	-E ・ No.51	層	1/7程度	残24.6	残5.3	1.1	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	円盤状の蓋板。推定径34.8cm。	
37	418	容器	円形曲物蓋板・底板	-E	不明	1/6程度	残23.4	残4.2	1.0	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	推定径24.0cmの円形曲物の蓋板あるいは底板。ケビキの痕跡多し。	
37	419	容器	曲物・箱形組物側板	-A	層	不明	残8.7	残4.1	0.6	板目	ヒノキ科 ヒノキ属 桜・樺	曲物あるいは箱形の組物の部材。ケビキなし。長辺に2孔、短辺に3孔の穿孔あり。一部炭化する。	
37	420	容器	円形曲物側板	-A	層	不明	残10.1	6.3 (高さ)	0.7	柱目	ヒノキ科 ヒノキ属 桜・樺	円形曲物の側板。	
37	421	容器	円形曲物側板	-A	層	全・端部欠損	20.0	3.0	0.3	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	長辺に沿って垂直方向のケビキが残り、ケビキに沿って破損する。	
37	422	容器	容器側板	・ W-6	層	不明	残35.7	3.4 (高さ)	0.5	板目	ヒノキ科 ヒノキ属	円形曲物の側板。片方の端部のみ、長辺に垂直方向のケビキが3~5mm間隔で平行に入る。深さ3.5cm程度の曲物。	
38	423	容器	容器側板	・ W-4, W-5	層	全	58.3	11.6	0.8	柱目? (板目から柱目へ??)	ヒノキ科 ヒノキ属 桜・樺	外面に斜め不定方向のケビキが観察できる。上縁下縁の長辺である2側縁と短辺の2側縁に、結合を目的とした穿孔(結合孔)がある。ほぼ全体が残っており、曲物の径は18.6cm前後と推定される。	
38	424	容器	割物舟形容器	・ W-1	層	2/3以上	55.0	残33.0	8.6 (高さ)	-	クスノキ	割物で舟形の容器だと考えられる。全長55cm、全幅は破損のため不明だが、うち30cmほどが残る。底の厚さ1.5~2.0cm、側壁の厚さ1.6~5.4cm。内外面とも摩耗顕著で加工の痕跡等は明瞭でない。外面の一部に樹皮が残る。	
38	425	杭	杭状木製品	・ 杭2	層	先端	残29.8	4.1	3.2	角材・柱目	ブナ科 シイ属	柱目の木取(あるいはミカン割り材)を角材として加工し角棒状の素材をつくりだした後、先端全周を削り杭先状に加工する。	
38	426	杭	杭状木製品	・	層	先端	残29.0	3.8 (径)		一本の木を利用	イヌガヤ	1本の木の先端を加工して杭とする。加工は全周に及ぶ。	
38	427	杭	杭状木製品	・	層	先端	残22.2	5.4~5.6 (径)		一本の木を利用	ブナ科 シイ属	1本の木の先端3方向のみを加工し、1/4については樹皮を残す。	

Tab.18 木製品観察表- 4

Fig. 番号	図版 番号	種別	種別	出土 地点	層位	残存 状況	残存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	樹種	特 徴	備考
38	428	杭	杭状 木製品	・	層	先端	残37.3	5.0 (径)		一本の 木を 利用	イヌガヤ	1本の木を利用する。加工は先端の2方向のみであり、残りの部分は樹皮を残す。	
38	429	杭	杭状 木製品	・	層	先端	残41.0	4.2 ~4.8 (径)		一本の 木を 利用	アワブキ科 アワブキ属	1本の木の先端3方向のみを加工し、1/4については樹皮を残す。	
38	430	杭	杭状 木製品	・	層	先端	残47.6	5.8 ~6.1 (径)		一本の 木を 利用	アワブキ科 アワブキ属	1本の木を利用した杭で樹皮が残る。先端の3方向を加工、杭先とし、残り1/2はそのまま残す。加工回数は25回以上にわたり、杭先としては比較的細かい。	
PL 29	写真のみ	綴紐 素材	樹皮 (綴紐 材料)							-	桜 あるいは 樺	綴紐の素材である桜あるいは樺の樹皮	



第 章 考 察

1 西鴨地遺跡出土の古代土器と遺跡の性格

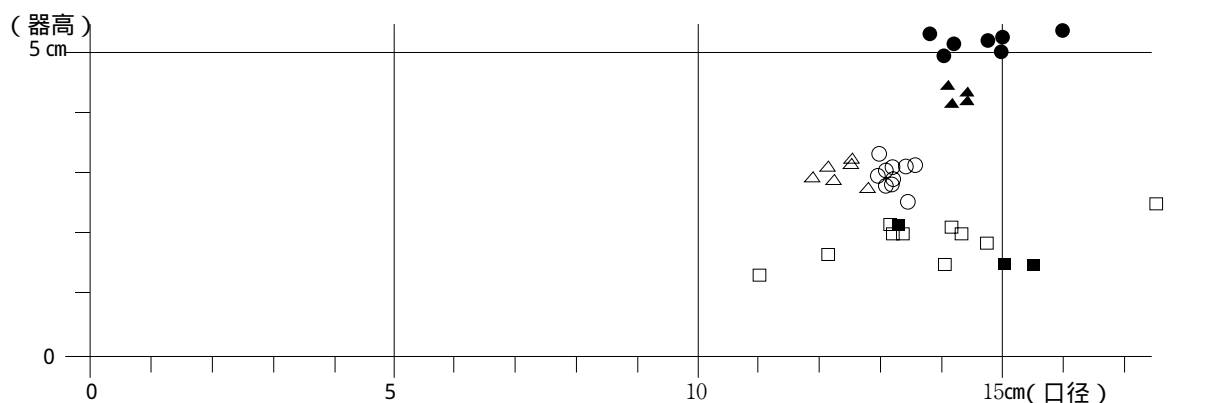
西鴨地遺跡からは縄文時代後期から中世にいたる遺物が出土しているが、これらは自然流路からの出土であり、層位的な堆積は示していない。しかしながら主体を占めるのは、8～10世紀代の土器である。ここでは、これらの中で最も出土量の多かった供膳形態を中心に、先に行なった分類に基づいて編年的な位置付けや諸特徴を抽出し、西鴨地遺跡における古代の諸画期とその性格について若干の考察を行なうものである。

南四国における当該期の土器の編年的研究は、資料的な制約はありながらも近年、松田直則氏⁽¹⁾、高橋啓明氏⁽²⁾、廣田佳久氏⁽³⁾、吉成承三氏⁽⁴⁾、坂本憲昭氏⁽⁵⁾等によって精力的に進められてきた。筆者も小籠遺跡の土坑出土資料や白猪田遺跡の資料から編年や土器生産について拙稿を提示してきた⁽⁶⁾。また、もっとも新しいところでは、池澤俊幸氏が下ノ坪遺跡の遺構出土の質・量ともに良好な資料を用いて詳細な編年を組まれている。池澤氏の研究成果は、南四国の古代土器編年を充実させ、都城の土器編年との併行関係を明らかにした点で画期的な成果であり、今後の土器研究の基軸となるものである⁽⁷⁾⁽⁸⁾。ここでは、これらの成果に依拠して他の遺跡出土の土器との比較検討も行ないながら、先後関係やセット関係の把握に努めたい。なお時期区分については、特にことわりのない場合は池澤案によって進め必要に応じて平安京編年を用いる。

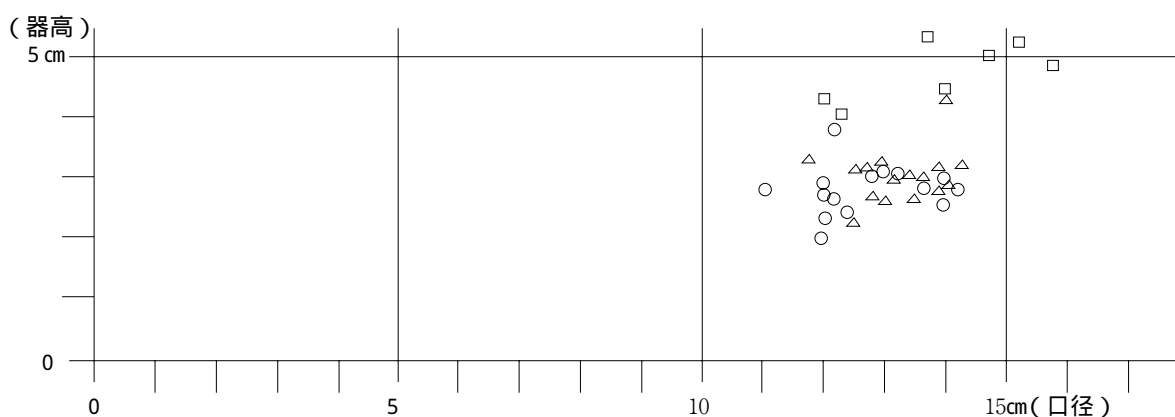
(1) 土師器

皿、坏、椀があるが、すでに見たようにすべて回転台成形、底部ヘラ切りを製作手法の基本としている。皿は、41と45を除いてヨコナデ調整を強く施している。口径の違いから 類と 類に大別した。小型の 類(25・26)は、土佐国衙第22次のSX11⁽⁹⁾や尾立遺跡⁽¹⁰⁾、奥谷南遺跡⁽¹¹⁾で多く出土しており、 期の指標となるタイプである。SX11や奥谷南例がすべてヘラ切りであるのに対して尾立遺跡のものには糸切りが見られる。25・26は、ヘラ切りであり内外面のヨコナデ調整も尾立遺跡のものより丁寧になされていることから 1期、すなわちSX11や奥谷南遺跡例とともに土師器小皿出現期のものとして位置付けることができる。 類は、口縁部形態によってAとBとに分けたが、各々の中にも時間幅が見られる。 A類の中でも41・45は明らかに古相を示しており 1-7期、ヨコナデを駆使した他のものは 期の範疇で捉えられる。また口縁部の強く外反する B類は、 1期に顕在化し 期を通して見られるタイプであるが、口径の縮小と横方向への立ち上がりの著しい27・28・37は 3期に比定するのが妥当であろう。

坏は供膳形態の中でもっとも多く出土している。法量と形態、手法から ~ 類に大別した。 類の小坏は、皿 類に対応するものであり 1・2期に属するものである。外底を丁寧にナデ処理するものとヘラ切り痕をそのまま残すものがあるが、先後関係を示すものであろうか。 類(52・59)は、律令的土器様式の範疇で捉えられるタイプであり 5・6期の所産である。 類



小籠遺跡 S K 130・136 出土の坏・皿の口径・器高分布 (○と△が西鴨地遺跡出土の坏 A・B 類に対応する)



西鴨地遺跡出土の土師器坏の口径・器高分布

○ 坏 A 類 △ 同 B 類 □ 同 A 類

Fig.39 土師器坏口径・器高分布図

の72は、 類と後述の 類との中間的なタイプである。 類はもっとも多く出土している。このタイプは、小籠遺跡のSK130・136¹²⁾や下ノ坪遺跡P14・15、SA 4¹³⁾から良好な一括資料が出土しており、 期を代表するタイプである。と同時に 類は、 類とともに円盤を使用した分割手法による画期的な製作技法によるもので、古代後半から中世の土師器坏の主流となるタイプである。今回は口縁部の形態からAとBに分けたが、両者の比率は相半ばしているのに対して、小籠遺跡では口縁部が外反する B類が8割を占めている。また本例では底部外面のナデ調整を基調とするのに対して、小籠遺跡例ではその痕跡が殆ど認められない。このような特徴から本例の中には、小籠遺跡に先行するタイプの存在が認められよう。法量については図示したように、小籠遺跡例に対して本例は全体的にかなりのバラツキが見られる。一方口径12cmのあたりで小さなまとまりが見られる。これらのことから 類は、 期を通して存在していることが理解できる。 類は、 類と同様の製作手法を有する器高指数が著しく大きいものをまとめた。全体を把握できる資料は少ないが、無高台のものをA類、高台付のものをB類とした。本例も - 1期に出現し、法量的には - 2期までは大型の器形を保ち - 3期には小型化していくことが知られている。今回の例は小籠遺跡や下ノ

坪遺跡例に比べると全体的に小型化の傾向は否めない。 - 3期の所産とするのが妥当であろう。

椀は、ベタ高台の 類と輪高台の 類に分けることができるが、両者共に中世前期を代表する器形であり 期を通して存在する。 類の資料は少ないが大振りのもの(104)と小振り(92)がある。この種の良好な一括資料は、奥谷南遺跡窯体内やひびのきサウジ遺跡SE1⁽⁴⁾に求めることができるが、SE1はすべて糸切りであることから、本例はSE1に先行する奥谷南遺跡窯体内出土資料に併行関係を求めることができる。 B類(111~114)は、ひびのきサウジ遺跡SE1、天崎遺跡などから出土している。これらは本例に比べて高台径が小振りであり、後者においては、底部糸切り痕跡を留めるものが散見される。従って本例は、SE1とほぼ同じか若干先行するタイプで土師器輪高台椀の出現期の所産として位置付けることができよう。 A類(119)もひびのきサウジ遺跡や天崎遺跡から出土例がみられる。

次ぎに供膳形態ではないが、多量に出土している甕と羽釜について見ておきたい。甕は形態、調整、胎土等から ~ 類に大別した。 類(253)は県下では初めての出土であり、 類(255)と共に近畿からの搬入品である。 類は、図示し得なかったものを含めて3点出土している。この種の甕は小籠遺跡のSK136で認められ、少量ながら系譜的には 期のひびのきサウジ遺跡SE1や土佐国衛第22次SX9⁽⁹⁾へと形態を変化させながら続く。本例はSK136出土のものに比べて上胴部の張りが弱く古相を示しており、平安京 - 古~中に比定されている平安京右京三条三坊SX07⁽¹⁵⁾出土の例に近似することから小籠遺跡例に先行するタイプとして位置付けることができる。 ・ 類は、茶褐色の独特の胎土と刷毛調整を特徴とするもので、特に 類は30点出土しており甕全体の80%を占めている。 類の初現例は - 2、3期とされる下ノ坪遺跡SB9、十万遺跡SK50⁽¹⁶⁾で認められ、以後 期を通して存続するタイプである。その間、口縁部を漸次上方に拡張させながら変遷を遂げていく(A類 B類)ことが知られている。 類は胎土が変わるだけでなく胴部外面ヨコ方向の刷毛が多用されるようになる。 期の所産である。

羽釜は36点出土している。 期に出現し盛行する煮沸形態である。罏の形態と位置で ・ 類に分類した。奥谷南遺跡の窯体内からは窯道具に転用された 類が甕 類と共にまとまって出土しており、より新相と考えられる十万遺跡SD2やひびのきサウジ遺跡SE1からは 類と 類が共存している。このことから 類は - 1期に、 類は - 2期に出現し盛行する煮沸形態とすることができよう。

(2) 須恵器

供膳形態では、皿、坏、蓋、椀がある。皿、坏、蓋は、基本的には 期以降、消滅する形態である。口縁部の形態によって ~ 類に分けた。高知平野において須恵器皿が定量出土しはじめるのは - 4期以降である。 類は、その - 4期の典型的なタイプであり、ちなみに同期の白猪田遺跡SD1⁽¹⁷⁾出土の皿はすべて 類である。 ・ 類については - 5~7期の時間幅の中で捉えておく。

坏は、先ず高台を持たないA類と高台付のB類があり、更に各々の形態的な差異によって分類した。A 類は - 3期である十万遺跡SK50や下ノ坪遺跡SX2出土のものとの共通点が認められる。

A 類は - 4 ~ 7 期の時間幅の中で捉えて置かざるを得ない。A 類は - 7 期に比定できよう。坏B類は、 - 3 期以前に遡る例はない。福井遺跡第 区の包含層¹⁸⁾からは、 - 4 期の坏B類がまとまって出土しているが、これらの90%以上が高台端部を凹状に納めるタイプである。この傾向は先に挙げた白猪田遺跡でも認められる。したがって高台端部凹状のものは - 4 期を中心に、他は - 4 ~ 7 期の幅の中で捉えて置きたい。ただ器高の高い170、171の類似相は、下ノ坪遺跡では - 5 期を中心に認められている。

蓋は、口径の大きな177が内外面共に丁寧なヨコナデ調整を施しているのに対して、他の4点は天井部外面の調整が粗雑である。

椀は、ベタ高台のもの(110)と輪高台のもの(178)がある。前者は土師器椀 類(104)と同様の手法、形態を有するものであり同時期の所産とすることができよう。後者も調整、焼成手法から見て同時期のものとする事ができる。

壺・甕は、供膳形態のような詳細な時期比定が難しい。短頸壺は概ね平安京 期中段階、小型壺は下ノ坪遺跡から類似相が出土しており - 7 期に求めることが出来る。最も出土量の多かった甕の大半は廣田編年の第 - 1・2 型式(3)に属するものである。ただ316と320は白猪田遺跡P30 出土例から見てより後出としなければならない。また、321に施された一見鋸歯状の叩き目は、下ノ坪遺跡SK22(- 4 期)出土の甕に見られる。

(3) 黒色土器

図示し得なかったものも含めて95点出土しているが、1点(200)を除いてすべて内黒のいわゆる黒色土器A類に属する。一つの遺跡からの出土量としては県下でもっとも多い数字である。厚手の 類と薄手の 類とに分け、さらに口縁部の形態や口縁部内面の沈線の有無や沈線の大きさによって細分した。また全体を把握できる個体が僅少であるため、底部は別途分類した。県下における黒色土器の最古例は、風指遺跡¹⁹⁾で出土した畿内からの搬入品を挙げることができる。平安京 期新段階に比定されるものである。在地生産の開始は、小籠遺跡SK130・136、すなわち - 2 期(平安京 期新段階)に求められてきた⁶⁾。これは森隆氏によるC段階、黒色土器生産の最大の画期とされる第2次拡散期に該当する²⁰⁾。

今次調査で出土した薄手の 類45点の中で17点が畿内からの搬入品であり、これらは底部形態 a・b 類と対応するもので概ね平安京 期古・中段階に比定できる。そしてこれらの模倣形態として、いわゆる畿内系 類²¹⁾の在地生産が開始されるものと考えなければならない。その事例として、今次調査出土例の大多数や小籠遺跡例、土佐国衛第22次、曾我遺跡²²⁾例などを挙げることが出来る。しかしながら今次調査で確認された多量の搬入品とその模倣形態の存在、言わば二重構造は在地生産の開始が - 2 期よりも遡る可能性を示唆するものである。今後一括資料の検出を待って検討されなければならない。また、今次資料の中で205は、他のものとは異なる深椀タイプであり、ひびのきサウジ遺跡SE1の段階に至って定着するタイプである。底部形態 類の中には深椀と考えられるものが含まれている。この他、底部形態 類としたベタ高台の椀(237・239)が含まれていることは、当該期の土器生産のあり方を投影した現象として興味深いものがある。先述した土師

器、須恵器の椀と同時期の所産として捉えることができよう。

(4) 緑釉・灰釉陶器

緑釉陶器は7点出土している。皿が1点、椀が6点である。皿(245)と椀(243・244・246・248)は京都洛西の産であり、概ね平安京 期中段階に時期比定することができる。輪高台の椀2点(242・243)は、篠窯の極一般的な製品で、平安京 期古段階に位置付けることができる。灰釉皿は1点(247)のみの出土であるが、猿投の折戸53号窯式段階²³⁾のもので緑釉椀241・242と同時期とすることができる。本県における緑釉は、洛北産のものから搬入が見られるが、量的に多くなるのは洛西窯の段階からである。曾我遺跡からは45点、宮崎遺跡²⁴⁾からは10数点の緑釉が出土しているが、そのほとんどが洛西窯の所産で平安京 期中段階である。篠窯産のものは、岩村遺跡²⁵⁾や尾立遺跡などから出土している。

(5) まとめ

以上の結果、西鴨地遺跡の流路出土の古代土器は、池澤編年の - 3期から - 1期、概ね平城京 期から平安京 期中、実年では8世紀中葉頃から10世紀末頃にかけての約250年間にわたるものであることが明らかとなった。その変遷を図化したものが表10である。この中で、土師器皿 類や同甕 C類、須恵器広口壺、同長頸壺、同甕は、 期を通して存続したことになっているが、型式分類の方法上、時間幅を持たざるを得なかった結果であって、実際の現象とは必ずしも合致し

都城	平城 ~		平安 中		新 ~		期中	期新	期古	期中	期新		
池澤	-2	-3	-4	-5	-6	-7	-1	-2	-3	-1	-2	-3	
土師器	皿 類												
	皿 類												
	坏 類												
	坏 類												
	坏 類												
	坏 類												
	坏 類												
	椀 類												
	椀 類												
	甕・類												
	甕 類												
	甕 A・B類												
	甕 C類												
	甕 類												
羽釜 類													
羽釜 類													
須恵器	皿・類												
	杯A 類												
	杯A 類												
	杯A 類												
	杯B・類												
	椀・類												
	短頸壺												
	小型壺												
	広口壺												
	長頸壺												
甕													
黑色土器椀 類													
黑色土器椀 類													
緑釉陶器													
灰釉陶器													

Fig.40 西鴨地遺跡出土の古代土器変遷図

ない。

これらの土器は、あくまでも流路堆積遺物であり、周辺部に存在したであろう生活遺跡の消長や性格を必ずしも反映したものではないが、この流路が河川活動をしていた下限は、同安窯系の青磁椀や瓦器椀から12世紀後半以降に求めなければならない。従って、 - 1期、10世紀末から11世紀初頭頃を境に遺物が激減することは遺跡の存続期間に歴史的な意味を持たせるのに有効である。しかも最も一般的遺物である供膳形態を見る限り、各器種、器形における時期別の組成変化は、集落遺跡等の遺構出土例と比べてなんらアンバランスを感じさせない。従って、これらの遺物は一定の分析に耐え得る普遍性を有しているものと判断することができる。以下そのような前提にたって検討し背後にある遺跡の性格に迫りたい。先ず遺物内容について注目すべき点は二つある。一つは土器組成、もう一つは畿内からの搬入品の多いことである。

土器組成では、煮沸形態、貯蔵形態が異常に多いことである。土器全体のなかで2割以上を土師器・須恵器の煮沸・貯蔵形態が占めている。これを県下の官衙関連遺跡と比較すると、下ノ坪遺跡6～7%、白猪田遺跡7%前後、曾我遺跡10%前後であり、如何に今次調査における煮沸・貯蔵形態の組成率が高いかが理解されよう。この現象は、官衙遺跡等における日常生活の状態を投影したのではなく、祭祀的な要素を強く感じさせる。流路の近隣で煮沸、「郷飲酒禮」を伴った祭祀行為、すなわち「春時祭田」のような祭祀がなされていたことを彷彿させるものである²⁶⁾。県西部の中筋川や後川流域の祭祀遺跡で5世紀後半から6世紀に成立を見た新しいタイプの祭祀形態の延長線上に位置付けられるものである²⁷⁾。

畿内からの搬入品は、黒色土器と緑釉陶器である。すでに触れたように黒色土器は95点を数え県下で最も多い出土量である。この中で搬入品が20%近くを占めているが、搬入時期である - 1期に限定すればこの割合はさらに増加する。洛西産の緑釉陶器も黒色土器とともにもたらされたものであろう。 - 1期は、畿内からの搬入品の第一のピークを成すものであるが、当該期の官衙関連遺跡での出土量は曾我遺跡と国衙関連遺跡を除くと極めて少ない。これは、当該期の黒色土器や緑釉陶器がかなりの比率で祭祀遺跡で用いられていたことを示すものである。

木製祭祀遺物については、別項に述べられているように、人形は陰陽道におけるは被物として、斎串は神の招き代として或いは浄域を画するしるしとして用いられた祭祀具であり、何れも律令体制の発展と深く係わった祭祀遺物として位置付けられている。これらの祭祀具は、7世紀に登場し9世紀に最も多く出土することが知られており、その時期も当遺跡の盛行期と一致している。以上のことから、流路出土の土器群の背後には、8世紀中葉から10世紀にかけて行われた祭祀のあることが明らかとなった。祭祀の内容について具体的に明らかにすることは難しいが、「春時祭田」に見られるような伝統的な祭祀と律令的な祭祀の共存の可能性も考えられよう。10世紀末頃を最後に遺物が一斉に消えるのは、県下の古代遺跡の消長と軌を一にするものである。

註)

- (1) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相 - 模倣系土器の展開を中心にして - 」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1989年
- (2) 高橋啓明「総括」『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡野市町教育委員会 1989年
- (3) 廣田佳久「南四国の須恵器 - 周辺地域における須恵器の変遷 - 」『王朝の考古学』雄山閣 1995年
- (4) 吉成承三「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相 - 高知平野を中心に - 」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1997年
- (5) 坂本憲昭「古代末から中世にかけての高知県の貯蔵具・調理具について」『四国中世土器研究』創刊号 四国中世土器研究会 1996年
- (6) 出原恵三「小籠遺跡出土の古代土器について」『小籠遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1996年
- (7) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相 - 下ノ坪遺跡の成果を中心として - 」『下ノ坪遺跡』高知県香美郡野市町教育委員会
- (8) 池澤俊幸「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 2000年
- (9) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書』第9集高知県教育委員会 1989年
- (10) 江戸秀樹『尾立遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1995年
- (11) 松村信博・山本純代『奥谷南遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2000年
- (12) 出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1996年
- (13) 小松大洋・出原恵三・池澤俊幸『下ノ坪遺跡』高知県香美郡野市町教育委員会 1998年
- (14) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡土佐山田町教育委員会 1990年
- (15) 平尾政幸・加納敬二・鈴木久男・岡田文雄『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- (16) 出原恵三・高橋啓明・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡香我美町教育委員会 1988年
- (17) 三谷民雄・出原恵三『白猪田遺跡』南国市教育委員会 1997年
- (18) 江戸秀樹・坂本憲昭・出原恵三『福井遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1999年
- (19) 出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡 アソノ遺跡』1989年高知県教育委員会
- (20) 森 隆「西日本の黒色土器生産(下)」『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会 1991年
- (21) 森 隆「西日本の黒色土器生産(上)」『考古学研究』第37巻第2号 考古学研究会 1991年
- (22) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡野市町教育委員会 1989年
- (23) 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産 - 猿投窯を中心に - 」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東3 施釉陶器 - 』古代の土器研究会 1994年
- (24) 廣田佳久『竹シマツ遺跡 宮崎遺跡』高知県幡多郡大方町教育委員会 1992年
- (25) 三谷民雄『岩村遺跡群』高知県南国市教育委員会 1998年
- (26) 義江彰夫「律令制下の村落祭祀と公出挙制」『歴史学研究』380号 1972年
- (27) 出原恵三「祭祀発展の諸段階-古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究』第36巻第4号 考古学研究会 1990年

2 西鴨地遺跡出土の端部炭化材について

(1) はじめに - 「端部炭化材」呼称について

西鴨地遺跡から出土した木製品の中で、明らかに加工され、その形状を製作する意図を持って造られた「製品」ではないが、木製品の加工の際に生じる端材や枝の一部を利用したとみられる「木片」が多数出土している。これらの木片に共通する特徴は、細長い形状を持ち、一端あるいは両端が炭化しているという点である。素材や形状は、棒状あるいは板状、さらには自然の小枝などを利用したものまで極めて多様である。

これらの木片は、端部が炭化しているということから採火あるいは点火に利用したであろうことが推察された。調査開始時点でこれらの遺物の存在に注目し、炭化していることが明らかな遺物については極力持ち帰る方針で調査を進めた。調査当初に、火に関する遺物であることは明らかなのだが、日常的な点火行為、例えば炊事や火種から他へ火を移動するために利用した木片で敢えて名称を付けるのなら「付け木」あるいは「火付け木」が妥当なのではないか、と独断により決めつけた為に「可能な限り」持ち帰り分析するはずだった遺物の多くを現地で廃棄、あるいは整理作業の際に廃棄してしまい、計測作業を始めた段階では200点ほどが手元に残っているにすぎない状態だった。端部が炭化する木片の正確なカウントはできないが、廃棄した遺物も含めると少なくとも400点以上にのぼる。

採火あるいは点火の行為が、日常的な炊事行為にあったのかあるいは祭祀的な意味合いを持つ採



西鴨地遺跡Ⅱ区Ⅵ層出土 端部炭化材

火・点火行為にあったのかについては、調査の段階では明らかにすることはできなかった。前者については、出土した土師器甕・羽釜などの煮炊具の存在と常識的な思い込み(例えば、たき火から木切れで採火し煙草に点火する、竈の奥に点火するなど)から、後者については木製祭祀具の存在から予想してみた。しかし、用途の特定はあくまでも推定である。実際には用途の断定のできない遺物の呼称を推定用途で表現することは適当ではない。ここでは、火付け木等の用途による呼称はせず、これらの遺物を形態上の特徴から「端部炭化材」と称することとする。

報告書作成の過程で、この端部炭化材が「火付け木」だとした当初の推定は誤りであり、少なくとも、いくつかの他の用途も検討すべきであるという結論に達した。ここでは、端部炭化材の本来の用途は何なのか、その可能性について遺物の計測と観察を通じて明らかにしたい。そして、精巧で優美な木製品に較べ、省みられ検討・報告されることすらほとんどない「あたりまえ」とみなされる遺物の重要性にも言及できればと考える。

(2) 端部炭化材の樹種

樹種同定した端部炭化材は1点のみであり、その結果、利用されている木材がヒノキであるということが明らかになっている。板材や角材などの端材が最も多く利用されていること、当遺跡の木製品、特に板材として利用されている木製品のほとんどがヒノキあるいはヒノキ属であることから板材(角材を含む)を利用した端部炭化材の大半はヒノキ(ヒノキ属)であったと考えられる。

しかし、ヒノキ以外の樹種も含まれている。少数ではあるが、木の枝をそのままつかった炭化材は周辺に自生する広葉樹(杭等の樹種鑑定によりシイ属・アワブキ属などの樹木が予想されるが、正確な樹種の同定は行っていない。)をそのままつかったものだし、数点だけだが、竹の利用も確認された。

(3) 形態及び炭化部位からみた端部炭化材の特徴

1) 計測方法

利用される木材片の大きさは様々である。しかし、目的のために最も効率的な大きさ・形状を選択するはずであり、法量はそれによって自ずと規定されてくると想定し、計測のみを行うこととした。対象とした資料は、400点を超える出土端部炭化材の中で、整理作業の過程を通じて残った210点についてである。

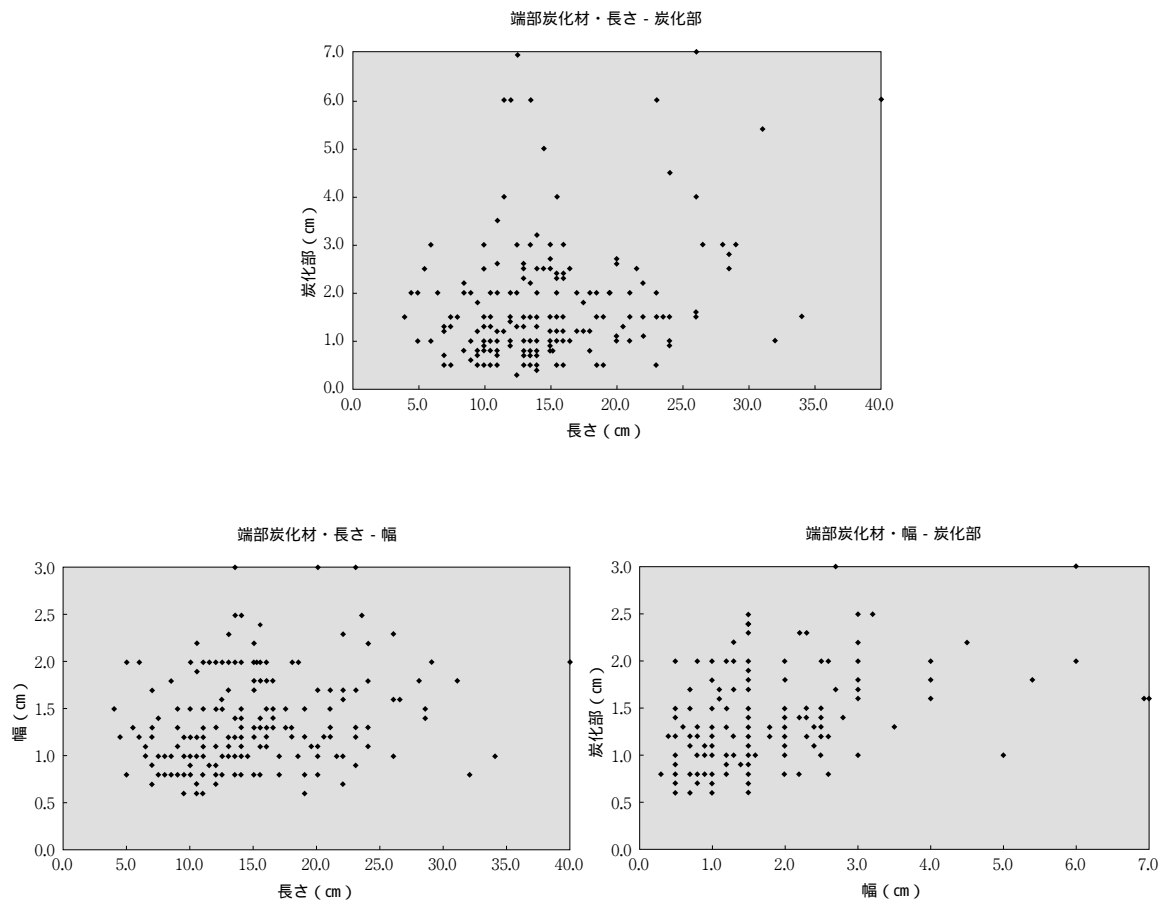
長さ・最大幅・端部の炭化部の長さの3点を選んで計測した。計測に際しては、有効数値を勘案して、長さについては0.5cm単位、幅・炭化部の長さについては0.1cm単位での計測とした。出土層位あるいは出土地点で差異が出る可能性も考え、計測表には調査区と層位のみを同時に記録する。端部炭化材ごとの形状や素材にも意味はあると思うが、今回は全体の観察所見を述べるにとどめ、計測表には記載しない。

2) 西鴨地遺跡出土端部炭化材の諸特徴-ヒストグラムから-

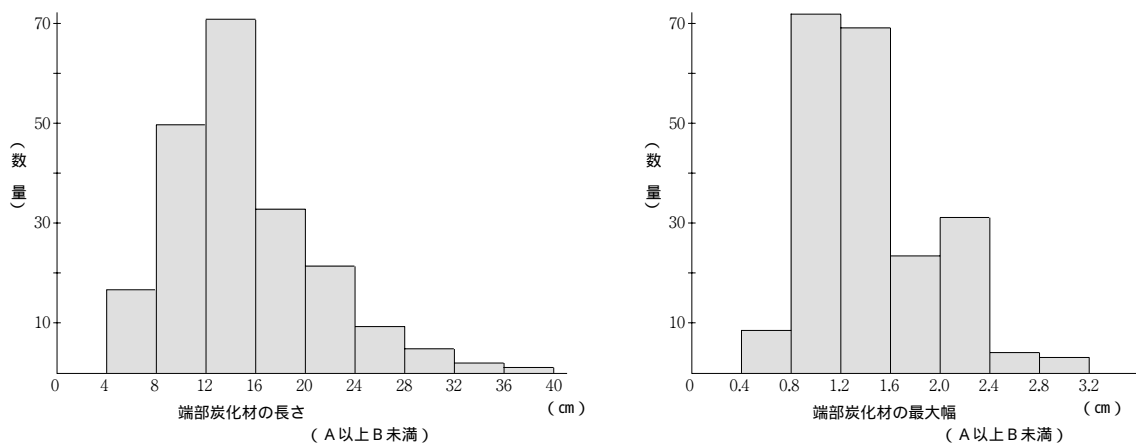
全体の84%、176点が8cm以上24cm未満の階級に入る。特に8cmから16cmの中に半数以上の遺物が含まれる。燃焼により失われた端部の長さについては復元不能なため、使用後に残る長

Tab.19 端部炭化材計測表

整理番号	地点	層	長さ	最大幅(厚)	炭化部(長)	炭化部(両)	両端使用	整理番号	地点	層	長さ	最大幅(厚)	炭化部(長)	炭化部(両)	両端使用	整理番号	地点	層	長さ	最大幅(厚)	炭化部(長)	炭化部(両)	両端使用
1			10.5	1.2	1.5			71	- E	- 2	16.0	1.5	2.3			141			13.5	1.4	2.2		
2			18.5	2.0	1.5			72		- 2	16.5	1.4	2.5			142			13.5	2.0	1.5		
3			5.5	1.3	2.5			73	- E	- 2	16.5	1.8	1.0			143			13.5	2.5	3.0		
4	- B		7.0	0.9	1.2			74	- E	- 2	17.5	1.3	1.8			144			14.0	1.0	1.3		
5			8.0	1.0	1.5			75	- E	- 2	18.0	1.2	0.8			145			14.0	1.2	0.4		
6	- B		9.0	0.8	1.0			76		- 2	18.0	1.3	1.2			146			14.0	1.3	1.0		
7	- C		9.0	1.1	2.0			77		- 2	19.0	1.2	0.5			147			14.0	2.0	1.5		
8			9.5	0.6	0.7	1.0		78	- E	- 2	26.0	2.3	1.5			148	- E		14.0	2.0	1.5		
9			9.5	0.8	0.8			79		- 2	28.5	1.4	2.8			149			14.0	2.5	3.2		
10	- B		9.5	0.8	0.8			80	- B	- 2	28.5	1.5	2.5			150			14.5	1.0	2.5		
11			9.5	1.0	0.5			81		- 2	31.0	1.8	5.4			151	- B		15.0	0.8	1.0		
12	- B		9.5	1.0	1.2			82	- E	- 2	40.0	2.0	6.0			152	- E		15.0	0.8	0.9		
13			10.0	0.9	0.5	0.8		83			4.0	1.5	1.5			153	- E		15.0	1.2	1.5		
14			10.0	1.0	1.3			84	- C		4.5	1.2	2.0			154			15.0	1.3	1.5		
15	- B		10.0	1.0	0.9			85	- E		5.0	0.8	1.0			155			15.0	1.3	0.8		
16	- E		10.0	1.5	1.5			86			5.0	2.0	2.0			156	- E		15.0	1.3	1.0		
17	- E		10.5	0.7	0.8			87	- C		6.0	1.2	1.0	2.0		157	- B		15.0	1.7	3.0		
18			10.5	1.0	2.0			88			6.0	2.0	3.0			158	- E		15.0	1.7	2.7	3.0	
19			11.0	1.0	1.2			89			6.5	1.0	2.0			159			15.0	1.8	3.0		
20			11.0	1.2	1.0			90			6.5	1.1	2.0			160	- E		15.0	2.0	1.2		
21	- C		11.0	1.2	0.5			91			7.0	0.7	0.5			161			15.2	2.0	0.8		
22			11.0	1.3	2.0			92			7.0	1.2	0.7			162			15.5	0.8	0.5		
23	- B		11.5	0.9	1.2			93	- E		7.0	1.3	1.2			163			15.5	0.8	0.5		
24	- B		12.0	0.9	1.4			94			7.0	1.7	1.3			164			15.5	0.8	2.0		
25	- E		12.0	1.1	0.9	1.4		95			7.5	0.8	1.5			165			15.5	1.3	1.2		
26	- B		12.0	1.5	1.0			96			7.5	1.0	1.3			166	- E		15.5	1.4	2.0		
27			12.5	1.0	3.0			97	- E		7.5	1.4	0.5	2.0		167			15.5	1.8	4.0		
28			12.5	2.0	1.3	1.5		98			8.5	0.8	2.2			168			16.0	1.2	1.5		
29			13.0	1.2	2.6			99	- E		8.5	1.0	0.8			169			16.0	1.2	2.3		
30			14.0	0.8	2.0			100			8.5	1.8	2.0			170	- A		16.0	1.3	2.4		
31			14.0	1.0	1.3			101			9.0	1.3	0.6			171			16.0	1.5	1.0		
32			14.0	1.4	1.5			102	- E		9.0	1.5	2.0			172			16.0	2.0	1.0		
33			14.0	1.5	2.5			103			9.5	1.0	0.8			173	- E		16.0	2.0	1.2		
34	- C		14.5	1.0	5.0			104	- B		9.5	1.2	1.8			174			16.5	1.3	1.0		
35			15.0	1.3	2.5			105	- E		10.0	0.8	1.0			175			17.0	0.8	2.0		
36			15.0	2.2	3.0			106			10.0	1.0	0.8			176	E 拡		17.0	0.8	1.2		
37			15.5	1.1	2.4			107	- B		10.0	1.2	2.5			177			17.0	1.0	2.0		
38	- E		15.5	2.0	1.0	4.0		108			10.0	1.5	1.0			178			17.0	1.0	2.0		
39			15.5	2.4	1.5			109			10.0	2.0	3.0			179			17.0	1.0	2.0		
40			16.0	1.1	1.5			110			10.5	0.6	0.5	1.0		180			17.5	1.5	1.2		
41			16.0	1.5	0.5			111	- B		10.5	1.2	1.0			181	E 拡		18.0	2.0	1.0		
42	- E		16.0	1.8	3.0			112			10.5	2.2	1.3			182			18.5	1.0	2.0		
43	- E		16.5	1.5	1.0			113	- E		11.0	0.8	0.8			183			19.0	0.6	1.5		
44	- C		18.5	1.0	0.5			114			11.0	1.0	0.5			184	- E		19.0	0.8	0.5		
45	- E		19.5	1.1	2.0			115	- E		11.0	1.1	2.0			185			19.0	1.5	0.5		
46	- B		20.0	1.1	1.0			116			11.0	1.3	3.5			186			20.0	0.8	2.6		
47	- B		20.0	3.0	2.7			117	- E		11.0	1.5	0.7			187	- E		20.0	1.0	1.0		
48			20.5	1.2	1.3			118			11.0	2.0	1.2			188			20.0	1.7	1.1		
49	- C		21.0	1.2	2.0			119			11.0	2.0	2.0			189	- B		21.0	1.3	1.0	1.5	
50	- C		21.0	1.7	1.5			120	- E		11.0	2.0	0.5			190			21.0	1.5	2.0		
51	- E		22.0	0.7	1.5			121			11.5	2.0	6.0			191			21.5	1.0	2.5		
52			22.0	2.3	2.2			122			12.0	0.7	1.0			192	E 拡		22.0	1.0	1.5		
53			24.0	1.8	1.5			123	- E		12.0	0.8	1.0			193	- B		22.0	1.6	1.1		
54	- C		32.0	0.8	1.0			124			12.0	1.3	2.0			194	- E		22.0	1.7	1.5		
55			34.0	1.0	1.5			125	- E		12.0	2.0	1.5			195			23.0	0.9	1.5		
56	- E	- 2	10.0	1.2	1.5	2.5		126	E 拡		12.0	2.0	6.0			196			23.0	1.2	0.5		
57	- E	- 2	10.5	1.9	1.5	1.8		127			12.5	1.5	2.0			197	- E		23.0	1.2	0.5		
58		- 2	11.0	0.6	1.0			128			12.5	1.6	12.5			198			23.0	1.3	2.0		
59		- 2	11.0	1.5	1.2			129			13.0	1.0	1.0			199			23.0	1.7	1.5		
60	- E	- 2	11.0	2.0	2.6			130			13.0	1.0	1.3			200			23.0	3.0	6.0		
61	- B	- 2	11.5	2.0	4.0			131	- B		13.0	1.0	1.0			201			23.5	2.5	1.5	2.2	
62		- 2	12.5	0.8	0.3	2.5		132	- B		13.0	1.1	1.5			202			24.0	1.1	0.9		
63	- E	- 2	13.0	1.2	0.5			133			13.0	1.2	1.0			203			24.0	1.3	1.0		
64		- 2	13.0	1.7	1.5			134			13.0	1.2	0.8			204	- E		24.0	2.2	4.5		
65	- B	- 2	13.5	1.2	0.8			135	- E		13.0	1.7	0.7			205			26.0	1.0	1.6	1.8	
66	- E	- 2	13.5	1.2	1.0			136	E 拡		13.0	2.0	2.5			206			26.0	1.6	7.0		
67		- 2	13.5	3.0	6.0			137			13.0	2.3	2.3			207			26.0	1.6	4.0		
68	- E	- 2	14.0	1.1	0.7			138			13.5	0.8	0.7			208			26.5	1.6	3.0		
69	- E	- 2	15.5	1.4	2.3			139	- E		13.5	1.0	0.5			209	- B		28.0	1.8	3.0		
70	- E	- 2	16.0	1.1	1.5			140			13.5	1.2	1.0			210			29.0	2.0	3.0		



(端部炭化材・長さ - 幅 - 炭化部の相関関係)



(ヒストグラム)

Fig.41 端部炭化材の形状

さが10～15cm前後のものが多いといえる程度である。最大幅としては0.5～1.5cm（特に1.0cm前後が突出）、炭化部位では0.8～2.2cm（さらに1.0～1.4cmに集中）という数値が得られた。

Fig.41をみてもわかるように、端部炭化材の長さとは幅・炭化部の長さとの間に相関関係はない。しかし、幅と炭化部との間には、幅が広くなれば炭化部が長くなるという比例傾向が読み取れる。

（４）端部炭化材の用途

端部炭化材は何に使われた結果、こういう特徴を持つに至ったのだろうか。調査時に考えていたように西鴨地遺跡の端部炭化材が、炉や竈を利用した日常的な炊事などに伴う採火・点火の道具であるとするならば、端部のみが炭化し、他の部位に炭化が及んでいないことに対する合理的な説明ができなくなる。1960～70年代以降、薪炭から石油、ガス、電気へと我々を取り巻く燃料環境は驚異的な変貌を遂げた。ガス、電気が当然の現在においても、高知平野のあちこちに薪炭を利用した生活の営みが残っている。それには、薪へのこだわりであったり、五衛門風呂に代表される風呂釜への愛着であったり、様々な理由があるが、これらの人々への直接・間接の取材から端部炭化材が生活の中で生み出されることはあり得ないという結論を得た。昭和30年代生まれである私自身の幼少時の薪炭に依拠した生活を振り返っても、西鴨地遺跡で出土したような長さ10～15cm程度の端部炭化材が生じることはまずない。点火に木片を使用したとしても、おそらく点火に使った木片をそのまま焚きくべてしまっただろう。つまり、木片は全面が炭化するか灰となって消失してしまうかのいずれかであり、仮に遺跡から出土する場合は全面炭化した炭化材となっているはずである。西鴨地遺跡からは全体が炭化した木はほとんど出土していない。

現代の生活と直接比較するのも乱暴な話だが、調査時点での端部炭化材イコール「火付け木」といった捉え方は過った認識であった。ただし、火付け木ではないにしても、燃料材としての用途を全て否定することはできない。特に焚火を利用した炊事・祭祀などの行為に際しては、焚火の燃え残りとして、端部の炭化した燃料材が残ることが想定され、端部炭化材として一括した資料の中には、一定量の燃料材が含まれているものと考えられる。同時に、燃料材という説明だけでも端部炭化材について理解できない。法量分析の結果導かれた形態的な特徴は、実に粗雑な加工ながらも一定の規格性を持つ遺物である事は明らかで、端部炭化材が一定の意図のもとに作られた可能性を示している。

西鴨地遺跡は木製祭祀具がまとまって検出された遺跡であり、端部炭化材を水辺の祭祀と結びつけて考えることも可能である。だとすれば一定量の端部炭化材が生じる祭祀とはいかなる形態の祭祀なのか。焚火による祭祀の可能性も考えられるが、焚火だけでは幅1～1.5cm前後の長さ10～20cm前後の細長い木片という規格性は生まれにくい。いかなる行為により、粗雑な加工ながらも一定の規格性を持つ端部炭化材が生じるのだろうか。

木製品の出土例や各地の報告書を検討してみたが、同様の遺物の報告例はほとんどない。各地で一定量出土する遺物だという認識があり、出土するという話を聞いたことがあっただけに報告例の少なさには驚いた。燃料材だという報告例以外に、確認できた範囲では端部炭化材の用途に言及す

る報告はなかった。

ところが、意外なところ、というよりも当然早くから検討すべきだった学問分野の中に、この端部炭化材に対するヒントを見出すことができた。民俗学である。

しかも、現在の民俗例の中に遺跡出土の端部炭化材に類似する資料を確認することができる。

以下の民俗例及び写真は、全て高知県歴史民俗資料館の梅野光興氏の御教示・提供によるものであり、紹介する写真は1993～94年に氏が高知県内各地に取材したものである。

(5) 火と水辺の祭祀 - 生者と死者を繋ぐ - 民俗例から見た端部炭化材

現在の民俗例で、西鴨地遺跡出土の端部炭化材と似た形状の端部が炭化した木片が生じる例がある。盆の習俗である迎え火・送り火と葬送に使われる松明である。

1) 盆

高知県下の盆に由来する水と火の習俗として、ホウカイ、フルセンジ、火とぼし、水まつりが挙げられる。写真1～8に示した

A. 盆-中土佐町久礼

1994.8.21(写真5・6・8)

B. 新盆-安芸市上尾川

1993.8.31(写真1・2)

C. 街角のホウカイ-室戸市佐喜浜浦

1993.8.13(写真4)

D. 水まつり-西土佐村権谷

1993.8.7(写真3)

これらの盆に関する習俗については、梅野光興「 .死のフォークロア」(『死と再生の文化』高知県歴史民俗資料館)に詳細にまとめられ、紹介されている。

2) 葬送・松明

葬送の中にも端部炭化材を生じる可能性のある行為が認められる。葬送の先頭に立つ松明がそれであり、古事記の中にも記載が見られ、7世紀にまで遡ることができる。

窪川町七里の葬送に伴う松明の例が、高知県歴史民俗資料館によって紹介されている。松明の法量は、長さ40cm前後の木片であり、遺跡出土の木片と比べると2倍ほどの大きさとなっている。(写真7)十和村小野の葬送の例でも42～43cm程度で、同様の大きさである。一度の葬送に際して、大量に必要とはされず、水辺とも直接結びつかないなど、盆の祖霊迎えに伴うものと比べると、西鴨地遺跡出土遺物と関連する可能性は低い。

葬送に限らず、かがり火として焚かれたであろう松明も、端部炭化材を生み出す可能性のある行為の一つである。



写真1



写真5



写真2



写真6



写真3



写真7



写真4



写真8

(6) まとめ

端部炭化材の定義を、とりあえず「一方の端部あるいは両方の端部が炭化した細長い形状の木片」としておく。目的別には、1)炊事等日常生活に関する行為 2)祭祀行為の2つが、遺物の用い方の面からは、A)焚火等の地面に木片を集めて行う燃焼行為 B)松明等の木片を束ねて点火する燃焼行為 C)A・B以外の行為(現段階で想定できない)などいくつかの可能性が考えられ、今後検討する必要がある。遺物の用い方は、ある程度遺物自体の大きさ・形状にも反映する。上記のA・Bを、端部炭化材A類・端部炭化材B類とするならば、西鴨地遺跡出土の端部炭化材はB類が主体でA類も含まれている、と表現できる。

仮に、西鴨地遺跡出土「端部炭化材B類」が、現在につながる民俗例である盆のホウカイや火とぼし、フルセンジ、水まつりなど「祖霊迎え」の祖形となる習俗によって残された遺物だとすると、この「盆」の時期に行われる祖霊迎え習俗が詳細な時期は特定できないものの8~10世紀ごろまでは遡ることが、出土遺物によって確認されたことになる。端部炭化材が形成されるこのような祖霊迎え自体は高知県特有のものではなく、全国各地にも豊富な類例を認めることができる。

しかし、当遺跡の例だけで直接「盆」と「端部炭化材」を結びつけてしまうことは極めて危険である。それを論証するためには、さらにいくつかの空白のピースを埋めなければならない。西鴨地遺跡では、水辺からこれらの遺物がまとまって出土しているが、火と水が密接に関係する「祖霊迎え」なのか、その他の理由による松明なのか、あるいは偶然にもある程度大きさの揃った燃料材なのか、それを検証することは難しい。

こういった問題点を内包するものの、端部炭化材と盆(祖霊迎え)を結びつける考え方は実に魅力的である。

「端部炭化材」という、どこからでも出土する遺物を報告してみようという動機で、いろいろな角度からの検討を加えてきたが、可能性の追及を行ったのみで、結局、それが何であるのかという結論を得ることはできなかった。今後、端部炭化材の出土遺跡の 地理的な拡がり、 時期の拡がり、 時間・空間の違いによる形態的な共通点と相違点、 使用される樹種の相違、 用途の可能性の追及など、遺跡から報告されるデータが蓄積されることによって、端部炭化材のもつ意味が初めて明らかになるのではないだろうか。

考古学の側面からのアプローチである以上、出土状況、出土地点、遺物の形態上の観察が出発点であることはいうまでもない。

参考文献・註)

- 1) 部分的に炭化部をもつ木が「燃料材」であるとの指摘は、各地の遺跡でもなされているようである。西鴨地遺跡出土炭化材の中にも燃料材が含まれている。

2) なお、高知県下においては、遺跡から出土している例について、調査担当者各位から直接、御教示を得ることができた。数量的に正確なデータではないため、曖昧な部分が残るが、確認できた範囲で量的な差はあっても、木製品が残る状況の低湿地遺跡では普遍的に存在する遺物である可能性があるということである。例えば、高知市柳田遺跡(古墳時代-4~5世紀)、高知市介良遺跡(5世紀中葉~後半・6~7世紀の2時期)、吾川郡伊野町八田神母谷遺跡(古墳時代前半)など。量的には、10~20程度という遺跡もあれば、数十程度だったという遺跡もある。

存在すれども意識されない遺物であり、精巧な木製品と比べ、あまりにも粗雑な遺物であることは確かである。

県内の木製品出土遺物と主な時期

香美郡香我美町下分遠崎遺跡・・・・・・・・・・弥生前期
香美郡野市町曾我遺跡・・・・・・・・・・古代
南国市奥谷南遺跡・・・・・・・・・・縄文時代中期末~後期初頭
高知市柳田遺跡・・・・・・・・・・古墳時代(4~5世紀)
吾川郡伊野町八田神母谷遺跡・・・・・・・・・・古墳時代(4世紀)
吾川郡春野町芳原城跡・・・・・・・・・・中世(5世紀~16世紀)
土佐市天崎遺跡・・・・・・・・・・古墳時代(4世紀)・中世
土佐市居徳遺跡群・・・・・・・・・・縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代・古代
土佐市西鴨地遺跡・・・・・・・・・・古代
須崎市飛田坂本遺跡・・・・・・・・・・近世
中村市船戸遺跡・・・・・・・・・・中世
中村市具同中山遺跡群・・・・・・・・・・中世

1. 五来重著『葬と供養』東方出版 1992年
2. 高木啓夫『土佐の祭り』高知新聞社 1992年
3. 坂本正夫『中土佐町資料』中土佐町教育委員会 1985年
4. 芳賀登『葬儀の歴史』雄山閣 1991年
5. 斎藤忠『日本史小百科 4 墳墓』近藤出版 1978年
6. 梅野光興・岡本桂典『死と再生の文化 展示解説資料』高知県歴史民俗資料館 1995年
7. 『安芸市史 民俗篇』安芸市史編纂委員会 1979年

3 西鴨地遺跡出土の木製品 - イスノキ製の横櫛素材

(1) はじめに

西鴨地遺跡の今回の調査では多くの植物遺体及び木製品が出土した。近年まで、周辺の環境が湿地だったこともあり、植物質の遺物の遺存状況も良く、木製遺物から多くの情報を得ることができた。遺物は県内では出土例のほとんどなかった斎串・人形などの木製祭祀具やもじり編み用の木錘、円形曲物容器、横櫛・檜扇などの服飾具にいたるまで実に多彩である。木製品の大半が流路内からの出土で、8世紀から10世紀中葉にかけての時期幅で捉えられる遺物である。高知平野の古代の木製品の様相を示すものとして重要な資料である。

これらの木製遺物の中で58点の遺物については保存処理を施し、種子・自然木も含む約100点の遺物については樹種鑑定を実施した。板材はほとんどヒノキであること、杭等の土木材には周辺に自生するシイ、イヌガヤ、アワブキ、アカガシなどの樹木が用いられていることなど、樹種鑑定により明らかになった事実は数多い。

調査終了後、整理作業の過程を通じて、全く注意を留めなかった遺物に一片の板材がある。厚さ1.1cm、平面は長辺10.1cm、短辺7.3cmの大きさの板材は、人間の手によってつくられた板材であることは確かであるという程度の用途不明の板材として特に注意されることもなく、その他大勢として扱われ、木器保管庫へ整理されようとしていた。

木製品の観察表作成をしていた私は、この変哲もない板材の樹種鑑定の結果を写す手を止めてしまった。この板材に対して「イスノキ」という鑑定結果が記載されているではないか。他の板材はほぼ全てヒノキである。西鴨地遺跡でイスノキが利用される木製品は、これ以外では横櫛のみである。他の遺跡でも横櫛の材料はツゲとイスノキに限られるようだが・・・と、大きさを改めて観察するうちにイスノキの横櫛の全体形状を復元したものがこの板材の大きさと重なることに気付いた。この板材は横櫛の素材ではないか。

ここでは、このイスノキの板材が横櫛の素材であることを明らかにし、木製品をはじめとする遺物あるいは地名を手掛かりに西鴨地遺跡の性格についても可能な範囲で考えてみたい。

(2) 西鴨地遺跡木製品について

前項(「西鴨地遺跡出土の端部炭化材について」)で述べたように、当遺跡からは端部炭化材がまとまって確認されたが、他遺跡で報告されるものと同様の木製品も一定量出土している。大別すると祭祀具・服飾具・容器そして杭を主体とする土木材に分けられる。それ以外に、用途不明の部材・板材、1点だけが生産具に分類可能なもじり編み用の木製錘の出土も見られる。

木製品の出土する層は、層及び層として設定した層である。両層とも含まれる木製品の内容に決定的な違いは認められない。土器などの木製品以外の遺物から導き出される時期も、この2つの層の遺物の内容により、明らかな時期差の設定ができないことを示しており、層と層は埋積する時間差はあるものの、時期差が生じるほど離れた時期の流路ではないことがわかる。しかし、包含する最も新しい遺物が10世紀中葉であることから、木製品の時期も8世紀～10世紀中葉の時期

幅の中では捉えることができる。

高知県の古代の木製品の様相は、従来、唯一の古代の木製品出土遺跡である野市町曾我遺跡の例によって語られてきた。⁽¹⁾ 曾我遺跡は緑釉陶器の出土量は県内最多であり、官衙関連の「郷家」の可能性が指摘され、8世紀後半から11世紀にかけての6期にわたる遺構が検出されている。植物遺体の遺存条件を満たしていたため、礎盤、柱根、付札状木製品などの木製品も出土している。柱穴内から出土した桃種からは、桃仁の生産が推定されている。付札状木製品以外は建築部材が多く、生活の実態に迫るにはやや資料不足の感を否めなかった。

これと比較すると西鴨地遺跡の出土木製品は生活に即したものが多い。

1) 祭祀具

県内では、はじめてまとまった出土を示した木製祭祀具は、細板状に整形された祭祀具である可能性を持つ細板材も含めれば30点にのぼる。(うち24点を図示 - Fig.34・35) 斎串・人形・形代に大きく分類できるものの、全体形状が推定可能な個体は6点のみであり、大半は大きく破損している。極めて簡素な整形による祭祀具が多い。頭部・体部などに墨書による表現がのこっている可能性を考え、保存処理を施した全ての祭祀具に対して赤外線写真撮影を試みたのだが、墨書の痕跡を検出することはできなかった。

人形と斎串の弁別は、下端形状の違いによる。下端が二股に分かれた形状の祭祀具は、脚部表現と考えると人形に、串状の下端を呈するものは斎串として分類した。両側縁に削りがけが入る例が大半だが痕跡をとどめるのみで、注意しなければ見落としてしまうほどわずかな痕跡もある。人形の場合の上腕表現は下方からの削りかけによる。

斎串の型式から見れば、形状は「上端を圭頭状に下端を串状に加工する」C型式で、側縁の切込み(削りかけ)は1箇所(2回)行う式として設定されたC - 型式に相当する。細かい形状の差異は認められるものの、分類可能な個体はすべてC - 型式に属している。このC - 型式には8・9世紀という年代感が与えられている。⁽²⁾

また形代の可能性のある遺物は2点である。380の刀形と395の木筒形を想定したのだが、異なる用途の遺物である可能性もある。

2) 服飾具(装身具を含む)

服飾具に分類できるものは檜扇(Fig.35-403)と横櫛(Fig.35-404~407)である。

檜扇は1枚だけの出土でヒノキ製、扇の要は1孔、先端形状は破損のためわからない。

横櫛は4点出土しているが、破損が著しい小片が多く、全体形状の推定復元が可能なものは1点(407)だけである。

3) 容器

曲物容器と刳物容器が出土している。刳物容器は424(Fig.38)の舟形の刳物容器であり、408~423(Fig.36~38)が曲げ物容器である。

円形曲物であると考えられる資料は、底板・蓋板・側板が確認され、接合部の綴紐が残った資料(408・414・416・419・420・423)も確認できた。特に、側板の綴じ方が明瞭に分かる資料も含まれている。

なお、把手付円形曲物として報告した資料は、側縁が面をなし、留め釘（木釘）の残存が確認できる。

4) 生産具及びその他の板材・部材

もじり編み用の木製錘が出土している。⁽³⁾ いわゆるツチノコ型であり、破損して縦方向に割れているものの、全体形状の推定は可能である。（長さ14.0cm、頭部径3.9cm、括れ部径2.0cm、胴部径4.2cm）

板材・部材については用途不明木製品が大半である。その中で、399（Fig.35・44）は他の板材がヒノキであるのに対し材質がイスノキである点が注目される。当遺跡では、大半の木製品がヒノキあるいはヒノキ科ヒノキ属であるのに対し、イスノキは、この板材以外には横櫓に使用されているのみである。399の板材の厚さは11mmで、101mm×73mmの長方形の平面形を持つ。

5) 土木材

検出し得た杭状の木製品4点についてのみ樹種鑑定を行ったが、すべて周辺で産する広葉樹を素材としている。自然流路の堆積土（・層）以下の層で検出される杭は、流路の岸辺に沿って並んでおり、杭の周辺から検出される礫と併せて考えると、護岸のための杭列だった可能性が高い。

(3) イスノキの横櫓

1) 横櫓

このような木製品を出土する西鴨地遺跡の中で、先述の通り出土した横櫓は4点（404～407）である。ツゲの横櫓は405の1点、イスノキの横櫓は404・406・407の3点で、横櫓の素材としてツゲとイスノキが利用されている。

横櫓の製作工程は「板状の素材を加工、一側縁から細かい歯を挽き出し、表面を平滑に仕上げる。」と表現されている。西鴨地遺跡の場合は、挽き出された櫓歯数は1cmあたり9本から11本（9本/cm - 405・406、10本/cm - 404、11本/cm - 407）で、横櫓の歯数を単純に3cmあたりに換算した27本～33本/3cmという密度は、7世紀代の21～24本/3cmと比較するとより緻密であり、8世紀以降の平均的な歯数である。⁽⁴⁾

407（Fig.35・44）は推定長9.2cm、幅3.6cmの長方形の横櫓で、歯先は直線的で肩部に丸味を持つ。歯の挽き出し位置である切り通し線は上縁に沿っており、背部（直線部）では上縁と平行線、肩部では上縁と同様の曲線を描く。古代の横櫓は長方形のA型式と半円形のB型式、A型式の中でも肩部の角張るA型式と肩部が丸みを帯びるA型式に分類できる。形態的特徴から407はA型式に相当する。A型式が7世紀代から存在するのに対し、A型式は8世紀になって登場し10世紀まで存続する型式である。

2) イスノキという樹種とイスノキ製木製品出土遺跡について

イスノキは日本では関東以南に分布する常緑広葉樹で、南九州など温暖な気候の地域に自生する樹木である。非常に堅致で、ツゲと並んで櫓の材料として知られている。

遺跡出土の横櫓にイスノキが使われる例が多いとしても、イスノキ製の板材が他の用途に使わ

1	建築材	2	3.4%
2	土木材	3	5.1%
3	工具	1	1.7%
4	農具	5	8.5%
5	服飾具	34	57.6%
6	容器	2	3.4%
7	食事具	1	1.7%
8	遊戯具	1	1.7%
9	雑具	1	1.7%
10	部材	2	3.4%
11	加工材	2	3.4%
12	用途不明品	5	8.5%
合	計	59	100%

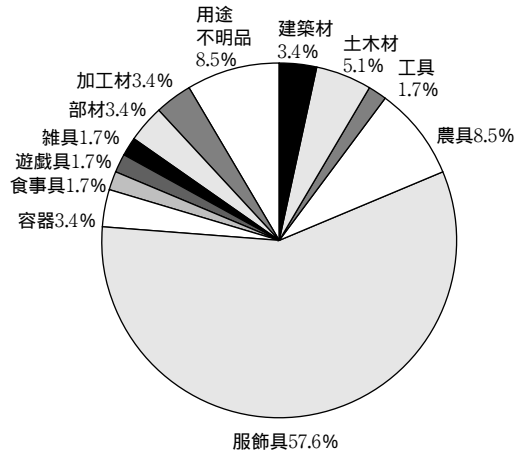


Fig.42 イスノキ製木製品の用途別出土状況

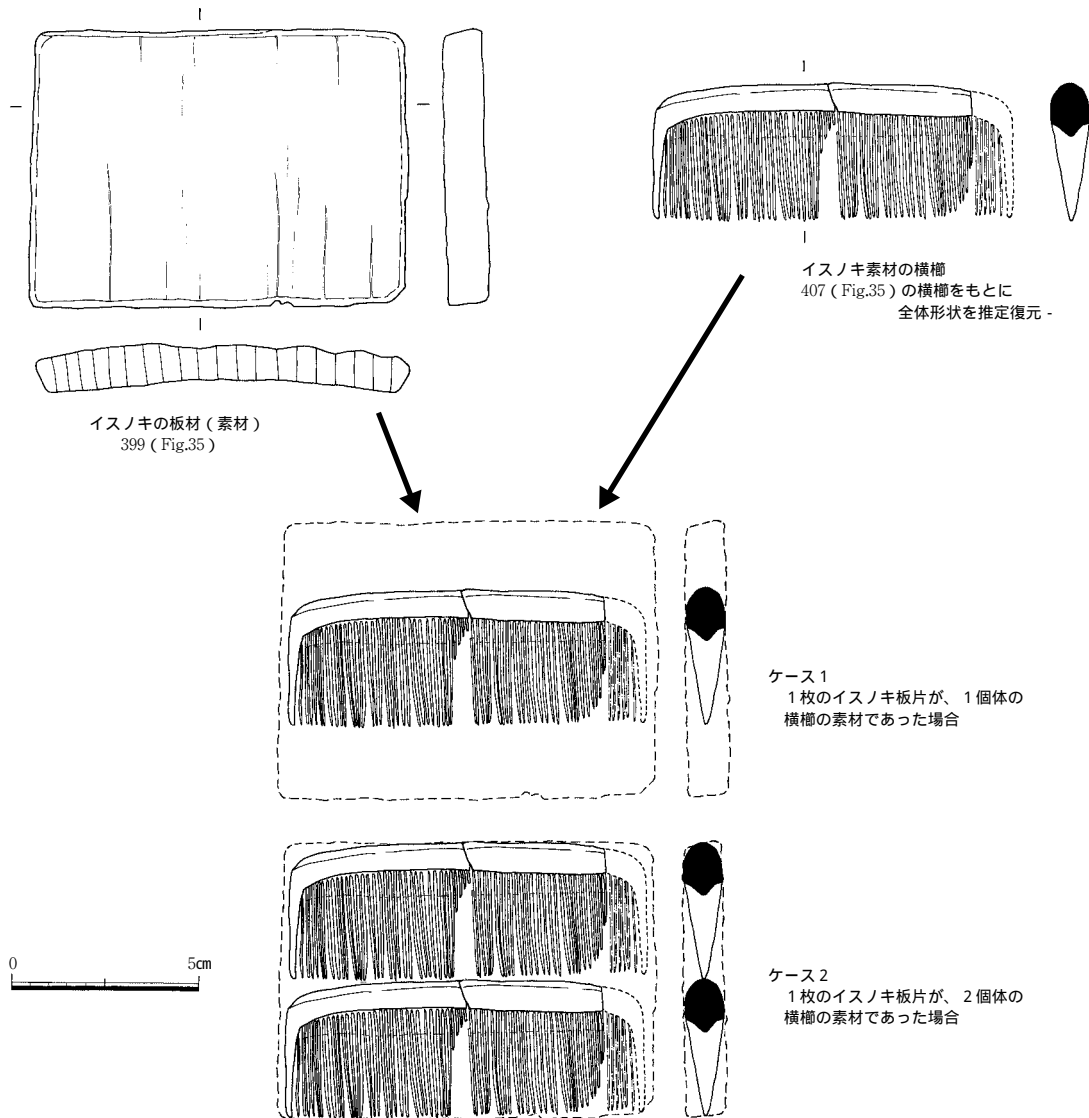


Fig.43 イスノキ製の横櫛と横櫛素材の板材

Tab.20 イスノキ製木製品出土遺跡一覧表

遺跡名	時期	都道府県	点数	木製品	分類	年次	報告書
摂津高槻城遺跡	室町後期	大阪府	1	割付・補修杭	建築材	1984	
摂津高槻城遺跡	室町後期	大阪府	1	梯子胴木組	建築材	1984	
四箇周辺遺跡	弥生前期後半～中期	福岡市	3	杭	土木材	1978	
藤原宮跡	白鳳	奈良県	1	斧柄	工具	1977	
菜畑遺跡	弥生中期	佐賀県	1	鋤	農具	1982	
拾六町ツイジ遺跡	奈良末～平安初期	福岡市	1	三又鍬	農具	1983	
拾六町ツイジ遺跡	古墳	福岡市	1	平鍬	農具	1983	
拾六町ツイジ遺跡	奈良末～平安初期	福岡市	1	平鍬	農具	1983	
藤原宮跡	弥生後期	奈良県	1	竪杵	農具	1980	
藤原宮跡	飛鳥～藤原	奈良県	1	簪	服飾具	1980	
巨摩庵寺跡	中世以降	大阪府	1	横櫛	服飾具	1981	
葺屋敷遺跡	縄文～平安	神奈川県	1	横櫛	服飾具	1984	⑳
藤原宮跡	7世紀後葉～8世紀	奈良県	1	横櫛	服飾具	1984	
布留遺跡	奈良～平安	奈良県	2	横櫛	服飾具	1981	
平城宮跡	奈良	奈良県	1	横櫛	服飾具	1982	
平城宮跡	奈良	奈良県	2	横櫛	服飾具	1984	
平城宮跡	8世紀中葉	奈良県	5	横櫛	服飾具	1984	
平城宮跡	8世紀後半	奈良県	1	横櫛	服飾具	1982	
御山千軒遺跡	平安前期	福島市	1	櫛	服飾具	1983	
江上B遺跡	弥生～中世	富山県	1	櫛	服飾具	1984	
青戸・葛西城址	中世	東京都	1	櫛	服飾具	1982	㉒
曾根遺跡	平安前期	新潟県	3	櫛	服飾具	1983	
草戸千軒町遺跡	鎌倉～室町	広島県	4	櫛	服飾具	1976	㉓
藤原宮跡	白鳳	奈良県	2	櫛	服飾具	1977	
藤原宮跡	飛鳥～藤原	奈良県	2	櫛	服飾具	1980	
南条坊遺跡	平安～鎌倉	福岡県	2	櫛	服飾具	1980	㉑
難波宮跡	近世	大阪府	1	櫛	服飾具	1981	
平城京跡	古墳	奈良市	1	櫛	服飾具	1985	
南条坊遺跡	平安～鎌倉	福岡県	1	下駄(齒)	服飾具	1980	㉑
菜畑遺跡	弥生前期	佐賀県	1	椀	容器	1982	
菜畑遺跡	弥生前期	佐賀県	1	高杯	容器	1982	
平城京跡	8世紀中葉	奈良市	1	剝物匙	食事具	1984	
正倉院	奈良	奈良市	1	螺鈿楓琵琶(鹿頸)	遊戯具	1978	
正倉院	奈良	奈良市	1	未造着軸	雑具	1981	
正倉院	奈良	奈良市	1	紫檀木画挟軾(脚)	部材	1978	
正倉院	奈良	奈良市	1	紫檀木画挟軾(台)	部材	1978	
門田遺跡	古墳～中世	福岡市	1	加工板材	加工材	1979	
拾六町ツイジ遺跡	奈良末～平安初期	福岡市	1	板材	加工材	1983	
菜畑遺跡	弥生前期	佐賀県	1	L字状	用途不明品	1982	
藤原宮跡	奈良	奈良県	1	L字状	用途不明品	1978	
菜畑遺跡	弥生前期	佐賀県	1	あわび起し状	用途不明品	1982	
湯納遺跡	弥生後期	福岡市	1	柄付台	用途不明品	1976	
拾六町ツイジ遺跡	弥生前期初頭	福岡市	1	木製品	用途不明品	1983	

れる木製品である可能性はないのか。それを確認するため、国内の遺跡から出土するイスノキについて集成を行った。⁽⁵⁾ イスノキ出土遺跡とイスノキ製木製品をまとめたものが、Tab.20である。

集成の結果、イスノキの板材は横櫛の素材である可能性が極めて高いという結論を得た。Fig.42に示したように、膨大な出土木製品の中でイスノキは例外的な存在であり、総数59点と出土数僅少である。その中では、やはり、イスノキ製木製品に櫛（横櫛）の占める割合は約60%近くと他を圧している。櫛（横櫛）とイスノキとの結び付きはツゲと並んで強固であり、横櫛製作のために意図的に選択された素材である。それ以外は菜畑遺跡の農具、正倉院の遊戯具などあくまでも例外で、その目的物（木製品）を生み出すために意図して選択された素材ではない。

なお、加工材や用途不明の中に、当遺跡と同様の素材（板材）が含まれている可能性を考え、確認したが類例を見出すことはできなかった。

*イスノキ……マンサク科の常緑高木。高さ20mに達する。葉に虫こぶがでやすく、子どもがこれを笛にして吹くときの音からヒヨノキとも呼ばれる。葉は互生し、質が厚く、長楕円形、長さ5～8cm、先は鈍くとがり、縁には鋸歯がない。四月ごろ葉のつけ根から総状花序をだし、花は紅色で上方に両性花、下方に雄花をつけ、萼片は三～六個、花弁はない。果実は木質で星状毛を密生し、二裂する。心材は暗紫紅色で、堅くて重い。櫛をつくり、床柱・床板・器具材となる。虫こぶや樹皮にはタンニンを含む。日本では四国・九州の暖地に自生する。「蚊母樹（いすのき）」の花は春、実は秋の季語。（小林義雄）
（『大日本百科事典ジャポニカ-2』1968年 小学館）

（4）西鴨地遺跡周辺の地名

西鴨地遺跡周辺の地籍図から今回の調査に関係する地名、あるいは遺跡の性格のヒントとなる地名を探し出すことができる。Fig.44に周辺の地籍図を示した。地籍図は、現在の西鴨地・本村・東鴨地など旧賀茂地村に相当する部分である。

調査地点は字「バデン」周辺である、調査地の西を流れる波介川は物資流通の動脈としての役割を担う川である。西鴨地遺跡への搬入口として遺跡の西方約400mにある「西御門（ニシミカド）」付近が、河港的な役割を果たしていたことが地名（御門）から指摘できる。波介川のさらに上流には、家俊や市野々などの集落が続いているが、西鴨地遺跡のすぐ近くに河港が設置されていることから遺跡周辺の谷筋の重要性がうかがわれる。

地積図に見える地名の中で、最も注目されるのは南西約400mの地点にある「串屋」地名である。長宗我部地検帳でも「クシヤ」は地名として使われており、⁽⁶⁾ 山畠・下田・下々田・下ヤシキ・下々ヤシキなど当時の土地利用のあり方・景観の復元が可能である。クシヤは少なくとも16世紀末以前に由来する地名である。名称の類似のみを持ってクシヤ地名と西鴨地遺跡から出土した横櫛とが関連するとは断定できない。しかし、遺跡周辺にはコカチャ（地検帳ではカチノタニ）、鍛冶ノ窪（地検帳でも同じ）、カチャシキ（地検帳でも同じ）など中世以前に祖源を遡り得る「鍛冶」関連地名が点在している。クシヤ地名が単独で存在するのではなく、遺跡周辺の谷筋の地形変換点付近に、これら手工業生産関連と目される地名が分布する様相から、クシヤと横櫛生産とが関連する可能性がより高くなる。

さらに、地検帳の賀茂地村の中に「塗師名」の存在が認められる。横櫛を仕上げる課程で、漆塗

の工程が必要であろうことを考慮すれば、クシヤ地名と塗師名は関連した可能性もあるものの、詳細な検討はできていない。

地籍図の中には奈良との関連も想定できる坪地名「大坪」・「坪ノ内」、街道の存在を示す「古道」などの地名も確認できる。

これらの地名の他に、寺・堂・塔・経塚などの仏教関連の地名（印）と神・宮などの神道関連の地名（印）の分布が密であることがわかる。（地籍図の範囲は1.3km四方）これらの地名のうち寺名など仏教関連地名の大半は中世に成立したもので、当遺跡の中心の8～10世紀とは直接関連しないが、中世にこれらの寺が成立する前提条件が、賀茂地村に揃っていたことになる。

「寺・堂」地名分布域と「神・宮」地名分布域は、明らかに異なっている。これらの地名の多さと併せて、地域の特色を示す事実として興味深い。

（5）イスノキ板材が横櫓の素材である理由

イスノキの板材と横櫓との関連について、西鴨地遺跡の木製品・イスノキと横櫓・周辺の地名から検討してみた。ここで、イスノキの板材が横櫓素材である理由についてまとめてみる。

- 1）板材の樹種がイスノキである。西鴨地遺跡出土の他の板材は、樹種鑑定したものについては全てヒノキを使用している。
- 2）日本の遺跡からのイスノキの出土例の57.6%が横櫓であり、イスノキが他の木製品に使用される場合は例外的なケースである。
- 3）板材の形状と推定復元した横櫓の大きさ（長さ・幅・厚さ）とがほぼ一致する。板材は1点あるいは2点の横櫓を製作し得る大きさである。
- 4）西鴨地遺跡の周辺に「串屋」（クシヤ）地名が残っており、16世紀末の長宗我部地検帳の段階にも「クシヤ」として地名に使われていることから、それ以前に付けられた地名であることが解る。直接の結び付きを論証することはできないが、横櫓と関連を持つ可能性がある。周辺には「大坪」「坪ノ内」など古代に祖源を持つ地名も残り、遺跡周辺の谷筋には「コカチャ」「鍛冶ノ窪」「カチャシキ」などの鍛冶に関する地名も残っている。これらの地名は串屋同様、長宗我部地検帳段階以前に遡るものである。

（6）まとめ

以上の理由を以て、出土したイスノキの板材を横櫓の素材だと考えたい。Fig.43のように、この板材からは1個体あるいは2個体の横櫓をつくりだすことが可能である。同様の形態を持つイスノキの板材の出土が報告された例はなく、イスノキの板状の素材が出土した初めての例である。

イスノキの板材が横櫓の素材であるということが確認されるのなら、高知平野の西端に位置する西鴨地遺跡の近在において精緻な木製品（横櫓）の生産が行われていた可能性が高まり、古代の手工業生産に関する重要な新知見を提供することとなる。一方、8～10世紀において当地がイスノキという温暖な気候を好む樹木の自生地であり、横櫓素材となり得るイスノキ板材を供給する産地の一つとして、加工した板材を横櫓生産地へ搬送した可能性も検討しなければならない。

流路以外の遺構がほとんどない段階で、出土遺物のみを以て西鴨地遺跡の性格について断定することはできない。しかし、官的な色彩が強いといわれる木製祭祀具の存在や服飾具、曲物容器は一般集落との違いを明示している。緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・製塩土器・帯金具などの多様で特殊な遺物群と併せて考えると、近接する地点に官衛関連の何らかの施設が存在していた可能性は高いといえる。横櫛とイスノキ板材の存在、そして串屋地名は木製品製作に関わる手工業生産が行われていた可能性を示し、串屋に近接するコカチャ、鍛冶ノ窪、カチャシキ、など手工業に関する地名は生産関連施設の存在を示す（椀状鉄滓も出土）。大坪・坪ノ内などの坪地名も、条里の復元までには至らないものの、当地が条理地割り施行時点で何らかの役割を持つ土地であったことを示唆する。

西鴨地遺跡のイスノキの板材と横櫛は、製品とその素材を同時に検出した例として注目され、古代の手工業生産をつかさどる施設が近接している可能性を示したと言える。その施設が官衛に関連するものかどうかなどの遺跡の性格については、他の出土遺物や地籍図などを手がかりに推定することができるのみである。西鴨地遺跡周辺の他地点の調査により、遺構と遺物のセット関係が明らかになれば、より明瞭な遺跡像が浮かび上がってこよう。

註)

- (1) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡野市町教育委員会 1989年
- (2) 『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所 1985年
- (3) 渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌66-4』1978年
- (4) 同(2)
- (5) 1988年にまとめられた『日本の遺跡出土木製品総覧』（島地謙・伊東隆夫編、雄山閣）をもとに集成した。その後、12年間の遺跡数・木製品の増加に伴い、報告例も増加しているが全体を網羅することは困難であるため、1988年段階のデータに頼る。土木・建築材から各種木製品、自然木、炭化木、木彫り仏像に至るまで、「木」に関する樹種鑑定資料が網羅されており、全体の傾向をつかむことができる。
- (6) 『長宗我部地検帳 高岡郡上』高知県立図書館 1963年

参考) イスノキ出土遺跡報告書一覧 (Tab.20に対応)

- ① 飯島泰男・長谷川益夫 (1984) 木製品の樹種. 北陸自動車道遺跡調査報告、上市町木製品 (本文) 総括編、89-96、図版 5-8.
- ② 川村恵洋 (1983) 曾根遺跡出土木材の識別. 新潟大学農演報、No.16:75-82 (写真 1-18).
- ③ 貴島恒夫・嶋倉巳三郎・林昭三 (1981) 正倉院宝物の木材材質調査報告. 正倉院年報第三号、1-17
- ④ 嶋倉巳三郎 (1978) 正倉院木工品の樹種について. 宮内庁正倉院事務所「正倉院の木工」、日本経済新聞社、111-128、図版 1-240.
- ⑤ 嶋倉巳三郎 (1978) 福岡市四箇J-10地区出土杭材の樹種について. 福岡市教育委員会、福岡市埋文調査報告、No.47: 1-24、図版 1-20.
- ⑥ 嶋倉巳三郎 (1981) 難波宮跡から出土した木質遺物. 難波宮址の研究第7集、(財)大阪市文化財協会、211-215、図

87-92.

- ⑦・・嶋倉巳三郎（1982）菜畑遺跡から出土した木製品の樹種. 唐津市教育委員会「菜畑遺跡」、唐津市菜畑字松円寺所在の縄文・弥生時代稲作遺跡の調査（分析・考察編）唐津市文化財調査報告書第5集、430-446（図含む）.
- ⑧・・嶋倉巳三郎（1983）御山千軒遺跡から出土した木質遺物. 福島県教育委員会「御山千軒遺跡」、福島県文化財調査報告書第109集、東北新幹線関連遺跡発掘調査報告、9-31、図版4-9.
- ⑨・・嶋倉巳三郎（1983）福岡市城原小学校建設地内遺跡調査報告書「拾六町ツイジ遺跡」、福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集、93-116.
- ⑩・・嶋倉巳三郎・金原正明（1981）出土木器の樹種と木取り、. 奈良県天理市布留遺跡・三島（里中）地区、布留遺跡天理教発掘調査団、1-32、図版1-16.
- ⑪・・島地謙（1978）木製品の樹種. 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」、奈良国立文化財研究所、111-112、図版76-78.
- ⑫・・島地謙・林昭三（1984）出土木材の樹種. 摂津高槻城本丸跡発掘調査報告. 高槻市教育委員会、高槻市文化財調査報告書第14冊、102-108.
- ⑬・・島地謙・伊東隆夫・光谷拓実（1977）藤原宮跡出土木製品の樹種鑑定. 木材研究資料、No.11:36-47.
- ⑭・・奈良県教育委員会（1985）平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書、16-17、52-60.
- ⑮・・奈良国立文化財研究所（1980）木製品. 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 -藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査-、奈良明新社、135-206.
- ⑯・・奈良国立文化財研究所（1982）木製品. 平城宮発掘調査報告、奈良国立文化財研究学報第40冊、188-206.
- ⑰・・奈良国立文化財研究所（1984）「木器集成図録」近畿古代編、奈良国立文化財研究所資料第27冊、1-223.
- ⑱・・松田隆嗣（1981）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、大阪府教育委員会大阪埋蔵文化財センター「巨摩・瓜生堂」、361-374、図版9-18.
- ⑲・・松本島・林弘也（1976）建築部材. 福岡県教育委員会「今宿関係埋蔵文化財調査報告第4集」-福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査-、117-140、図版82-84.
- ⑳・・松本島・林弘也（1979）門田遺跡谷地区出土の木材片の樹種名について. 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第11集、159-161、図版88-95.
- ㉑・・松本島・堤寿一・林弘也・北原龍士（1980）北部九州の遺跡から出土した木材及び木製品. 「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」、文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班、東京プレス、241-248.
- ㉒・・山内文（1974）植物遺存体. 葛西城址調査会「青戸葛西城址調査報告」、122-124.
- ㉓・・山内文（1976）植物性出土品、木材. 広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡-第11～14次発掘調査概要-」、47-49.
- ㉔・・山内文（1984）蔵屋敷出土の木製品について. 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会「蔵屋敷遺跡」、227-231、図版29-32.

第 章 付編 西鴨地遺跡の自然科学分析

西鴨地遺跡出土遺物については、木製品・植物遺体の樹種同定・金属製品の成分分析などの自然科学分析を試み、関係各機関から分析報告をいただくことができた。ここに、成果をまとめて掲載する。

- 1 西鴨地遺跡から出土した木製品の樹種 (株)パリノサーヴェイ・(株)東都文化財研究所
《保存処理及び樹種同定》
- 2 高知県西鴨地遺跡・出土木製品の樹種調査結果 (株)吉田生物研究所
《保存処理及び樹種同定》
- 3 高知県西鴨地遺跡・出土木製品の樹種調査結果 (株)吉田生物研究所
《樹種同定のみ》
- 4 西鴨地遺跡から出土した種実遺体・木材の同定 (株)パリノサーヴェイ・(株)東都文化財研究所
《樹種同定及び植物遺存体の分析》
- 5 西鴨地遺跡、金属製品の科学的調査 (株)東都文化財研究所
《保存処理及び金属製品(帯金具)分析》

木製品の樹種同定の結果からは、板材の大半がヒノキであり、周囲に自生する広葉樹は土木材などに選択的に使用されていること、板材の中に例外的にイスノキが存在し、それはイスノキ製の横櫓の素材板の可能性が指摘できること、など多くの知見を得ることができた。

また種子類の樹種同定では、種子と同時に送った木材等の分析も含めて行い、周囲の環境が暖温帯広葉樹林(照葉樹林)であったことを明らかにするとともに、調査の目的の一つの桃の種分析では、古墳時代から奈良時代にかけての桃の形質と遺跡出土の桃の形質が一致することが明らかになった。分析の主な目的である出土桃核が古代の土佐の産物だとされる桃仁の原料となり得たかどうかの検討については、現代の桃と比べると、より適した形質はあるものの詳細は不明だという結論を得た。

金属製品は保存処理により、2個体の帯金具(鉈尾)が接合することが改めて確認されるとともに、蛍光X線分析により、鉈尾を構成する金属が、銅・ヒ素・鉛・ケイ素・すず・アルミニウム、丸鞆を構成する金属が、銅・すず・ケイ素・鉛・ヒ素・アルミニウム・銀・水銀・金であることが判明した。銅の占める割合が90%以上で、銀・水銀・金は1%未満の微量が含有されるのみである。詳細は各報告を参照していただきたい。

なお、木製品については早急に保存処理をする必要があったことなど諸般の事情により、(株)東都文化財研究所及び(株)吉田生物研究所からの3次に渡る報告となったことを付記しておく。

1 西鴨地遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

(株)東都文化財研究所

(1) 試料

試料は、9世紀後半～10世紀初めの祭祀具を中心とした木製品11点(図版番号380、379、395、378、377、375、376、374、373、403、407)である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル(抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。試料は、針葉樹2種類(ヒノキ・ヒノキ科)と広葉樹1種類(イスノキ)に同定された。各種類の解剖学的特徴を以下に記す。

- ・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

- ・ヒノキ科(Cupressaceae)

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列、1～10細胞高。ヒノキ属ヒノキの可能性が高いが、保存状態が悪いために確定できず、ヒノキ科とした。

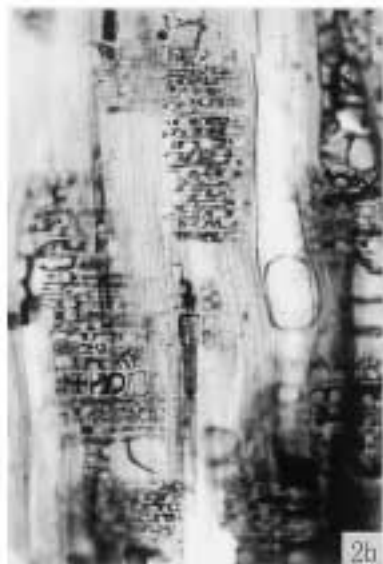
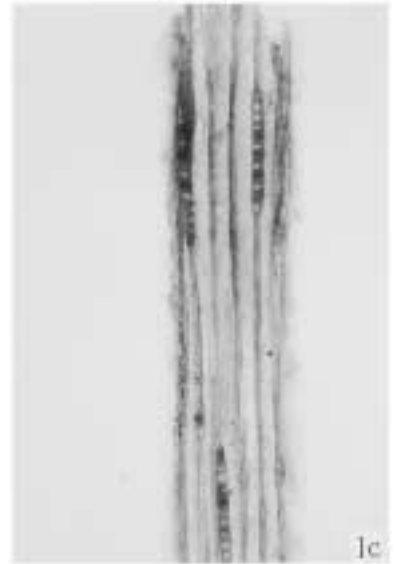
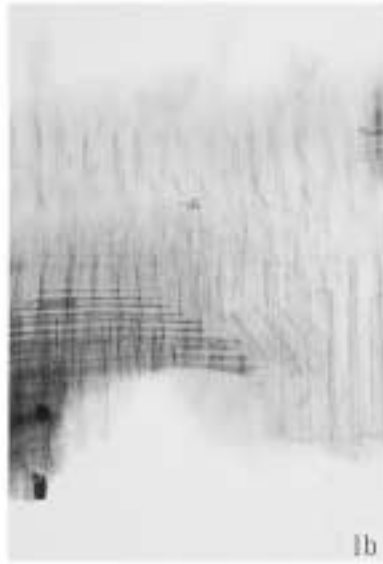
- ・イスノキ(*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独、横断面では多角形。階段穿孔を有し、段数は5前後。放射組織は異性型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状でほぼ等間隔に配列する。

表1 西鴨地遺跡の樹種同定結果

図版番号	遺物	時代	樹種
380	祭祀具(形代・刀形?)	8世紀～10世紀	ヒノキ
379	祭祀具	8世紀～10世紀	ヒノキ
395	荷札形木簡あるいは木簡形	8世紀～10世紀	ヒノキ
378	祭祀具(斎串)	8世紀～10世紀	ヒノキ
377	祭祀具(斎串)	8世紀～10世紀	ヒノキ
375	祭祀具(簡単な人形・斎串?)	8世紀～10世紀	ヒノキ
376	祭祀具(簡単な人形・斎串?)	8世紀～10世紀	ヒノキ
374	祭祀具(人形?)	8世紀～10世紀	ヒノキ
373	祭祀具(人形)	8世紀～10世紀	ヒノキ
403	桧扇の部分(1枚)	8世紀～10世紀	ヒノキ科
407	横櫛	8世紀～10世紀	イスノキ

図版 西鴨地遺跡・木材



1.ヒノキ (試料番号29)
2.イスノキ (試料番号45)
a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b,c

2 高知県西鴨地遺跡・出土木製品の樹種調査結果(1)

(株)吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

(1) 試料

試料は西鴨地遺跡から出土した服飾具3点、容器13点、食事具1点、祭祀具8点、用途不明13点の合計38点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を採取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹5種)の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)

(遺物 1~19、21~29、32、33、35~37)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

2) クスノキ科クスノキ属クスノキ(*Cinnamomum camphora* Presl)

(遺物 34)

散孔材である。木口は中庸の道管($\sim 200\mu\text{m}$)が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に見え小さな道管と見間違える程の油細胞(樟脳油貯蔵細胞)がある。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ $\sim 800\mu\text{m}$ からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものが多く見られる。クスノキは本州(関東以西)、四国、九州に分布する。

3) マンサク科イスノキ属イスノキ(*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

(遺物 28、29、38)

散孔材である。木口ではやや小さい道管($\sim 50\mu\text{m}$)がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1~2列のものが多数走っているのが見られる。柾目は道管は階段穿孔と内部に充填物(チロース)がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異

性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1mmで多数分布している。イスノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

4) ツゲ科ツゲ属ツゲ (*Buxus microphylla* S. et Z. var. *japonica* Rehd. et Wils.)

(遺物 30)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管(～40μm)が多数平等に分布する。木繊維は厚壁である。柾目では道管は階段穿孔(10本前後)を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織管壁孔には小型の篩状の壁孔がある。板目では放射組織は2～3細胞列、高さ～600μmからなる。ツゲは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

5) モチノキ科モチノキ属 (*Ilex* sp.)

(遺物 20)

散孔材である。木口では小道管(～60μm)が単独ないし数個が放射状、集団状に複合している。柾目では道管は階段穿孔と側壁に螺旋肥厚を有する。木繊維も螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織管壁孔は小型の壁孔である。板目では放射組織は1～7細胞列、高さ～1.8mmからなる。モチノキ属はアオハダ、イヌツゲ、モチノキ等があり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

6) 桜or樺の樹皮 (遺物 19、21、23、24、27、31、35)

曲物を綴じるために桜ないし樺の皮が使われている。両者は顕微鏡観察では判別が難しい。

参考文献

島地 謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

島地 謙・須藤彰司・原田 浩「木材の組織」森北出版株式会社(1982)

伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 ～ 」京都大学木質科学研究所(1995～)

北村四郎・村田 源「現職日本植物図鑑木本編 ・ 」保育社(1979)

岩井宏實「曲物」法政大学出版局(1994)

使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEEX UFX-DX Type 115

高知県西鴨地遺跡出土木製品樹種同定表

No	図版番号	品名	樹種
1	386	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
2	382	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
3	383	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
4	393	細板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属
5	394	籠板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属
6	400	用途不明木製品	ヒノキ科ヒノキ属
7	384	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
8	390	細板材	ヒノキ科ヒノキ属
9	387	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
10	385	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
11	388	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
12	402	用途不明木製品	ヒノキ科ヒノキ属
13	409	容器蓋板	ヒノキ科ヒノキ属
14	413	容器蓋板	ヒノキ科ヒノキ属
15	411	容器底板	ヒノキ科ヒノキ属
16	396	端部炭化材	ヒノキ科ヒノキ属
17	421	薄板状	ヒノキ科ヒノキ属
18	412	容器底板	ヒノキ科ヒノキ属
19	408	容器底板	ヒノキ科ヒノキ属
19	408	樹皮	桜or樺の樹皮
20	398	用途不明木製品	モチノキ科モチノキ属
21	416	容器底板	ヒノキ科ヒノキ属
21	416	樹皮	桜or樺の樹皮
22	410	容器蓋	ヒノキ科ヒノキ属
23	419	部材	ヒノキ科ヒノキ属
23	419	樹皮	桜or樺の樹皮
24	414	把手付き底板	ヒノキ科ヒノキ属
24	414	把手付き底板(把手部)	ヒノキ科ヒノキ属
24	414	樹皮	桜or樺の樹皮
25	417	容器蓋板	ヒノキ科ヒノキ属
26	397	用途不明木製品	ヒノキ科ヒノキ属
27	420	容器側板	ヒノキ科ヒノキ属
27	420	樹皮	桜or樺の樹皮
28	404	横櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
29	406	横櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
30	405	横櫛	ツゲ科ツゲ属ツゲ
31	写真のみ	樹皮	桜or樺の樹皮
32	415	用途不明木製品	ヒノキ科ヒノキ属
33	422	容器側板	ヒノキ科ヒノキ属
34	424	容器	クスノキ科クスノキ属クスノキ
35	423	容器側板	ヒノキ科ヒノキ属
35	423	樹皮	桜or樺の樹皮
36	401	板材	ヒノキ科ヒノキ属
37	381	祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
38	399	板材	マンサク科イスノキ属イスノキ

3 高知県西鴨地遺跡出土・木製品の樹種調査結果(2)

(株)吉田生物研究所 汐見 真
京都造形芸術大学 岡田 文男

(1) 試料

試料は西鴨地遺跡から出土した建築材6点、容器1点、用途不明3点の合計10点である。

(2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

(3) 結果

樹種同定結果(針葉樹2種、広葉樹2種)の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ(*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura) (遺物 6、9)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸新的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柁目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)をなして存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州(岩手以南)、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)(遺物 1~4)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状端末壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

3) ブナ科シイ属(*Castanopsis* sp.)(遺物 5、7)

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管(~300 μ m)は単独でかつ大きい。接線方向には連続していない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柁目では道管は単穿孔と多数に有縁壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。ツブラジイに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低い為、スダジイとの区別は難しい。シイ属は本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

4) アワブキ科アワブキ属(*Meliosma* sp.)(遺物 8、10)

散孔材である。木口では中庸な道管(~130 μ m)が、単独ないし柔細胞を間に挟んで2~4個放射方向に複合して分布している。幅の広い放射組織が幾筋もある。柁目では道管は階段穿孔(バー少数)を持つ。放射組織は平状と直立組織からなり異性である。板目では放射組織

高知県西鴨地遺跡出土木製品樹種同定表

No	図版番号	品名	樹種
1	389	細板or祭祀具	ヒノキ科ヒノキ属
2	391	曲物or板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属
3	392	薄板状木製品	ヒノキ科ヒノキ属
4	418	容器蓋板or底板	ヒノキ科ヒノキ属
5	425	杭状木製品	ブナ科シイ属
6	426	杭状木製品	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
7	427	杭状木製品	ブナ科シイ属
8	429	杭状木製品	アワブキ科アワブキ属
9	428	杭状木製品	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
10	430	杭状木製品	アワブキ科アワブキ属

は1～4細胞列、高さ～2.5mmからなる。アワブキ属はヤマビワ、アワブキ等があり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

参考文献

- 島地 謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
 島地 謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
 島地 謙・須藤彰司・原田 浩「木材の組織」森北出版株式会社（1982）
 伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 ～ 」京都大学木質科学研究所（1995～）
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 ・ 」保育社（1979）

使用顕微鏡

Nikon
 MICROFLEEX UFX-DX Type 115

4 西鴨地遺跡から出土した種実遺体・木材の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

西鴨地遺跡は高知平野西端の沖積地に位置する。今回の発掘調査では弥生時代、奈良～平安時代の遺物が出土している。特に9～10世紀を中心とする古代の遺物が主体をなし、その大半が水路として利用されていた自然流路から出土している。出土遺物には多くの搬入品や製塩土器、官的祭祀関連遺物である木製祭祀具などが認められ、当該地が中村街道に近接する交通の要衝であることなどから、物資の集積あるいは交通を司る官衛に関連する施設が存在した可能性が考えられている。また、古代の自然流路内からは、木製祭祀具と共にモモ等と考えられる種実遺体が出土している。文献史料によれば、土佐からは年貢として塩サバや桃の種から作る桃仁という菓を納めていたことが記録されている。今回の種実遺体もこの桃仁の生産に関係する可能性が考えられている。そこで、今回は、出土した種実遺体の同定を行い、種類を明らかにすると共に桃仁生産の可能性について検討する。また、種実遺体と共に出土した木材の樹種同定を行い、古植生に関する資料を得る。

(1) 試料

試料は、出土した種実遺体14ケース(試料番号1～14)である。このうち、試料番号9から1点、11から2点、14から3点の合計6点の木材試料が抽出された。各試料の詳細は、同定結果と共に表1に示す。

(2) 方法

1) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定した。特にモモについては、核の形態に関する特徴を知る目的で、計測(長さ、幅、厚み)を実施した。なお、形状の特徴を数値化するために、大きさ、扁平率、分散、相関係数などを求めた。計算方法は以下の通りである。

・大きさ:

幅を x 、長さを y とすると、大きさ= xy

・扁平率:

幅を x 、厚みを y とすると、扁平率= $\frac{y}{x}$

・分散(不偏分散) 標準偏差、変動係数:

長さや幅の要素を(X_i)、要素の個数を n 、平均を \bar{X} とすると

$$\text{分散}(V) = \frac{\sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}{n-1} \quad \text{標準偏差} = V \quad \text{変動係数} = 100 \frac{V}{\bar{X}}$$

・相関係数(ピアソンの積率相関係数):

長さや幅の要素を(X_i, Y_i)、要素の個数を n 、それぞれの平均を \bar{X}, \bar{Y} とすると

$$\text{相関係数} = \frac{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})(Y_i - \bar{Y})}{\sqrt{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2} \sqrt{\frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}}$$

2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

同定結果を表1に示す。種実遺体は4種類（オニグルミ・イチイガシ・シリブカガシ・モモ）に同定された。また、木材は広葉樹4種類（アサダ・コナラ属アカガシ亜属・クリ・タブノキ属）に同定された。以下に検出された種類の木材の解剖学的特徴や種実の形態的特徴を記す。

種実遺体

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura) クルミ科
核が検出された。褐灰色で木質。非常に堅い。長さは2.5cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。
- ・イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属
果実および子葉が検出された。果実は長さは1.5cm程度。保存がよく、先端部が残存しているドングリには、輪状紋が確認される。さらに柱頭まで残存している個体をみると、柱頭の先端部が傘状になっており、外側を向く。また表面は縦の条が明色となってめだつ。保存の悪い個体のうち、柱頭が残っていないが輪状紋が確認され、縦の条が明色となってめだつものはイチイガシ近似種、輪状紋が確認されるものはアカガシ亜属、破損・魔耗などによりいずれの特徴も確認できない個体はコナラ属とした。
- ・シリブカガシ (*Pasania glabra* (Thunberg) Oersted) ブナ科ツブラジイ属
果実が検出された。大きさは1.5cm程度。褐色、長楕円形で先端部はやや尖る。表面は薄くて堅く、光沢がある。座についていた部分は淡褐色で、丸くてざらつき、凹む。
- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属
核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で長さは3cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

木材

- ・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属
散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。
- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科
放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。複合放射組織は確

表1 種実同定および樹種同定結果

番号	地区・層位など	試料の質	種類名	個数	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	大きさ	扁平率
1	区 層	種実遺体	モモ	完形 1	28.3	20.5	15.4	581.3	0.75
2	-E No.42	種実遺体	モモ	完形 1	25.2	19.1	14.3	480.1	0.75
3	-W 層	種実遺体	モモ	完形 1	29.7	22.6	18.2	673.0	0.80
4	-E (6)	種実遺体	モモ	完形 1	26.8	20.0	19.7	535.5	0.99
5	-W ~ 層	種実遺体	モモ	完形 1	25.4	19.3	14.2	489.1	0.74
			モモ	半分 1	26.1	19.5	-		
6	-E 砂	種実遺体	モモ	完形 1	25.8	20.1	13.9	518.1	0.69
			モモ	完形 1	23.4	17.4	13.7	407.2	0.79
7	B	種実遺体	モモ	完形 1	25.6	19.8	14.4	505.4	0.73
			モモ	半分 1	28.7	19.8	-		
8	7.15	種実遺体	モモ	完形 1	25.4	18.7	14.4	475.2	0.77
			モモ	完形 1	27.4	19.3	14.5	527.8	0.75
			モモ	完形 1	26.3	18.7	13.7	489.8	0.74
			モモ	半分 1	25.9	20.6			
9	-E 層	種実遺体	イチイガシ近似種	完形 2					
		木材	コナラ属アカガシ属						
10	-W 層	種実遺体	不明	完形 1、破片 1					
11	下C	種実遺体	イチイガシ						
		木材	タブノキ属	完形 1					
			広葉樹(散孔材)						
12	の下層の砂礫青灰B	種実遺体	イチイガシ近似種	完形 1					
13	-E ~ 岸辺	種実遺体	モモ	完形 1	35.3	24.4	17.4	860.1	0.71
14	8.10 (10) 青灰砂礫728ライン北	種実遺体	コナラ属	破片 8					
			アカガシ亜属	完形 5、破片 1					
			シリブカガシ	完形 12					
		木材	クリ						
			アサダ						
			樹皮						

認できなかった。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・タブノキ属 (Persea) クスノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性 ~ 型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔組織はしばしば大型の油細胞となる。

(4) 考察

1) モモについて

モモは食用のほか、観賞用、薬用等に広く利用される。最も古い出土例は縄文時代前期(伊木力遺跡)であるが、弥生時代以降になると全国各地の遺跡から多くの出土例がある(粉川、1988)。今回は、形状を数値化して検討することを目的として、さまざまな統計処理を実施した。その結果、大きさの平均値は545で扁平率の平均値は0.77であること、長さとは強い正の相関関係(相関係数0.94)があること、大きさと扁平率とは無相関(相関係数-0.10)であるといった特徴が明らかになった。また、大きさと扁平率との散布図(図1)をみると、大きさは500付近、と扁平率は

0.75付近に集中する傾向がみられるものの、一部離れた位置にある個体もみられる。また、変動係数は、それぞれ大きさ(21.7)、扁平率は、それぞれ大きさ(9.9)であり、大きさの方がばらつきが大きい。現在栽培されているモモは明治以降渡来したもののなので、遺跡出土のモモとは直接つながりはないが、現在のものと比較して大きさは

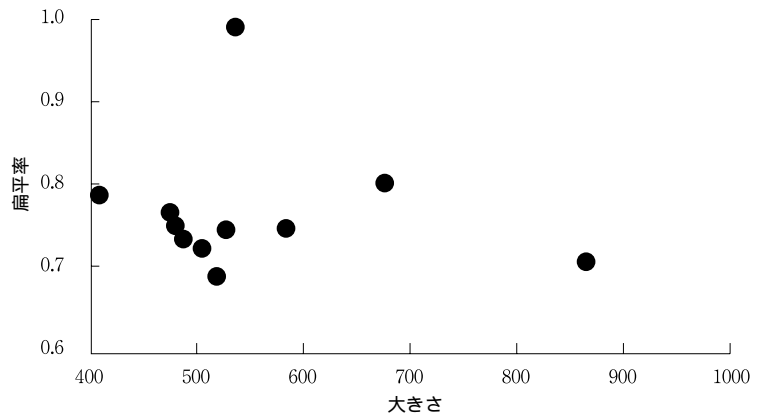


図1 モモ核の形状

まばらで、比較的厚いものが多いという特徴をもつ。ばらつきが大きいのは、当時のモモが現在のように遺伝的に純系でなかったことに由来すると考えられ、複数の種類(品種)が混じっているかどうかは判断が難しい。モモの核は、厚くて丸く小型のものは古い形質を表し、新しいものほど扁平になるとされる(堀田、1980など)。遺跡出土のモモも当初はこのような傾向があるとされたが、モモ核の出土例が増えるにしたがって、弥生時代以前の遺跡からも大型で扁平な核が検出されたりして、核の形態に関する時代変遷は混沌としてきている(南木、1991)。また、モモは近世以前に多くの山地や品種があったとされるが、そのほとんどが現在は消滅しているため(柴田編、1958)遺跡出土の核と栽培品種との関係は不明であるのが現状である。一方、金原ほか(1992)では、布留遺跡出土の弥生時代~中・近世のモモ核を5つに分類している(A~E)。今回検出された個体の形質をみると、散布図の集中部にある個体は、B類とされているものに近い。金原ほか(1992)によれば、古墳時代~奈良時代にはA類~C類の形質が存在するとされるが、これは今回の結果と調和的である。また、中国漢方によれば、桃仁は中国北西部を原産とする桃あるいは山桃の核の中にある種子を用いるとされ、果物用の白桃や水蜜桃は種子が小さいので適さないといわれている。今回検出された種実核は核が小型で丸く、古い形質を持っていることから、白桃や水蜜桃などよりは適している可能性があるが、詳細は不明である。

2) 古植生について

種実遺体では、モモの他にオニグルミ、イチイガシ、シリブカガシが検出された。一方、木材では、アサダ、アカガシ亜属、クリ、タブノキ属が認められた。アカガシ亜属は、種実遺体の結果からイチイガシの可能性がある。基本的には暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)を構成する種類が多く見られることから、遺跡周辺にはこれらの常緑広葉樹を主とした植生が見られたと考えられる。

検出されたうち、オニグルミ、イチイガシ、シリブカガシ、クリは、果実が生食可能で貯蔵も利くことから、植物質食料として重要な種類であったと考えられる。そのため、これらの種類については、果実が植物食料として利用されていたことが推定される。

引用文献

堀田 満 (1980) モモ。「植物の生活誌」, p. 137-140、平凡社。

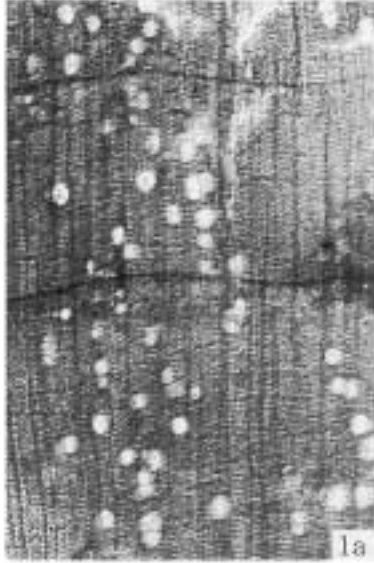
金原正明・粉川昭平・太田三喜 (1992) モモ核を中心とする古代有用植物の変遷。日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集、p. 76-77。

粉川昭平 (1988) 穀物以外の植物食。「弥生文化の研究2 生業」, 金関 恕・佐原 真編、p. 112-115、雄山閣。

南木睦彦 (1991) 栽培植物。石野博伸・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編「古墳時代の研究4 生産と流通」, p. 165-174、雄山閣。

柴田桂太編 (1958) 資源植物事典。904p、北隆館。

図版1 木材(1)



1a



1b



1c



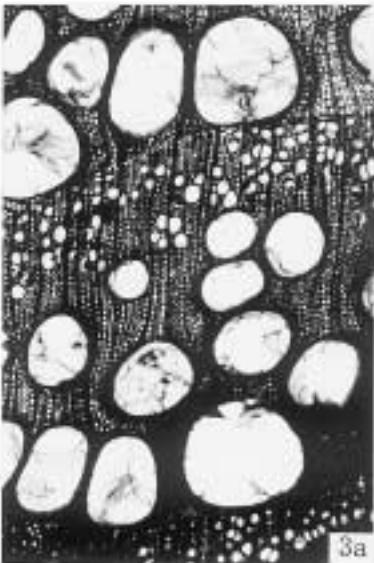
2a



2b



2c



3a



3b

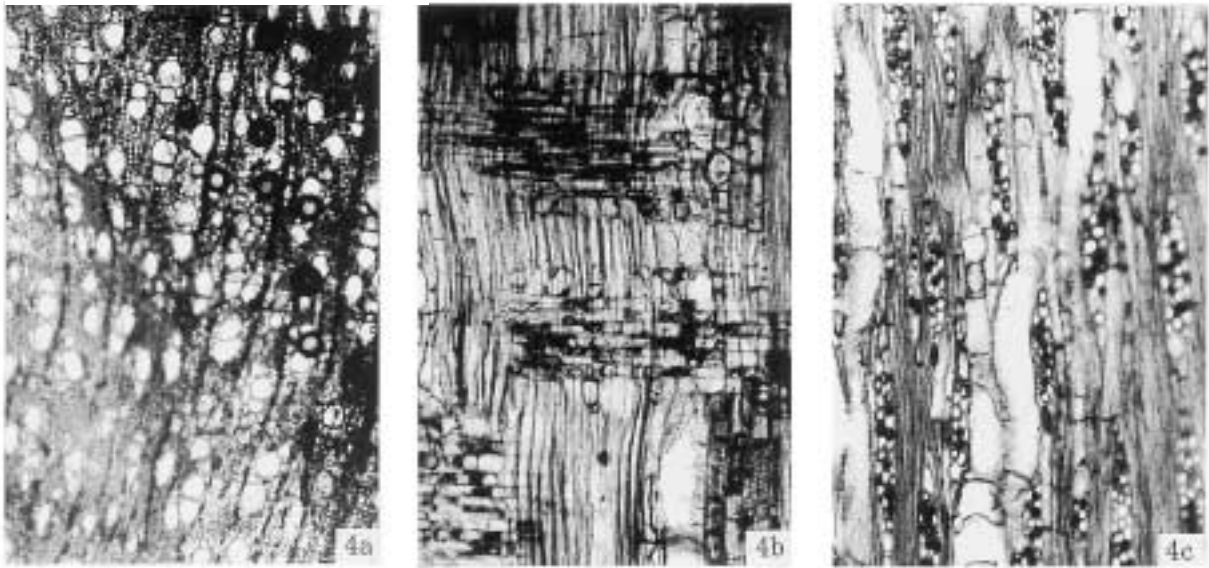


3c

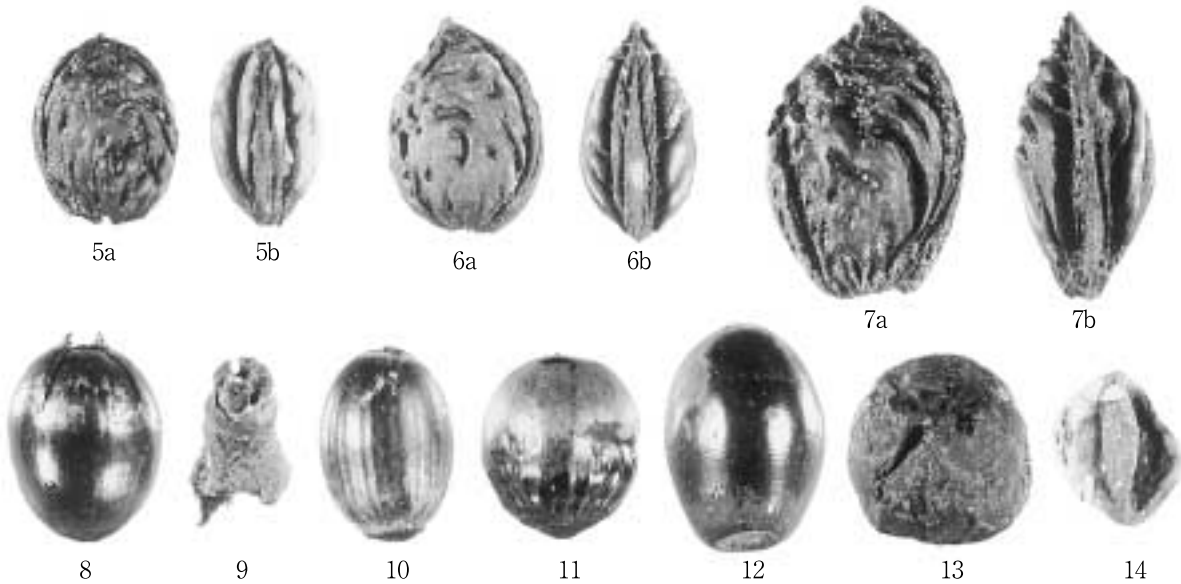
- 1.アサダ (遺物仮 14)
 - 2.コナラ属アカガシ亜属 (遺物仮 9)
 - 3.クリ (遺物仮 14)
- a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μm : a
200 μm : b,c

図版2 木材(2)・種実遺体



200 μm : a
200 μm : b,c



2cm (5-7, 13) 1cm (8, 10-12) 5mm (9, 14)

- 4.タブノキ属(遺物仮 11) a: 木口、b: 柁目、c: 板目
- 5.モモ(遺物仮 6)
- 6.モモ(遺物仮 8)
- 7.モモ(遺物仮 13)
- 8.イチイガシ(遺物仮 11)
- 9.イチイガシ: 柱頭(遺物仮 11)
- 10.イチイガシ近似種(遺物仮 9)
- 11.イチイガシ近似種(遺物仮 12)
- 12.シリブカガシ(遺物仮 14)
- 13.不明: 未熟果(遺物仮 10)
- 14.不明: 種子(遺物仮 10)

5 西鴨地遺跡出土、金属製品の科学的調査

(株)東都文化財研究所 大野 清奈

下記の調査を実施しましたので、ここに報告いたします。

調査対象遺物 西鴨地遺跡 区 層 361 蛇尾
区 層 360 丸靱

調査内容 現状観察、及び組成分析

調査方法 調査は主として以下の方法によった。

- A . X線透過画像写真撮影
- B . 顕微鏡観察
- C . 蛍光X線分析

A . X線透過画像

X線透過によって得られる画像は、試料の材質や構造を反映する。本調査では腐食の進行による地金の残存状況や、目視で把握できない内部構造などを確認する手がかりとした。

使用したX線照射装置は、ベリリウム窓マイクロ焦点のX線管球を有し、本調査での使用電圧は90kVである。

今回の調査ではX線フィルム（軟X線用微粒子フィルム）への直接撮影を行った。

- ・使用機種：SOFTEX社製 M-100特
- ・使用Film：フジフィルム社製 tipe N/GN-100

B . 顕微鏡観察

実体顕微鏡を用い、資料の細部観察を行った。

- ・使用機種：Nikon社製 tipe104

C . 蛍光X線分析

本体を構成する材料及び付着物の材質に関して、存在元素の分析を行った。

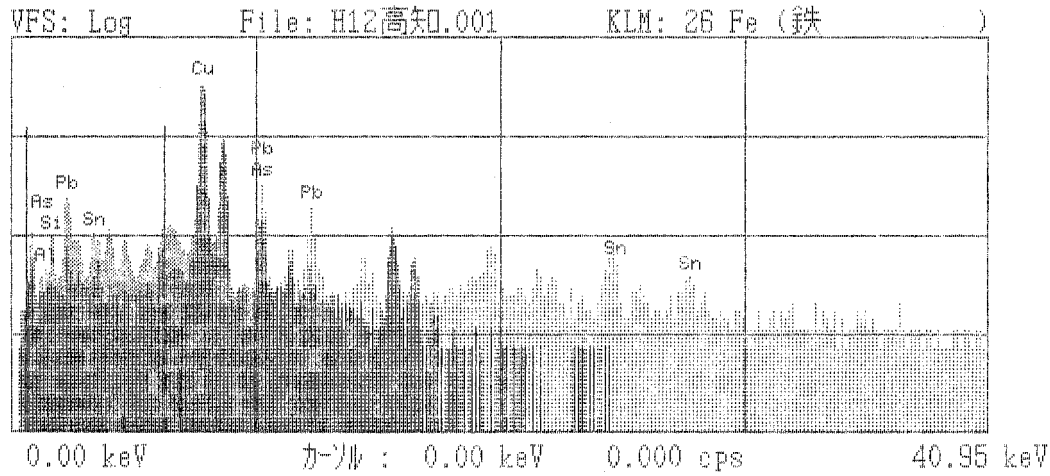
今回の蛍光X線分析は、遺物の非破壊調査を前提とし、表面分析が主体であるため、得られた結果は資料内部の状況が必ずしも忠実に反映されているとは限らないことを、承知しておく必要がある。

分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用い、Na（ナトリウム）以上の元素分析を行った。X線管ターゲットはRh（ロジウム）、X線管出力は15kVと50kV、分析対象部位のX線照射面積は 5mmである。

分析部位は、X線透過画像、目視及び顕微鏡下での観察によって、遺物本体を代表するような均質な部分を選択し分析を行った。

- ・使用機種：HORIBA社製 MESA-500

コメント：高知 1 + 2 処理後



測定条件

	# 1	# 2
日付	'01/01/11	'01/01/11
時刻	15:49:23	15:49:23
電圧	15 kV	50 kV
電流	220 μ A	14 μ A
時間	50 秒	50 秒
DT%	21 %	24 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

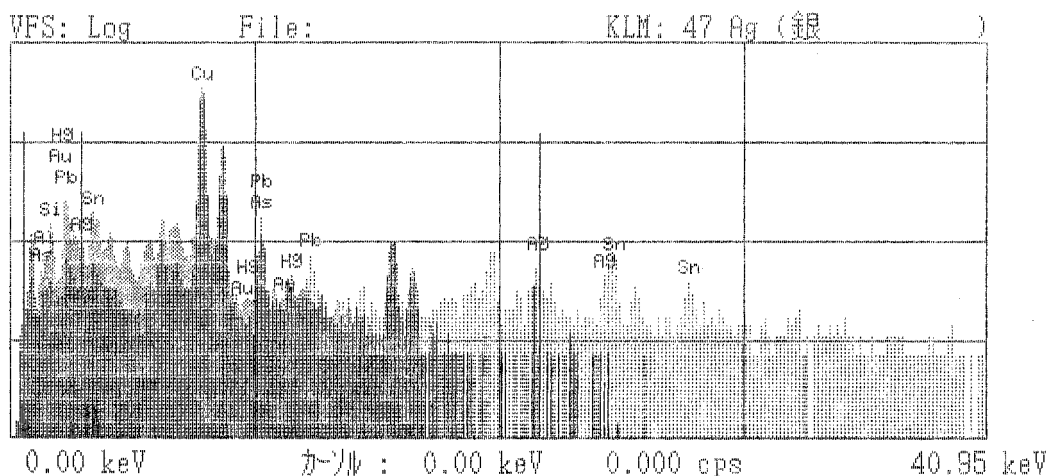
定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○			
14 Si	けい素	○			
29 Cu	銅	○			
33 As	ひ素	○			
50 Sn	すず	○			
82 Pb	鉛	○			

コメント：高知 1 + 2 処理後

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
29 Cu 銅	91.58	1.18	265.337
33 As ひ素	4.31	0.35	8.086
82 Pb 鉛	1.42	0.23	0.977
14 Si けい素	1.03	1.02	0.040
50 Sn すず	1.03	0.10	1.147
13 Al アルミニウム	0.64	0.64	0.012

コメント：高知 No.34 処理後



測定条件

	# 1	# 2
日付	'01/01/19	'01/01/19
時刻	14:47:57	14:47:57
電圧	15 kV	50 kV
電流	160 μA	8 μA
時間	50 秒	50 秒
DT%	24 %	21 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
13 Al	アルミニウム	○			
14 Si	けい素	○			
29 Cu	銅	○			
33 As	ひ素	○			
47 Ag	銀	○			
50 Sn	すず	○			
82 Pb	鉛	○			
79 Au	金	??			
80 Hg	水銀	??			

HORIBA MESA-500 定量結果

コメント：高知 No.34 処理後

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/μA)
29 Cu 銅	92.21	0.26	420.427
14 Si けい素	1.71	0.07	0.108
50 Sn すず	1.54	0.13	2.774
82 Pb 鉛	1.51	0.15	1.658
13 Al アルミニウム	1.28	0.09	0.039
33 As ひ素	1.23	0.11	3.700
47 Ag 銀	0.46	0.07	1.060
80 Hg 水銀	0.03	0.03	0.032
79 Au 金	0.02	0.03	0.020



蛇尾 (361)

丸柄 (360)

保存処理を終えた状態の帯金具



帯金具赤外線写真 (上段：蛇尾、下段：丸柄)

第 章 付編 1997・1998年度飛田坂本遺跡の調査

飛田坂本遺跡 - 1997年度調査 -

1 調査の概要

1995年度に行われた試掘調査の結果を受け、'97年度は4月1日から6月30日の間、Fig.46の対象地域において、調査区を設定した。調査面積は計1,950㎡である。その結果、A - 区より弥生土器及び土師質土器片約20点、A - 区より弥生土器、土師質土器及び瓦器片約40点、青磁碗1点、ピット約30基、B - 区より弥生土器、土師質土器、瓦器、東播系須恵器及び近世陶磁器片約50点、青磁碗1点、B - 区より弥生土器及び土師質土器片数点、C区より若干の瓦器片が各々出土あるいは検出された。Fig.47はA - 区北壁及びその延長でB - 区中央部を横断する土層堆積状態で、土質等は下記の如く

である。A - 区のピット群は 層上面で検出したが、所属時期は不明である。中世の遺物は 層から 層で確認している。B - 区では 層などから貼付口縁などの弥生土器が出土しているが、

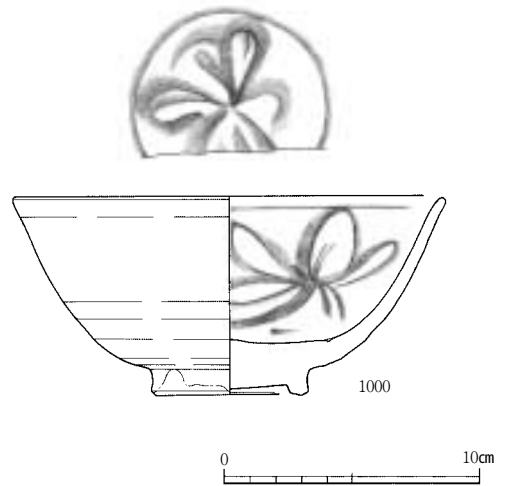


Fig.45 B - I区出土青磁碗実測図

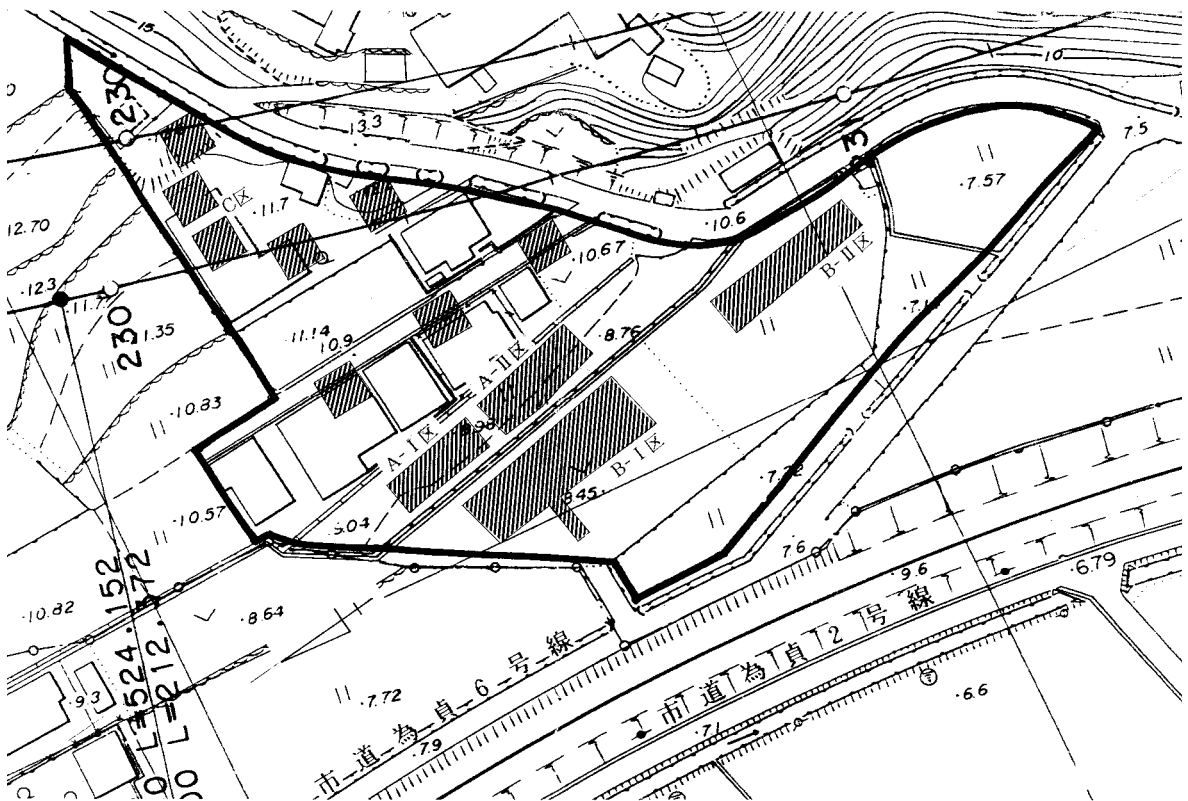


Fig.46 1997年度調査区位置図

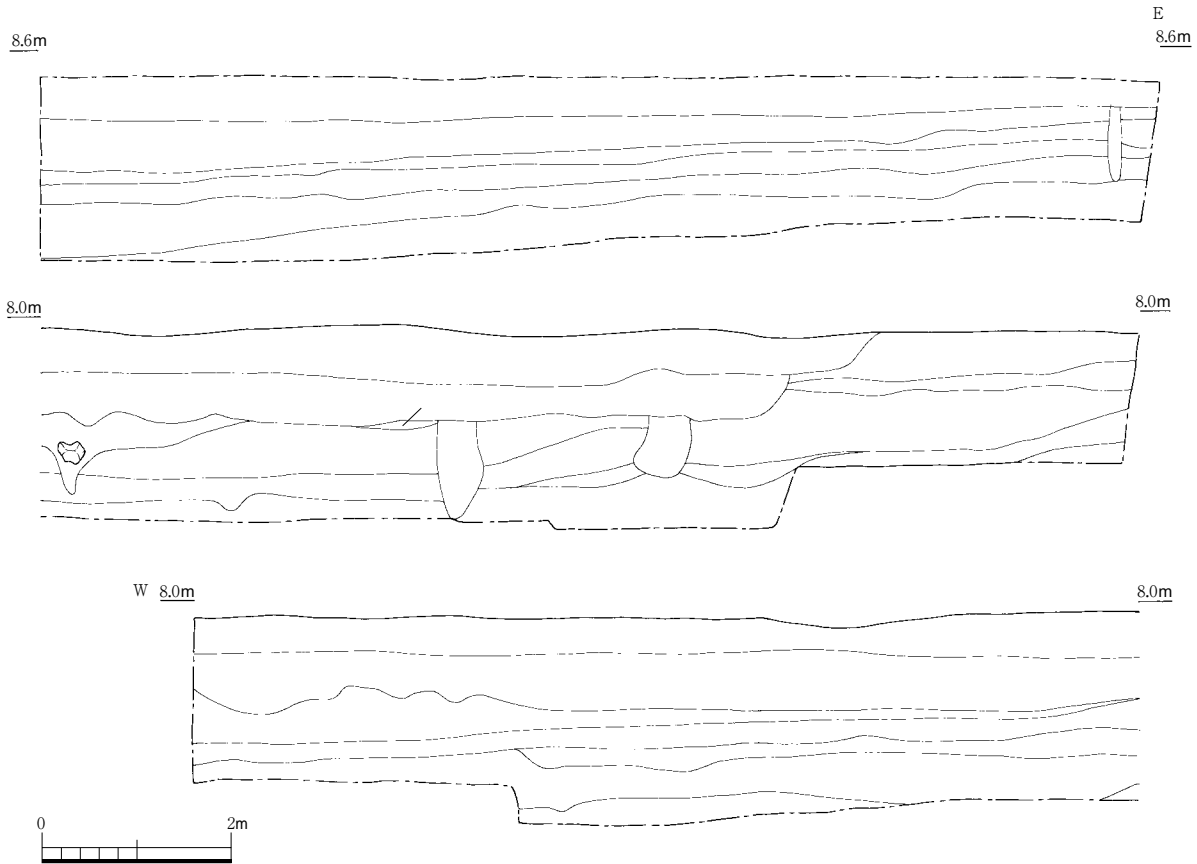


Fig.47 基本層準

当該期の純粋な包含層は確定できなかった。

Fig.45はB - 区南部の 層下層より出土した青磁碗である。内面は劃花文で、外面下半は回転ケズリを施し、外底を除く全面に施釉する。断面は灰色を呈すが、焼成状態によりやや褐色がかった部分がある。釉には貫入が入る。当該期の青磁碗は、'96年度の調査でも劃花文1点、鎬蓮弁文のものが複数点報告されている。

2 基本層準 (Fig.47)

層：耕作土

層：整地層 (ダケ土)

層：オリブ黒色に褐色を含むシルト

層：オリブ黒色シルトに2 ~ 25mm大の礫を含む，微量の近現代遺物を含む

層：旧耕作土

層：灰黄褐色と黒褐色が混ざる粘土質シルトに5 ~ 25mm大の礫を含む，B区では若干の炭化物を含む

層：灰黄褐色と黒褐色、褐色が混ざる粘土質シルトに数 ~ 50mm大の礫を含む

層：暗褐色と褐色が混ざる粘土質シルトと多量の数 ~ 60mm大の礫が混ざる，層に相当する可能性あり

層：オリブ黒色と褐色が混ざる粘土質シルトとオリブ黒色粘土が混ざる，数 ~ 数十mm大の礫を含む

層：暗灰黄色に明褐色を含む粘土質シルトに数 ~ 50mm大の礫を多く含む，中世前期の遺物を少量含む

層：黒褐色に赤褐色を含む粘土質シルトに数 ~ 25mm大の礫を含む

層：灰色粘土質シルトに数 ~ 20mm大の礫を含む

層：オリブ黒色粘土に数 ~ 25mm大の礫を含む

飛田坂本遺跡 - 1998年度調査 -

1 調査に至る経過および調査の方法

1998年度の飛田坂本遺跡に関する調査は四国横断自動車道（伊野 - 須崎間）建設工事に伴うものである。1996年の本発掘調査時に着手できなかった生活道部分に関する調査で、高速道路本体工事に伴う約4mの道路幅に沿って23mほどの長さの範囲の調査である。

飛田坂本遺跡は、須崎市神田飛田字坂本、吾桑、為貞に所在する。1996年度調査の結果、弥生時代以降、断続的に営まれた集落遺跡であり、中世前期に遺跡が盛期を迎える遺跡であることが明らかになった。在地の土師器とともに、貿易陶磁（青磁・白磁）・瓦器など13世紀前後の遺物がまわって出土しており、当地周辺の土器様相を知る上で重要な遺跡である。また、近世の墨書木札も出土し、稲作に関わる遺物として注目されている。

今回の調査区は1996年度の調査B区に連続した場所であり、現地に残されていた96年度調査で使用した測量杭を基準に4mグリッドを設定して調査を行った。また、標高については遺跡近くに残っていなかったため、高速道路関連工事に使用する基準点から遺跡内の測量杭に移設して使用した。

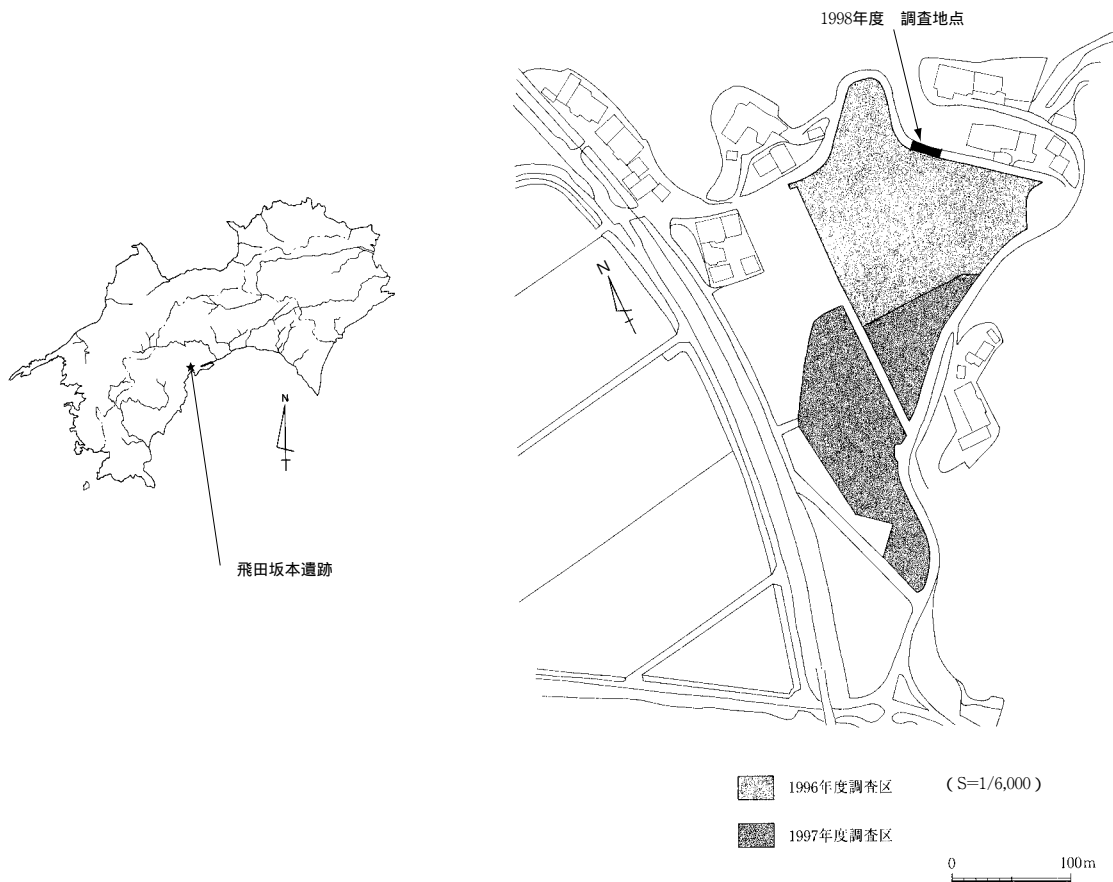


Fig.48 飛田坂本遺跡位置図及び1998年度調査地点

調査対象地、北西端にTR - 1を設定、土層確認のうえ、遺物包含層上面までは重機で除去、包含層より下は人力により掘削、遺構検出および遺構調査を行った。大半の遺物が基盤層直上に形成された包含層及び遺構からの出土であり、面積は少ないものの遺構の残存状況は良好であった。

調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員松村信博が担当し、重機オペレーター西村進一、現場作業員、野村寛、森光初悦、梅原真知子の合計5名の体制で実施する。調査面積は120㎡、調査期間は1998年5月25日から6月4日の間、実働1週間の調査である。



調査風景



Fig.49 飛田坂本遺跡と周辺の主な古代・中世の遺跡

2 調査の成果

(1) 土層堆積状況

調査地点の北西端（TR - 1）、南半の礫集中部（TR - 2）とその上段（中央バンク）の3箇所
に土層観察のためのトレンチを設定、堆積状況の記録を採った。

基本層序は中央バンクの堆積状況をもとに設定した。層を旧耕作土とし、以下層が灰褐色シル
ト質粘土、層灰黄褐色（オリーブ褐色）シルト質粘土、層にぶい黄褐色（暗灰黄色）粘土質
シルト、層褐色粘土質シルト（炭化物含有・黄褐色小礫混）、今回の調査地点に限っていえば基
盤と考えられる黄褐色粘土層（礫混）の上面に最終的に堆積する遺物包含層が層である。層～
層の間に、さらにいくつかの層の堆積がみられる。その堆積の状況についてはFig.50に示した。
また、～の各層ごとにさらに細分できる地点もあったが、遺物の採り上げに際してはあえて細
分をしていない。

北西端に設定したTR - 1では、工事の対象となった生活道から下段の畑にかけての土地の変遷
が確認できる。この地点に生活道が付設されたのは、昭和30年代のことであり、それ以前は道路の
下は畑および果樹園として利用されていた。

今回の調査では、前回の調査で残されていた礫集中部の確認も道路下の調査と併行して行う。
1996年度調査では、当初、礫の集中が基壇状に構築されたものであると想定して調査を進めたが、
調査の過程でそれに否定的な見解に至ったことが報告されている。残された礫集中部に設定した
TR - 2では、礫の集中が、階段等何らかの構造物を人為的に造り出すために意図的に構築された
ものではなく、緩やかな斜面であった旧地形を改変し、生活領域となり得る平坦地を造り出すため
に、斜面下方に投棄された礫であり、土地（斜面）の埋立て・平坦地造成を意図したものであるこ
とが明らかになった。

TR - 2・TR - 3の堆積状況から、斜面上方は削り出され、斜面下方が埋立てられている様子が
わかる。調査区に接する北西側への遺跡地の広がりを確認するために、トレンチを設定し調査を行
ったが、遺構・遺物ともに検出することはできなかった。今回調査した道路下の部分が、四国横断
自動車道関連の対象となる飛田坂本遺跡の北限であると考えられる。



TR - 2 堆積状況

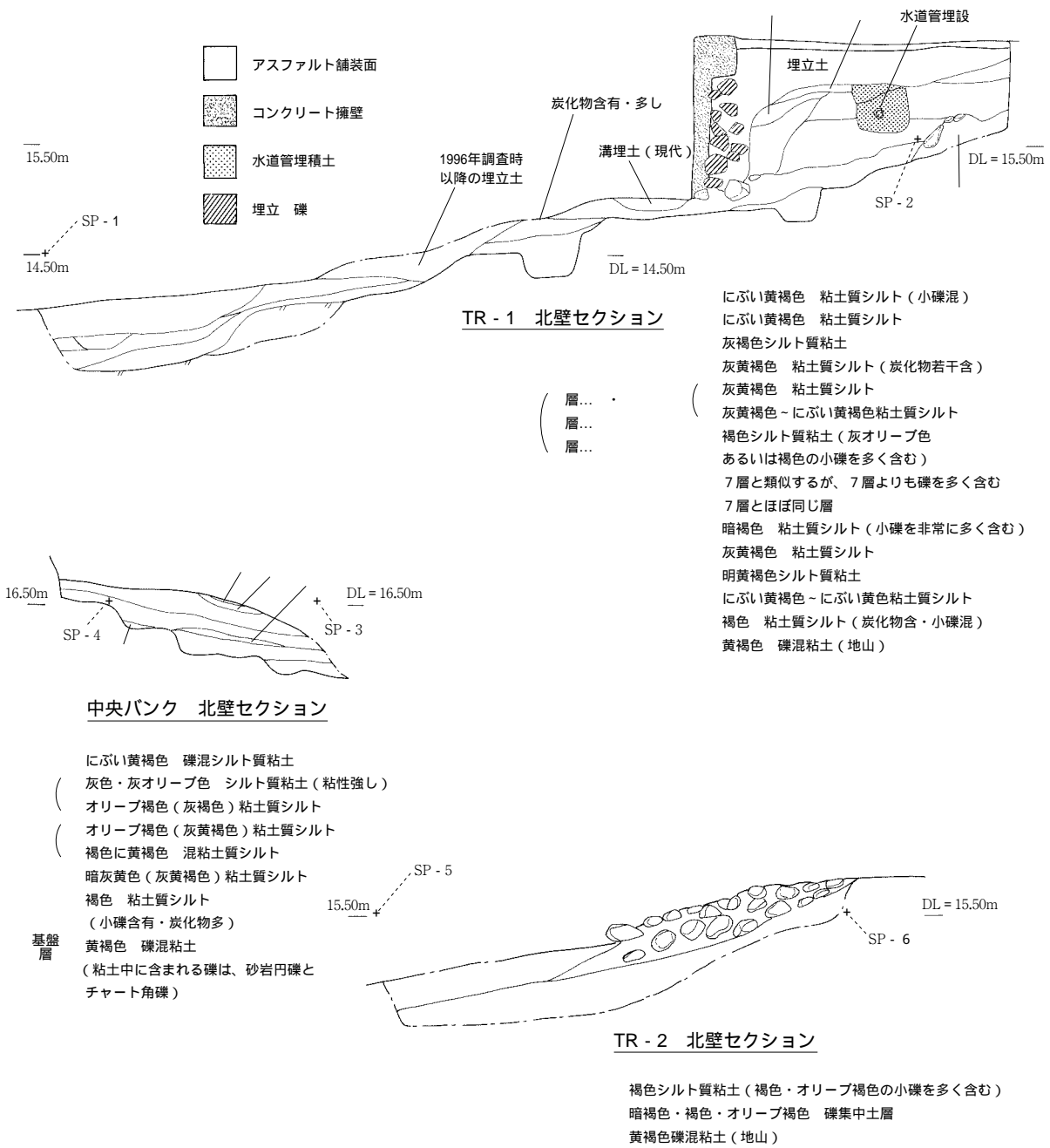


Fig.50 土層堆積状況 (S=1/60)

(2) 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、ピット85基、土坑1基(SK-10)であり、ピットの並びおよびピット底面レベルを元に掘立柱建物跡3棟(SB-5~7)、柵列2列(SA-1~3)を復元し、それぞれ遺構ごとにピット番号を付した。また、SB・SAを構成するピット以外の遺構については、遺物の出土したピットにのみP-001~P-011の遺構番号で示す。調査区の制約上、建物跡等の構造物を完全に復元することはできなかった。総柱の掘立柱建物と推定されるSB-5など、調査区外・調査区の南西方向に続いている遺構もある。

なお遺構名については、飛田坂本遺跡内での重複を避けるため1996年度調査で確認された遺構番号に続く番号、あるいは重ならない番号とした。1997年度にも調査が行われているが、97年度調査では遺構番号の付く遺構は検出されていない。

A 遺構と遺物

掘立柱建物(SB)

SB-5

梁間1間以上×桁行6間の東西棟で、1996年度調査時の柱穴をあわせると6間×3間の総柱建物であると推定される。棟方向はN-50°-W、梁間の柱間距離は164cm~186cm、桁行の柱間距離は174cm~204cm、梁間については南東端の柱間距離のみが186cmで、それ以外は164cmから168cmの間におさまる。建物の規模は梁間5.24m×桁行11.5mほどであるが、梁間については推定値である。

出土遺物の中で図示可能遺物は1001(P1)・1002(P4)・1003(P3)の3点である。1001は土師器坏で14世紀初頭から前半、1002は瓦器椀で13世紀後半から14世紀前半、1003は須恵器甕だが上胴部破片であり、詳細な時期はわからない。それ以外にP2・3・4・5・6から各々数点から20点ほどの土師器細片が出土しているが、時期の特定できる資料はない。

西北隅にあたる柱穴(P1)から出土した1001には、底部に穿孔が認められ、この建物の廃絶に伴う地鎮的色彩を持つ埋納遺物である可能性が指摘できる。

SB-6

梁間1間以上×桁行3間の東西棟で、棟方向はN-57°-W、梁間の柱間距離は180cm~186cm、桁行の柱間距離は176cm~186cmを測る。建物の規模は梁間は不明で桁行が5.6m。

図示可能遺物はないが、P3・P6から土師器の細片数点が出土している。中世の土師器だが、それ以上の時期特定はできない。

SB-7

1間以上×1間以上であることがわかるのみである。掘立柱建物の可能性を持つ遺構として示した。調査区の北西隅に位置する。建物の様相はつかめない。

柱間距離は102cmと108cm、方向もN-16°-Eと他の掘立柱建物とは全く異なる。

図示可能遺物はないが、P1から土師器細片2点が出土している。



Fig.51 1998年度調査 遺構平面全体図 (S=1/100)

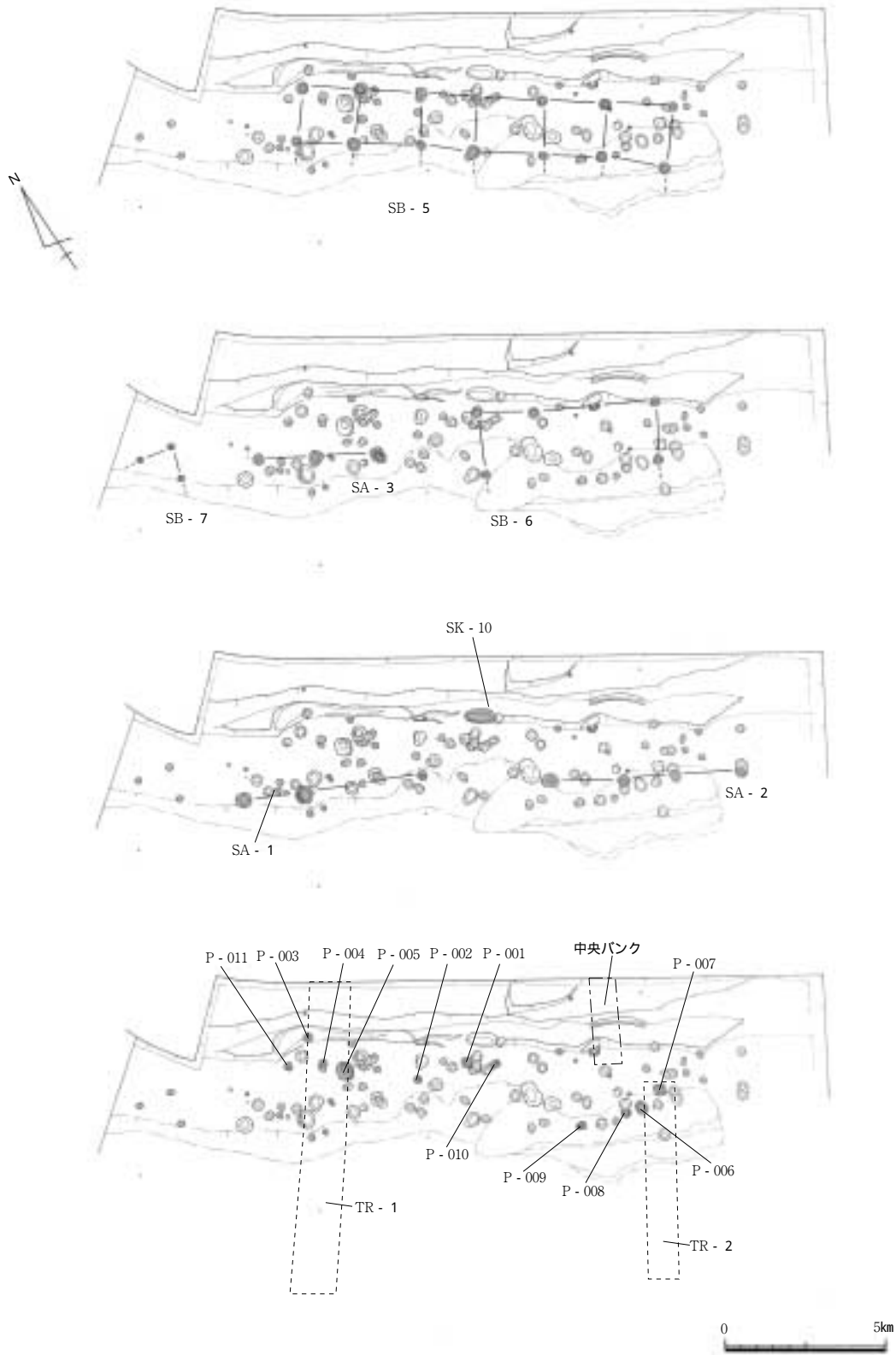


Fig.52 遺構配置図、設定バンク・トレンチ位置図 (S=1/200)

柵列 (SA)

SA - 1

東西方向の柵列である。遺構底面標高が同じ柱穴が並ぶため柵列としたが、今回の調査区外に続く遺構だと推定される。柱間距離は180cm～192cm、方向はN - 60° - W。

1996年度調査時に検出された柱穴と併せて検討すると、梁間5.8m×桁行4.5m程度の規模を持つ側柱の掘立柱建物である可能性もある。

出土遺物は1004の東播系捏ね鉢で、P4から出土している。12世紀末～13世紀初頭に属する遺物である。それ以外にP2から瓦器小片2点、土師器小片2点が出土する。この建物が上述のような掘立柱建物であるとすれば、P4は建物の南東隅の柱穴にあたる。

SA - 2

東西方向の柵列である。遺構底面標高が同じ柱穴が並ぶため柵列としたが、調査区外に続く可能性も残る。柱間距離は168cm～216cm、方向はN - 57° - W。間に挟まれたP2・P3間の柱間距離が168cmと狭く、両脇のP1・2間、P3・4間は200cmを超える。

出土遺物は1005・1006。P3から1005の土師器小皿が、P2から1006の瓦器椀が出土している。他にP2から土師器・瓦器小片が、P3から土師器細片が出土している。

SA - 3

東西方向の柵列である。遺構底面標高が同じ柱穴が並ぶため柵列としたが、調査区外に続く可能性も残る。柱間距離は186cm、方向はN - 57° - W。

図示可能遺物はない。出土遺物はP3から土師器細片3点のみである。

土坑 (SK)

SK - 10

平面形は長軸96cm、短軸48cmの楕円形で、検出面からの深さは約18cm、浅い皿状の土坑である。埋土には焼土とみられる赤変した土と炭化物を多く含み、底面近くには炭化物の集中土層が確認されている。底面は東側が高くなっており、若干傾斜している。

出土遺物は1007の土師器坏と1008の砂岩円礫である。円礫には明らかな使用痕は認められないものの、自然礫ではなく人為的に球形に整えられたものである。この球形を呈する石製品(1008)は土坑の東端から検出された。他に土師器細片が出土しているが、中世であること以上に時期の特定はできない。

ピット (P)

P - 001～P - 011

ピットについては、遺構の計測表及び出土遺物の一覧表 (Tab.21) を作成した。

図示可能遺物は、1009(P - 007)・1010(P - 008)・1011(P - 009)の3点で、いずれも瓦器椀で

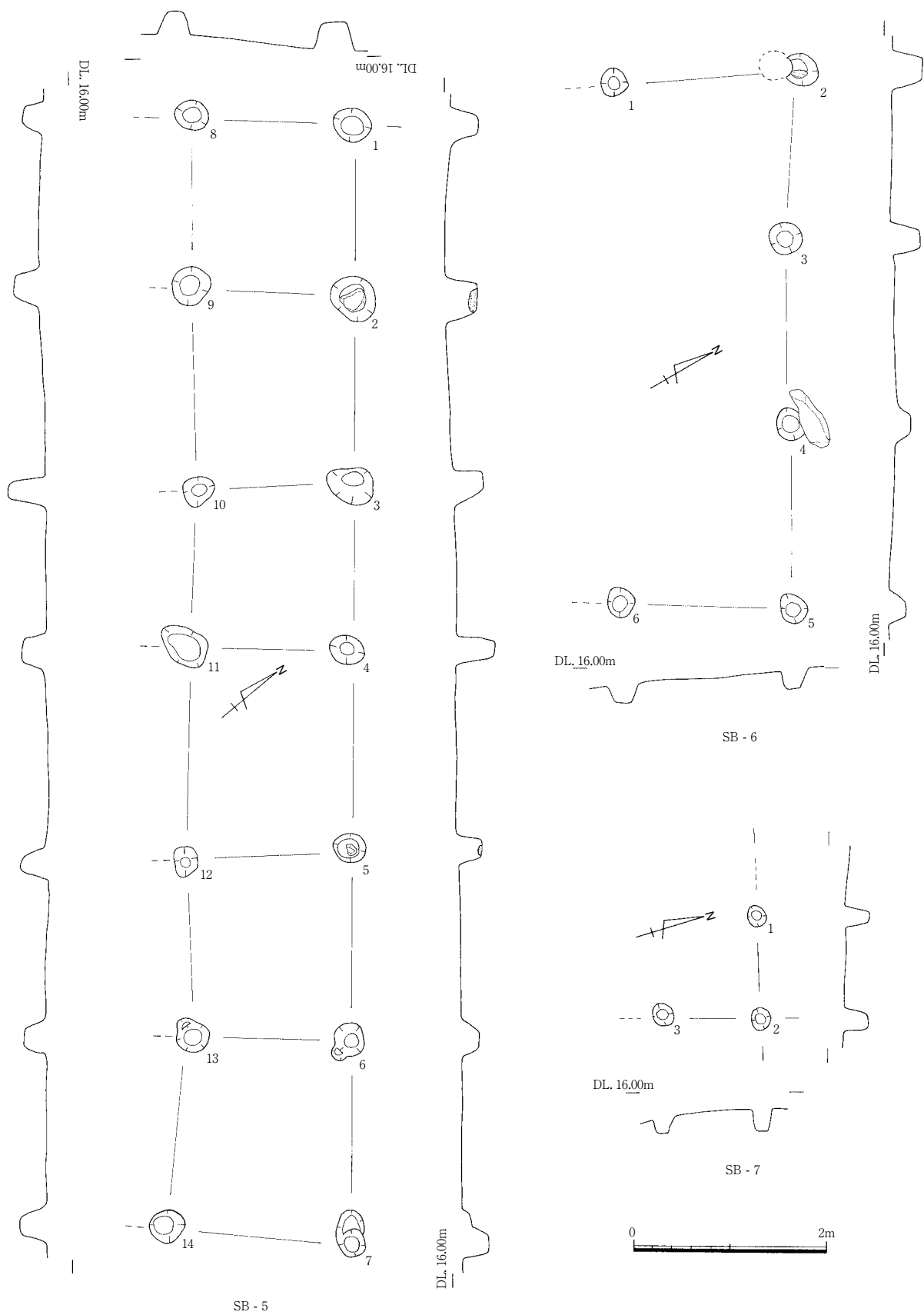


Fig.53 SB-5・SB-6・SB-7 遺構平面エレベーション図 (S=1/60)

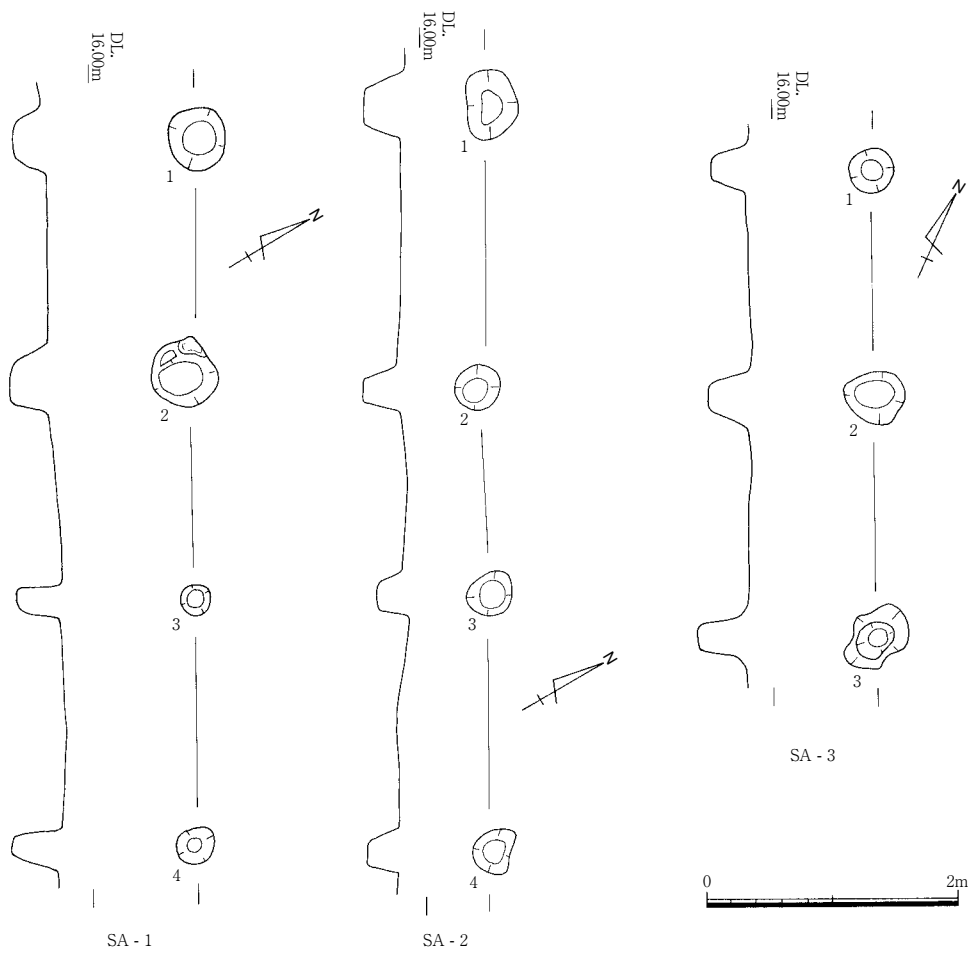
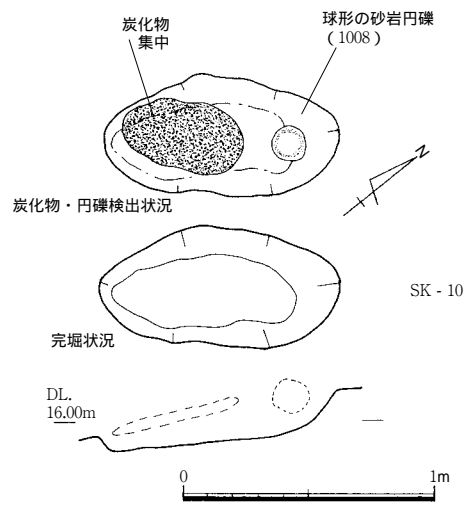


Fig.54 SA-1・SA-2・SA-3・SK-10遺構平面・エレベーション図 (S=1/60・1/30)

ある。法量、技法ともほぼ同一で、13世紀後半から14世紀にかけての瓦器椀が終焉する頃の遺物だと考えられる。

これらのピットについては建物跡等の遺構としての復元はしていない。しかし、遺構の底面標高で比較した場合、A-15.49～15.55m、B-15.66～15.70m、C-15.76～15.79m、D15.85m以上と4類型に分類され、A～Cのグループについては間隔は一定でないものの、ほぼ同じライン上に並ぶ。今回の調査地点の様に検出面が一定でない、つまり様々な要因で同一生活面でピットを検出できない場合は、ピット底面標高の比較が遺構復元において有効な指標となる。検出面最大径と検出面からの深さを比較した場合、例外はあるものの、同じグループで深さが深いほど最大径も大きいという対応関係を認めることができる。

Tab.21 遺構（ピット）計測表

遺構名	検出面最大径 (cm)	検出面からの深さ (cm)	検出面標高 (m)	底面標高 (m)	底面標高による類型	出土遺物	時期
P - 001	36	27	15.930	15.660	B	土師器小片 2	中世
P - 002	25	18	15.942	15.762	C	土師器細片 6	中世
P - 003	32	15	16.002	15.852	D	土師器細片 3	中世
P - 004	56	20	15.986	15.786	C	土師器細片 8	中世
P - 005	24	21	15.900	15.690	B	土師器細片 1	中世
P - 006	44	24	15.818	15.778	C	土師器小片 3	中世
P - 007	40	41	15.928	15.518	A	土師器小片 5	中世
P - 008	30	27	15.818	15.548	A	土師器小片 5	中世
P - 009	26	23	15.720	15.490	A	土師器細片15	中世
P - 010	32	24	15.936	15.696	B	土師器細片 8	中世
P - 011	27	28	16.068	15.788	C	土師器細片 1	中世

B 遺構外出土遺物（Fig.55-1013～1020）

包含層出土遺物は、細片が多く、時期判定のできる図示可能遺物は少なかった。大半の遺物が包含層最下層（基盤層直上に堆積）である 層中からの出土である。

層出土遺物として1020の擂鉢口縁部小片が挙げられるにすぎない。乗岡編年の備前3期-bに相当、18世紀初頭の年代観が与えられる。¹⁾

層出土遺物は、1018・1019の土師器坏である。中世の土師器だが、小片で、ロクロ目を残すこと以外調整も不明瞭であり、細かい時期の特定はできない。

層からは1013・1014の土師器坏、1015の瓦器椀、1016・1017の土師器甕が出土している。これらの遺物は13世紀から14世紀前半の時間幅の中で捉え得る遺物である。ただ、この時期の土佐の土師器甕の様相は明らかになっておらず、細かい位置付けはできない。

註 1) 乗岡 実「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会（2000年）

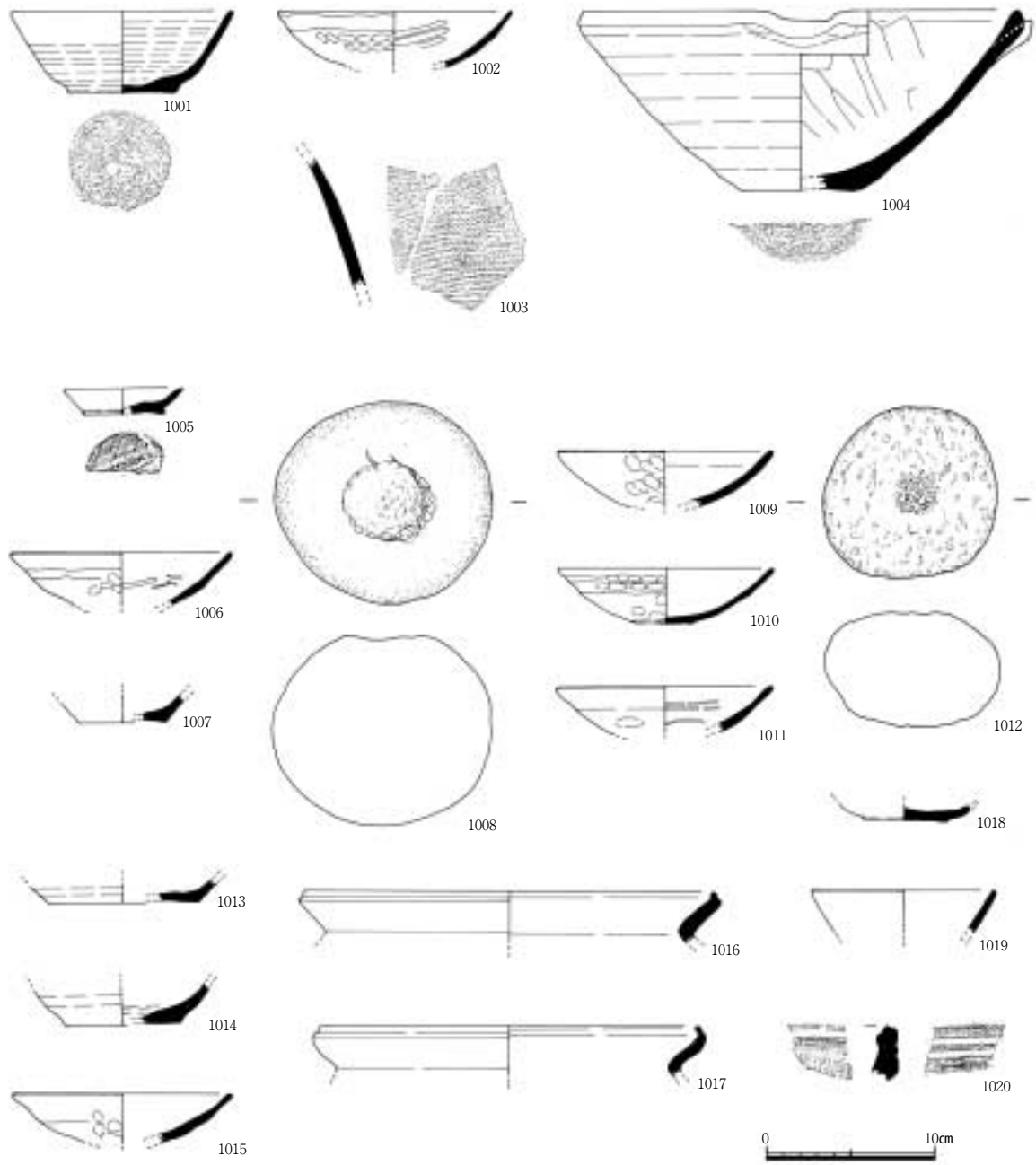


Fig.55 1998年度調査出土遺物

Tab.22 1998年度出土遺物観察表(土器)

Fig. 番号	図版 番号	出土地点 層位	器 種	法量 (cm)			色調・胎土	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
55	1001	SB-5・P-1	土師器坏	12.8	4.4	6.2	内面にぶい橙色、外面橙色。精選された胎土。	見込は凹状に窪む。底部は一旦屈曲した後、内湾気味に湾曲して立ち上がる。ロクロ目あり。底部回転系切り痕。	14世紀初頭～前半。総柱建物の西北隅の柱穴から出土。
55	1002	SB-5・P-1	瓦器椀	13.4	(2.5)	-	内外面とも灰白色。2mm大の白色砂粒以外は、微細砂を含むのみ。	外面指頭圧痕、内面へら磨きが残るが不明瞭。いぶしが不十分で軟質。全体に灰色に発色する。	SB-5・P-1はSB-6のビットと切り合い関係にある。
55	1003	SB-5・P-3	須恵器甕	-	-	-	内面灰白色、内面灰色。	外面に細かい平行叩きが残る。	上胴部の破片。
55	1004	SA-1・P-4	東播系須恵器 捏ね鉢	25.8	10.7	7.0	内外面灰色。	底部に回転系切り痕が残る。	ビットの壁にへばり付いて出土。遺構を柵列(SA)としたが、掘立柱建物の角の柱穴の可能性もある。
55	1005	SA-2・P-3	土師器小皿	6.9	1.5	4.8	内外面橙色。精選された胎土。	底部に回転系切り痕が残る。底部外縁が外方へ突出。	
55	1006	SA-2・P-2	瓦器椀	12.9	(2.5)	-	内面黒色、外面灰白色。精選されており、微細砂以外ほとんど砂粒を含まない。	外面指頭圧痕、内面へら磨きが残る。炭素吸着が良港で、内面から外面注意に書いて黒色に発色。	
55	1007	SK-10	土師器坏	-	(1.7)	(5.2)	内外面にぶい橙色。	摩耗顕著、調整不明。	
55	1009	P-007	瓦器椀	12.6	(3.3)	-	内面浅黄色、外面オリーブ黒色。1～3mm大の長石・石英粒を含む。他は微細砂のみ。	外面指頭圧痕。内面口縁部付近から外面にかけて黒色に発色。	
55	1010	P-008	瓦器椀	12.8	3.3	3.0	内外面灰白色。	外面指頭圧痕。	
55	1011	P-009	瓦器椀	12.6	(2.8)	-	内外面オリーブ黒色。	外面指頭圧痕、内面へら磨き。	
55	1013	層	土師器坏	-	(1.3)	(8.9)	内外面橙色。精選された胎土。	ロクロ目が残る。	
55	1014	層	土師器坏	-	(2.5)	6.8	内外面にぶい黄橙色。チャートの微細砂を含む。	見込は凹状に窪む。底部は一旦屈曲した後、内湾気味に湾曲して立ち上がる。ロクロ目あり。底部回転系切り痕。	中世前期
55	1015	層	瓦器椀	12.8	(2.9)	-	内面浅黄色、外面にぶい黄橙色。	外面指頭圧痕。	
55	1016	層	土師器甕	(24.3)	(3.1)	-	内外面にぶい橙色。砂粒を多量に含む。雲母・角閃石・ガラス質の鉱物を少量含有。	頸部はくの字状に強く屈曲、口縁はヨコナデにより仕上げる。口縁端部はヨコナデにより強く屈曲短く上方に立ち上がる。	
55	1017	層	土師器甕	(22.2)	(3.0)	-	内外面灰白色。		
55	1018	層	土師器坏	-	(1.0)	4.9	内面にぶい黄橙色、外面橙色。	見込にロクロ目残る。	
55	1019	層	土師器坏?	(10.8)	(3.0)	-			
55	1020	層	備前播鉢	-	(3.3)	-	内面にぶい赤褐色、外面灰赤色。	内面に条線、単位は不明。外面2条の凹線。	乗岡編年 近世3期b - 18世紀初頭

Tab.23 (石器・石製品)観察表

Fig. 番号	図版 番号	出土地点・ 層位	器種	石 質	重量 (g)	最大径 (cm)	最小径 (cm)	厚さ (cm)	特 徴	備 考
55	1008	SK-10	石製品 - 球状礫	花崗岩?	2,400	12.9	11.8	11.0	使用痕は認められない。整形加工により、球形に整えられた円礫。	SK-10検出時に確認する。遺構埋土に2/3ほど埋まった状態で検出された。
55	1012	P-08	敲石	火成岩の一種 表面全体に小孔を持つ	930	10.3	10.0	6.7	扁平な敲石。平坦面中央部付近に敲打痕が確認できる。	

3 飛田坂本遺跡Ⅲ - 1998年度調査のまとめ

今回の調査は、飛田坂本遺跡1996年度調査で設定されたB区¹⁾の北側に連続する地点の調査である。96年度調査ではB区の遺構からは12世紀後半から14世紀前半にかけての遺物が出土し、ピットを中心とする遺構が検出されている。今回の出土遺物も、ほぼ同じ時期のものである。中世の遺構面の形成は、緩斜面を削り出し、斜面下方を埋め立てて行われている。削られた斜面部は磨滅した砂岩礫を含む黄褐色粘土層であり、斜面削り出しに伴って多くの礫が掘り出され、平坦面を形成するため斜面下方へ投棄され、礫集中部が形成される。96年度調査では礫状遺構の存在が報告されたが、断ち割り調査の結果、これは平坦面形成に際して生じた礫集中部であることが明らかになった。

さらに北側へと続く斜面の確認調査も行ったが、遺構・遺物とも検出されなかった。飛田坂本遺跡の中世（12世紀末～14世紀前半）の遺構面の北限は今回の調査地点だといえる。

調査面積は120㎡と僅少ではあったが、柱穴と目されるピットが85基検出されている。ピットの並びをもとに復元し得た建物跡は、可能性のあるものも含めて掘立柱建物3棟（SB - 5～7）、柵列3列（SA - 1～3）であり、他に焼土を含む土坑1基（SK - 10）を検出した。これらの建物跡はピット列の並びの方向から、N - 57°～60° - Wの方向を示す一群とN - 50° - Wの方向を示す一群に、さらに前者は遺構の重なりから2時期以上にわたることが予想される。前者は、SB - 6・SA - 1～3、後者はSB - 5・SK - 10が相当する。遺構出土遺物の少なさゆえに、遺構の細かい時期についての特定はできないものが大半だが、その中でSB - 5とSA - 1は、隅柱穴（SB - 5・P - 1とSA - 1・P - 4）出土遺物の時期（SB - 5 1001・14世紀初頭～前半、SA - 1 1004・12世紀末～13世紀初頭）から、SA - 1 SB - 5の先後関係を認めることができる。また、SA - 2は13世紀後半～14世紀初頭であり、SA - 1 SA - 2の先後関係が、またSB - 5とSB - 6との遺構の切り合いからSB - 6 SB - 5の先後関係の特定ができる。

以上の先後関係及び建物跡等の位置から、（SA - 1）（SB - 6 SA - 2・SA - 3）（SB - 5・SK - 10）という遺構の変遷が予想される。SB - 6とSA - 2、SA - 3については先後関係を決定することはできず、SB - 5とSK - 10の関係についても遺構の方向と配置による推定にすぎない。しかし、この地点には、少なくとも12世紀末以降14世紀前半までの約150年間に4時期以上の遺構があることは確実である。

N - 60° - W N - 57° - W N - 50° - Wと方向を変えながら遺構は変遷する。柵列としたピット列も掘立柱建物の一側辺を構成する可能性が強いが、96年度調査の柱穴と併せて復元できたのは、SA - 1とSB - 5の2棟であり、SA - 1は3間×3間の側柱掘立柱建物、SB - 5は3間×6間の総柱掘立柱建物となる。

今次調査の成果をまとめる。

- 1) ほぼ同一の検出面で遺構は検出される。平坦面は緩斜面を削り出し埋立てて成形されており、遺構面形成時期は12世紀末（後半）～13世紀初頭である。
- 2) 遺構の時期は4時期以上であり、遺構の変遷を推定することができる。

- 3) 12世紀末から13世紀にかけては、側柱の掘立柱建物であったと想定されるが、14世紀に入り、総柱の掘立柱建物（SB - 5）が登場する。
- 4) SB - 5の東北隅の柱穴には、底部に穿孔された土師器杯（1001）の埋納が認められ、SK - 10からは焼土と共に球形に整形された礫が検出されるなど、祭祀的な色彩を持つ遺構が確認された。
- 5) この遺構面は14世紀前半まで利用されている。

なお、96年度調査では、B区包含層から、弥生土器及び古代の土器が報告されている。古代の遺物は量的には少ないものの、中世の遺構面形成以前にB区周辺が利用されていたことを示す資料として重要である。特に、9世紀前半の須恵器杯は、外底に「廣道」という墨書の確認される墨書土器であり、注目される。最近、この廣道は国司「平群朝臣廣道」と関連するのではないかという重要な指摘がなされている。²⁾延暦24年に平群朝臣廣道が土佐守となるという記事と、同じ延暦24年、土佐の駅路の整備に関する記事を日本後記に確認することができる。

飛田坂本遺跡は、水陸の交通の重要な結節点に位置している。陸路は中村街道、水路は桜川である。中村街道は遺跡に近接して通っている。高知城下と中村を結ぶ近世の幹線道路であり、遺跡付近から坂道を上り始めると近世に付設された石畳が残り、土佐市市野々へと抜ける名護屋坂に通じる。名護屋坂は高知城下から追放刑を受けたときに名護屋坂以西という規準とされた坂である。中村街道が街道として、いつ成立したのか、正確にはわからないが、古代中世を通じて幹線道路として機能した道であると想定されており、これが古代の官道であるという説もある。詳細な分析により墨書須恵器の「廣道」が国司廣道と関連することがより明らかになれば、古代の官道についての新たな問題提議となる。桜川は総延長6kmの河川ながら、須崎湾と遺跡周辺を結び、物資搬入に際しては重要な役割を果たしていたと考えられる。飛田坂本遺跡から96・97年度調査の際に出土した多量の貿易陶磁や瓦器碗などの搬入土器は、桜川の水運と結びつけて考えることができる。

それでは、飛田坂本遺跡の中世遺構面（B区周辺）はどのような性格を持っているのだろうか。

12世紀末に成立し14世紀前半まで存続。

主に掘立柱建物で構成される多時期の遺構が確認される。

多量の貿易陶磁・瓦器などまとまった搬入遺物。

交通の要衝に位置する。

10世紀～12世紀前半の遺物が飛田坂本遺跡には欠落しており、古代からの連続性はない。遺物や平坦地の造成方法からは一般集落とは異なる集落であり、瓦類が出土しないことから寺院ではない。12世紀末の成立という点から地頭との関連も可能性としては考えられようが、それを示す資料はあまりに乏しい。

現時点では飛田坂本遺跡・中世遺構面の性格を明らかにすることはできない。上記の特色を持つ集落であるということを提示し、地名・文献等含めた今後の研究の進展を待ちたい。

註 1) 小嶋博満『飛田坂本遺跡』1998年(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

以下、飛田坂本遺跡1996年度調査に関しては本書を参考にする。

註 2) 山本哲也氏の御教示による。氏は類例の検討などさらに慎重な検討が必要であると指摘する。

前田和男編『新編 土佐国古代編年資料 巻一』

写 真 图 版



西鴨地遺跡と周辺の景観（遺跡西側 字竹ノ下から撮影）



調査前の景観（遺跡東側より）



区 西端セクション



区 西端セクション（流路岸边の礫を含む）



区 東端セクション(層より上層のみ)



区 東端セクション



区 中央部 A・B境界バンク西壁セクション



区 西端セクション



区 自然流路・河岸 遺物出土状況



区 自然流路・河岸 遺物出土状況（検出された礫と木）



区 杭列・礫 検出状況



区 自然流路・河岸 流木・礫・杭列 検出状況



区 全景（東から）



区 自然流路（西から）



区 自然流路内 堆積状況



同 上



区 自然流路 河岸の様相



・ 区 自然流路 完掘状況



・ 区 自然流路 完堀状況 (南東から)



同 上 (東から)



区（調査地西端）調査開始時の状況



同 上



SD-1 及び周辺の小ピット 検出状況



同 上 完掘状況



区 自然流路 河岸の状況（南東から）



同 上（東から）



須恵器・坏 (159)



土師器・坏 (62)



土師器・碗 (110)



黒色土器・碗 (207)



黒色土器・碗 (205)



黒色土器・碗 (233)

西鴨地遺跡遺物出土状況(1) - 須恵器、土師器、黒色土器 -



土師器・坏



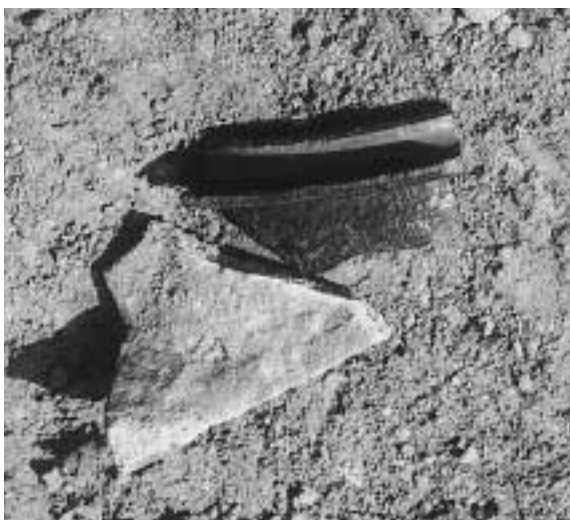
須恵器・壺 (231)



土師器・羽釜



須恵器 (167)



土師器・羽釜



土師器・甕

西鴨地遺跡遺物出土状況(2) - 須恵器、土師器 -



横櫛 (407)



横櫛 (406)



木製祭祀具 - 人形 (373)



曲物 - 測板 (413)



円形曲物 - 底板 (416)



円形曲物 - 底板 (413)

西鴨地遺跡遺物出土状況(3) - 木製品 -



木製祭祀具 - 刀形 (380)



曲物 - 側板と綴紐 (420)



割物 - 舟形容器 (424)



曲物 - 把手付底板 (414)



木錘 (割面) (398)



木錘 (出土状況) (398)

西鴨地遺跡遺物出土状況⁽⁴⁾ - 木製品 -



丸鞆 (360) 出土状況



蛇尾 (361) 出土状況



区 流木出土状況 (南から)



区 流木出土状況 (北から)

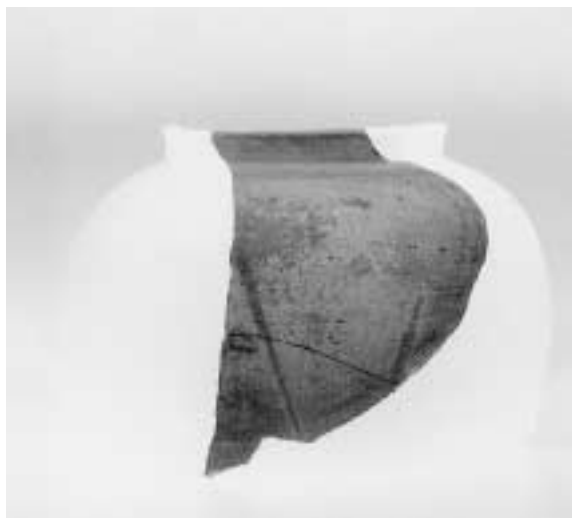


飛田坂本遺跡 SB-5・P-1



飛田坂本遺跡 SA-1・P-4

西鴨地遺跡・飛田坂本遺跡遺物出土状況



須恵器壺 (312)



須恵器壺 (305)



須恵器壺 (309)



須恵器壺 (303)



須恵器壺 (313)



古式土師器鉢 (17)

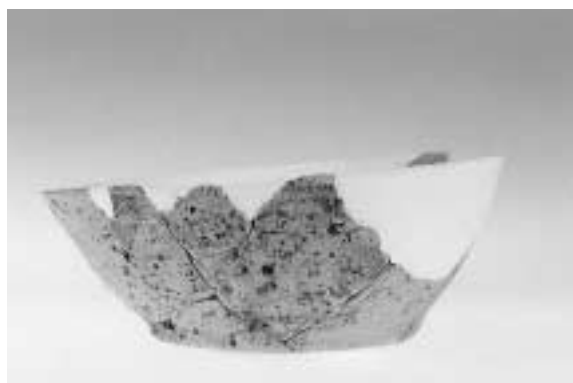
須恵器壺・古式土師器鉢



土師器坏VA類 (88)



須恵器坏B類 (171)



土師器坏VA類 (94)



須恵器碗A類 (110)



土師器碗 A類 (119)



黒色土器碗 b 類 (204)



黒色土器碗 b 類 (205)



黒色土器碗 b 類 (206)

土師器坏・碗、黒色土器碗



土師器皿 A類 (36)



土師器皿 B類 (51)



土師器坏 A類 (55)



土師器坏 A類 (56)



土師器坏 A類 (57)



土師器坏 B類 (62)



土師器坏 A類 (64)



土師器坏 B類 (69)

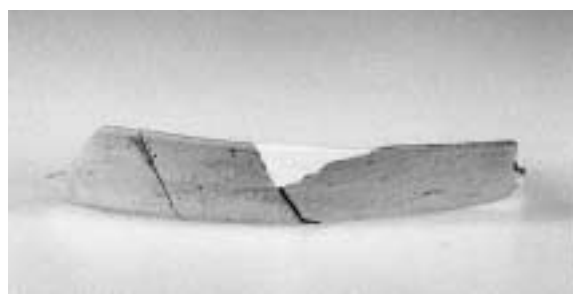


土師器坏 B類 (76)



須恵器皿 類 (127)

土師器皿・坏、須恵器皿



須恵器皿 類 (130)



須恵器坏A 類 (146)



須恵器坏A 類 (148)



須恵器坏A 類 (150)



須恵器碗B類 (178)



須恵器坏B類 (167)



黒色土器碗 (232)



灰釉皿 (247)

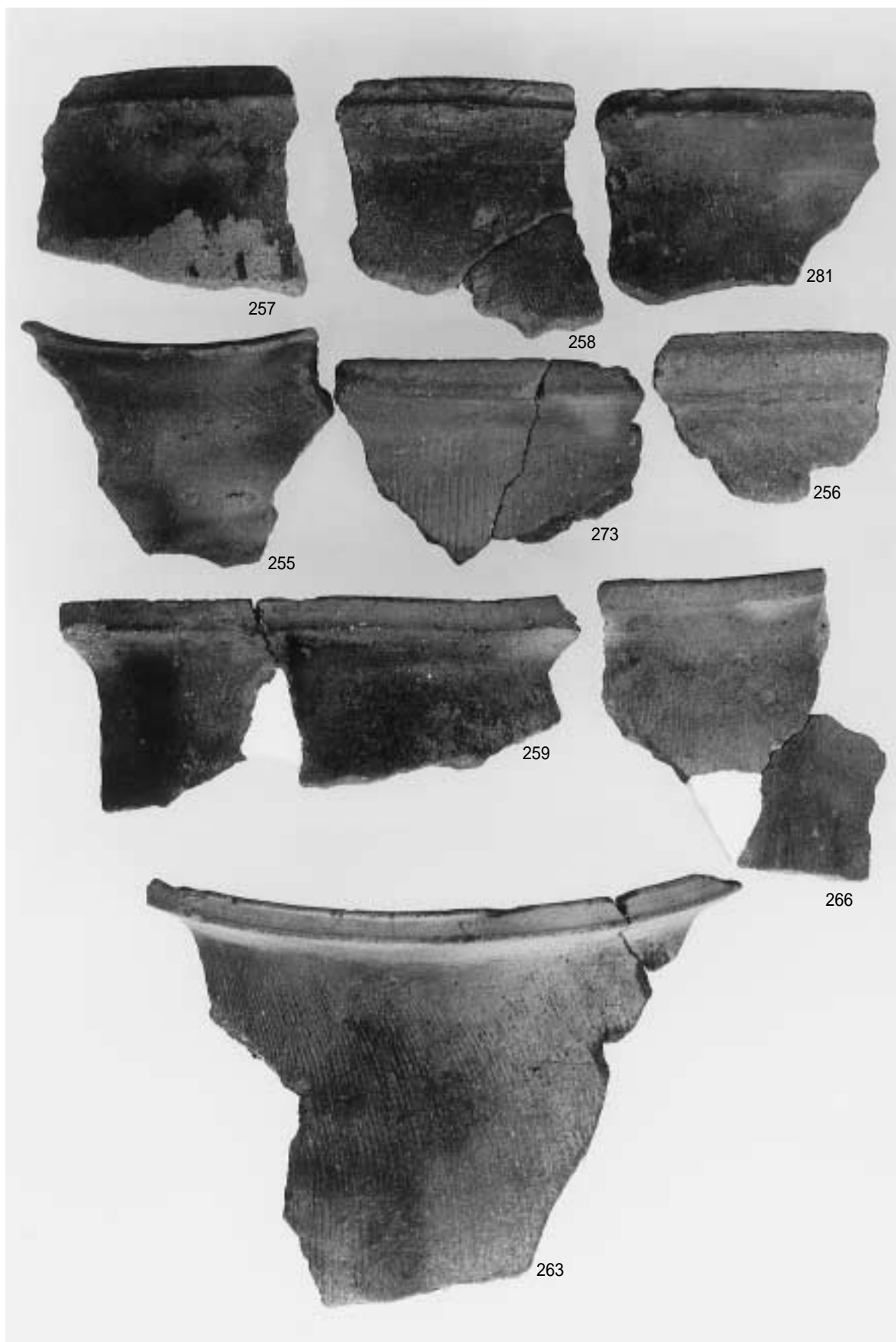


緑釉皿 (245)

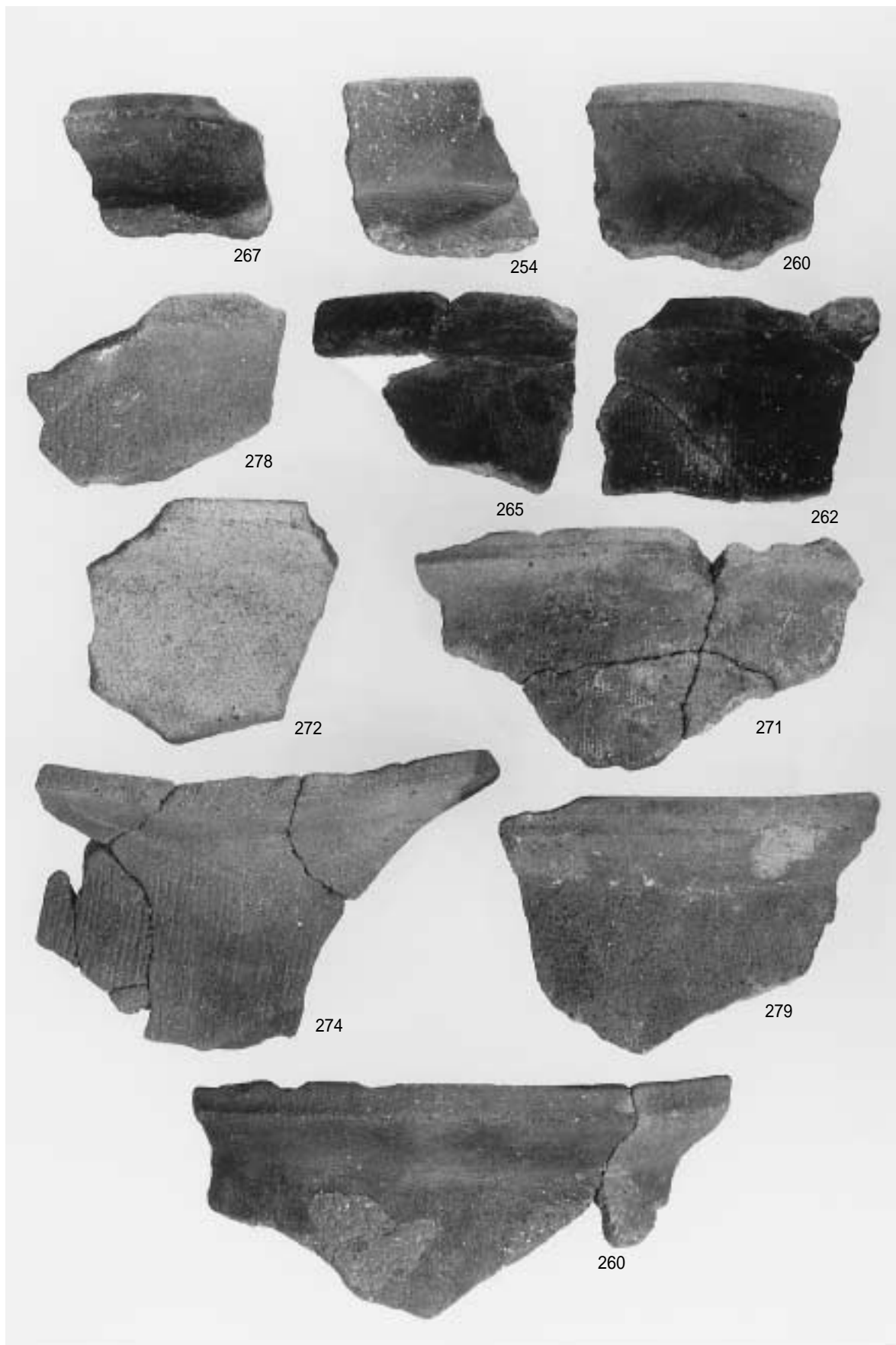


土師器坏 B類 (80)

須恵器皿・坏・碗、黒色土器碗、土師器坏、緑釉皿、灰釉皿



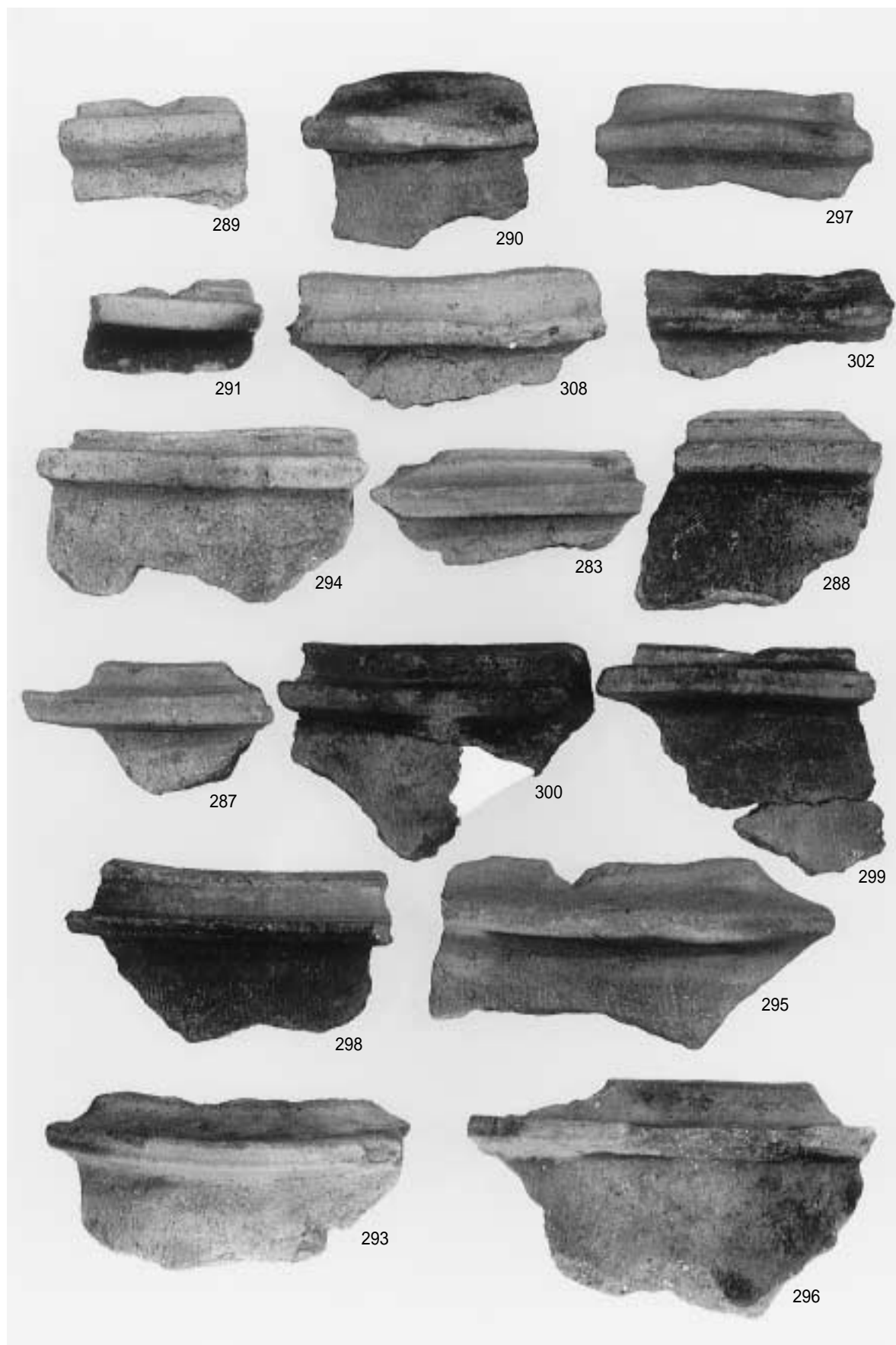
土師器 甕



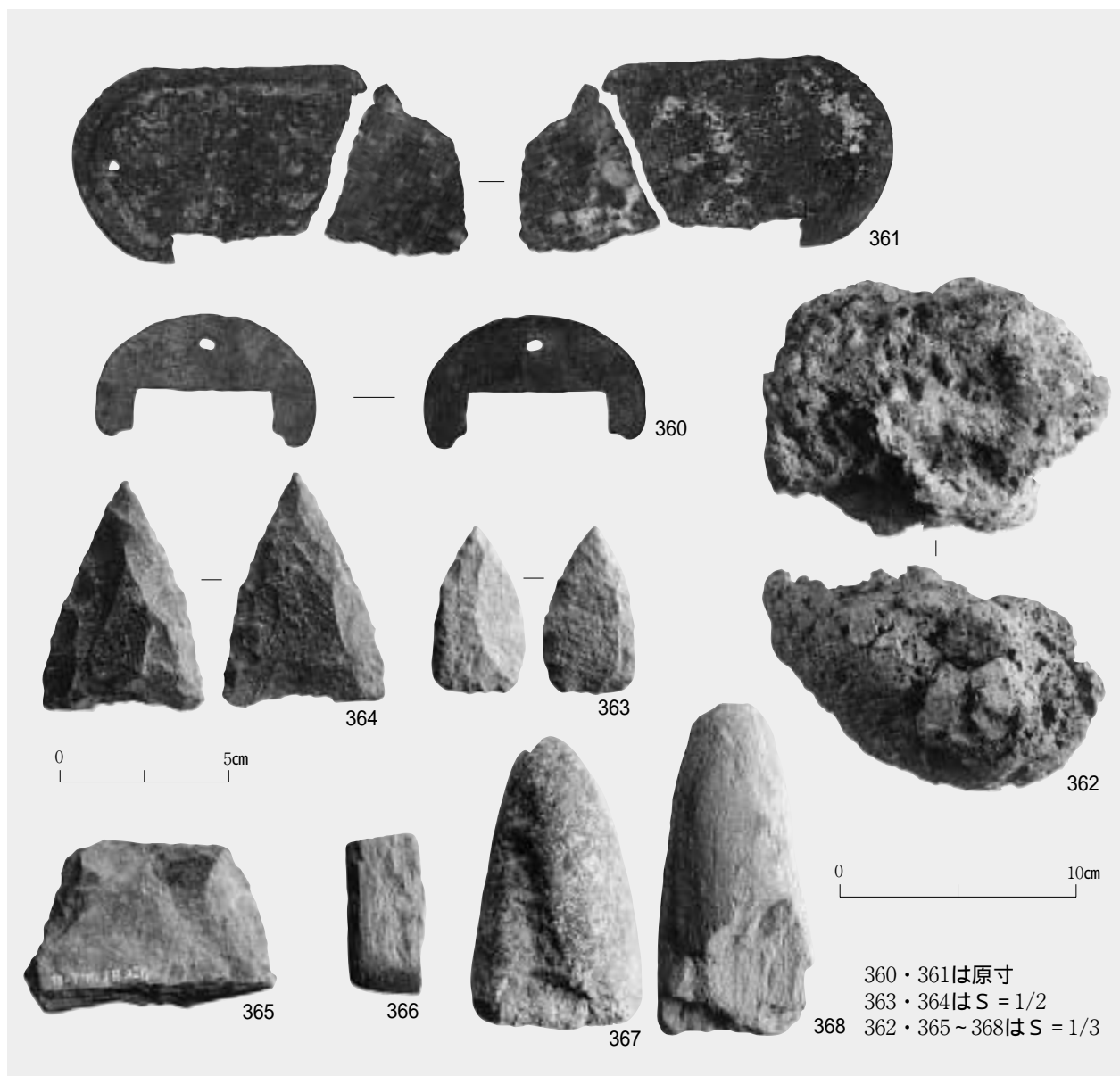
土師器 甕



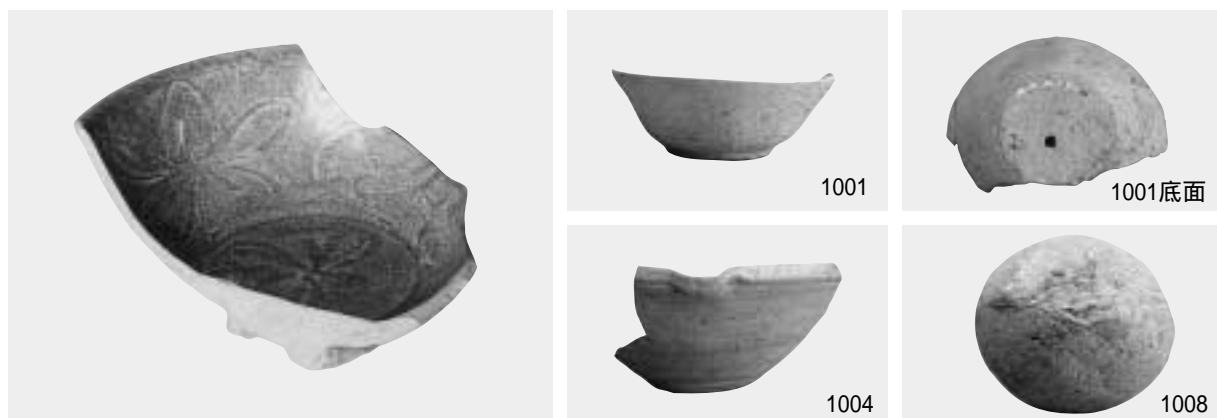
土師器 甕



土師器 羽釜



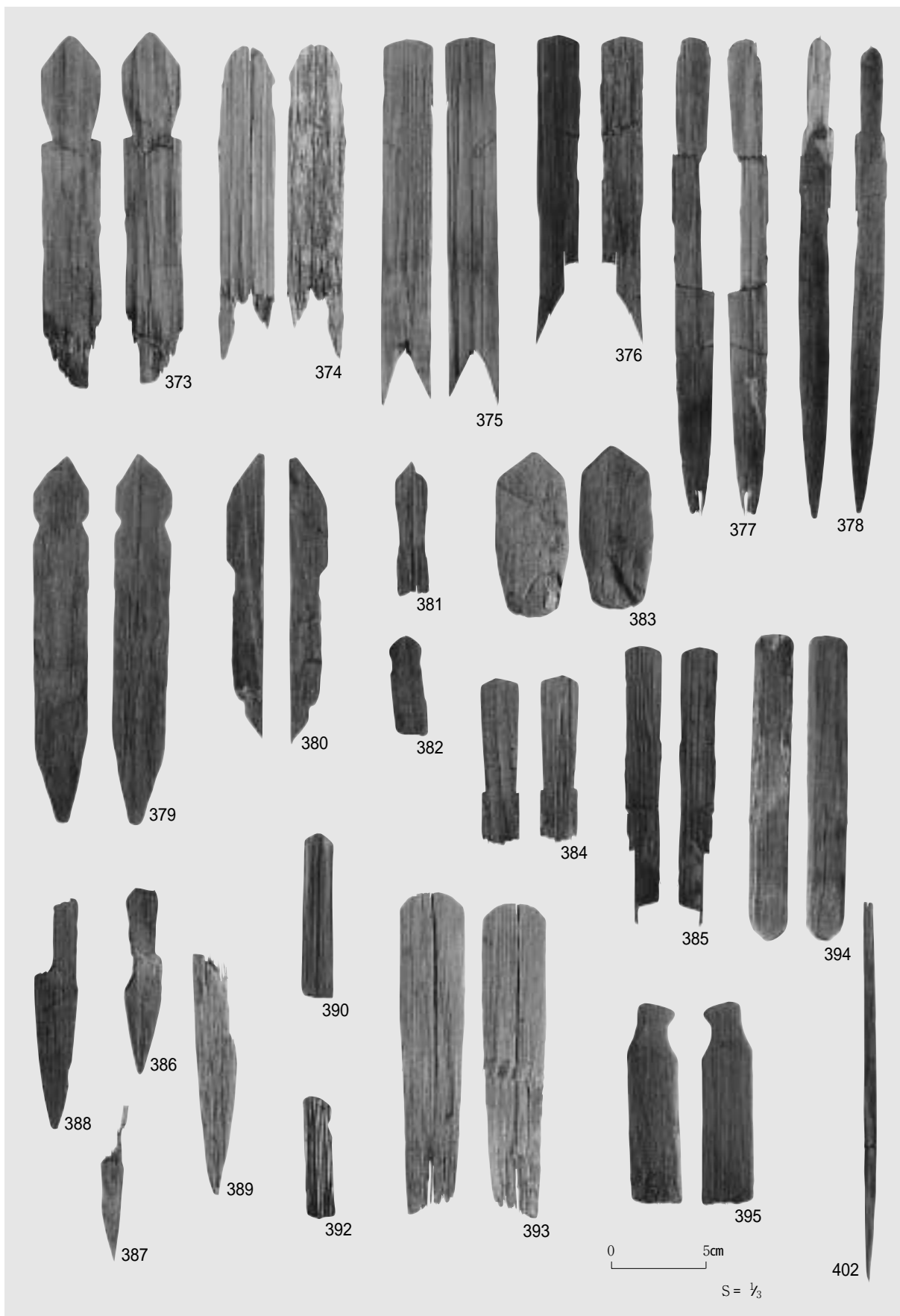
西鴨地遺跡出土遺物（帯金具・椀状鉄滓・石器）



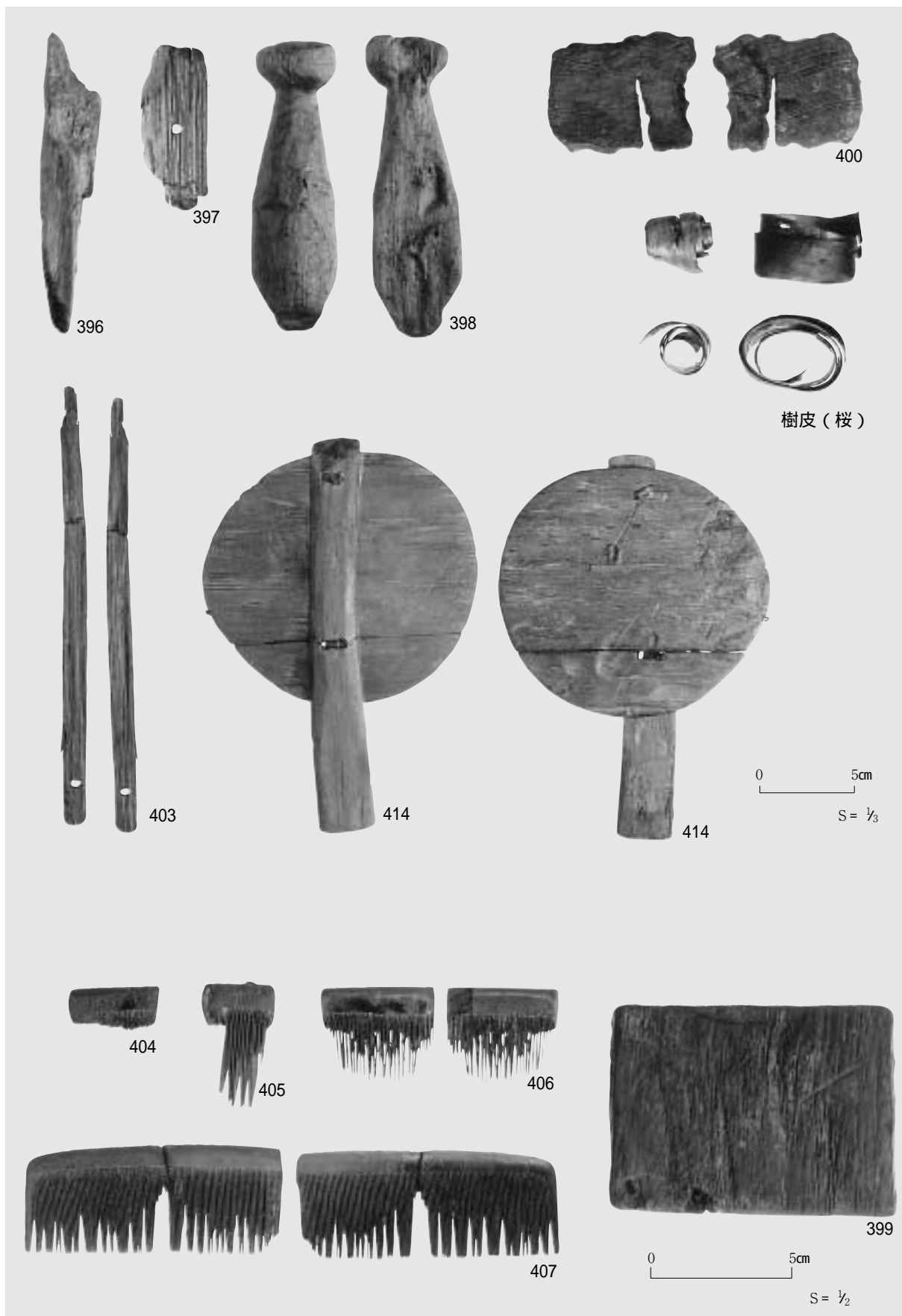
1997年度 B - 区出土青磁 碗

1998年度 出土遺物

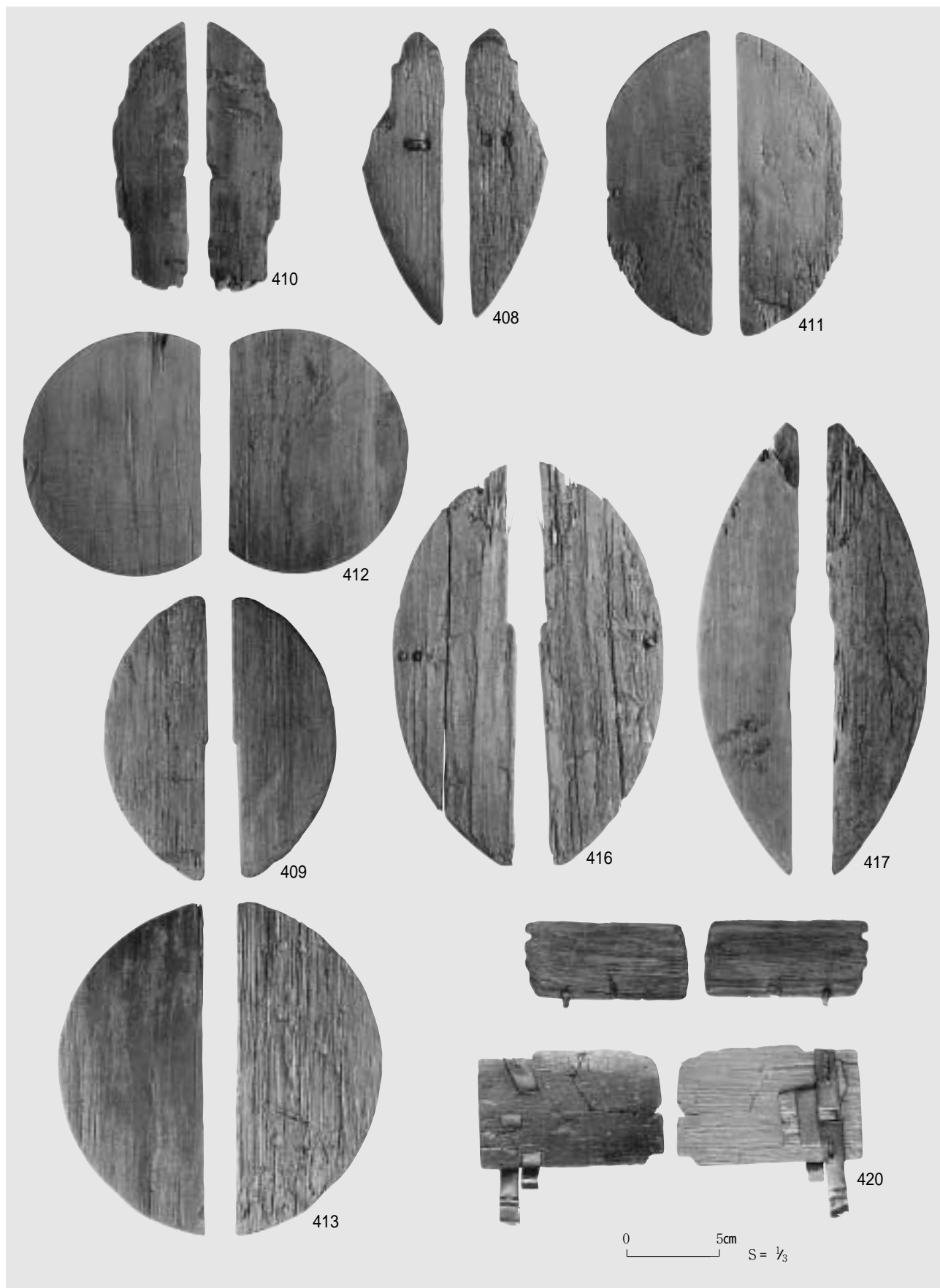
飛田坂本遺跡 出土遺物



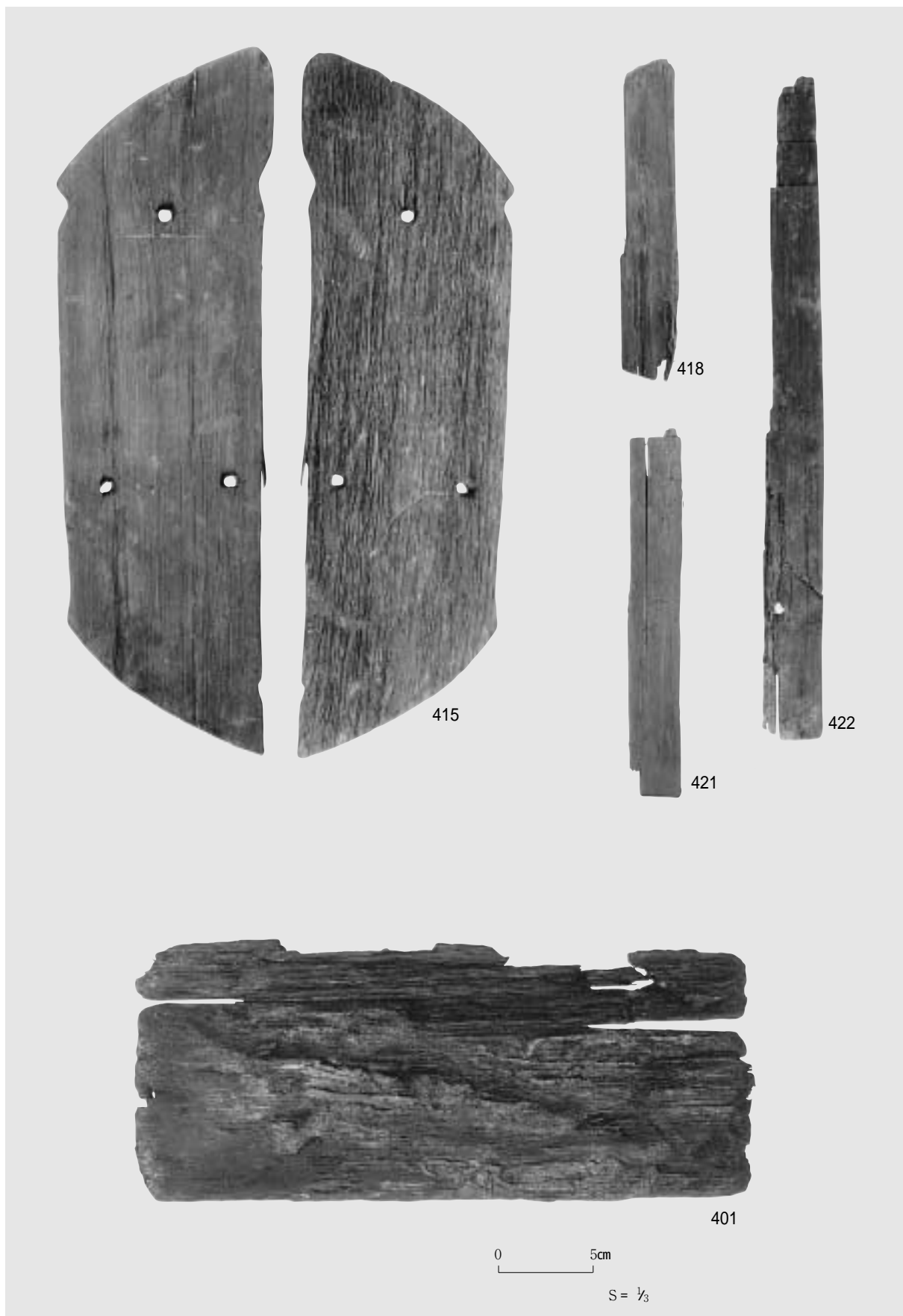
出土遺物（木製品）1 - 木製祭祀具 -



出土遺物(木製品) 2 - 服飾具(横櫛・檜扇) 木錘、部材、素材、曲物、綴紐 -



出土遺物（木製品）3 - 曲物（蓋板・底板・側板）-



出土遺物（木製品）4 - 大形円形板、曲物側板、板材 -



出土遺物（木製品）5 - 曲物側板、剝物（舟型容器）-



飛田坂本遺跡・1998年度 TR-1北壁セクション



飛田坂本遺跡・1998年度 TR-2北壁セクション



飛田坂本遺跡・1998年度 遺構検出状況（南から）



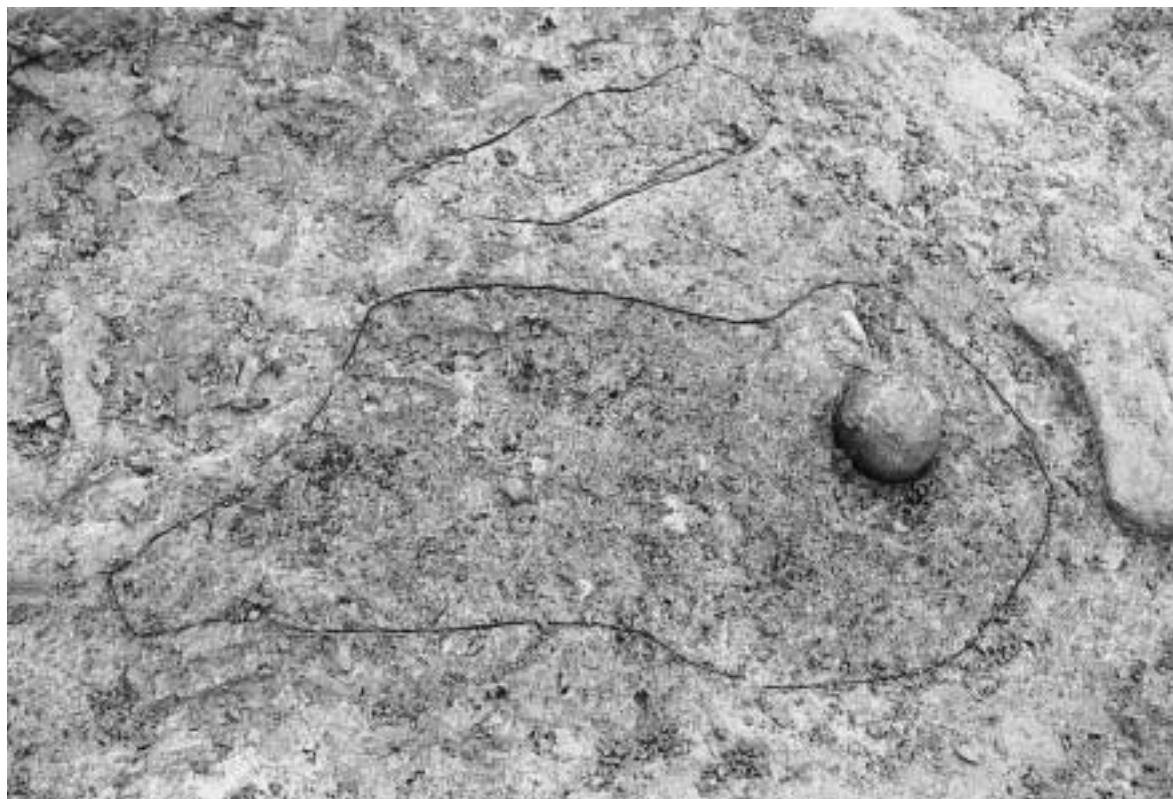
同 上（北から）



飛田坂本遺跡・1998年度 遺構完掘状況（北から）



同 上（南から）



飛田坂本遺跡・1998年度 SK-10 焼土及び円礫出土状況



飛田坂本遺跡・1998年度 SB-5 (P-1) 土師器出土状況

報告書抄録

ふりがな		にし かも じ い せき						
書 名		西 鴨 地 遺 跡						
副 書 名		四国横断自動車道（伊野～須崎間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第 61 集						
編 著 者 名		出原恵三・松村信博						
編 集 機 関		（財）高知県文化財団 埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437 - 1 TEL . 088 - 864 - 0671						
発 行 年 月 日		西 曆 2001年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしかもじいせき 西鴨地遺跡	高知県土佐 市西鴨地字 バデン	39205	0084	33度 28分 00秒	133度 21分 40秒	試掘 1996.1.22～ 1996.2.22 本発掘 1998.5.25～ 1998.9.4	820m ² 2000m ²	四国横断自動車道 （伊野～須崎間） 建設工事に伴う調 査
ひださかもとい 飛田坂本遺 跡1997年度 調査	高知県須崎 市神田、飛 田字坂本・ 吾桑・為貞	39206	0024	33度 25分 07秒	133度 18分 17秒	1997.4.1～ 1997.6.30	1950m ²	四国横断自動車道 （伊野～須崎間） 建設工事に伴う調 査
ひださかもとい 飛田坂本遺 跡1998年度 調査	高知県須崎 市神田、飛 田字坂本・ 吾桑・為貞	39206	0024	33度 25分 07秒	133度 18分 17秒	1998.5.25～ 1998.6.4	120m ²	四国横断自動車道 （伊野～須崎間） 建設工事に伴う調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西鴨地遺跡	集落に近接 する自然流 路（河道）	古代	杭列・礫列 自然流路（河岸）	弥生土器・土師器・ 須恵器・緑釉陶器・ 灰釉陶器・黒色土器・ 製塩土器・帯金具・ 椀状鉄滓・木製祭祀 具・曲物・木製服飾 具（横櫛他）		8～10世紀の煮炊具供膳具・ 搬入遺物 帯金具・木製祭祀具 横櫛素材のイスノキ板片		
飛田坂本遺跡 1997年度調査	集落	古代 中世	なし	弥生土器・瓦器・青 磁・土師質土器		青磁碗		
飛田坂本遺跡 1998年度調査	集落	古代 中世 近世	焼土坑 ピット 掘立柱建物	土師器・東播系須恵 器・瓦器・備前		13～14世紀総柱掘立柱建物 跡検出（3間×6間） 隅柱穴地鎮祭祀		

西鴨地遺跡

2001年3月

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437 - 1

電話 (088) 864 - 0671

印刷 (有)西村謄写堂